

芥川龍之介文学と知識人

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 佳高 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20270

芥川龍之介文学と知識人

The Works of Akutagawa Ryunosuke and His
Contemporary Intellectuals

目次

凡例	6
序章	7
一、知識人の時代	7
二、芥川龍之介文学と知識人	12
第一章 芸者の恋と欲望する語り——「片恋」論	18
一、お徳は不幸なのか	18
二、「片恋」と「名花」	19
三、お徳の物語	22
四、友だちの語り	25
五、語りの欲望の背景と意義	29
六、貧を描かないということ	32
第二章 日清戦争と語りの戦略——「首が落ちた話」論	36
一、立場をもたない語り	36
二、中国賤視の語り	41
三、語りの重層性	48
四、知識人たちの欲望	53
第三章 軽薄な知の系譜と知識人——「葱」論	56
一、女給の時代	56
二、田中君と「作者」	59

三、お君さんと「作者」	61
四、新中間層の主婦への道	63
五、自立した女性	66
六、知識人と大衆との関係	68
第四章 正系知識人を特権化する差異化戦略——「秋」における〈インテリ女性〉と〈新中間層〉——	72
一、二つの表象	72
二、同性間関係のジェンダー間格差	73
三、産業化適的な価値観	76
四、信子と照子の関係	81
五、語り手の欲望	86
第五章 中国を語ること——「南京の基督」論——	90
一、中国の変容と金花の物語	90
二、母胎回帰の物語	98
三、語りの性質	105
四、外的焦点化のパースペクティブ	110
五、語りの欲望と戦略	112
第六章 愛と権力——「妙な話」論——	117
一、探偵小説への近接	117
二、「貞淑な妻」になる物語	122
三、天皇制国民国家体制	126
四、超感覚の権威性	129

五、エリートたちの欲望	135
第七章 保吉物と軍隊——「保吉の手帳から」「あばばばば」「寒さ」	139
一、芥川龍之介と軍人	139
二、「保吉の手帳から」	140
三、「あばばばば」	143
四、「寒さ」	148
五、表現形態としての軍人否定	154
第八章 北京の駐在員の物語——「馬の脚」における日本人社会システム	156
一、移民の系譜	156
二、日本人社会システム	157
三、ナシヨナリズム	165
四、われわれの内なる野蛮／かれら	169
五、新たな共同体へ	175
第九章 旅——「湖南の扇」論	178
一、旅行と観光	178
二、メタファーとしての自然	179
三、周縁からの脅かし	185
四、『支那遊記』の表現技法と「湖南の扇」	189
五、エリートの保守性	192
終章	196
初出一覧	203
主要参考文献	204

凡例

- 一 芥川龍之介の文章の引用は、『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九五年一月～一九九八年三月）に拠る。
- 二 傍線はすべて引用者による。
- 三 単行本書名、新聞名、雑誌名は『』、雑誌や新聞掲載の作品名、論文名などは「」で括った。
- 四 年代表記は原則として西暦を用いた。
- 五 本論文の四〇〇誌原稿用紙換算の枚数を記しておきたい。
四七九枚

序章

一、知識人の時代

芥川龍之介の活躍した時期は、知識人、知識階級、インテリゲンツィアという言葉の出現／隆盛した時期と重なっている。竹内洋が言うように、「日本における知識人のフオーク・コンセプトは「賢人」や「学者」、「有識者」であったが、ロシア革命とマルクス主義の影響のもとに「インテリ（ゲンツィア）」や「知識人」、「知識階級」の用語が一般に普及するようになった」⁽¹⁾のである。知識人の経済的窮乏の中で彼らの文化貴族性に光を当てることで彼らの矜持を救済すべく、大正時代にロシア革命とマルクス主義の影響で、これらの言葉が澎湃として使われ始めたのだ。もともと存在しなかった知識人という言葉の登場／汎化した時代なのである。

これらの言葉はいつごろから使われ始めたのだろうか。管見で最も早い用例は一九一四年七月一五日『読売新聞』紙上の「選挙改正方針 渡邊地方局長談」という見出しの記事で、「先づ差当りは選挙権の拡張を計らん筈なるが巷間伝ふる如く果して其範囲を知識階級に及ぼし中学卒業程度と云ふが如きものとすべきや否や」という風に使われている。ここでは知識階級という言葉に定義が随伴していないので、これよりも前から使われていたと考えるのが自然だろう。知識階級という言葉は、一九一四年には使われていたのである。

ここで、知識人（＝知識階級、インテリゲンツィア）という言葉の定義を見ておこう。原田士驥雄「知識階級でも浮ばれぬ」(『事業之日本』一九二六年六月)には、「知識階級」の定義について次のように書かれている。ちなみに、当時は知識人、知識階級、インテリゲンツィアの中では、知識階級という言葉が最も高い頻度で使われていたようである。

普通教育以上の教育を受けたる者で、主として知力を働かす処の仕事に従事しそれによつて生活資糧を得てゐる。

る処の一团の人々を指してゐると思へば大体誤はないと思ふ。純粹の筋肉労働者を含まないのは勿論であるが、小商工業者等所謂小独立企業者もその圏外にある。学者将校官公吏会社工場事務員学校教師及医師弁護士等の自由職業者がこれに属する。

中学校卒以上の学歴を持ち、肉体労働ではなく、頭脳労働に従事している人ということである。具体的な職業としては、学者・将校・官公吏・会社員・事務員・教師・医師・弁護士が挙げられている。本稿では、知識人という言葉は、この意味で用いることとする。なお、エリートという用語も知識人と同義の意味で用いることとする。

大正中期以降、知識人という言葉が広く普及するようになり、知識人の存在意義が頻繁に語られるようになった。知識人とはどのような人を指すのか、どのような使命を持つのか、どのような役割を持つているのか、といったことが語られていたのだ。「如何に専門学に関する造詣が深くとも、世間に対する注意を欠いて、近時の激動しつゝある思想界の傾向、即ち政治問題、軍備問題などに関する世論の大勢に通曉し、是等に対する自己の見解を有するに至らぬ者の如きは、いまだ以て知識階級たることを許されぬ者である」、「我が国の知識階級を以て自任して居る人々は、能く国家の前途を洞観し、徹底の見を以て自ら処し、国民を率ゐ、世界の思潮界に一大旗幟を樹てることに努力しなければならぬ。」（無署名「知識階級の意義」『国学院雑誌』一九二二年六月）という言表に、そのことが端的に表れているだろう。専門分野に通曉しているだけでは知識人と呼ぶに相応しくなく、政治問題や軍備問題に精通して、自分なりの見解を持つ必要がある、国民を率いる責務を有するといふのである。知識人の存在意義に関する言及は、枚挙にいとまがない。「知識階級たる者は其文化創造者としての重大なる使命の存する事を自覚し徒らに姑息偷安に陥らず自重以つて其文化的使命の貫徹に努力すべきである」と、知識人に文化創造者としての意義を見る岡田一郎「知識階級の文化的使命」『太湖』一九二六年三月、「知識階級は茲に覚醒して強固なる同盟を結び、自己の努力と、合同の勢力に依りて、根本的に生活の改造を断行し、能率多くして幸福の大なる生を営むの範を社会に示す可き運動に従事すべきである」と、知識階級は社会の模範として、生活改造に従事すべきとする森本厚吉「知識階級同盟

論」(『中央公論』一九二二年四月)などを例として挙げる事ができる。文化を創造する者、生活改善運動の模範として、知識人の意義を見出そうというのである。いずれも社会を率いる者として、知識人の意義を捉えている。社会を導く者、国民の模範としての意義が見出されていたのである。

知識人の意義の問いかけは、この時期盛んに論じられた、知識人の迷信熱に関する言説の中にも看取できる。この頃は、大本教など知識人が迷信を信じることに對する批判が瀰漫していたが、それらの批判の言説の中に、知識人は迷信を信じるべきでないという考えが見えるのである。無署名「知識階級の迷信熱」(『声』一九二〇年八月)では、「近時、彼の大本教に對する非難攻撃の声が漸く世間に喧しくなつて来た。固より当然の結果で、愚にもつかぬ迷信が時を得顔に横行濶歩する杯といふことは実に新時代の一大恥辱である。而かもその所謂お筆先きの暗示を受けて、巧みに催眠状態に陥る者の中には、無知無教育の愚民ばかりでなく、立派な肩書きのある知識階級の人々も決して少なくない。尤も、知識階級とは云ひ条、かゝる迷信の擒になる人間の事故、その頭は余程何うかして居るので、此点から実は無知無識の愚民と少しの撰ぶところは無いのである。」としている。大本教を信仰する者に對する批判だが、その中に知識人が含まれていることを許すべからざることとしている。知識人たるもの、迷信など信じてはならぬというわけであり、知識人の輪郭をはつきりさせたいという欲望が見える。迷信を信じるか否かによつて、知識人とそうではない者とを画然と区分けしようとする欲望である。高島米峰『人生小観』(丙午出版社、一九二六年六月)の「なぜ知識階級に迷信が無くならないか」では、「女性一流の感情論のために、遂に、馬鹿々々しいとは思ひながら、喧嘩してまで、我を通すでもあるまいと、遂に、その愚論に従ふことになる。これが知識階級に、迷信の亡びない、一つの理由とでも、言へば、言へないことはない。」としている。女性が迷信を信じるために、男性の知識階級も迷信に従わざるを得ないということだ。ここにも、知識人であれば迷信に惑わされないのが当然だという口吻が見られる。知識人の迷信熱に関する言及を見ると、知識人は迷信など信じないはずだという信念が見えてくる。そこには知識人とそうではない者との類別を明確にしようとする欲求が看取できるのであり、知識

人の威信を確保しようとする欲望が窺える。

この時期は知識階級の就職難の語られた時期でもあった。第一次世界大戦後は、大学などの学校を出ても就職できない知識階級が増えていたのである。横田英夫「知識階級の帰農を唱道す」(『中央公論』一九一七年七月一五日)では、「今や官界、商工界に於ては人員過剰の状態に陥り、各種学校卒業生は就職難に襲はれ、驥足空しく都会の陋居に朽ちて伯樂なきを嘆ずるの風がある。各種学校卒業生にして就職口なく空しく遊食して居るものを数へたならば、恐らく毎年万千を以て算するであらう。其の如何に夥しき数に達するかは、近年、諸学校卒業生を如何にすべきかと云ふことが当局者の頭を悩まし、所謂高等遊民階級の善導が社会の一問題たらんとするのを見ても想像される。無職の知識階級が徒らに増加する時は、如何にも種々の弊害が醸されるであらう。」として知識階級が「農村に帰ることを提唱している。「各種学校卒業生」の就職難が喫緊の課題であると論じているのである。MC生「知識階級の失業問題」(『社会事業』一九二五年九月)でも、「我国の失業問題が根本的に解決せられぬ第一の理由は知識階級が夥多であること、第二の理由は産業が発達しても、知識階級の激増とは比例せぬことの為めであるとせられて居る」としている。日本の知識人が就職難にあえぐ理由を、高学歴人材の過剰とポスト不足にあると論じているのである。原田士驥雄「知識階級でも浮ばれぬ」(『事業之日本』一九二六年六月)でも、「近時知識階級の失業問題が著しく識者の頭を刺戟し喧しく論ぜらるゝに至つた」、「何故に喧しく論ぜらるゝに至つたかと言ふに従来殊に大戦前迄は比較的利益な地位にあつて安定せる生活をなす事の出来た彼等の間に、大戦を境として失業者続出し、加之新しく高等の学校を卒業した者は容易に就職の機を得ることが可能なくなり、従て彼等の生活の上に多大の不安動揺を与へる事になり、惹いてはそれが社会生活全般の上に深刻なる不安の陰影を投ずるに至つたからである」と述べられている。大戦前は比較的有利な地位にあつたが、大戦を境として知識人に失業者が増大したことを難じている。竹内洋が言うように、「高等教育人口」は「明治三三〜大正九年にかけて西欧先進国の水準に達し」、「大正九〜昭和五年にかけてこれらの国々を引き離すまでになった」(註)。一九二〇年の高等教育卒業生はおよそ一四、三〇〇人である。第一

次世界大戦を境として、知識人人口の膨張もあり、彼らの就職率の低下が問題となり始めたのである。人材過剰時代が到来していたのだ。

このためか、知識人の存在意義を否定的に捉える見方も増えていった。知識人の社会的無力、知識人の消滅の可能性、知識人の存在否定などが語られていたのである。西宮藤朝「我が知識階級の現状」(『東方時論』一九一九年八月)は、「彼等知識階級は社会的には多くは無力である。声は所有しても、手は所有しない。知識は持つてゐても、活動力は持つてゐない。是れは何れの国も同じものと見えて、露西亜あたりでもインテリゲンツイヤは社会上の劣敗者と見られて居る。」と述べている。知識人の社会的無力を嘆じているのだ。小川未明「知識階級雑感」(『中央公論』一九二三年六月一五日)は、「今日、次第に影のうすくなつた、知識階級は、いつか瞭然として、分裂の運命に接するところから免れ得ないであらう」としている。知識人の消滅の可能性を述べている。千葉亀雄「最早や知識階級なるものは存在せず」(『中央公論』一九二三年六月一五日)では、「無産階級の概念の対称になるものは、たゞ有産階級が唯一に在るだけである。どうして知識階級が、無産階級の対照になり得るといふのか。知識階級は、或る種の頭脳労働によつて、知識所得であるところの一定の報酬をうけとり、それによつて暮しを立てて行く一点で、有産階級の尻尾にぶらさがる無産階級の一種に過ぎないのである。」と、知識人の意義を否定している。知識人は有産階級の尻尾にぶらさがっているにすぎないとして、知識人というものは最早存在しないとしているのだ。知識人の力のなさを主張したり、知識人の存在意義を否定したりする見方は多い。

だからこそ逆に、知識人の意義を正当化しようとする言表も多くみられた。渡辺一民は、「宣言一つ」の中で、有島武郎は自分が労働者階級の出身でないが故に、労働者階級に何か寄与できると思うのは僭上沙汰だと書いておられますが、このように労働者階級に属していないことの自覚から来る、インテリ敗北論ないしインテリ無用論が当時の日本では横行し、労働者階級のために働こうとする知識人には、何よりもまず自分の知識人であることの否定が要求されていたのです。それだけに、自分の知識人の立場を正面に出すこの『種蒔く人』の姿勢は、当時極

めて特異なものともみなされたのです。」⁽³⁾と述べている。有島武郎の「宣言一つ」(『改造』一九二二年一月)に端的に窺えるようにインテリ敗北論や無用論が横行していた時代、『種蒔く人』は知識人という存在を正当化していたのである。例えば、松村正俊は「労働運動と知識階級」(『種蒔く人』一九二二年一〇月)で「知識階級は一の寄生虫であるに過ぎない」と述べつつも、「しかしながら、それは単なる一寄生物ではなくして、一階級に於ける一事業を分担する一機関である」として、「知識を排斥することは出来ない。生活の発展が知識を要求するからである」と述べ、「それ自身に於ける知識階級をさへも排せんとする意味であつたならば、あまりにも浅見である」とも言う。知識人は一寄生虫であるにすぎないという見解を諾いつつも、生活の発展が知識を要求するとして、知識階級の存在意義を肯定している。森本厚吉も「プロレタリアの文化生活」(『文化生活』一九二二年六月)で、「我国十六万の小学校教師乃其他の知識階級を中心として、一大中流階級同盟」が、「一方に於てはブルジョワ階級を引き下げ、他方に於てはプロレタリア階級を引き上げ」る運動を起こして、「上下の階級が今日の中流階級程度に或る調和点を見出し、民衆挙つて文化生活を送」るようすべきだとしている。ブルジョワ階級を引き下げ、プロレタリア階級を引き上げる役割を果たすのが知識人だとして、知識人の意義を積極的に捉えている。ブルジョワ階級とプロレタリア階級のはざまにある知識階級の、はざまにあるからこそその存在意義を主張しているのである。

知識人の矜持を揺さぶる社会的背景と、知識人の矜持を取り戻そうとする運動が、同時進行していたのである。

二、芥川龍之介文学と知識人

芥川龍之介の活躍した時期は、知識人にとって、自らの存在意義を問われる時代だったと言える。そして、芥川自身、典型的な知識人であった。「文学好きの家庭から」(『文章俱樂部』一九一八年一月)に記されるように、芥川の育った芥川家は「文学好きの家庭」であり、家中が俳諧や草双紙・芝居・小説・演芸・美術に親しみ、芥川が文学をやることには誰も全く反対しなかった。彼は一九一〇年東京府立第三中学校を二番の成績で卒業、第一高等学校の

文科に入学し、一九一三年に二六名中二番で卒業、東京帝国大学英文科英吉利文学科に入学する。一九一六年に二〇名中二番の成績で卒業し、六月三〇日の『東京朝日新聞』『万朝報』に東大文科優等生として名前が載った。一九一七年には海軍機関学校教授嘱託として就任し、英語を教え始める。府立第三中学校↓第一高等学校↓東京帝国大学というコースを辿った正系の学歴エリートであり、卒業後は教員という中間層の典型とも言える職業に就いている。

芥川の知識人としての側面は、彼の作品にも刻印されている。

八歳か九歳の時か、兎に角どちらかの秋である。陸軍大将の川島は回向院の濡れ仏の石壇の前に佇みながら、味かたの軍隊を検閲した。尤も軍隊とは云ふものの、味かたは保吉とも四人しかゐない。それも金釦の制服を着た保吉一人を例外に、あとは悉く紺飛白や目くら縞の筒袖を着てゐるのである。（「少年」『中央公論』一九二四年四・五月）

保吉のみ金釦の制服を着ており、仲間の中での保吉の立ち位置がはっきりと示されている。進藤純孝はこの箇所に関し、「同じ下町の子でありながら、桶屋の子や、小間物屋の子と違って、下町の埃にまみれず、下町に自然の美しさを見い出すやうな子供。そして、いつも仲間外れにされる「坊ちゃん」であることに、何かしら引目を感じずにはゐられぬ子ども。現実では塞ぎとめられてゐる（体の弱かったせゐばかりではない）活力のはけ口を、空想に求めようとする少年。それが下町の中流階級の子であることの中身であつた」⁽⁴⁾としているが、芥川の分身・保吉は知識階級の子なのである。

「大導寺信輔の半生——或精神的風景画——」（『中央公論』一九二五年一月）にも次のような一節がある。

学校も亦信輔には薄暗い記憶ばかり残してゐる。彼は大学に在学中、ノオトもとらずに出席した二三の講義を除きさへすれば、どう言ふ学校の授業にも興味を感じたことは一度もなかつた。が、中学から高等学校、高等学校から大学と幾つかの学校を通り抜けることは僅かに貧困を脱出するたつた一つの救命袋だつた。尤も信輔

は中学時代にはかう言ふ事実を認めなかつた。少くともはつきりとは認めなかつた。しかし中学を卒業する頃から、貧困の脅威は曇天のやうに信輔の心を圧しはじめた。彼は大学や高等学校にゐる時、何度も廃学を計画した。けれどもこの貧困の脅威はその度に薄暗い将来を示し、無造作に実行を不可能にした。

学校での授業内容に興味を持たないにも拘らず、貧困を脱するために学校へ行かなければならない知識人の宿命が描かれている。この作も芥川自身の自画像だが、彼は知識人の内面を詳しく描き出しているのである。

また、府立中学で英語の教師を一時囑託された先生を描く「毛利先生」(『新潮』一九一九年一月)に関して、田村修一は次のように述べている。

府立三中↓第一高等学校↓東京帝国大学とエリートコースを歩み、しかもそれぞれの学校を優秀な成績で卒業した龍之介は、自らの学歴を誇つてよい人生を歩んできた。しかし、そのことを脳天気には誇るほど龍之介は楽天的な人物ではなかつた。時代の変化は、かつての封建的な身分制度を崩壊させたではあるが、近代社会があらたなステージへと進んでいくに伴つて、その新たな枠組みに応じた階層が編成し直されていったのである。そして「学校」というものが、そのための選別・差別の装置としての性格をはつきりと現し始めたのが、日清・日露戦争後の日本社会だつたのではないだろうか。時代の変化の中で、毛利先生は古いタイプの教師として、エリートを目指す「府立中学」の生徒からは排斥されるべき教師となつていた。(5)

学校という差別の装置が、古い先生である毛利先生を排斥したとするのであるが、ここには本稿をしたためるにあつた重要な問題がある。エリートが自分とは身分集団の異なる人物と出会い、その人物に対して何らかの欲望を持つという物語は、芥川文学において意外に多いのである。

本稿では、知識人という身分集団に着目することで、芥川文学の読みを新しくすることを目指す。芥川文学では、知識人(「エリート」という身分集団、あるいは知識人としての作者が、他の身分集団に属する人たちと出会うとき)に働く欲望や戦略を描いているのだ。そうした欲望や戦略を復元し、作品の読みを新たにすることが本稿の目的で

ある。ここでいう欲望とは、身分集団の異なる者との出会いによって生じる、脅かしの感情や、彼らをコントロールしたいという感情、また彼らを相対化したいという感情のことであり、戦略とは、己の身分集団に益するために採用される方策、あるいは欲望を抑え込むために採用される方途のことである。知識人の欲望や戦略に目を向けることで、単に知識人の引け目や排除願望を読む先行研究とは差異化を図りたい。

第一章で扱う「片恋」(『文章世界』一九一七年一〇月)では、お徳という芸者の物語を、「大学を出た」「友だち」が語るという体裁を取る。芸者という下層階級に属する女性を知識人が語る際、そこには何らかの欲望が働くと考えられる。

第二章で扱う「首が落ちた話」(『新潮』一九一八年一月)は、清の騎兵である何小二を主人公とし、彼の人生を、木村陸軍少佐と山川理学士という二人の知識人が解釈するという構図を持つ。敵国の階級の低い兵士を、日本の知識人が解釈する際、どのような欲望が垣間見えるだろうか。

第三章で扱う「葱」(『新小説』一九二〇年一月)は、知識人と思しき「おれ」が、カフェーの女給のお君さんと、逸脱した知識人の田中君に関する小説を書くという物語である。お君さんは下層の女性ではあるが、文学や芸術に親しむ女性である。田中君は、詩・音楽・美術・演劇に通じた「芸術家」でありながら、性が放縦である。この二人の人物を「おれ」はどのように描いているのかは興味深い。

第四章で扱う「秋」(『中央公論』一九二〇年四月)では、東京帝大文科卒の男性知識人・俊吉とインテリ女性の信子、高商出身の信子の夫が出てくる。いずれも知識人と言えるが、知識人の中でも、俊吉は正系知識人であり、信子と彼女の夫は傍系知識人である。語り手がこの三者をどのように描いているのか着目されるだろう。

第五章で扱う「南京の基督」(『中央公論』一九二〇年七月)は、中国の娼婦・宋金花の物語を知識人としての側面を持つ語り手が語る話である。異国の、しかも階級の低い女性を、語り手がどのように語るのか着目される。

第六章で扱う「妙な話」(『現代』一九二一年一月)では、エリートの中での脱落者「私」が出てくる。一方、「私」

が不倫していた千枝子は富裕階級に属し、その夫は第一次世界大戦中、地中海方面へ派遣された乗組将校であり、戦後、日本の外交的・軍事的に貢献したエリートである。この二つの層の関係には、何らかの力学が働くと考えられる。

第七章では、保吉物の「保吉の手帳から」(『改造』一九二三年五月)の(へわん)、(あばばば)、『中央公論』一九二三年一月、「寒さ」(『改造』一九二四年四月)を扱う。「保吉の手帳から」の(へわん)では、海軍機関学校教諭の保吉が「乞食」の少年に同化し、海軍の武官を批判する。「あばばば」では、保吉の平凡志向が描かれる。「寒さ」では、理学士と文学者との対比が見られる。いずれも、保吉という知識人のアイデンティティが主題になっている。

第八章で扱う「馬の脚」(『新潮』一九二五年一月、二月)の主人公は、「北京の三菱」に勤める忍野半三郎である。彼は「商科大学」を卒業したエリートである。異国の地で生活するエリートのまなざしは、何らかの彩りを与えられているのではないだろうか。彼らが異国の地で(移民)として生活するとき、外国人に対するまなざしはどのようなものなのか着目される。

第九章で扱う「湖南の扇」(『中央公論』一九二六年一月)では、「僕」が中国の長沙を旅して譚永年と再会する。「僕」と譚はいずれも「一高から東大」へ入った「同期」である。知識人の「僕」が異国の地のラディカルな様子を目撃した際、どのような心理が生まれるのか着目されるだろう。

本稿で取り上げる作品は、いずれも知識人が他の身分集団、あるいは他の知識人集団と出会うときに働く欲望や戦略が描かれている。この欲望や戦略を説明することで作品の読みを新しくすることが本稿の目的である。

注

(1) 竹内洋『立身出世主義』(日本放送出版協会、一九九七年一月)。

(2) 竹内洋『競争の社会学 学歴と昇進』(世界思想社、一九八一年九月)。

- (3) 渡辺一民「クラルテ運動と『種蒔く人』」(安斎育郎、李修京編『クラルテ運動と「種蒔く人」——反戦文学運動「クラルテ」の日本と朝鮮での展開』御茶の水書房、二〇〇〇年四月)。
- (4) 進藤純孝『芥川龍之介』(河出書房新社、一九六四年一月)。
- (5) 田村修一「時代に取り残されて 芥川龍之介『毛利先生』」(上田博、池田功、前芝憲一編『小説の中の先生』おうふう、二〇〇八年九月)。

第一章 芸者の恋と欲望する語り

——「片恋」論——

一、お徳は不幸なのか

芥川龍之介の「片恋」(『文章世界』一九一七年一〇月)を論じたこれまでの論考では、西洋の映画俳優に恋する主人公の芸者・お徳を不幸で弱い女性と見做す前提が共有されてきたように思う。鷺崎秀一は芸者稼業を営むお徳への「悲哀」⁽¹⁾を読み取り、江藤茂博はお徳の恋を「現実逃避」⁽²⁾とし、芸者に対する憐れみを讀んでいる⁽³⁾。例外的に、安藤公美は「映画史の常識」とは裏腹な「お徳の個別的関心」を読み、映画のストーリーではなく俳優に興味を持つお徳を「主体としての観客」と見做す⁽⁴⁾。この読みは、お徳の恋を積極的な観点から評価する地平を切り開いている。お徳の境遇に憐れみを讀むことには慎重になっていいだろう。

また、この小説では、「友だち」がお徳から聞いた話を語り手の「自分」に語り、「自分」が読者にこの物語を陳述するという重層する入れ子型構造が採用されている。お徳の物語を語る友だちの語りは、お徳の物語を正確に叙述したものではないだろう。そこには友だちの欲望が隠されているはずだ。そのため、友だちの語りの志向性の分析も望まれる。夙に寫田明子は「銀幕の俳優にこれ程真剣に恋するとは考えられない、という「僕」の思考様式についても考えてみる」⁽⁵⁾。必要性を喚起しているが、その思考様式の内実を明らかにする必要もある。

それらの問題意識を持ちつつ、本章では、この作が持つ芸者表象における手法の特徴を明らかにしたい。

二、「片恋」と「名花」

論の手始めに、「片恋」成立に影響を与えた先行作品を指摘しておこう。芥川には珍しい、芸者を主人公とした小説「片恋」に、永井荷風の影を読むことは詭弁ではない。荷風の「名花」(『三田文学』一九二二年六月)と「片恋」の間には少なくない符合が見出せる。芥川は書簡で「再永荷風の「名花」を読み」「芸術的感興」を覚えた」と述べ、「材を蘭燈金釵の境に取るも」「その筆を駆るや繊細清楚その想を行るや軽妙辛辣」と称揚する(6)。「名花」を再読したとし、遊廓を題材にしながら表現・作者の態度の両面での鋭さが評価されている。神田由美子は「荷風の「名花」のヒロインが飲食店の女中から新橋の芸者に変身して、彼女の昔を知っている男に会い、その男の友人だった彼女の恋人の話をするという設定」が「片恋」に「影響を与えている」と述べている(7)が、短いながら肯綮に中たる指摘である。

「片恋」に見出せる「名花」の俳をより積極的に読み取ってみよう。「名花」のヒロインお君は、「浅草の芝居町辺」の出身で、湯島の天麩羅屋の「女中」から、新橋の「芸者」を経て、現在は一本立ちしている。名前もお君から花鳥、小鍛冶へと変えている。その改名に関し、「友達」は「然しお君は其時には、今のやうに小鍛冶なんて、変に姐さんぶつた名前をつけてはあませんでした」というように、改名に関する批評を加えている。女中時代から、「年長の女中よりも酒は強いし、男をあやなす腕に至つては」「なか／＼凄い」ものがあり、新橋の芸者をしていた頃は「恐ろしい境遇を通りぬけて来た」過去を隠し、「今日初めてお弘めをしたんですと云はぬばかり」のあどけなさを装っていた。新橋では「西洋人と支那人を専門」にする芸者をしていた。一方で、「片恋」のヒロインお徳は、「浅草田原町」の出身で、飲み屋「Uの女中」を経て「芸者」になり、福龍へと名前を変えている。改名に関し「友だち」は「福龍がよかつたらう」というように、批評を加えている。女中をしていた時分は「あすこ中での茶目だつた」ようで、「もの云ふ度に、顔をしゃやくる癖」がある。「お徳の事だ。前には日本橋に居りました位な事は、云

つてゐないものぢやない」と言われるように、臨機応変に嘘をつける世渡り上手である。そのお徳の惚れているのは、映画俳優の「西洋の曾我の家」だ。女中から芸者へという境遇の一致のみならず、いずれも主人公の実家は浅草になっており、女中時代から水際立った性格の人物として造形されている。芸者になった後の改名にも言及され、改名に關し、語り手の批評が加えられる。場に応じた嘘で上手に世渡りし、いずれも西洋人に関係がある。ちなみに、「名花」における「お君の花鳥さん」、「花鳥改めの小鍛冶」という言い方と、「片恋」における「お徳事福龍」という言い方も似ているだろう。

もう少し見てみよう。「名花」のお君は女中時代、「今では法学士でさる地方の裁判所長をしてゐる男」と恋仲になるものの、生木を裂かれる結果に終わっている。大学時代初めてお君に出会った友達は、「新聞記者」になった後、「ある宴会の席上で偶然にも芸者姿となつた」彼女に再会し、出来心から彼女にのめり込むようになる。お君に再会した「宴会の席上」では、最初二人は会話をせずにいたが、「宴席もそろ／＼騒々しくなりかける頃から」彼女の方から「忽ち最初の敬遠主義を一転させて、今度は妙に馴々しく媚を呈し出し」た。二人で会話をし出すと、隣席の人に「君どうもお安くはないですなあ。」と「冷笑」^{ひやか}される。「片恋」のお徳は、今「シカゴにゐる志村」に岡惚れされるが、彼の好意を突っぱねている。(おそらくは)大学にいた頃にお徳と親しくなつた友だちは、社会人になってから「宴会」で図らずも芸者になつた彼女に再会し、お徳の自分への好意を確かめようとしている。お徳と再会した「宴会」の席上では、最初彼は「声をかけようとしたが、遠慮」していた。しかし、「向うから声をかけた」ので、話をする事になった。二人で話していると「外の連中」が「わい／＼騒ぎ立て」、外の芸者はお徳を「ひやか」す。両作とも、ヒロインが後に出世する大学生の男との色恋沙汰を持ちながら恋が成就しないというプロットが共通する。また、大学生の時にヒロインを知るようになった友だちが社会人になってから彼女と宴会で端無くも再会し、彼女の昔の恋の相手を尻目に彼女との恋仲を得々と語る恋の三角関係が描かれる、という類縁もある。さらに、再会した宴会の席上では、両作とも二人は最初は声を掛けないが、ヒロインの方から声を掛けてくるという類似もある。

るのだし、二人で話していると周りの人に冷やかされるといふ点でも共通する。

入れ子型構造の面での相似もある。「名花」は、語り手が「何々倶楽部」という名の会場で「計らず」「友達」に出逢い、その友達が「面白い話があるんですよ。今の世の中は何でもあの調子で行かなくつちや駄目です。」と芸者のお君の話を「聞かしてくれ」という話である。「片恋」も、語り手が偶然「親しい友だちの一人に」「京浜電車の中で遇」い、「君に聞いて貰はうと思ふのはそののろけ話さ」と芸者のお徳に関する「話を聞かせられ」る。ちなみに、『芥川龍之介資料集 凶版1』（山梨県立文学館、一九九三年一月）所収「片恋」関連草稿「お紋の話」1aにおける対応箇所では、「工学士のKに聞かせて貰った話である」となっており、「名花」の表現に近い。友人の話を聞く語り手は、「名花」ではその話に「たいした興味をも感ぜず」、「片恋」ではその話を「聞かせられた」と洩々聞いているようである。「名花」では友達は芸者になった現在のお君に関し、「唯だ年増ざかりの激しい肉慾と、利益の慾とを満足させて行きさへすれば、それでいゝと云ふ女なのです」と述べ、「現代主義の権化」と見做しており、彼女に関して独善的な解釈を施す。「片恋」の友だちもお徳に関して「あいつは悪くすると君、ヒステリイだぜ」と述べており、自分勝手な解釈の枠組みでお徳を領略しようとしている。加えて、「名花」の友達がお君の話を聞かせるのは、「現代の社会一般に対する嫌悪の、これも其の一例として」である。お徳の話をする「片恋」の友だちも、「どうせこれもその愚作中の愚作だよ」というように、「恋愛小説」の「愚作」の一例としてお徳の話を聞かせるのである。

「片恋」に痕跡をとどめている「名花」の影は、本作が「名花」を下敷きとしていることを物語る。後述の通り、「名花」に依拠してヒロインの実家をわざわざ浅草にしたり、ヒロインの嘘のうまさを叙述したりすることには意味があるように思われるし、遊蕩文学撲滅論争と本作との関連を考える上で、「名花」を下敷きにしていう事實は重要になる。加えて六節で述べるように、ヒロインの芸者の描き方においても「名花」の影響を受けているだろう。

三、お徳の物語

さて、本節では本作がお徳の物語を立ち上げるための作品内言説を巧みに配置していることを確認するとともに、一方で、彼女の真の物語を確定できないように作品内言説を丹念に構成する工夫が施されていることを確認していきたい。

先述の通り、これまでお徳は不幸な女性と見做されてきた。それは、お徳の物語を語る友だちが語り手として強い力を持つているためである。しかし、友だちの解釈に抗って、読者がお徳に関する別の物語を読むことはできないだろうか。注目したいのは、友だちはお徳が零落したものと思ひ、彼女に惻隠の情を寄せているのだが、彼女の不幸を裏付ける決定的な根拠はないという点である。友だちは芸者になつたお徳に関し、「そのお徳が、今ぢやこんな所で商売をしてゐるんだ」と同情し「無常」を感じる。その上、「写真に惚れたと云ふのは作り話で、ほんとうは誰か我々の連中に片恋をした事があるのかも知れない」と、お徳が自分に惚れているのではないかと解釈したいようである。しかし、お徳自身は自らの境遇に関して一言も嘆いてはいない。実はこの小説には、お徳の境遇の不遇を読み、自分に惚れていると解釈する友だちの欲望を揺さぶる力が内包されている。まずは彼女の物語を立ち上げるための装置がこの作に本当にないのかに注意しつつ、友だちの抑圧的な語りに関わされることなく、彼女の物語を紡ぎ出す作業から始めてみよう。

「片恋」のお徳は「茶目」で、「もの云ふ度に、顔をしゃやくる癖」がある。悪戯好きで、横柄にも見える挙措を持つ。「志村さんが私にお惚れになつたつて、私の方でも惚れなければならぬと云ふ義務はござんすまい」と言い、率直な自己主張もできる。

現在お徳の働くYの土地柄は、「土地がらに似ず騒がない」、「船着だから、人氣が荒い」と言われるように、騒々しく、人氣の荒いものだ。自己主張の強く、茶目で顔をしゃやくる癖のあるお徳の性格と親和性を持つ。彼女の性格

はYの土地柄とアナロジーを付与されているのである。

また彼女は、「お徳の事だ。前には日本橋に居りました位な事は、云つてゐないものぢやない」と言われるように、世渡りのための取り繕いを身につけている。ここでは、お徳の世渡り能力の高さ、嘘を躊躇わない強さが示されているだろう。渡世能力の高い彼女が接客の仕事をやまくできていないとは考えにくい。

彼女は子供時代、映画に「毎日行きた」がっていた。「芸者になつてからも、お客様をつれ出しちやよく活動を見に行つた」。子供時代は母親からのお小遣いで映画に行っていたが、芸者になつてからは客を連れ出して映画を見に行くようになる。「つれ出しちや」とあることから、自分から誘っていることも分かる。芸者になつても、映画を見ることはできたのである。

お徳の実家は「浅草田原町」に設定されている。荷風の「名花」を引用する形でお徳の実家をわざわざ浅草にしたのには、芥川の意外に深い用意が隠されているだろう。浅草は映画の常設館の多いところで、田原町から徒歩数分圏内に、多くの活動写真館があった。「お徳の惚れた男と云ふのは、役者でね。あいつがまだ浅草田原町の家にゐた時分に、公園で見初めたんださうだ。」とあることから、映画館の多い浅草という土地の性質が本作では十分に取り入れられている。

さらに、淡島寒月は「浅草回想録」(『聖潮』一九二五年一月)で、「仁王門の内」での「仏蘭西人のスリエ」率いる西洋曲馬団の興行を回想し、室生犀星「浅草公園」(『聖潮』一九二五年一月)では「紅毛水泳団」が「十二階下」で興行を行ったことを報告している。浅草は、訪日外国人観光客が真っ先に訪れる観光名所でもあり(8)、外国への窓としての役割を持っていた。「片恋」のお徳が西洋の役者に惚れたのは「まだ浅草田原町の親の家にゐた時分に、公園で見初めた」という経緯だが、浅草で映画を見て西洋人俳優に惚れることから、映画館の多い浅草が外国映画を多く放映し、大衆が西洋に親しむトポスとして設定されていることが分かる。

現在お徳が働くYは「横浜」(9)と推定されるが、馮海鷹は横浜という土地に着目し、「横浜は当時の港町として

海外の情報にあふれ、活気に満ちていた」(10)ことに注意を促している。「捨児」(『新潮』一九二〇年八月)でも松原勇之助の義理の親は「浅草田原町」から「横浜」へ移動している。浅草から横浜へという移動が芥川にとって何らかの意味を持たされたことを推測している。外国への窓としての浅草に育ったお徳にとつて、横浜は自らの育った環境に通底するものがある場所であるはずだし、自分の好きな西洋人俳優に、似た人のいるかもしれない土地であるだろう。お徳はYに自ら進んでやって来たとも推察でき、西洋の役者を好きになるのにも必然性がある。お徳が西洋人俳優に陶酔することや、横浜へ移住することに関して、その理由を説明・推定しうる言説は作品に織り込まれているのである。なお、お徳は横浜へ来て「十年ぶり」で、恋人にめぐり遇「うことができています。お徳は横浜へ来て幸せだったはずだ。

お徳の恋した西洋人俳優の属性は、友だちによって語られるお徳に類似した造形となっている。「西洋の曾我の家」は「半道」であり、おかしみを帯びた敵役である。対してお徳は、「可笑しい」とされ、滑稽味を付与されている。作品の構造上、西洋人俳優とお徳の二人は似た属性を与えられている。お徳の「まあ私の片恋つて云ふやうなもの」という言葉にも、自分の恋愛をも道化によって語ってしまう彼女の性格が表れている。道化師でありながら、西洋人俳優は最後には「泣きさうな顔」をするのであるし、彼女の「みんな消えてしまつたんです。消えて儂くなりにけりか。どうせ何でもさうしたもんね。」という言表にも、ペーソスが漂う。お徳と西洋人俳優の間にはアナロジーが付与されているのだ。映画で彼が連れている「小さな犬」と、お徳の名前と同一の名前が出てくる「八犬伝」との類似も偶然ではないだろう。こうしたアナロジーによって、お徳の西洋人俳優に対する恋の強度が強められることになるのである。

以上の分析から、次のような物語の可能性を指摘することができるだろう。お徳はYに自ら進んでやってきて、芸者になった。そのYの土地柄と自身の性格の親和性、映画も十分に鑑賞でき、芸者の仕事も自分の性格に合うことから彼女の現在不幸とは言えない。お徳は、「我々の連中」の「誰か」に恋しているわけではなく、西洋人俳優

に熱烈に恋している。そのような物語の可能性を紡ぎ出せるよう、作品内言説は巧妙に配置されているのである。

ただし注意したいのは、この物語は一つの可能性でしかなく、別の物語を紡ぎ出すこともでき、この作は「さまざまな解読の可能性」⁽¹¹⁾を持つということだ。鷺崎秀一は、「凶らずもかつての常連客」⁽¹²⁾「友だち―引用者注」に会ったという事実は、懐かしのフィルムを偶然観かけたという話とよく似ている⁽¹³⁾。また、江藤茂博は「志村からのプレゼントでもあるペーパーミントの瓶の「青いお酒」の色と、彼女が語る映画のなかの「お酒の罖」を含む「青」という色」⁽¹⁴⁾との類似に着目している。こうしたアナロジーの技法により、もしかしたらお徳は友だちや志村に恋をしているのではないかと思わせるからくりもあるのである。また、彼女は「阿母さん」の話はするが、父親の話は一切しない。ここから父親がいない経済的貧しさが彼女をして芸者にならしめたのではないかと想像することは深読みだが、そのように想像する読者もいるかもしれない。つまり、お徳の生の強度を高める仕掛けをつくりつつも、それとは相反する物語の可能性をも潜在させることで、彼女の物語を確定的に規定することは避けるというメカニズム¹¹不確定性を残しているのである。ただし、だからといって彼女の生を否定する決定的な根拠も与えられてはいない。

四、友だちの語り

お徳の物語は、彼女自身の言葉で紡がれるのではなく、友だちの話を通して「自分」に伝えられる。他者によって語られることで、お徳の生はどのような解釈枠に基づいて充填され、物語化されているか、また、友だちの話を「自分」が読者に開示するという入れ子構造によってどのような効果が生まれているのか。芥川が芸者を主人公にした小説を執筆する際、それを語る者をどのように特徴づけたかを分析することで、本作の芸者表象における特徴を考えたい。まずは本節で友だちの語りの志向性の分析を、次節でそうした語りの志向性の意義を考察する。

小説冒頭は、「友だちの一人に」「こんな話を聞かせられた」となっている。先述の通り、草稿から定稿に修正す

る際、迷惑の受身の表現に改稿することで、「自分」と友だちとのせめぎあいを暗示する効果が生まれる。友だちにお徳とのろけ話を聞かされる「自分」の苦々しさを示しているだろう。

友だちは「酒も甘かつたらうが、志村も甘かつたよ」と志村の甘さを揶揄したうえで、お徳の懸想する俳優に「似てゐやしないか」と彼女に尋ね、お徳の本命が自分であるかのように解釈したがる。ここで披露されているのは、志村と友だちとの競争的な関係だ。友だちは、「自分」・志村に比してモテる男である言いたげだ。男性社会的な競争により、お徳は友だちに惚れていることにされてしまうのだ。

また、語り手と「友だち」の関係は「一しよに大学を出た」間柄であり、インテリ同士の対話である意味合いが与えられている。この作品では、「自分」・友だち・志村の三人の男が知識階級の男性社会的な関係の中で角逐する関係が描かれている。お徳の片恋は、男性社会的な関係の中に還元されることになる。

友だちは「福龍がよかつたらう。八犬伝の龍の講釈の中に、「優楽自在なるを福龍と名づけた」と云ふ所がある。それがこの福龍は、大に優楽不自在なんだから可笑しい」と言う。知識の中にお徳の性格を囲い込むと同時に、勸善懲悪を主潮とする「八犬伝」を引用することで己の道徳的健全さをアピールしう。さらに、「その揚句にエキセントリック例でも挙げる気だつたらう」などと、お徳の話を論理体系の中にも回収する。

加えて、友だちはお徳が「その男の名前」「居所」「国籍」を「知らない」のに恋しうるのを「莫迦げてゐる」と思う。相手に関する情報が欠如していても恋しうるお徳を、十分な情報を得た上でなければ恋しえない友だちは嘲笑する。お徳と友だちとは人間の評価方法に懸隔がある。彼女は、映画俳優に恋するという、新時代の恋愛の仕方を取り入れているのであるが、そうした恋愛法を友だちは非知識階級的なものとして解釈したいのだろう。これは「名花」と「片恋」の重要な相違の一つで、「名花」ではお君は「未来の学士さんの奥様」になることを望んでおり、結婚相手を選ぶうえで学歴という価値基準に依拠している。

自らを遊興から切り離して己の真面目さを強調する友だちの有様を見てみよう。「僕は始から、叔父さんにつれら

れて、お茶屋へ上つたと云ふ格だつた」、「向うで宴会を開いて、僕を招待してくれた」と言うのは、自分の意志でお茶屋に上がったわけではないと念を押すためだ。作者は、自分から進んでお茶屋へ上がったという設定を避け（花柳小説ではこうした設定が普通である）、連れられて仕方なく行ったことにしている。友だちは自らの道徳的健全さを示したがる人物として造形されている。これは「片恋」が「名花」に対して持つオリジナルで、「名花」では、友達は狭斜の巷に自然に出入りする人物として造形されている。加えて、友だちは京浜電車で新橋では降りないことから、一九一四年竣工の東京駅に行くことが分かる。芥川の「妙な話」（『現代』一九二一年一月）における東京駅に關し、神田由美子は「天皇制軍国主義のランドマーク」⁽¹⁵⁾としての役割がふりあてられているとしている。作者は落成したばかりの東京駅まで友だちを運ばせるのだが、皇居と向き合う東京駅へ行く友だちは首都の威嚴の表徴を（アイロニカルに）帯びていると言える。

さらに、「名花」とは違い、「片恋」の友だちは場所に対して揶揄を行う。彼は横浜を東京との対立項として捉えるのである。彼はまず、横浜の人気の荒さを述べる。また、「思つたよりや感じがよかつた」というように、横浜を感の悪い土地として捉える見方を示す。さらに、「呼んで見給へ。気がひだと思はれる。いくらYだつて、まだ活動写真に惚れた芸者はみなからう」というように、「気がひ」がいるかもしれない場所という認識も示す。横浜をこのような土地として語ることは、自分の住む東京を理智的で健全な場所として逆規定することでもある。成田龍一がいうように、東京は「国内の秩序の頂点にたつたため、近代国家の首都たるにふさわしいモデルであること」⁽¹⁶⁾が求められた。友だちが横浜を語るのには、その対極としての東京の威容を定位したいという欲望が秘められている。

東京との差異を確認するためのトポスとして横浜が選ばれたのにはそれなりの理由があるだろう。港町の横浜はコレラやペストの持ち込まれる場所であり⁽¹⁷⁾、伝染病の流入を防ぐために管理されねばならない土地であった。また、外国人の多い場所であるため、風紀の紊乱する土地というイメージもあつた⁽¹⁸⁾。「片恋」の友だちのしている

ことは、帝都東京から横浜を切り離し、横浜に特別なまなざしを注ぎそれに負のイメージを押しかぶせることで、横浜を外部として切り離す行為であり、横浜という陰面を反転させた東京という陽面を立ち上げるための、自らの文明性確認のための行為である。横浜は帝都東京から外部化し易い都合のいい場所だったのである。

その横浜では「この土地へ来て始めて活動へ行った晩に、何年ぶりかでその人が写真に出て来た」とお徳が言うように、東京で見られない映画が見られる。鷺崎秀一は本作における映画の取り扱いに関し、「当時、新聞・雑誌上で物議を醸していた『活動写真興行取締規則』（大正6年7月14日公布8月1日施行）が発令間もなかった」（19）ことに注意を促している。取締規則によって東京府内で警視庁が映画の検閲を一括して行い、検閲強化の季節が到来した。鷺崎は、お徳の恋が「こうした規制によって、消失する危機に晒されていたということ」を、当時の読者が容易に想像できた「はずだとしている。この指摘は、お徳の恋する俳優が「どうした訳か」「ばつたり」「写真に出てこなくなってしまった」理由を推察する上で示唆に富む。お徳の恋する映画俳優の出演する映画の一つは犯罪事件が扱われていることを考えれば、検閲の影響を受けたと当時の読者はまず推測するだろう。お徳が横浜で好きな俳優と邂逅できたのは、東京と比べて横浜の取締りが緩慢なためだろう。だが、お徳の片恋は、取締規則の発令で消失の危機に晒されているかもしれない。横浜も、規律権力が他の地方へと及ぶ中央集権体制・画一化の機運によって、その良さが奪われる可能性があるわけだ。小説の語りの場が一九一四年に東京と横浜間の運輸を開始した「京浜電車」という、東京と横浜を短時間で行き来できる鉄道にすることで、画一化の気運を暗示できるし、「片恋」という小説には、冒頭から、東京という中央の権力を模倣してしまう横浜が点描されてしまっていた。「何しろYの事だから、床の間には石版摺りの乃木大将の掛物がかゝつてゐて、その前に造花の牡丹が生けてあると云ふ体裁だがね」という箇所がそれだ。永井荷風「きのふの淵」（『大和』一九三五年三月）では一般的に「新橋の茶屋にはいづこにも明治の元勳か何かの書幅が掛けてあつた」ことが回想されている。「石版摺り」の乃木大将の掛物をかけ、その前に「造花」の牡丹を生けるといふ体裁は、新橋などの一流茶屋の浅薄な模倣だろう。お徳の見た映画の中で「大き

な鸚鵡の籠が一つ吊下げてある」のがしたためられるのも、模倣性の象徴と捉えてもいい。実際、その後の横浜は首都圏に組み込まれることになる。

このように、規範・規律の位置から疎外を受ける横浜という場所とパラレルに、お徳の物語は、男性同士の競争的な関係や知識・規律に基づいて、恣意的に物語化されているのである。と同時に、彼女の片恋が消失する予兆もかすかに織り込まれている。

五、語りの欲望の背景と意義

ところで、友だちは何故にお徳に冷笑と同情を浴びせるのだろうか。安藤公美が指摘するように、友だちは「論理的」^{ロジカル}「例」^{エキザンプル}と言った英語を使うと同時に、「公園で見初めた」「宮戸座か常盤座の馬の足」「毛唐の役者」「八犬伝」といった伝統的な用語を使用する²⁰。竹内洋は、「日本の高等教育」は「貧しい階層（ブチブル）の子弟を基盤にしていた」ことに着目し、「学歴エリートが繰り出す教養主義（西洋古典）」について次のように述べている。「かれらは身分集団としての相続カリスマも欠いていた。かれらは必死に正統なる文化に同化し、民衆と差異化しなければならなかった。旧制高校の教養主義はそういう同化＝差異化戦略である」²¹。そして、「大正時代から第一高等学校をはじめとする旧制高等学校を中心に花開いた学歴エリート文化」である「教養主義」について、「教養」は「(武士的)農民的文化のエートスと西欧文化へのコミットメントから構成されていた」としている²²。「片恋」の友だちにとって、エリートの知的基盤としての西洋に憧れを抱くお徳との出会いは、自らのアイデンティティを揺さぶられる出来事だったはずだ。彼は、横浜に住み、外来の娯楽である映画を享受するお徳との出会いを通じて、自らの伝統性―武士的農民的文化のエートスを取り出し、それを強調することで、ハイカラ文化との差異化を図らざるを得なくなったと言える。おまけに彼女は学歴という価値基準に対する尊敬の念すらなさそうだ。友だちがお徳を見下す必要があったのは、自らのアイデンティティに揺さぶりをかける者に対する警戒からであろう。また、彼がお

徳に恋されたかのように振舞う姿には、知識という圏域以外の場での競争をも強いられる知識人の有様を見ていい。西洋人俳優に憧れるという情話文学には極めて珍しいお徳の造形は、それに出会った知識人に脅かしを与え、芸者を語る知識人に不安を与えするという文学的意義を持つことになる。友だちはお徳を冷笑しながら、その実お徳から脅かしを受けているのである。自らの伝統性というエートスを取り出すとともに、東京／横浜、知識人／下層階級という二つの対立項を軸に彼がお徳との差異化を図るのは、自らの威信を再定位化したいためだろう。

友だちが自らの道徳的健全さをアピールせざるを得ない背景には、この時期、男子の貞操に対する視線が厳しくなったことが挙げられるだろう。一九一四年から一九一五年にかけての、女子の貞操を議論する貞操論争の過程で、男子の貞操についても問われるようになった。伊藤野枝は「貞操に就いての雑感」(『青鞥』一九一五年二月)で、「女子に貞操が必要ならば同じく男子にも必要でなくてはならない」と言っているが、男子に対して貞操を要求する声は多い(23)。それとともに、花柳病男子との結婚を忌避すべきだとの主張も増えていた。例えば安部磯雄「大正新女大学 その八」(『婦人公論』一九一六年八月)で、結婚について女子が「調べねばならぬのは、相手の男の身体の健康如何である。今まで日本では、此方面に於て第一番に注意したものは癩病の血統であつたが、私は之に次いで花柳病如何を調べる必要があると思ふ。此花柳病の恐るべきことは、日本の婦人はまだ能く知らぬやうであるが、此病気は自分自身を害すると共に子孫を生むことが出来ないやうになる。仮令子供が出来ても片輪の子が生れる恐れがある。」としている(24)。「片恋」の友だちが己の道徳的健全さを語らなければならないのは、結婚不適合者としての烙印を押されることを回避したい欲望からだろう。

男子の貞操に対する視線が厳しくなったという社会的背景に連動してか、文壇においても遊蕩文学撲滅論争が勃発する。芥川が秦豊吉宛書簡で荷風の「名花」を絶賛したことは既述の通りだが、赤木桁平の「遊蕩文学」の撲滅(『読売新聞』一九一六年八月六、八日)に言及した後に、遊蕩文学でありながら芸術性のある作品として称賛したのが「名花」であった。「名花」を下敷きとする、芸者を焦点化した芥川初の小説「片恋」を考える際(25)、赤木の「遊

蕩文学」の撲滅」と、それを契機とする遊蕩文学撲滅論争を視野に入れる必要がある。

芥川は井川恭宛書簡（一九一六年一〇月二一日、年次推定）で、「作家」は「金をほしがりにしても金をとる手段をモオライズしないのが感心だ」、「ぼくは安価な良心を持つてゐるブルジョアより かはいい道楽者の方によつぽど同情するやうになつた」と言っている。この言葉の背景には赤木の遊蕩文学撲滅論があるだろう。赤木は「遊蕩文学」の撲滅」において、「最近の文壇の实情」として「これまで比較的眞面目な作家」として認められてゐた人々が、一面「遊蕩文学」的作家として、その節操を二三にしつゝある」、「その原因の一半は、慥に生活上の経済的压迫に強ひられて」「通俗的方面に最後の活路を見出さうとするところにあらう」と述べている。金をとる手段をモオライズする安価な良心を持った人と、金をとる手段をモオライズしないかわい道楽者とを対比させる思考は、「遊蕩文学」の撲滅」とそれに関する論争によつて齎された思考軸であるだろう。赤木は「遊蕩文学」の徒」は「酒楼と娼婦」にばかり興味を持っているが、「静謐なる感情と冷徹なる理知とに依つて司配せられた生活」こそが必要ではないかと説く。対し遊蕩文学撲滅論への駁論、小山内薫「所謂「遊蕩文学」に就て」、『時事新報』一九一六年八月二二、一五、一六、一七日）は、「愛情なしの人間の理知や意思が果してどれ程頼みになりませう」、「思ふに、赤木氏のやうな人が大学を卒業して、段々出世をして警視総監にでもなると、私娼撲滅でも企てる人になるのでせう——学生時代に遊蕩文学撲滅を企てたやうに——」と述べる。遊蕩文学撲滅論をこの年の警視庁の私娼撲滅策と関連させているのにも注意が必要で、赤木の遊蕩文学撲滅論は道德の強化の風潮と関連付けて解釈された²⁶。

「片恋」の興味深い点は、芸者と関わる人物が道德家を自称している点である。花柳街に疎い人物が花柳街に足を踏み入れたという筋は、通常の情話文学²⁷と比較したときの「片恋」のオリジナルである。良心の強調とそれに対する非難という枠組みが遊蕩文学撲滅論争では見られるのだが、自らを堅気な人間として強調し、芸者お徳の恋を恣意的に語る「片恋」の友だちは、こうした時代的趨勢と共時性を持つ。情話文学の性格を持つ「片恋」で道德家を自称する人物を登場させた背景に、道德を軸に花柳街を劣位化する風潮に対する作者の静かな抗議も読み取

れるのではないだろうか。

友だちが実のところお徳に恋しているのではないかと推察することは実はたやすい。お徳を冷笑する反面、「これには、僕も同情したよ」、「こいつには、可笑しい中でも、つまされたよ」、「さう思へば、可哀さうだよ」というように、彼女に寄り添う場面が散見されるからだ。「片恋」は、お徳に対する恋情を抱こうとしながらも、時代の趨勢からそれを明瞭には示せない男の哀話でもある。道徳家を自称する人物として友だちを造形したことで、芸者を語る友だちこそが不安定な位置に置かれるという手法が採用されているのである。この点も「片恋」が芸者を語る上で採用した重要な方法である。

六、貧を描かないということ

ところで、坂上博一が「従来貧のために芸者に身を売ると言えば、自然主義の作品はもとより一時代前の硯友社の小説などにもよく扱われた題材であり、そこには自我を梗塞された陰惨なかげりがあった」(28)と指摘するように、芸者になった動機として経済的要因を書くことは文学的定型であった。お徳の芸者になったいきさつとしての貧を描いていないという空白こそが、こうした常套句クリシェに対する「片恋」の意義である。これは荷風の「名花」に倣った手法である(29)。「名花」では友達が「私も今だに当時のお君、今日では新橋の小鍛冶の血統については何事も知ってゐません」と言うように、芸者になった動機については語られないからだ。荷風「おぼろ夜」(『よしあし草』一九〇〇年六月一五日)の芸妓・駒次が「最う世の中が可厭に成つちやツたんだよ」と自分の身の上の哀れを語り、「阿爺様と云ふのは、今ぢや顔も明瞭覚えて居ない位なんだけれども、何でも相場で財産を損了つたとかで、私は未だ年が行かなかつたもんだから、半玉に売られるし」というように、芸者になった理由を語るのとは対照的である。ヒロインの芸者の境遇を決定しないという「名花」の手法を、「片恋」は踏襲しているだろう。ただし、「名花」のお君は「芸者は一番お小遣銭のない時ほど困る事はなくつてよ」と金を強請っている。「片恋」では、男にお金を強請る

様子さえ叙述されない。

芸者に対する憐憫とその経歴に関する叙述は、彼ら／我々という区分けが軸になっているだろう。我々は彼らに優越した存在としての位置を与えられることになるのである。「片恋」の手法の成否は次の点にかけられていたといっている。第一に、芸者の生の強度を高める仕掛けを用意していること、にもかかわらず複数の物語の可能性を内在させ、不確定性を残しておく点。第二に、芸者に同情を注ぐ知識人を不安定な位置に置く点である。第三に、第一、第二の手法により、芸者に対する憐憫とその経歴に関する叙述を行う通常の情話文学とは差異化を図っている点。第四に、遊蕩文学撲滅論における道徳重視の規範により芸者に対するまなざしが欠如していることに対するさやかな抗議となっている点である。同時に、お徳の未来の不幸が微妙に暗示されている点で、彼女の現在の幸福を考える契機を読者に提供している。

注

- (1) 鷺崎秀一「芥川龍之介「片恋」論——チャップリン流行下における〈西洋の會我の家〉表象から——」(『日本語と日本文学』二〇〇四年二月)。
- (2) 江藤茂博「芥川龍之介「片恋」論——重層する語りのなかで浮かび上がるフィルムの質感」(『十文字国文』二〇一二年三月)。
- (3) その他、馮海鷹「芥川龍之介『片恋』を読む」(『芥川龍之介研究』二〇一〇年四月)、山崎甲一「お徳の「片恋」、龍之介の贖罪——嘘による外は語られぬ自画像」(『芸術至上主義文芸』二〇一六年一月)も同系の論である。
- (4) 安藤公美『芥川龍之介 絵画・開化・都市・映画』(翰林書房、二〇〇六年三月)。
- (5) 寫田明子「片恋」(『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、二〇〇〇年六月)。
- (6) 秦豊吉宛芥川書簡、一九一六年八月九日、年月推定。
- (7) 神田由美子「芥川龍之介と永井荷風」(『東洋学園大学紀要』一九九三年七月)。

- (8) 「倫敦のお客様」(『読売新聞』一九二二年一月二八日)、「珍客が来た」(『読売新聞』一九一四年一月二三日)、「米国旅客の浅草見物」(『読売新聞』一九一五年七月二二日)など参照。
- (9) 『芥川龍之介全集第一卷』(筑摩書房、一九五八年二月)脚注。
- (10) 馮海鷹、前掲「芥川龍之介『片恋』を読む」。
- (11) 江藤茂博、前掲「芥川龍之介「片恋」論——重層する語りのなかで浮かび上がるフィルム的質感」。
- (12) 鷺崎秀一、前掲「芥川龍之介「片恋」論——チャップリン流行下における〈西洋の曾我の家〉表象から——」。
- (13) 山崎甲一は前掲「お徳の「片恋」、龍之介の贖罪——嘘による外は語られぬ自画像」で「お徳の「真剣」な恋情が向けられた当の相手は、他ならぬ聞き手本人の「僕」だとしている。
- (14) 江藤茂博、前掲「芥川龍之介「片恋」論——重層する語りのなかで浮かび上がるフィルム的質感」。
- (15) 神田由美子「車中と停車場の光景 芥川文学における近代的空間」(『芥川龍之介研究年誌』二〇〇九年三月)。
- (16) 成田龍一「帝都東京」(『岩波講座 日本通史 第16巻 近代I』岩波書店、一九九四年一月)。
- (17) 芥川の「雛」(『中央公論』一九二三年三月)でも、お鶴が「横浜」の「亜米利加人」に「コレラになってしまへば好い」と思うシーンがある。また、「捨児」にも「横浜」で「夫はチブスに罹った」という一節がある。
- (18) 麻生正蔵「ダンスの流行についての感想」(『婦人之友』一九二二年八月)では「横浜」の「外人間」に「Jazz dance」が「流行」し「風紀壊乱的」で「淫蕩的」だとしている。「外人の営業禁止」(『読売新聞』一九〇七年一月一九日)では「横浜市山下町」で「宿屋並飲食店」の「米国人」が「風紀紊乱の行為」で「営業禁止」を命ぜられたことを報じている。横浜について書いた谷崎潤一郎「港の人々」(『婦人公論』一九二三年一月、一二月合併号)にも「キヨ・ハウスの女たちは」「西洋人の客を相手にするせみかみんな野蛮で、活潑で、キビキビしてゐて、体格なども立派だった。」とある。
- (19) 鷺崎秀一、前掲「芥川龍之介「片恋」論——チャップリン流行下における〈西洋の曾我の家〉表象から——」。
- (20) 安藤公美、前掲『芥川龍之介 絵画・開化・都市・映画』。

- (21) 竹内洋『立志・苦学・出世 受験生の社会史』（講談社、二〇一五年九月）。
- (22) 竹内洋「教養知識人のハビトゥスと身体」『知識人』岩波書店、一九九九年九月。
- (23) その他、吉田熊次「教育ある婦人の貞操観」『婦女新聞』一九一六年六月三〇日）、平塚明子「男女性的道德論」『婦人公論』一九一六年一〇月）、島田三郎「男子の貞操」『読売新聞』一九一六年一二月三〇日）などで男子の貞操に関する言及がある。
- (24) 他に田村化三郎『花柳病予防及自療法』（東京衛生学会、一九一六年四月）、「婚約と健康診断」『婦女新聞』一九一六年五月五日）、高島平三郎「大正新女大学 その七」『婦人公論』一九一六年七月）などが花柳病男子との結婚の危険を訴えている。
- (25) 芥川が芸者を中心に描いたのは外に「一夕話」『サンデー毎日』一九二二年七月一〇日）、「湖南の扇」『中央公論』一九二六年一月）しかない。
- (26) 篠崎美生子『弱い「内面」の陥穽——芥川龍之介から見た日本近代文学——』（翰林書房、二〇一七年五月）も、遊蕩文学への不満の理由の一つに「社会道德」への抵触」があったことを指摘している。
- (27) 赤木桁平「遊蕩文学」の撲滅」参照。
- (28) 坂上博一「すみだ川」の意味」『日本文学』一九七一年一二月）。
- (29) ただし、坂上博一、前掲「すみだ川」の意味」が指摘するように、荷風は「すみだ川」『新小説』一九〇九年一二月）で既にこの手法を採用している。

第二章 日清戦争と語りの戦略

——「首が落ちた話」論——

一、立場をもたない語り

芥川龍之介の「首が落ちた話」(『新潮』一九一八年一月)は、日清戦争の際日本軍と清軍が戦闘を行う遼東半島を舞台とし、清の騎兵である何小二を主人公とする。日清戦争を題材とした小説には、泉鏡花の「海城発電」(『太陽』一八九六年一月)や川上眉山の『大村少尉』(春陽堂、一八九六年五月)などがあるが、前者は日本赤十字社の看護員、後者は日本兵を主人公としており、いずれも日本人が主人公となっている。日本兵を主人公とせず、日本にとって敵国である清の兵士を焦点化し、その内面を描いているのが、「首が落ちた話」の文学史的意義と言える(1)。

日本人の読者を対象とした小説が中国人を主人公としてその心中を開示する際、そこには語りの面で不可欠な手続きがあるように思われる。それは、中国人に対して敵愾心を抱いたり、中国を野蛮な国と見做して蔑視したりするパラダイムを内包させたまま主人公を語ることなく、中国人と日本人を同じ人間と見なす同胞意識の視座から物語ることである。同朋意識の語りの装置がなく、中国人に対する敵対・賤易の視座から語りを行えば、読者は語り手の主人公に対する批判的まなざしを受け継いだまま物語を読むことになるため、読者はあくまで日本人の視点から主人公を批評的に眺めるにとどまってしまい、中国人の主人公への感情移入が妨げられるのだ。コスモポリタニズムの語りの装置があつてはじめて、日本人読者は中国人主人公に己を重ね合わせて同化しうる。

中国に対する賤視の捨象が欠かせないだけでなく、中国人の視座から敵対的に日本を眺めるといふ語りも回避されなければならないだろう。日清戦争を描いた鏡花の「海城発電」は、博愛主義の看護員・神埼が愛国主義の軍夫・

海野と対立する様相を描いた小説だが、この小説が、「作家が其主人公（看護員）の性格を日本人に造らずして却て支那人の如く作りたるは最も大なる失策と云ふべし。苟も日本として日本人に特有なる国家的観念を欠かしめは、その代わりに、如何なる美德を帯はしむるとも読者何によつて其人物に同情を寄するを得ん。」⁽²⁾という同時代評を招来したことを思い起こしてよい。主人公が日本の愛国主義を批判的に眺めるだけで、つまり、中国的視点から日本の視点を批判するだけで、日本人読者は主人公に感情移入できなくなるのだ。中国的視線から日本を区別し、敵対化した視点で叙述を行えば、読者には強い反発心が醸成されるため主人公に感情移入しにくくなるのである⁽³⁾。

日本人に向けて中国人主人公を物語る際には、日本の視点から中国を侮ることも、中国的視点から日本に批判的であることも、回避されなければならない。日本と中国を区別し、そのいずれかを上位化し中心化するという語りの構造を避け、両者を同等のものとして見做す語りの手続きが必要となってくる、と言い換えることもできる。

実際、「首が落ちた話」の語りの特質は、中国と日本とを隔てる差異化のまなざしが排除され、中国と日本を同等に見做すというまなざしにある。何小二の属する清の騎兵と日本の騎兵との間で突然白兵戦が開始された際、日本騎兵の方へ押し寄せる中国騎兵の様子は、「いづれも犬のやうに歯をむき出しながら、猛然として日本騎兵のある方へ殺到した」と描かれている。日本騎兵の描写に関しても、「すると敵も、彼等（中国騎兵のこと——引用者注）と同じ衝動に支配されてゐたのであらう。一瞬の後には、やはり歯をむき出した、彼等の顔を鏡に映したやうな顔が、幾つも彼等の左右に出没し始めた」とされている。中国騎兵・日本騎兵のいずれも「歯をむき出し」にしているのであり、日本騎兵の顔は中国騎兵の「顔を鏡に映した」ようなのである。日本騎兵の内面も、中国騎兵の感じる衝動と「同じ衝動に支配」されている。突然敵国の兵隊に遭遇して動物的対抗心を燃やす日本騎兵と中国騎兵の表情や衝動の同一性を強調する語りの力学を析出できる。突然の敵兵との遭遇にも理性的な対応をする日本騎兵に反して動物的衝動に支配される中国兵を対照させたり、逆に中国兵の冷静さに反して日本兵の取り乱した様子を対照させたりすることもなく、いずれの国の兵士の表情・衝動も同じものとしてデザインしているのである。

また、日本騎兵と戦う際の「何小二は自分にもまるで意味を成さない事を、気違ひのやうな大声で喚」くのであるが、そこへ突然躍り出た日本騎兵も「眼球がとび出しさうに眼を見開」き、「血相の変つてゐる」顔をしている。日本騎兵・中国騎兵いずれも、心の準備のないままの突然すぎる敵兵との戦いに必死になり、心の平静さを失っている様子が強調されていると言える。ここでも、日本・中国いずれかを上位に位置づけることなく、人間として同じ心理を持つているかのように語られているのだ。

日清戦争に報知新聞の特派員として従軍した遅塚麗水の見聞録『陣中日記』（春陽堂、一八九四年二月）において、平壤攻防戦に向かう途中の戦闘を描いている部分で、「清兵は所謂武士道なるものを知らず」というように、武士道の有無によって日本と中国を差異化し、それによって両者の優劣を鮮明にしている記述があることを背景にしたとき、「首が落ちた話」におけるこうした語りの意義が見えてくるだろう。日本騎兵と中国騎兵の同一性をことさらに強調していることは看過されるべきではない。

首を切られた何小二を乗せた馬が高梁畑の中を無二無三に駆けて行く際に突如挿入される、「日の光も秋は、遼東と日本と変りがない」という記述にも、芥川の語りへの慎重な目配りが發揮されている。日の光に関して日本と中国で違いがないかのように表現することで、日の光の持つ象徴性（おそらくは寂しさという意味合い）が日本と中国で同一であることを示している。自然物の持つ記号性が、日本・中国の両国において同一であることをわざわざ強調しているのである。

それに加え、この記述により、「日の光」の強度が日本と中国で同じであるかのような印象を与え、日本と中国であたかも気候に差異がないかのように示す効果もある。実際、この小説では中国と日本の気候的差異を表現することとは一切なされておらず、日中の気候的差異を捨象するというテクニクの空白は重大な意義を持つように思われる。水本浩典・細淵清貴の共同研究によると、「従軍日記の記述を確認する」ことで、「兵士にとって日清戦争は、清国兵との戦闘以上に寒さや病気との闘いであったことがわかる」という⁽⁴⁾。たとえば、澤茂三吉は『征清日誌』（三

省堂、一九三二年）の中の「十二 旅順より金州へ移動」の中で、「十一月二十七日、前夜の期待は外れて雪は雨まじりとなり風止まず」としたうえで「雨は已に衣に湿潤して寒気激しく暖をとりて又行く。雪は氷となり顔面を打ち痛し」と記し、遼東半島の十一月の寒さを訴えている。日本では経験できない寒さに対する苦衷を打ち明ける兵士たちの言説を背景に置くと、「首が落ちた話」が遼東の寒さを描写しないうえ、遼東と日本の気候が同じであるかのようなニュアンスを含んだ表現を持つことは、注目されてよい。日本と中国を差異化する力学をあえて排除しているのだ。

それに加え、語り手は中国の軍隊を日本の軍隊と同じような近代的な組織として見做していることも重要である。語り手が中国の軍隊を前近代的な野蛮な組織として賤視すれば、中国を日本との同朋意識で把握するという語りの装置を作り出すことができなくなってくるからである。

何小二の属する中国騎兵が日本騎兵に突然遭遇し、戦闘が開始された際、「それから後の事は、どうも時間の観念が明瞭でない」と記され、「その騒ぎがどの位つづいたか、その間にどんな事件がどんな順序で起つたか、かう云う点になると、殆何一つはつきりしない」とされるのは、何小二が時間の観念を失ったことを示すためだろう。そして、日本騎兵に首を切られ、馬に乗って高梁畑を突き進むとき、「人の身の丈よりも高い高梁は、無二無三に駆けてゆく馬に踏みしだかれて、波のやうに起伏する」とされ、何小二が自然の時間感覚、つまり、円周上を始めなく終りなく循環し、時間の長さや順序を問題にしない時間感覚に回帰しつつあることを暗示していることから、何小二が失った時間認識とは、時間の長さや順序を重要視する、両端の閉じた有限の直線として表現される近代的な時間観念であるだろう。そのような近代的な時間観念を何小二が喪失したことを強調することで、逆に何小二が近代的な時間観念を保持していたことを示すことにもなるのだ。

成沢光は、明治政府によってフランスとプロイセンをモデルとして近代化された軍隊の規律の特徴の一つに「時間割による行動規則」⁽⁵⁾があるとする。吉田裕も、「軍隊は、工場・学校とならんで、人間を近代的時間秩序の中

に馴致してゆく重要な場となっていたのである」と述べ、「日本軍の場合、すでに一九〇〇（明治三三）年の北清事変の段階で、下士官クラスまで腕時計を所持していたといわれている」としている⁽⁶⁾のだが、日本において軍隊は、近代的時間観念の中に人々を囲い込む場として機能していたようだ。

したがって、「首が落ちた話」において、語り手が何小二の近代的時間秩序の喪失を描き出したことは重要な意義を持つてくるだろう。語り手は、何小二が近代的時間秩序を失ったことを描くことで、逆にそうした時間観念を持つていたことを暗に物語っているであり、中国の軍隊が近代的な時間観念を教育する場であると捉えているのである。語り手は、中国の軍隊を賤視することはせず、日本の軍隊と同じように、近代性を備えた組織として叙述しているのだ。

「首が落ちた話」の語り手は、中国と日本を同等に見做す視座で語りを行うことで、読者が主人公に速やかに感情移入できる装置を作り出しているのだが、このような語りの特徴は、物語のモチーフを語りの位相に投影したものである。首を切られ、死の恐怖に苛まれる何小二は、戦争に関係するあらゆるものに恨めしさを感じる。しかし、馬の上から転げ落ちた何小二は、自分の横を通り過ぎて行った日本騎兵の一隊に対して、「ああ、あの騎兵たちも、寂しさはやはり自分と変わらないのであらう。もし彼等が幻でなかったなら、自分は彼等と互に慰め合つて、せめて一時でもこの寂しさを忘れたい」という感慨にふけり、誰をでも許したいと感じるようになる。個々の分節化した状態に醜さを感じ、世界との融和を志向するというこの小説のプロット⁽⁷⁾は、戦争という暴力的な営為に動員される悲劇は、日本兵であろうと中国兵であろうと同じはずだという、作者の人道主義的な考えを反映するものであるが、世界との融和というモチーフを支えるためにも、中国と日本を同等に見做す語りの手続きは必要になってくるのである。

関口安義は「語り手の語り口には、清国兵を軽視した物言いはまったくない」⁽⁸⁾とし、林佩君は語り手が「何小二と同化するようにして」⁽⁹⁾語っているとするが、以上のように、語り手の語りの特質は、日本と中国を同一に見

做し、両者の差異を無化する点にあるといえる。空間上の制限を超えて、人間というものの本質に迫ろうとする志向性は、松浦一が『文学の本質』（大日本図書、一九一五年四月）において、国と国との境界を超えて文学の本質を見定めようとした態度と同時性を持つ。芥川も受講した東京帝大での講義に基づいたこの本は、芥川が「松浦一氏の『文学の本質』に就いて」（『読売新聞』一九一六年一月二日）で書評をしたものである。この本の中で松浦は、「文学というものに纏いつている因襲、人間の利害、もしくは各国の文学にそれぞれ特質なる国民性というようなものはみなひき剥いでしまって、赤裸々なる『文学』という一体が、赤裸々なる我々の心眼に映じたるものそのままを現してみたいと思う」とし、「文学の実体は、それで人間そのものの実体と等しく、時間・空間の制限、国民性の事情などを超越しているもの」であるとする¹⁹。芥川が近代中国を舞台として中国人を描く際、『文学の本質』に見られるようなコスモポリタニズムの戦略を採用していたことは注目されてよい。

本章では、中国を日本と同等に見做す語り手のコスモポリタニズム的な語りのことを、「立場をもたない語り」と呼ぶことにする。

二、中国賤視の語り

それに対して、この小説の「下」で木村陸軍少佐が語る何小二の物語は、中国と日本を二項対立の二つの極に對置させ、日清戦争の頃から瀰漫し始めた中国に対する貶視を識閥下にひそませたものであり、中国と日本を同等に見なす語り手の（立場をもたない語り）とは対立する構図が見られる。

「下」は下関条約から約一年後の早春に、北京の日本公使館の一室で、公使館附武官の木村陸軍少佐と農商務省技師の山川理学士とが雑談に耽る様子が描かれる。二人の話が日清戦争当時の追憶に及んだ際、木村は現地の新聞の「神州日報」の綴じ込みを持って来て山川に読ませる。その記事は、戦争当時勇士であったある床屋の主人が戦後身持ちを悪くし、とうとう酒楼で飲み仲間と喧嘩した揚句、戦争の時に負った首の傷口が破れて絶命したことを

紹介するものであった。山川がその記事を読み終わった後に「面白いだらう。こんな事は支那でなくつては、ありはしない。」と述べる木村は、首が落ちるといふ摩訶不思議なことが起こりうる国として中国を捉え、そのような奇怪な出来事は日本では起こり得ないと考えているはずだ。ここには、合理・科学・文明の国として日本を捉え、その対立項として中国を不可解・幻想・怪奇の国だと認識する枠組みがあるのであり、中国と日本を差異化する欲望が仄見える。首に重傷を負ってこれまでの生活を反省する何小二について語る際にも、木村は「支那めいた匂を送つて来る」「テエブルの上の紅梅へ眼をやつて」から話すのであり、中国の文化を味わう、「支那趣味」に近い態度を見せている。もちろん、中国に神秘性を付与したり、中国の文化を享受したりすること自体は、貶視というよりむしろ中国に対する日本のオリエンタリズムとする方が適切だろう。しかし、サイドが「オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式スタイルなのである」⁽¹¹⁾と述べるように、オリエンタリズムは優越的位置にいるものが従属的種族に声を与えて支配するための思考様式なのであり、その国に対する貶視の視線と表裏一体の関係にある。木村は、あくまで優越的位置から後進の中国を捉えるパラダイムを持ったまま何小二の物語を語るのである。

そして、「神州日報」の記事の男が自分の知っている何小二という中国人であることを山川に明かした木村は、戦争当時野戦病院で親しくなった何小二の追憶を山川に語って聞かせる。木村によれば、何小二は戦時日本兵の手によって首に重傷を負った際、今までの自分の生活が浅ましくなってきた。だが、戦後すぐに無頼漢となり、その結果飲み仲間との喧嘩で首が落ちた。木村の推察によれば、何小二はその時もまた今までの自分の生活を浅ましいと感じたはずだという。それに対して山川は、次のように述べる。

「君は立派な空想家だ。だが、それならどうしてあいつは、一度さう云ふ目に遇ひながら、無頼漢なんぞになつたのだらう。」

「さう云ふ目」という言葉には、〈ひどい目〉というニュアンスがあることから、今までの自分の生活を浅ましく感

じるといふ反省の体験ではなく（木村の語る何小二の物語を聞く限りでは、何小二の反省体験そのものは過酷な体験に聞こえないはずだ）、日本兵によつて（首を切られた）体験を指すのだと考えられる。また、「ながら」といふ言葉は「両立しにくい二つの事態が同時に成り立つ意を表す」（12）言葉である。この逆接の接続語の後の内容が（無頼漢になった）というものであることから、その前に述べられる内容は、（無頼漢であったためにそういう目に遇った）というものになるはずだ。この際、（無頼漢であった）という意味内容と（そういう目に遇った）という意味内容は当然直接的な因果関係によつて結ばれるはずである。要するに、山川の言葉は（無頼漢であったために首を切られたのに、どうしてまた無頼漢になったのか）という内容なのだ。それでは、山川が考える戦時の何小二の（無頼）とはどのような状態なのか。首を切られる原因を無頼であるという状態に求めていることから、（無頼）とは戦争以前の何小二の素行の悪さではなく、戦争行為そのものを指すのだと言える。したがって、山川は何小二が戦争を行うことを無法なものとして蔑視していると云えるだろう。その山川の言葉を否定しない木村も、山川の提示する構図を共有しているものであり、何小二が戦争行為に関わることを無頼として蔑んでいるはずである。しかも、木村は、戦後も「陸軍少佐」であり、戦争を肯定する組織に所属していることから、日本の戦争行為は問題視せず、中国の戦争行為を無法と見做しているのである。木村には中国に対する貶視のまなざしがあると云えるだろう。

この木村の持つ思想的枠組みは、小説の終わりで木村の発する言葉とも呼応関係を持つ。

「我々は我々自身のあてにならない事を、痛切に知つて置く必要がある。実際それを知つてゐるもののみが、幾分でもあてになるのだ。さうしないと、何小二の首が落ちたやうに、我々の人格も何時どんな時首が落ちるかわからない。——すべて支那の新聞と云ふものは、こんな風に読まなくてはいけないのだ。」

「すべて支那の新聞と云ふものは、こんな風に読まなくてはいけないのだ」と語る木村の言葉から、中国の新聞の読み方と日本の新聞の読み方を画然と区別する枠組みが見てとれるのだが、ここで別して着目したいのはほかでもない。人格の落ちる物語が瀟灑する国として中国を見做し、それを「我々」日本人は反面教師として学び、人格

を保つ努力をしなければならぬと言いたげなその口吻である。ここでは、理性の有無によつて、日本と中国の差異化を図っており、(日本Ⅱ文明／中国Ⅱ野蛮) という対立図式が見てとれるのだ。

このような木村の中国貶視のパラダイムは、泉鏡花の「海城発電」の日本赤十字社の看護員の「困りましたな、何うも支那人の野蛮なのにやあ。何しろ、まるでもつて赤十字なるものゝ組織を解さないで、自分等を何がなし、戦闘員と同一に心得てるです。仕方がありませんな。」という中国蔑視のまなざしに通底する⁽¹³⁾。ここでは、赤十字組織を解さないという点で清兵を(野蛮)と見做しているのであるが、日本を文明国と考え、その対立項として中国を野蛮な国と認識する枠組みは、日清戦争の頃から日本に瀰漫し始めたパラダイムであった。

檜山幸夫によれば、日清戦争で清国領内に入った日本軍兵士は、「衰退した大清帝国という実像」を目撃し、「建物の空虚さと不潔感に大きな衝撃を受け」、「兵士が誇りと思う国家が無かったこと」や「依然として非近代国家であったこと」、「封建的軍隊過ぎたこと」に理解しがたいものを感じたという。それに加え、「緒戦の大勝利に酔った」ことで、「清国を侮る意識」が生まれ、「弱兵清軍論」が共有されるようになったという⁽¹⁴⁾。日本兵は、日清戦争で中国の領土に入ること、その現状を目撃し、中国に対する賤視のまなざしを育んでいったのだ。

日清戦争の開戦により、知識人たちも中国に対する貶視の感情を共有するようになっていった。たとえば、福沢諭吉は一八八二年にみずから創刊した「時事新報」の一八九四年七月の論説「日清の戦争は文野の戦争なり」において、次のように述べている。

彼等(清国人を指す——引用者注)は頑迷不靈にして普通の道理を解せず、文明開化の進歩を見て之を悦ばざるのみか、反対に其進歩を妨げんとして無法にも我に反対の意を表したるが故に、止むを得ずして事の茲に及びたるのみ。(中略)幾千の清兵は何れも無辜の人民にして之を塵にするは憐れむ可きが如くなれども、世界の文明進歩の爲めに其妨害物を排除せんとするに多少の殺風景を演ずるは到底免れざるの数なれば、彼等も不幸にして清国の如き腐敗政府の下に生れたる其運命の拙なきを自から諦むるの外なかる可し。⁽¹⁵⁾

福沢諭吉は、日清戦争を「文明開化の進歩を謀るものと其進歩を妨げんとするものとの戦」であると規定し、中国を野蛮視するパラダイムの形成に荷担していたのだ。内村鑑三も、日清戦争の目的に関して、「蒙昧頑愚の徒を排除せざるべからず」と言い、「北京政府」を「其文明の光輝を吾人の同胞に供せざる」ものと明言した¹⁶。また、正岡子規は一八九五年四月一〇日に大連港に向かう輸送船に乗り込み、前年のうちに終わった戦跡を訪ね、四月二十六日、金州の料理店で食事をとる。「二十六日、支那料理店に入る。むさくるしき事いわん方なし。庖厨は食卓に近く、天井は低くして煤けたり。品格は本国の居酒屋に似て、もの喰う人のさまも車夫、立ちん坊にまさりて卑し」(『日本タイムス』一八九五年五月一六日)。中国の料理店の不潔さ・建物の造りの拙劣さ・食事をとる人の様子の卑しさを表現している。

「首が落ちた話」が発表された当時にも、芥川龍之介が書簡の中で、「兄さんがこの間満州から匪賊の首を斬る所の画はがきをくれました。斬ってしまった所です。満州は野蛮ですね。あんな野蛮な所を旅行してかへつて来て文ちやんに叱られては可哀さうです」(塚本文苑、一九一七年一〇月三〇日)としている。小説発表当時の日本においても、中国に対する賤視は脈打つ。

日清戦争の頃から日本では中国を「野蛮」と名指すことで日本を「文明」国と逆規定する構造が蔓延してくるのだが、その中で、中国の軍隊の「無頼」さを指摘する言説もあつた。福沢諭吉は、「時事新報」に掲載された「支那の大なるは恐るゝに足らず」(一八九四年九月二三日)において、中国兵に關し「過般太沽の船中にて我領事館員等の一行に向て公然暴行を働き、刺さへ将官の目前に於て罪もなく力もなき婦女子を捕縛して殘刻に之を苦しめたる」とし、中国兵の「不規律」ゆえの無頼な振舞いを論難している。また、旅順での日本軍の住民虐殺に関する外国人からの批判に対する釈明の論説の中で、彼は日本の軍隊の文明性と清の軍隊の無法を指摘している。

日本の軍隊は眞実紛れもなき文明の軍隊にして、其敵に対するに寛大にして慈悲心に富めるは今更蝶々するを要せず。例へば牙山の如き、平壤の如き、只敵を打払ひたるのみにして之を塵にせざるのみか、軍門に降伏し

たるもの若しくは捕に就きたるものゝ如きは、国内安全の地に護送して衣食の自由を得せしめ、又負傷者は病院に入れて治療を加へしむる等、其取扱は毫も自国の兵士を遇するに異ならず。其待遇の厚きは敵人さへも感激する所にして、何人も我日本国の寛仁大度を疑ものはある可らず。(中略)今度旅順の砲台は支那兵が死力を竭して守りたる所にして、実に一万五、六千の兵力あり。我兵の奮戦これを陥るや、彼等の多数は遁れて四方に散じ、其逃げ後れたる者共は市街の民家に濫入して衣服を盗み取り、兵士の服装を脱して之を着替へ、恰も普通の市民の如くに装ひながら、其兵器をば捨てずして処々に潜伏し、我兵の進んで市街に入るや、隠れながら発砲して抵抗を試み、甚だ危険なるより止むを得ず家屋内を搜索して変装の兵士を見出し殺戮に及びたることなり。元来支那人が信義を口にして実際に不信不義を恥とせざるは実に言語の外にして、逆も普通の人間を以て見る可き人民に非ず。(「旅順の殺戮無稽の流言」『時事新報』一八九四年二月一四日)

福沢諭吉は、日本の軍隊は寛大で慈悲心に富む文明の軍隊であり、清の軍隊は、国際法を遵守しない狡猾で危険で無法な軍隊であると主張しているのだ。

以上の日清戦争当時の風潮を横に並べれば、木村の中国に対する認識には、日清戦争頃から一般化していた中国に対する貶視のコードが少なからず影響を及ぼしているのではないか。

同時に、何小二が日本兵に首を切られ、日本軍が彼を野戦病院へ送り届けたことに関して、「正気を失つてゐる所を、日本の看護卒が見つけて介抱してやつた」と言う木村の言葉には、日本軍の寛大さを誇る意識、つまり、文明の軍隊としての日本軍に対する矜持があらわれていると言えそうである。

それに対して、語り手の語りには、中国を日本と同等のものとして扱うパラダイムがあるのであり、当時の中国貶視のパラダイムに対して批評性を持つとも言えるだろう。

そもそも木村は捕虜としての何小二と接していたのであり、軍人が捕虜を見る視線、つまり上位のものが下位のものを見るまなざしを持った状態で何小二と接していたのであって、何小二に対する賤視を持たないわけにはいか

なかったはずだ。木村は野戦病院に收容されていた当時の何小二を「極正直な、人の好い人間」で「柔順なやつ」として性格の形容を行っている。正直・温厚・柔順という性格は捕虜としての性格であろう。軍人が捕虜を見るまなざしで何小二を性格規定しているのである。木村は何小二と接した時から彼を捕虜として見做していたのであり、戦勝国の者が敗戦国の者を見るまなざしで何小二を見ていたのである(17)。このため、木村は何小二を賤視するパラダイムからは自由になれなかったのだ。

それとは裏腹に、語り手は何小二の性格の形容を一切行っていない。木村・山川・神州日報記事がいずれも彼の性格形容を行っているのは対照的である(山川・神州日報に関しては後述)。語り手には、木村のように軍人という立場がないのであり、何小二の性格を規定する言葉を思いつけないのだ。語り手の語りは「立場をもたない語り」なのである。

語り手の「立場をもたない語り」と木村の「中国賤視の語り」が軋み合う対立の図式は鮮やかだ。

何小二が後悔した人生を「無頼漢」としての人生と定位する木村の即断に紛れはない。「上」「中」で語り手が語る何小二の物語を単純化して言うと、個々の分節化した状態に醜さを感じ、世界との融和を志向する、となることは既に述べた。何小二が醜悪だと感じたのは、己の生存のために他を踏み台にするという人間のエゴイズムのことであろうが、如上人間の独自の存在性の内実が具体的に何であるか、語り手は最後まで明かすことはない。読者の想像に委ねるように、明確に特定することが困難となるように書かれている。軍隊の中で青雲の志を抱く功名心の醜悪かもしれないし、戦争に従事して敵対を志向する闘争心の醜悪かもしれない。もしかすると、無頼の生活かもしれない。読者は可能性のある無数の物語の中から一つを選び取り、何小二の人生に想像の翼を広げなければならぬ。いくつも選択肢があるにもかかわらず、木村は何小二から直接話を聞いて、彼の後悔した人生を無頼漢としての人生であると即断してしまっているのである。この即断の深層に、木村少佐の中国賤視のパラダイムがあることは紛れがない。やはり、木村は語り手が語る何小二に関する記述とは相容れない叙述を行っているのである。

さて、これまでの考察によって、語り手の語りと木村の語りが対立していることを見てきた。先行研究では、語り手の語る何小二の物語と木村の語る何小二の物語を連続させて捉え、二つの語りが地続きとなっていることを無前提に受け入れたうえで、木村の末尾の発言をそのまま物語の主題と見做すものが多かったのだが⁽¹⁸⁾、「下」の部分においては生身の何小二の解釈ではなく、新聞記事という一つの〈解釈〉を解釈する形で成されていた」とする水洞幸夫論⁽¹⁹⁾や、「木村少佐が戦争に勝った日本人／負けた中国人という立場の違いを当然の前提として何小二を捉えている」ため「何小二の気持ちか木村少佐に理解できない」とする林颯君論⁽²⁰⁾のように、木村の言葉が何小二の人生の再現たりえているかを疑う考察もある。本章は、これらの論究に論証を与えながら、木村の言説が日清戦争当時のイデオロギーの影響を受けていることを指摘、さらに、語り手の語りの特徴の分析も行つて、木村の語りとの対立の様相を具体的に特定したものである。

三、語りの重層性

以上の考察で、語り手の〈立場をもたない語り〉と木村少佐の〈中国賤視の語り〉の二つの語りが軋み合う対立のありようを見てきた。従来この小説のテーマを担うとされてきた木村の言葉は、実はその深層に中国賤視のパラダイムを潜ませていたのであり、この語りは語り手の〈立場をもたない語り〉によって相対化されているとも言えるだろう。

語り手は、その語りの性質によって木村の語りを相対化する役割を果たしているわけであるが、木村の内面思惟を描かないことによつても木村との距離を開示させている。語り手は、山川については、「それがあまり唐突だったので、技師はちよいと驚いたが、相手の少佐が軍人に似合はない、洒脱な人間だと云ふ事は、日頃からよく心得る。そこで咄嗟に、戦争に関係した奇抜な逸話を予想しながら」というように、かなり長い記述によつてその内面思惟を描き出している。それに対して、木村の内面については一切描写していない。木村の内面の空白は、語り

手の木村からの背離を物語り、語り手と木村との較差を支える。木村の内面に寄り添わないことで、語り手は彼の言葉を相対化しうる位置を獲得しているのだ。

ところで、木村が「人格」を保つことに拘るのには、いかなる理由があるのだろうか。木村の人格重視の姿勢には、軍人特有の人格主義が影響を与えているように思われる。一八九七年に小作農民の子として生まれた横須賀勘衛門は、一九一八年に徴兵検査を受け、第一補充兵になったところの回想を次のように語っている。

やっぱり兵隊というのは、人間の修養に必要なものだなあと思つて。軍人上りというのはひとつのハクになつていましたからね。嫁さん貰うときにも、あれは兵隊上りだということ。叩き直されてくる。叩き直されますからねえ、昔は。話し聞くと、まあ打ちのめされてますからねえ。やっただすから、言うこと聞かなかつたら、あらゆるリンチが行なわれたですからねえ、昔の軍隊は。いまの自衛隊なんぞと違いますから、非常に叩き直されてくるからまともな人間になつてくるわけです。根性とか意地が突つ張つてくるし、責任感とか人との約束を違えないとか、軍隊は一つの人間修養段階でしたね⁽²¹⁾。

軍隊生活を、根性・意地・責任感を磨く人間修養の場として捉える横須賀の発言は、芥川龍之介の「將軍」〔改造〕一九二二年一月)の中村小將がN將軍(乃木希典がモデル)のことを「徹頭徹尾至誠の人」で「人格者」と見做す考え方とアナロジーをもつ。軍人は人格を鍛えなければならぬと考えられていたのだ。木村が人格の維持を図ろうとする考えには、軍人特有の人格主義的パラダイムが影響していると言えるだろう。木村は、中国を抑圧するパラダイムと軍人特有の人格主義的パラダイムの二つの枠組みの中で何小二の批評を行っているのである。

このような木村の語りが語り手の語りによって相対化されていることは先に述べたが、木村の語りはさらに別の二種類の語りによつても相対化されている。その語りは、「神州日報」の記事の語りと山川理学士の語りである。

まず、「神州日報」の記事については、国家主義のパラダイムで語られたものである。そもそも「神州」という言葉は、「神国」という意味を持ち日本や中国で自国の尊称として使われた言葉であるが、自国を神国として尊ぶこの

言葉は、戦時に国威発揚のために使われがちな言葉であろう。鏡花の「海城発電」でも、日清戦争の最中、愛国主義者・海野は博愛主義者・神埼に「愛国の何たるかを教え」るために、「苟も神州男児だ」と一喝する。戦時ナショナリズム発揚のために「神州」という言葉が利用されたことを私たちに教えてくれる。「神州日報」は国家主義の立場をとっており、国家に忠実な人民を称美する機能を持っていたのである。

記事の冒頭で、何小二を「日清戦争に出征して、屢々勲功を顕したる勇士」として性格規定する叙述は、国家に忠実な英雄を創出しようとするメディア特有の語りだろう。芥川が中国の新聞を読んでいたとは思えないので、日本に限って新聞記事を読み込むと、日清戦争当時の新聞は、国家に忠実な英雄を創り出す物語が多く見られる。たとえば、一八九四年九月二十九日の「読売新聞」の以下の記事。

○我海軍兵士の勇敢

勇将の下に弱卒なし海洋島沖海戦の詳報到達せば我海兵奮戦の美談も尠からざることならんが今聞くが儘に其一二を記さんに、比叡艦乗組の一水兵激戦の際操砲の任に当り榴弾を抱いて将に之を込めんとするや流弾飛び来て其前に爆裂し為に重傷を負ふ然れども彼は毅然として動かず弾丸を握りし儘突立ち居ること石像の如し他の水兵其の重傷を負へるを知り代て操砲の任に当り握れる弾丸を受取るや彼は安心して瞑目せり、又一水兵あり甲板に在て敵弾に中るも容易に瞑せず頻に敵兵を叱咤して止まず斯くて我艦大勝利の凱歌を奏して大同江に凱旋するや水兵は始めて我軍の勝利なるを知り微笑して瞑したりといふ

佐谷眞木人は、日清戦争に関する報道に関して、「戦死者が最期まで勇敢に戦った」という「忠勇美談」を「新聞や雑誌はこぞって」「掲載した」としているが⁽²²⁾、軍人の出陣を物語化し、英雄を創り出すのはメディア特有の語りである。何小二を「勇士」と見做すのも、戦後の何小二の身持ちの悪さを「素行修まらず」とするのも、国家主義的なメディアに特徴的な語りなのである。この〈中国の国家主義的語り〉により、戦中の何小二を無頼漢と見做す木村の語りは相対化されているのである。

次に、山川技師の語りについてであるが、人間の言葉を信頼しない、技術者特有の語りである。「アツタツシエの癖に、新聞記者と一しよになつて、いゝ加減な嘘を捏造するのではあるまいね」とする山川の発言から、彼が新聞記者の虚妄に不信を抱いていることが分かる。何小二が戦中日本兵に首を切られた際、今までの自分の生活を反省したのに、戦争が終わるとすぐに無頼漢になったことに関して「猫をかぶつてゐた」と見做すのも、人間は嘘をつくものであるという山川の認識が露呈したものだ。山川は、人間をいつわりの生き物だと思っており、人間の言葉や態度にまやかしを感じているのだ。

山川が人間の言葉や態度を信用しないのには、山川が「農商務省技師」であることに関係ありそうだ。農商務省は一八八一年に設置された、農政と産業の育成、振興を担当した行政機関であるが、一八九六年に中国に視察に来るのはどのような目的からなのか。一八九九年四月に書かれた農商務省の『清国蚕絲業復命書』（高山社同窓会、一九〇六年三月）のはしがきには、「清国蚕糸業視察ノ為メ出張ノ命を受ケ昨年十月十二日東京出發同十九日上海ニ到着シ浙江蘇省兩省ノ地ヲ視察調査スルコト約七十日ニシテ終リ」とあり、一九〇一年三月に書かれた『清国蠶糸業ニ関スル報告書』（農商務省商工局、一九〇一年九月）のはしがきにも、「昨年七月海外実業練習生ノ命ヲ拝セシ以來清国蚕業ノ根軸タル江蘇浙江ノ兩省内各生産地ヲ巡遊シ専ラ繭糸商工業ノ練習ニ意ヲ注キ或ハ上海ニ於ケル洋式製糸場及彼我ノ商館ニ出入リ窃ニ其工事若クハ取引ノ如何ヲ調査シ或ハ内地ノ生産者ニ就キ之レヲ討究シタル実績ニ聊カ僻見ヲ附加シ茲に具陳致候」とある。山川が視察に来ている時期とは三年以上の時間差があるので、これらの資料の引用には慎重でなければならぬが、山川が中国の蚕糸業視察のために中国を訪れている可能性は十分にある。そして、『清国蚕絲業復命書』には、上海の一年間の気温の統計データ・清国の輸出額のデータ・清国の生糸の輸出額データなどが報告され、『清国蠶糸業ニ関スル報告書』には、中国における気候風土・桑園・蚕種・養蚕・蚕繭・製糸業・繭糸屑物について報告されている。このことから、山川が自然現象の調査を行い、データの作成に従事しているだろうことが推察される。山川は、自然や工場の観察をしデータを作成する仕事をしていることが分かる。

山川は人間の言葉や態度に頼らない仕事をしているのだ。

山川の発言内容が（人間不信の語り）になることには、山川の仕事内容が影響を及ぼしていると言えそうである。木村は、何小二の話や新聞記事をそのまま信じて、何小二に関する物語を自分の中でつくっていたのであるが、この山川の語りによって、人間の言うことに立脚して自分なりの解釈を行う木村の語りは絶対性を失っていくのである。

ところで、「首が落ちた話」を読んてちよつと気になることは、山川が一本しか葉巻を吸っていないのに対して、木村は二本吸っているということだ。二人は談話をしながらいずれも葉巻を吹かしている。山川が葉巻を吸う様子を描写しているのは二箇所である。「山川技師もにや／＼しながら、長くなつた葉巻の灰を灰皿の中へはたき落した」という部分と、「山川技師は椅子の背へ頭をつけながら、足をのばして、皮肉に葉巻の煙を天井へ吐いた」という部分である。山川は、一度灰をはたき落してから再度吸っていることが分かり、おそらくは全部で一本しか吸っていない。それに対し、木村が葉巻を吹かす様子を描写しているのは三箇所ある。「木村少佐は、ゆつくり葉巻の煙を吐きながら」という箇所、「木村少佐は葉巻を捨て、珈琲茶碗を唇へあてながら」という箇所、「木村少佐は新しい葉巻きに火をつけてから」という箇所である。木村は合計二本の葉巻を吸っていることが分かるだろう。木村の方が山川より一本多く吸っているのだ。このことにより、木村が嗜好品に対する習慣的欲望を抑えられない性格を持つていることが暗示されていると考えられることは、無理な解釈とも言い難い。なぜなら、木村がコーヒーを飲む様子は描写されているのに（「珈琲茶碗を唇へあてながら」、山川が飲む様子は描かれていないからである。ここでも、木村がコーヒーという嗜好品に愛着を示す様子が見て取れる。木村は、習慣的な欲望を抑えられない性格なのであり、このことよつて木村が欲望を伴う習慣的思考を抑えられない性格であり、対して山川がより思索型で理性的であることを暗示しているとも言えるかもしれない。葉巻やコーヒーに関する描写は、木村と山川との較差を隠微に示す比喩的な表現の意味合いを持つ。彼らの思考は、彼らの言葉だけでなく、彼らの身振りというもう一つの「言語」

を手がかりに解き明かすことができる。このもう一つの「言語」によって、木村の語りが相対化されるありようを読み取らねばならない⁽²³⁾。

「首が落ちた話」では、従来物語世界で権威をもつとされた木村の語りが、実は、語り手・新聞記事・山川の語りによって、相対化されていたのであり、語りの重層性によって、日清戦争当時のイデオロギーに対する批評性を持った小説なのである。

四、知識人たちの欲望

ところで、この小説には二種類の知識人が登場する。木村陸軍少佐と山川理学士である。陸軍組織の中で高位にいる木村は、階級の低い兵卒である何小二を貶価する。戦争に負けた国である中国に対する貶視とも相俟って、何小二の人生は劣位の者のそれとして語られるのである。階級社会の中での上位の者が、下位の者との峻別を図りたいという欲望によるだろう。

一方で、山川の語りには、木村の語りを相対化する役割が振り当てられている。これは、理学士である彼の、軍人である山川とは差異化を図りたいという欲望が遠因にあると考えられる。軍隊エリートとは別種のものでありたいという欲望である。

この小説は、二人の知識人が、自分とは異なる身分集団、あるいは自分とは別種の知識人集団と出会ったときに働く欲望を描いているのである。

注

(1) 関口安義 「首が落ちた話」論——人生のしたたかな眼」『芥川龍之介研究年誌』二〇〇七年三月）に次の指摘がある。

「一九一八（大正七）年に発表された日清戦争の戦場を舞台とした小説で、清国側に視点を置いて書かれた日本の小説は稀で

ある。執筆当時、彼（芥川——引用者注）は横須賀の海軍機関学校という兵士養成機関の教員であった。こうした小説にあっては、日本びいきが出てもおかしくないところだ。が、そのような面はまったくくない。」

(2) 八面楼主人「泉鏡花の『海城発電』」(『国民之友』一八九六年一月)。

(3) ただし、この小説は全体として、日本人の愛国主義的視座が相対化されており、本稿ではその点を小説のモチーフとして重視している。しかし、表層的には日本の視座が相対化されているようには見えていないのであり、日本を敵対化していないかのような語りが採用されているのである。

(4) 水本浩典、細淵清貴「日清戦争従軍兵士が記録した異文化体験——日記の類似表現に着目して——」(『人間文化』二〇〇八年九月)。

(5) 成沢光『現代日本の社会秩序——歴史的起源を求めて』(岩波書店、一九九七年一月)。

(6) 吉田裕『日本の軍隊』(岩波書店、二〇〇二年二月)。

(7) 渡辺正彦は、「回心の結果何小二は調和的、融和的な心境になり、誰に対しても謝り、許そうとする」と述べている(「芥川龍之介」首が落ちた話」材源考——ドストエフスキー『白痴』との関連——『近代文学論』一九八六年三月)。また、吉田俊彦は、「徐々として彼の胸の上へ下つて来る」「限りなく深く「蒼い空」は「人間の独自の存在性への確信とか自負を空無化し、彼我合一の道を開く絶対境を暗示するものに外ならない」としている(『首が落ちた話』(芥川龍之介)小考——認識面における漱石の影響——『岡大国文論稿』一九八九年三月)。

(8) 関口安義、前掲「首が落ちた話」論——人生のしたたかな眼」。

(9) 林嬢君「芥川龍之介「首が落ちた話」論」(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』二〇〇八年三月)。

(10) 引用は、松浦一『文学の本質』(白鳳社、一九七三年十二月)に拠る。

(11) エドワード・W・サイード著、板垣雄三・杉田英明監修・今沢紀子訳『オリエンタリズム』(平凡社、一九九三年六月)。

(12) 『明鏡国語辞典』(大修館書店、二〇〇二年)。

- (13) 「私の文壇に出るまで」(『文章倶楽部』一九一七年八月)において、芥川は「中学時代には漢詩を可成り読み、小説では泉鏡花のものに没頭して、その悉くを読んだ」としている。
- (14) 檜山幸夫編『近代日本の形成と日清戦争——戦争の社会史——』(雄山閣出版、二〇〇一年四月)。
- (15) 福沢諭吉「日清の戦争は文野の戦争なり」(『時事新報』一八九四年七月二十九日)。引用は、『福澤諭吉全集 第一四卷』(岩波書店、一九六一年二月)による。以下、福沢諭吉の文章の引用は、すべてこの全集に拠る。
- (16) 内村鑑三「日清戦争の目的如何」(『国民之友』一八九四年一〇月三日)。引用は、『内村鑑三全集 3』(岩波書店、一九八二年一二月)に拠る。
- (17) 林佩君は前掲「芥川龍之介「首が落ちた話」論」において、「木村少佐は戦争に勝った立場に立って、負けた中国人の一人として何小二を見ているのである。」と指摘している。
- (18) その代表に、渡辺正彦、前掲「芥川龍之介「首が落ちた話」材源考——ドストエフスキー『白痴』との関連——」、関口安義、前掲「首が落ちた話」論——人生のしたたかな眼」、熊谷信子「芥川龍之介の描いた日清・日露戦争——「首が落ちた話」——」(『遊卵船』二〇〇四年六月)がある。
- (19) 水洞幸夫「「首が落ちた話」・「西郷隆盛」の位置——解釈する人々——」(『学葉』一九九〇年)。
- (20) 林佩君、前掲「芥川龍之介「首が落ちた話」論」。
- (21) 東敏雄編『大正から昭和初年の農民像』(御茶の水書房、一九八九年九月)。
- (22) 佐谷眞木人『日清戦争——「国民」の誕生』(講談社、二〇〇九年三月)。
- (23) 「点鬼簿」(『改造』一九二六年一〇月)に、「僕は時々幻のやうに僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこから僕の一生を見守つてゐるやうに感じてゐる。これは珈琲や煙草に疲れた僕の神経の仕業であらうか？ それとも又何かの機会に実在の世界へも面かげを見せる超自然の力の仕業であらうか？」とある。

第三章 軽薄な知の系譜と知識人

——「葱」論——

一、女給の時代

知識人と大衆との関係を考える上で興味をそそられる小説がある。芥川龍之介の「葱」（『新小説』一九二〇年一月）である。

「葱」は、神田神保町に勤めるカフェーの女給の物語である。カフェーの女給を主人公とした背景として、この頃カフェーが流行し、そこで働く女給に澎湃として関心が寄せられていたという事情がある。『中央公論』一九一八年九月号では「新時代流行の象徴として観たる「自動車」と「活動写真」と「カフェー」の印象」という特集がなされている。その中で江口渙は「今はカツフェの隆興時代、ウエートレスの隆興時代である」と述べている。久米正雄の「螢草」（『時事新報』一九一八年三月一九日～九月二〇日）が本郷のカフェーに勤める女給を登場させるなど、小説においてもカフェーの女給が登場するようになっていた。『新潮』一九一八年一月号に掲載された門外漢「カフェエと新しき文士」では、「久米正雄さんの『螢草』の中の、最も甘やかな、また最も派手な舞台の一つはカフェエ・リラである。ちか頃、ある人の説を聞くと、今日の通俗小説で——学生や若い会社員向きの物であらうが——カフェエの女を出したり、カフェエを舞台にしたりすると、昔芸者を出したり狭斜の巷を舞台にしたと同じやうに、大当り大受合ひださうである。」と述べている。『新小説』一九一九年六月号に掲載された布衣人「カフェーの女を——世相観的に」では、「女中奉公するよりも、カフェーの女になれ」という風潮が「若い女達」の間で現れてきたとしている。文壇においてカフェーの女給の季節が到来していたのである。

ところで、「葱」のカフェー女給のお君さんの特徴は、彼女が「不如帰」などの小説や「婦人雑誌」を読み、「新聞」を購読し、「鏑木清方」や「ベエトオフェン」といった芸術に強い関心を示しているという点にある。稲垣恭子は、一九〇一年に日本女子大学校が創立され、高等女学校進学率も一九二〇年に九%になるなど、学問をする女性が台頭してきた状況下で、「女子の学問は浅くて広い、軽い教養程度のものであって」、「軽薄」「虚栄心」といった批判も少なくなかった」と述べている⁽¹⁾。こうした「軽薄な知」の系譜⁽²⁾（稲垣）に対する男性知識人の執拗な揶揄は、学歴エリートの経済的窮乏の中で彼らの文化貴族性に光を当てることで彼らの矜持を救済すべく、大正時代にロシア革命とマルクス主義の影響で「インテリ（ゲンツィア）」、「知識人」「知識階級」の用語が一般に普及するようになった⁽³⁾という時代背景が遠因として働いているだろう。「軽薄な知」の系譜⁽⁴⁾に対する揶揄は、男性／女性という区分けを設定し、女性インテリ層に軽薄なイメージを付与することで、男性知識人の文化的矜持を救済する機能を持っていたのである。大正期の男性知識人を脅かしたものは、女学生や女子大生にとどまらない。活動写真の隆興によって、老若男女や階級を問わず大衆一般に西洋文化が享受されるようになったこと、カフェーの女給など都市を背景とする職業女性が西洋的な匂いを放っていたことも、教養主義を通じて西洋文化の特権的に享受していると自負する彼らの矜持に脅かしを与えたはずだ。加えて、山本芳明によれば、「大正八年」に「小説を掲載する雑誌の増加」が「原稿料の高騰」を招き、「需要過剰の文学市場が形成」されたが、「この時期の購読者数の拡大は学歴秩序の枠を破ったものと考えざるを得ない」という⁽⁵⁾。つまり、尋常小学校卒の人も読書するようになったと考えられ、おそらくはカフェーの女給で読書する者も少なくはなかった可能性はある。読書するか否かによって知識人層とそうではない層とを区分けすることが困難になりつつあったことも、彼らを脅かしたと思われる。芥川文学には、活動写真の西洋人俳優に恋する芸者の物語である「片恋」⁽⁶⁾（『文章世界』一九一七年一〇月）、女子大学卒の才媛をヒロインとする「秋」⁽⁷⁾（『中央公論』一九二〇年四月）、女学校を出た女性が「芥川龍之介」の作品を批判する「文放古」⁽⁸⁾（『婦人公論』一九二四年五月）といった、（軽薄な知の系譜）⁽⁹⁾とも呼ぶべき作品群がある。文学や芸術に親しむカ

フェーの女給を主人公とする「葱」もこの系譜に位置づけることができるだろう。

「葱」では「作者」の「おれ」が顔を覗かせており、「作者」と登場人物の関係を考えることが重要である。下層の女性でありながら文学や芸術を嗜むカフェーの女給を、「作者」はどのように描いているのか。本章では第一にその点について考察したい。

また、お君さんと同様に幅広い趣味を持つ田中君の表象について考えることも、知識人としての「作者」の様相を捉える上で有効となるだろう。本章では第二に、もう一人の「軽薄な知」の系譜」である田中君と「作者」との関係についても考察する。

「葱」はこれまで主に、「作者」が作品に介入するという特異な表現方法に注目が寄せられてきた。西原千博は、「作者」の「おれ」が作中に顔を出すという表現方法に着目し、「描写の仕方・方法によって「お君さん」のリアリティ」が「産み出されて」いるとしている⁽⁴⁾。桑原丈和は西原と同様の点に関心を寄せ、「小説の作り出す(物語)世界だけではなく、その中に登場する人物も実際には作者が書いた言葉であって、現実の人間と同じように考えることはできない、また考える必要もないということにふれている小説」と見做し、「自然」にあるかのように存在する小説を尊重する」「自然主義への悪意」を読み取っている⁽⁵⁾。大西永昭は西原・桑原の論を発展させてこの小説の「メタフィクショナルな構造」に注目し、芥川の「(売文)意識」を視野に入れて、「出版資本主義の制度内ではいかに創作は行われるか、文学とメディアは表現の上でいかに結びつくことができるか、といったことが試行された小説」と見做している⁽⁶⁾。一方で、五島慶一は「通俗小説(化)への訣別」という観点から本作を論じ⁽⁷⁾、神田由美子は「視覚的魅力」から「葱」を評価し、「(活動写真)的短篇」と見做している⁽⁸⁾。ただし、「作者」の知識人としての側面にはほとんど着目されてはこなかったように思う。

本章では、「作者」の「おれ」と、お君さん・田中君との関係について考察することで、芥川文学における知識人と大衆との関係を考える一助としたい。

二、田中君と「作者」

まず、田中君はどのように描かれているだろうか。「詩も作る、ヴァイオリンも弾く、油絵の具も使ふ、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出来る」「無名の」「芸術家」で、「女を口説く事は歌骨牌をとる如く敏捷で、金を借り倒す事は薩摩琵琶をうたふ如く勇壮活潑を極めてゐる」とされている。この種の若者は「一種のタイプ」で、「神田本郷辺のバアやカツフェ、青年会館や音楽学校の音楽会」、「兜屋や三会堂の展覧会などへ行くと、必二三人はこの連中が、傲然と俗衆を睥睨してゐる」という。そして、「だからこの上明瞭な田中君の肖像が欲しければ、さう云ふ場所へ行つて見るが好い。おれが書くのはもう真平御免だ。」とされる。「役者」も勤め、「ボヘミアン・ネクタイ」を結び、「襟を立てゝ」いる様子からは、あるいは久米正雄「不死鳥」『時事新報』一九一九年一〇月一四日（一九二〇年四月四日）の「俊雄の先輩の友人で一年前に大学を出た田口」を想起することもできる。彼は「劇場へ出入する文士の一人」で「気障」で、「ボヘミアン・ネクタイ」を結び、「高襟な合着の背広」を着、「軽薄才子らしい感じ」があるからである。おまけに田口は「アクトレス・ハンター」でもあり、「女を口説く」のが「敏捷」な田中君と同じ類型である。

田中君は、詩・音楽・美術・演劇に通じた「芸術家」なのであるが、「芸術家」という点では、小説家である「作者」の「おれ」とアナロジーを持つように見える。ただし、田中君の場合は性が放縦である点で、軟派不良でもある。稲垣恭子は、「モダニズムには鋭い感受性と軽い機知と広くて浅い知識とともに、その裏にある性の放縦、官能性が指摘されることが多い」⁽⁹⁾と述べているが、田中君はこうしたモダニズムの表象に合致する。彼は詩・音楽・美術・演劇など多趣味である点で「広くて浅い知識」を持つ。同時に、「女を口説く事は歌骨牌をとる如く敏捷」である点で、「性の放縦」を持ち合わせている。お君さんの机には「残念ながらおれの小説集などは、唯の一冊も見当らない」とあるように、「おれ」が書く小説は、お君さんの読む通俗小説とは審級が違っており、知識人相手の作品

を書く正統的審級の小説家ということになっている¹⁰。「作者」の「おれ」は、「おれが書くのはもう真平御免だ」と言い、田中君のことを叙述することを途中で放棄するほど苦々しく思っているようだが、知識人に近接している田中君に対する「おれ」の嫌悪は、放縦な性によって知識人の威信を脅かす者に対する不快感だったと言える。同時に多趣味な彼は、知的な葛藤がないまま芸術を享受しているようにも見え、知識人と大衆との境界を取り崩す危険な存在でもあっただろう。

田中君は階級的にも「おれ」と近似しているようだ。「安い切符」、「安物らしい獵服」とあるように、田中君は決してブルジョワの子弟ではなく、貧しい中産階級と推定できる。この点で、「おれは締切日を明日に控へた今夜、一気呵成にこの小説を書かうと思ふ。いや、書かうと思ふのではない。書かなければならなくなつてしまつたのである。」というように、安直な原稿を必死に書かなければならない「おれ」と同類である。仮に経済資本が豊かであれば、一夜で書くことができるような安っぽい小説を発表する必要などない。経済的余裕は作家に、小説を発表するか否かに関する選択の自由を与えることだろう。「おれ」の醸し出す切迫感には、このような経済的余裕は感じられない。文化資本は豊かだが経済資本に乏しい点で「おれ」に近似した田中君は、「おれ」に己のアイデンティティの内実を突きつける存在であるだろう。

そしてこの田中君は層として厚みを持った存在である。「思ふにこの田中君の如きは既に一種のタイプ」なのだと言われるように、個人として逸脱しているのではなく、集団的に学生文化と化している。つまり、一つの層として厚みを帯びている存在なのである。「おれ」はその威力に脅かされなければならぬだろう。

そもそも「おれ」は売文業で口を糊しなければならなくなっており、高級芸術を手放し、通俗芸術に走らなければならぬ状況にある。カフエーの女給など流行風俗をふんだんにとり入れた大衆受けのする「葱」という作品を書いていくのである。文学における場の移動による「下流化」の危機にあると言える。資本主義制度に絡めとられるこの状況は、知識人と、一般的な労働者やサラリーマンとの境界を揺るがせる事態である。だからこそ、知識

人の輪郭を判然とさせたいという欲望が、田中君への不快感へとつながったのだと考えられる。

このように、カネのために小説を書かなければならなくなっている「作者」が、逸脱した知識人に脅かされるといふ物語をまずは抽出することができるだろう。

それでは、田中君はどのような物語の中へ囲い込まれることになるだろうか。彼はお君さんを「安普請らしい」「格子戸造」の「二階家」へ連れ込むつもりであった。しかしお君さんが、通りかかった八百屋の至廉の葱を買ったことで、その「想像が破れて」「実生活の如く辛辣な、眼に滲む如き葱の匂」が「田中君の鼻を打」つことになる。田中君は「世にも情けない眼つき」をすることになり、彼の目論見はくじかれることになるのである。彼は結局お君さんを籠絡することはできなかった。

「作者」の安全を求めるメンタリティーと、不良を秩序内化したいという規範が、田中君に作動したのだと言える。規範をそのまま小説にしていると見えよう。秩序への統制的関心をそのまま小説にしなければならぬ出版資本主義体制下の作家の哀れな姿を垣間見ることができよう。

同時に、このような物語を作り出すことで、「作者」は田中君に脅かされずにすむ。性に放縦でさえなければ、田中君の「作者」に対する脅かしは減じることになる。「作者」は容易に安全を確保し得たのである。

三、お君さんと「作者」

では、お君さんはどのように描かれているだろうか。まず、書き手の「おれ」とお君さんの関係について見ておこう。「おれ」はお君さんの趣味生活を貶価している節はあるものの、両者には看過できない相似性が見られる。

「おれはこの挿話を書きながら、お君さんのサンテイマンタリズムに微笑を禁じ得ない」としながらも、「おれの微笑の中には、寸毫も悪意は含まれてゐない」とし、「畜生、悪意がない所か、うっかりしてゐるとおれまでも、サンテイマンタルになり兼ねないぞ」と言っている。「おれ」はお君さんの「サンテイマンタル」に感染しつつ

あり、彼女に対して感情面での同一化が起こっている⁽¹¹⁾。

さらに、「おれ」は「批評家に退治」される小説家であるが、お君さんもお松さんに「いちめ」られている。他者から意地悪なまなざしを受けるという点で両者は共通する⁽¹²⁾。

そもそも、西原千博⁽¹³⁾がいうように、この作品ではお君さんが書き手の「おれ」から独立する場面があり、「おれ」の介入」によりお君さんという「作中人物のリアリティ」が確保されているが、お君さんも「不如帰」の浪子夫人に手紙を書いており、「作中人物をあたかも現実の女性としてみ」ている。作中人物を現実視するという点でも両者は吻合するだろう。

このような、「おれ」とお君さんの性格に付与された類縁性のインプリケーションは何だろうか。需要過剰の文学市場が形成されたことで、作家が文学を生計の手段と見做しやすくなるという状況が到来した⁽¹⁴⁾。それによって揺らいだ文学意識が、通俗小説を享受する読者層への共感を余儀なくさせたと考えられるのである。とともに、この頃民衆を文化的主体と見做す言説が増えてきたという時代状況が、趣味生活を享受するお君さんに対する「おれ」の同一視を生み出しただろうことも付け加えておくことができる。成田龍一の次の指摘は参考になるだろう。「第一次世界大戦後、デモクラシーの思想が社会改造の要求と結合して広く浸透し、民衆運動が社会を揺り動かしていく状況のもとで、文化の諸領域においても、新しい動きがおきていく。論壇において、大山郁夫や権田保之助・土田杏村らが中心となり、民衆文化をめぐる論議をくり広げ、そのなかで、民衆の生活に眼をそそぎ、それまで非文化的存在と考えられてきた民衆を文化創造の主体として認識する方向へ文化認識の転回がはかられていった」⁽¹⁵⁾。ただし注意しなければならぬのは、階級的に下層であるからこそ同一化に抵抗を感じなかったということだ。同じ「軽薄な知」の系譜」であっても、女子大学卒の女性の場合は、男性知識人との厳しい峻別が行われるはずである。自己との距離が近くなれば、それだけその層に対する意識は強くなり、斥力が働きやすくなるからである。

同時に、資本主義経済を生きる主体としてお君さんに同一化することで、制度自体を批判する位置を獲得したと

も言えるだろう。弱者に同一化することで制度批判の位置を確保するという手法は、以後の芥川作品に受け継がれることになる。「保吉の手帳から」(『改造』一九二三年五月)の(へわん)において、海軍の武官に弄ばれて「口腹の為に、自己の尊厳を犠牲にする」「十二三の乞食」に、「パンの為に教師になつた」保吉は同一化されている。保吉を資本主義経済における弱者として乞食に同一化させることで軍人とのへだたりをつくり、ミリタリズムを批判する位置を確保しているのである。「十円札」(『改造』一九二四年九月)では、「巻煙草も吸はれないのは悲惨である。悲惨? ——或は悲惨ではないかも知れない。衣食の計に追はれてゐる窮民の苦痛に比べれば、六十何銭かを歎ずるのは勿論贅沢の沙汰であらう。けれども苦痛そのものは窮民も彼も同じことである。」というように、六十何銭しか残っていない不如意を、「窮民」の苦痛と「同じ」だとしている。「大導師信輔の半生」(『中央公論』一九二五年一月)でも、信輔の「中流下層階級の貧困」は「体裁を繕ふ為に」、「下流階級の貧困」よりも「苦痛を受けなければならぬ」ものだとしている。自己を「貧困」と規定することで、「豪奢」とのへだたりをつくり、「豪奢」を相対化する位置をつくっているのである。自分を脅かすことのない安全圏にいる人物に同一化するという手法の濫觴を「葱」に見ていい。この同一化により、制度からのへだたりをつくることができるのである。

四、新中間層の主婦への道

布衣人、前掲「カフェーの女を——世相観的に」によれば、「カフェーの女と交渉して、そこに様々の色彩を見せて居るのは、帝大、慶應、早稲田、明治その他の学生級で」、「次いでは学校を出たばかりの勤人階級が主」だといふ。加えて、カフェーの女給の将来に関しては次のように書かれている。「ライオンに居た女の上にも、法学士夫人となつたり、新聞記者の妻となつたり、某子爵嗣子の妾になつたり、若い役者と浮名を謳はれた女が、数へ切れぬほど沢山ある。カフェーの女から、真面目な人妻に——、私はこれを明るい結末として喜ぶと共に、カフェーの女からお妾へ、私娼へ、女将へ——、私はこれを暗い結末として、悲しみ痛む者である」。他にも「よか楼に居たお竹

さん」は「今は木村法学士夫人として、大阪で幸福に暮して居る」、「ライオンに居た都里さんも、今は今井法学士夫人となつて居やう」と言った例が紹介されている。カフェーの女給は学士の人妻となつて幸福に暮すことになるものと、墮落するものとに分けられるようである。長谷川如是閑の「或るカフェーの娘」(『新小説』一九二一年一月)では、父親を亡くし、母親とともにカフェーで女給として働くみね子の伯父が、「折角自分が行く／＼相当なところ」にみね子を世話しようと思つても、かういう商売をさしてゐては、到底身分のある紳士のところには行かれない」と言つており、カフェーの女給はまともな紳士との結婚ができないという考え方もあつたようだ。『中央公論』の掲の特集「新時代流行の象徴として観たる「自動車」と「活動写真」と「カフェー」の印象」では、柳澤健が「日本ではカツフェは、中産階級以上の人達の為めといふことになつてゐる」とし、「下級階級者のため」の「居酒屋」とは区別している。「葱」のお君さんにはどのような将来が用意されているだろうか。

お君さんの勤めるカフェーの客には「外国語学校」などの「学生」が「多い」。比較的高学歴の男が集まつてくるようで、社会移動のきつかけもあつただろう。しかも、お君さんは田中君との恋に夢中で、結婚に十分な興味を持つてゐるように見える。

また、「お君さんは今日までに、未嘗男と二人で遊びに出かけた覚えなどはない」と書かれているように、男と今までデートしたことがない、処女である。カフェーの女給をしている美女であれば、これまでも男に誘われる機会はいくらでもあつたはずである。実際、お君さんが間借りしている「女髪結は、頻々としてお君さんの手に落ちる艶書のある事を心得て」おり、彼女が度々男からラブレターを送られていたことが示唆されている。にも拘らず、彼女はそれらの誘惑を慎重に遮断してきたのである。一方で、お君さんの想像によれば、お松さんは「尋常小学を出てから」「男を追つかけたりばかりしてゐた」。お君さんは結婚前の男女交際に極めて慎重で、貞操管理能力を持つてゐると言える。

さらに、彼女の性格は中間層の主婦として適合的だ。「お君さんも内心、お松さんの趣味の低いのを軽蔑してゐる」

とあるように、お君さんは「趣味」を重視しており、お松さんの趣味の低さから自身を区分けしている¹⁶。「おれ」も「かう云へばお君さんの趣味生活が、如何に芸術的色彩に富んでゐるか、問はずして既に明かであらうと思ふ」と述べている。当時、中間層の主婦にとつて、趣味的な生活が理想とされていた。中根環堂「西洋の母と其趣味 愛の家庭の後編」(『婦人公論』一九一六年七月)で「欧米の婦人は一般に芸術に非常な趣味を有つて」いること、「文芸、音楽、慈善事業等に其趣味を嗜み、修養を怠ら」ないことが説明されているように、母になるために読書や西洋音楽に親しみ、趣味を向上させることが必須とされた。「葱」のお君さんが西洋の音楽家の「ベエトオフェン」に関心を持ち、お松さんは庶民の娯楽である「浪花節」を聞いていると想定して「軽蔑」するのは、お君さんの机に置かれていた「婦人雑誌」のこうした言説の影響を受けているだろう。西洋の音楽は差異化機能を持つのであり、彼女には上昇移動欲求があるように見える。その他、お君さんの机には「西洋綴の書物が並んで」いるのであるし、茶箆の上の壁には、「鏑木清方君の元禄女」、「ラファエルのマドンナ」、「北村四海君の彫刻の女」など「雑誌の口絵らしい」のがピンでとめられている。文芸や芸術を価値的と見做すコードを所持している点で、お君さんは中間層の主婦として適合的である。彼女は、中間層の主婦のハビトウスや文化への同化が見られるのである¹⁷。

お君さんが田中君とのデート中に、至廉な葱を買うのは「間代、米代、電燈、炭代、肴代、醬油代、新聞代、化粧代、電車賃——その外ありとあらゆる生活費が、過去の苦しい経験と一しよに、恰も火取虫の火に集る如く、お君さんの小さな胸の中に、四方八方から群つて来」たからである。お君さんが「過去の苦しい経験」を通して、「あらゆる生活費」の節約に努めるべきことを学ぶ聡明さを持っていることが分かると同時に、彼女の生活費に対する拘りが中間層の主婦の義務とされていたことにも注意を払いたい。澁澤栄一が「節約生活は婦人の務め」(『婦人世界』一九一八年一〇月)で、「婦人の性質は緻密なものである上に、家庭にあつては、細かい家政を担当してゐる」から婦人こそが節約に努める必要があると説いているように、第一次世界大戦末期頃から起こった物価騰貴により、新中間層の主婦にも節約の重要性が繰り返し説かれていた。今田高俊もいうように、ホワイトカラーを職業とする山の

手階級は「価値観としては、生活の華美を避け質素であること、粗野な振るまいをせず自制力をもつこと」を特徴として持っていた。加えて、「生活態度としては、勤勉実直で、なにごとくも計画的・合理的に判断し効率を重んじること」を特徴とする¹⁸。八百屋の葱の価格と一般的な葱の価格とを比較検討して、合理的に判断するお君さんの節約志向は、新中間層の主婦として求められていた特質でもある¹⁹。

また、外国語学校の生徒らしい客が扇風機のせいで煙草に火をつけられずいたのを見て、「その卓子の側を通りかかったお君さんは、暫くの間風をふせぐ為に、客と扇風機との間へ足を止めた」。この気配りは、彼女が良妻としての性質を持っていることを物語る。

さらに、今田高俊のいうように、「読書や新聞購読の習慣」²⁰をもつことは、山の手階級の特徴でもある。お君さんは「新聞代」のことを思い浮かべているので新聞を購読していることになっているが、読書も新聞購読もしている点で、山の手階級への階級上昇の道が開かれていると言える。

このように、お君さんは主婦予備軍として造形されているだろう。読書などする人がまだマイノリティだった時代、彼女には新中間層の主婦への道が用意されているのである。

五、自立した女性

お君さんは結婚へ至るルートが用意されており、良妻賢母への道が与えられている。これは、カフェーの女給を良妻賢母主義に封じ込めようとする「作者」自身の欲望を表すとも評価できる。しかし、お君さんは良妻賢母という枠組みからのみは捉えられない過剰を持っている。それは、田中君とのデート中に彼を一人残して葱を買いに行くことである。お君さんのこの行為は、第一に田中君が用意したデートの計画から外れるという点において、男性の計略に囲い込まれない、女性の主体性を表徴する。第二に、田中君に買ってもらったことなく自身のお金で葱を買うという点において、生活を男性に頼らない、自立性を表す。第三に、お君さんのこの行為によって、それを見た

田中君が「孤影蕭然」とし「世にも情無い眼つき」になっており、彼女の行為が田中君を圧倒している点において、お君さんは男性の上位に立つことになるのである。加えて、そもそも田中君自体がお君さんとの結婚を視野に入れないだろう点で、お君さんの中間層の良妻賢母としての特質は行き場を失っている。

このように、お君さんの生活への関心は、良妻賢母主義に従う従順さを表すと同時に、男性の引力圏から逃れて女性一人で自立しうる主体性をも表すという両義性を持つ。この小説ではまず、お君さんの特質を新中間層の主婦にふさわしいものとして設定することで、彼女に新中間層の主婦への道を用意している。それでいて、そうしたお君さんの特質を、男性から自立した女性への道に繋がるものとしても解釈できる仕掛けが施されているのである。この点で、良妻賢母という安全地帯へとお君さんをいざなう「作者」を窮地に立たせる装置が内包されているのだと言える。

こうした両義性は、この小説の「作者」の非権威性によって支えられているだろう。この小説は、「おれ」が締め切り日を明日に控え一気呵成に小説を書かないといけないう設定のために、表現が完成されていない。その好例は、「何故作者たるおれが知つてゐないかと云ふと——正直に云つてしまへ。おれは今夜中にこの小説を書き上げなければならぬからである。」という箇所である。この午後六時までの間に、お君さんの恋の物語を揺るがす彼女の行為が起こっている可能性もあるわけである。そして、この箇所以外にも表現上のノイズがあることを推測させずにはおかないだろう。お君さんの内面を「作者」が叙述しきれていないのではないかとこの想像を讀者に要請するのである。実際、外国語学校の生徒らしい客のために扇風機の前に立った行為は、家庭的とも捉えられると同時に、女給士としての能力の高さを含意するとも捉えられる。また、「自炊生活に必要な台所用具」も、主婦への道を用意していると考えられると同時に、自活への道を用意しているとも解釈できる。

そもそも、お君さんは一人暮らしをしているが、職業婦人の一人暮らしの様子自立する女性の表象として肯定的に紹介され始めるのもこの頃である。読者投稿のみどり「自炊する職業婦人の一日」〔『婦人之友』一九二〇年九月〕

では、「私は小学教師、独身で自炊生活をしてゐます。家庭をお持ちの方から見れば自由なものですが、職業と私生活とどちらも相侵さぬやういさゝかの時間も考へて使ひ、この頃は大体左の予定通り進むやうになりました」と、自炊生活のあらましを紹介している。職業を持つ女性が、自活しつつ一人暮らしを始めていたのである。自活をしつつ一人暮らしをするお君さんの造形は、このような女性像に合致し、女性の自立の表象であると言える。お君さんは「作者」によって主婦への道を与えられている。と同時に、彼女が自立した女性となる物語を立ち上げることもできるのである。

六、知識人と大衆との関係

ここまでの分析をまとめておこう。

田中君と「おれ」との関係の分析で分かったことは、カネのために小説を書かなければならなくなっている「作者」が、逸脱した知識人に脅かされるという物語が析出できるということである。この田中君を、「作者」は規範に囲い込んで、安易に安全を手にすることに成功した。

お君さんに関してはず、「おれ」は彼女に同一化していることを指摘した。需要過剰の文学市場が形成されたことで、文学者意識が揺らぎ、通俗小説を享受する読者層への共感を余儀なくされたとともに、民衆を文化的主体と見做す言説が増えてきたことで、趣味生活を享受するお君さんに対する「おれ」の同一視を生み出したのである。加えて、資本主義経済を生きる主体としてお君さんに同一化することで、制度自体を批判する位置を獲得したとも言える。

また、主婦への道を用意すると同時に、自立へと歩む解釈の余地をも残しておくという表現が採用されている。これは、「作者」にとって女性が了解不可能なものとして映じていた事態を表しているだろう。それまで文学とは無縁だった下層の女性が、需要過剰の文学市場が形成されたことで文学の読者としてわずかながらも入り込んでくる

という、読書の大衆化が生じつつあった。同時に、専業主婦志向の女性は未だ大半を占めていたにもかかわらず、自立する女性が出始めたのもこの頃である。お君さんをめぐる解釈に両義性が併存しているのは、このような社会の構造変動にともなう女性の了解不可能性ゆえである。

さらに、「葱」は資本主義制度に困り込まれる作家の表象についてもアイロニカルに描き出している。「おれ」は売文業者であり、資本主義に困り込まれている。お君さんが田中君の誘惑から逃れえたのも、彼女の生活に対する執着、つまり資本主義的原理が働いたためである。「おれ」の書いた物語は最後まで資本主義から逃れられてはならず、資本主義制度に絡み取られなければならない小説家の哀れな姿がここにはあるだろう。

「葱」は、知識人と大衆との関係を考えるに恰好な小説なのだ。

注

- (1) 稲垣恭子『女学校と女学生』（中央公論新社、二〇〇七年二月）。
- (2) 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』（日本放送出版協会、一九九七年十一月）。
- (3) 山本芳明『カネと文学 日本近代文学の経済史』（新潮社、二〇一三年三月）。
- (4) 西原千博『「葱」試解——作品を飛び出す作中人物——』（『稿本近代文学』一九九六年十一月）。
- (5) 桑原丈和「リアリズムへの悪意——現実と小説の（無）関係——」（『近畿大学日本語・日本文学』二〇〇二年三月）。
- (6) 大西永昭「戦略としての〈売文〉小説——芥川龍之介「葱」試論——」（『日本近代文学』二〇〇九年五月）。
- (7) 五島慶一「左様なら。お君さん。——芥川龍之介「葱」と通俗小説——」（『日本近代文学』二〇〇三年一〇月）。
- (8) 神田由美子「〈路上〉の男女 「葱」の方法」（『芥川龍之介研究年誌』二〇一〇年九月）。
- (9) 稲垣恭子「不良・良妻賢母・女学生文化」（稲垣恭子・竹内洋編『不良・ヒーロー・左傾——教育と逸脱の社会学——』人文書院、二〇〇二年四月）。

- (10) 西原千博が前掲「葱」試解——作品を飛び出す作中人物——」でいうように、「読者はこの「おれ」を現実の作者芥川龍之介として読みやすい（錯覚しやすい）」仕掛けが施されている。また、大西永昭は前掲「戦略としての〈売文〉小説——芥川龍之介「葱」試論——」において、「おれ」は「通俗的読者には読まれない作家」であり、「短篇作家」であるのに加え、「(理知的)で(情味がない)作家」である点で、「小説家・芥川龍之介の像へ近似」しているとしている。
- (11) 五島慶一も前掲「左様なら。お君さん。——芥川龍之介「葱」と通俗小説——」で、「おれ」が「お君さんに(或程度まで)徹底して寄り添い、時にそれにつられて「サンティマンタルになり」かけ」ていることに注目してはいる。
- (12) 桑原文和は前掲「リアリズムへの悪意——現実と小説の(無)関係——」で「此処からいそいそ出て行って」「批評家に退治され」というのは「お君さん」だけではなく「おれ」にも当てはまる」としている。批評家に退治されるという点においても両者は相同的である。
- (13) 西原千博、前掲「『葱』試解——作品を飛び出す作中人物——」。
- (14) 大西永昭、前掲「戦略としての〈売文〉小説——芥川龍之介「葱」試論——」では、「出版資本主義」制度と「葱」との相関を表現面で分析している。
- (15) 成田龍一『近代都市空間の文化経験』(岩波書店、二〇〇三年四月)。
- (16) 神田由美子も前掲「(路上)の男女「葱」の方法」で、「日清戦争の戦闘場面も描かれた文語調の「不如帰」を愛読して浪子に慰問の手紙を書き、韻文の伝統を継承した「藤村詩集」を読んでいるという設定には、彼女の芸術的趣味を揶揄するだけでない、彼女の健気な向上心に対する「おれ」の敬愛も見出される」としている。
- (17) 芥川の「或恋愛小説」(『婦人グラフ』一九二四年五月)では、「東京の山の手の邸宅」に住む「外交官」の夫は「道楽に小説位は見る」うえ、夫婦で「一しよに音楽会へ出かける」こともあり、家の「壁にはルノアルやセザンヌの複製などもかかつており、「ピアノ」もある。
- (18) 今田高俊『社会階層と政治』(東京大学出版会、一九八九年一月)。

(19) 生活が苦しいから節約せざるをえないのであって、お君さんの節約能力を評価するのは過剰な解釈だという反論があるかもしれない。しかし、下層階級に属する人は自制心のなさによって表象されることが多かったことを考えれば、お君さんの節約志向は能力として評価していいだろう。例えば、賀川豊彦『貧民心理の研究』（警醒社書店、一九一五・一一、二四頁）では、貧民発生の人為的原因の一つに「貯蓄心の欠乏」を挙げている。カーネギー『実業の帝国』（小池靖一訳、実業之日本社、一九〇二年一月）には「文明人は其日々得る所の多少を余して必ず之を貯蓄す」とあり、節約の有無によって「文明人」と「野蛮人」とを区分けしていることも付け加えておきたい。加えて、芥川は「秋」で、「高商出身」で「大阪の或商事会社」へ勤める、新中間層のサラリーマンである信子の夫に、「夕刊に出てゐた食糧問題から、月々の経費をもう少し軽減出来ないものかと云」わせている。彼は「瑣末な家庭の経済の話」に「最も興味がある」ようである。

(20) 今田高俊、前掲『社会階層と政治』。

第四章 正系知識人を特権化する差異化戦略

——「秋」における〈インテリ女性〉と〈新中間層〉——

一、二つの表象

芥川龍之介の「秋」(『中央公論』一九二〇年四月)を読む際、我々は芥川文学を研究する上で重要な二つの表象に着目しなければならぬ。女子大学卒のヒロイン信子と、東京高等商業学校卒で商事会社に勤務する信子の夫(及び彼と結婚した信子)という二つの表象である。つまり、第一に女子大卒の女性、つまりインテリ女性という表象に着目する必要がある。第二に、日露戦争後に登場し第一次世界大戦後に本格的に増大した、会社員などの頭脳労働の俸給生活者で、生活水準が中位の新中間層という表象である。この二つの層は、竹内洋の言う、旧制高等学校を経た東京帝大卒の「正系学歴エリート」⁽¹⁾(以下、正系知識人と呼ぶ。なお、東京帝大へ進学する人の大部分は旧制高等学校を経てい)を特権化する語り手によって、貶価されている。「秋」には東京帝大文科出身の作家・俊吉が登場し、語り手によって内面を暴かれることも批評されることもなく「無傷のまま」⁽²⁾安全地帯にとどまり続けている。これら二つの集団と俊吉との距離を測定することが求められる。その距離の分析は同時に、芥川文学の読みを深めることにも繋がるだろう。芥川文学には、「文反古」(『婦人公論』一九二四年五月)、「たね子の憂鬱」(『新潮』一九二七年五月)など女学校卒の高学歴女性が主人公の小説がある。高学歴ではないが、知や西洋に憧れる女性を主人公とした小説である「片恋」(『文章世界』一九一七年一〇月)、「葱」(『新小説』一九二〇年一月)もあり、如上の小説は〈女の知の系譜〉とも名付け得る。さらに、「たね子の憂鬱」に加え、「或恋愛小説」⁽³⁾或は「恋愛は至上なり」(『婦人グラフ』一九二四年五月)、「馬の脚」(『新潮』一九二五年一月、二月)のように、新中間層を焦点化した作も多い。芥川文学における

この二つの表象に着目し、正系知識人とそれらとの距離を測定することで、芥川文学の読みの地平を広げることができるはずだ。

「秋」の才媛の信子はこれまでどのように捉えられてきただろうか。「作者は」「信子の文学的才能を信じていなかったようである」⁽³⁾、「信子はあくまで〈炉辺の幸福〉を守ろうとする平凡な女性であり、決して〈新しい女〉ではなかった」⁽⁴⁾、「信子という女の底の浅さは透けて見える」⁽⁵⁾と言った一連の指摘に見られるように、彼女は内省能力や知性の欠如した女性として捉えられてきた。語り手と読者が共犯しながら、信子の底の浅さが捉えられてきたわけだが、正系知識人の俊吉を特権化したいという語り手の欲望に目を瞑った解釈ではある。

新中間層という表象についてはどうか。蒲生芳郎が初めて「文化生活」や「小市民」といった術語を用いて「底の浅い時代の雰囲気」の「反映」を指摘⁽⁶⁾して以来、神田由美子が「平均的サラリーマンの典型的休日」や「中産階級の住居」の描写が「〈時代風俗〉としての〈現代〉」を「描写」しているとし⁽⁷⁾、西山康一は「当時の女性雑誌等の言説に典型的に表れ創り上げられた『健全な中流家庭の趣味ある芸術的な生活』などと頻繁に叫ばれていた〈物語〉」に信子が「自己を同一化し」しているとする⁽⁸⁾など、新中間層という表象自体への着目は一時期盛んにはなった。だが、それ以降の論究で新中間層の表象に関する分析が深められることはなく、新中間層がいかなる価値観を持った人達として記述されているのかは未だ明らかではない。

本章は、女子大学卒の才媛（インテリ女性）、新中間層という二つの表象に着目することで、「秋」の解釈史に新たな地平を切り開き、芥川文学分析の新視角を提示することを目的とする。

二、同性間関係のジェンダー間格差

まず、「秋」での同性間関係の描き方における男女間の差を確認する。同性間関係の希薄な女性、濃密な男性という差である。「彼女はなぜ俊吉と結婚しなかったか？ 彼等はその後暫くの間、よるときはると重大らしく、必この

疑問を話題にした」とあるように、信子が高商出身の青年と結婚した理由について、同窓たちは知らされていない。信子は自身の胸中を同窓たちに打ち明けることをしない。また、従兄と結婚するのかという彼女らの推測に対して「信子も亦一方では彼等の推測を打ち消しながら、他方ではその確な事をそれとなく故意に仄かせたりした」とあるように、自身の考えを曖昧にしたままだ。俊吉のことを好きなのかどうか、俊吉と何故に頻繁に会っているのか。こうした疑問を彼女たちはぶつけたはずであるが、信子はその問いに対して不明瞭な回答に留めるのである。さらに、同窓たちが「彼是二月ばかり経つと」「全く信子を忘れ」ることから、信子が結婚後、手紙のやり取りを含め彼女らとの交流を断っていることが分かるうえ、同窓たちの信子に対する友情の希薄さも推し量れる。「作家として文壇に打って出る」ことを確実視されながら、信子には作家志望の同窓との付き合いもないだろう。結婚後久しぶりで東京の土を踏んだ際にも、友人に会う様子すらない。「中央停車場へ見送りに行ったもの話によると」とあることから、信子が大阪へ発つ日、信子を見送りに行った同窓がいることが分かり、彼女らとある程度の交際があることを窺わせるが、あくまで彼女らとの親密な交際はなかったようだ。溝部優実子は、信子が同窓たちに忘れられることに着目し「彼女を取り巻いていたのが浮薄な関係性でしかない」⁽⁹⁾とするが、信子は同性間の関係が希薄で、親友に欠いている人物として語られている。

この理由として、信子が文学について立ち入った内容まで議論できる相手を求めていただろうことが考えられる。溝部は「信子はおそらくは同じ志向をもっていたはずの同輩ではなく、異なる主義主張をもった帝国大学文科の異性を敢えて選んでいる」とし、そこに信子の「強い知的好奇心と自己矜持」を読み取っている。信子は俊吉と親しく往来し、妹の照子が「時々話の圏外へ置きざりにされる」ほど専門的な会話をしている。一方で、大学の同窓たちは、女性として社会で活躍することを同級生の信子に期待しており、その点で進歩的であるものの、彼女らの関心は主に結婚に向けられている。信子が高商出身の青年と結婚した際、彼女らは「その後暫くの間、よるとさばると重大らしく、必この疑問を話題にした」とあり、彼女らの主たる関心事が結婚にあることが分かる。在学中も彼

女らは信子と従兄の「来るべき」「結婚を予想」することに熱心であった。彼女らの多くは、自ら社会で活躍できる人材になるよりも、結婚相手の選定により重きを置いている。同窓たちは、家父長制下の良妻賢母主義から自由ではない。信子にとっては自分と互角に談話できる相手が少なかったはずだ。信子は自身の交際相手として、女性ジエンダーの規範から逃れられていない大学の同窓たちに物足らなさを感じ、だからこそ俊吉との交際に時間を割いていると解釈できる。

同性間関係の希薄な信子の交友関係の特質は、「秋」の男性登場人物の同性間関係との対照によって判然とされている。俊吉は、「同人雑誌を始めた」とあるように、文学仲間との濃い付き合いがある¹⁰。また、信子が結婚後初めて妹夫婦の家を訪れた翌朝、「亡友の一周忌の墓参」もしている。俊吉は同性間の関係が親密な人物として語られている。信子の夫に關しても同然だ。夏の休暇に夫婦で舞子に行った際、「夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかった」とある。男たちは同性社会的な絆^{ホモソーシャル}で結ばれている。

男女間の同性間関係における差異は、職業につながるかどうかという問題を持つ。男たちの親密な同性間関係は、彼らがただ友情を大切にしていることを表すのみならず、共属感情がベースにあるだろう。俊吉が同人雑誌を始め、同性間の絆を重視するのは、「月々の雑誌」に「名前が見えるやうにな」ることにつながっている。彼の同性間の社会的連帯^{ソシヤリティ}は未来を共有する男同士を持つ、密接な関係だ。同時に、彼らは（おそらくは）同じ「大学の文科」の学生であり、同じ帝大生という共同感情を軸にした絆を結んでいるだろう。この共同感情は、同じ未来を志向するだろう。信子の夫の出身校と考えられる東京高等商業学校は、「何と言つても、引手数多の実業界の売ツ兒は一つ橋高商の卒業生」と言われるほど、実業界での就職が有利な学校で、「三井物産」「三菱」「郵船」「正金」「住友」といった大企業は東京高商出身者が多く占めており、「外交官」になる人も相当いたようだ¹¹。夫が「親しみ」を感じているのは、彼の勤める「商事会社」の「同僚たち」であり、ほぼ間違いなく学歴や価値観といった文化資本を共通に身につけた人たちである。彼は、「商事会社」での勤務という共通の仕事を抱えた人物にこそ「親しみ」を感じ

じているのである。信子の夫のホモソーシャリティーには同一の価値観を前提にした仕事の遂行という共通因子がある。

信子の作家としての不成功が同性間関係の希薄、作家志望の友人を作れていないことによることも推し量れるだろう。周りに作家志望の友人がいれば、創作を行う意志を醸成し持続させることができるはずだ。また、作家志望でなくても、「才媛の名声」を高めてくれる親友がいれば、創作を行う原動力もわくはずである。

このようにこの小説では、つながる男／つながらない女というジェンダー間格差が描かれている。

三、産業化適的な価値観

信子の交友関係の希薄は、彼女が結婚して同性社会的な環境から卒業した後も続く。結婚後の彼女の交際の少なさからは、彼女がある準、抛、粹に従っていることが窺えると思う。信子の新家庭は「大阪の郊外」にあり「その界限でも、最も閑静な松林」にある。隣近所のいない環境で新生活を始めるのである。「新しい借家」は「松脂の匂と日の光」だけが「沈黙」を領している。久しぶりで妹夫婦の家を訪れて彼らとともに賑やかな晩飯の食卓を囲む際にも、「信子はかう云ふ食卓の空気にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにはゐられな」い。新家庭の静寂が強調されている。結婚後の信子は「寂しい午後」を送っており、彼女が近所の人との付き合いのないことを推測させる。妹の結婚への祝いの手紙において「当方は無人故、式には不本意ながら参りかね候」とあることから女中もないということになり、夫が会社へ出かけると完全に一人になるのである。実家のある東京を離れ大阪へ引っ越した核家族のため親族との付き合いもないだろうし、夫の会社の同僚の夫人との付き合いの形跡も見出せない。信子は結婚後、人との付き合いを最小限に抑えているように語られている。

妹の結納の済んだことを知らせる母の手紙の来た際、信子は「母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた」。その手紙には「何分当方は無人故、式には不本意ながら参りかね候へども……」としたためられる。妹の結婚式にも参加し

ないうえ、母と妹のそれぞれに手紙を書くのではなく、両方に宛てて一通の手紙を書いている。結婚後の信子の親族関係の疎遠が分かる。

夫の社命で久しぶりに東京を訪れる際にも、その日時を俊吉夫婦に伝えていない。それは、俊吉が「来る事は手紙で知つてみたけれど、今日来ようとは思はなかつた。」と言っていることから分かる。信子は俊吉や照子に駅まで迎えに来てもらうことを躊躇つたのだと考えられ、人に迷惑をかけないようにしようとする彼女の志向が読み取れる。あるいは単に、もう一通手紙を書くことを億劫に思っただけなのかも知れない。

人付き合いを最小限に抑える信子の性質は、夫のそれと共通する。社命を帯びて東京を訪れた際、「短い期限内に、果すべき用向きの多かつた夫は、唯彼女の母親の所へ、来匆匆顔を出した時の外は、殆り一日も彼女をつれて、外出する機会を見出さなかつた」。信子の夫は東京に来て、義母の家に一度顔を出すだけのみならず、結婚式すら参加しなかつた義理の妹の家を訪れて祝賀することもせず、親戚付き合いを疎遠にする人物と言える。さらに、「信子はとうとう泊る事になつた」際にも、彼は妹夫婦の家に顔を出すこともしない。仕事もあるのだろうか、翌朝も妻が昼まで妹夫婦の家にいるにも拘らず訪ねてくることはしていない。義理の妹の結婚式にすら出席しなかつたうえ、妻が欠席することも認めていた（或いは欠席させた）ことも含め、信子の夫が仕事を最優先にしている様子が分かる。

信子や彼女の夫の人付き合ひの疎遠は、妹夫婦の人付き合ひの親密と対蹠的である。俊吉は女中の買ってきた「何枚かの端書」を受け取ると「せつせとペンを動かし始め」ている。宛先は友人・仕事関係の人・親類など色々考えられるが、彼が多くの人と書簡のやり取りをしていることは分かる。「せつせと」という言葉から、彼にとって手紙を書くことは習慣化された行いであることも窺える。

信子の訪ねてきた翌朝、亡友の一周忌の墓参をする際、彼女に言った「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと帰つて来るから。」という俊吉の言葉にも、彼の義理堅さが窺える。彼女を待たせるといふことは、帰途につく彼女を駅まで見送りに行くつもりだということを表す。

妹夫婦の家の「隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べて」いる。「界限でも、最も閑静な松林」にある信子の新家庭とは裏腹に、彼らの家は近所の人との付き合いをせざるを得ない環境にある。実際、照子が信子に話す「愉快なるべき話題」には「隣の奥さんの話」があり、照子が日頃近所付き合いのあることが分かる。さらに、照子の家庭には「女中」もおり、家庭を構成する人員の数も多い。

前節では、同性間の関係の親密度を基準にして、男と女で区別が見られることを確認したが、厳密には、その男二人の間にも差があるのであり、信子の夫は親類との関係を希薄にしている。また、信子の人間関係を、女子大学の同級生との同性間関係の希薄さのみで説明することはできない。彼女は親類との関係や近所づきあいをも希薄にしている点で、人間関係において別の枠組みにも準拠しているはずだ。

結婚後の信子や夫が人付き合いを疎遠にする、その準拠枠とは一体何なのか。それは大正期に、婦人雑誌などで頻りに提唱されていた虚礼廃止運動の言説ではないか。『婦人之友』一九一五年二月号では「虚礼廃止問題」の特集があり、一六の論説が寄せられている。同誌で虚礼廃止が提唱される初めての号である。その中の山脇房子「何処まで礼儀で何処から虚礼か」では、「女の訪問の八分通りは、御挨拶と云つてもよい位かと思ひます。肝腎の御用はお帰りがけに一言二言で済んでしまふといふ風です。時によつては一二時間も話しあつて、後から考へて見ると、何を云つたのか聞いたのか、一向何の印象も残つて居ない、つまり窮屈に時間を費したといふばかりのこともあります。」とし、「悠長な事少ない時代には、長々しい御挨拶を交換することも、意味もない手紙をかくことも、煩はしい贈答も、お互に楽しい一つの仕事であつたのでせう。即ちその時代には慥によい礼儀作法であつたかも知れません。しかも今日でも、めい／＼に忙はしい用事を控えてゐながら、長々と口上をのべ合つたり、無意味の贈答に煩はされたりするのは、迷惑至極のことで御座います。」と述べている。ミセス・ポールズ「虚礼は内容の貧弱から」では、「日本の生活は凡て外形に時間がかかる様に出来てゐます。朝夕の挨拶から季節々々の交際まで、実に非常に時間を取ります。気の短かい者、忙がしい者には、一々その責を果すに堪えぬ程の煩はしさで御座います。」とし、

「若しも限りある貴い時間が悉く斯う云ふことのためにのみ費されて、将来の進歩を計ることが出来ず、それが智識の発達や精神的の向上を妨げるとすれば私共は止むを得ず、さう云ふ習慣を廃して、他にそれに代るべきものを打建てなければなりません」とし、「日本の方々がモウ少し真剣に時間を重んずるといふことをお考えになつたら、虚礼的習慣の大部分は、ひとりでに改まるだらうと私は思ひます」と述べている。生活改善運動が本格的に開始する一九一九年から二〇年にも虚礼廃止の提唱は見られる。例えば、近衛文麿は「不愉快な日本を去るに際して」(『婦人公論』一九二〇年二月)で、「形式的な親類交際ひ」に対する嫌悪を吐露している。一九一五年から、多忙な現代社会においては交際を限定的にすべきとする意見が出てきた。産業化適合理的な価値観に基づいた交際限定の提言である。

産業化適合理的な生活によって、信子は「近頃世間に騒がれてゐる小説や戯曲」を読むことができ、信子の夫は「殆ど日曜毎に、大阪やその近郊の遊覧地へ気散じな一日を暮」すべく夫婦での娯楽を楽しむことができるのである。これに対して、俊吉夫婦の娯楽らしきものとして記述されているのは「外国の歌劇団」を観に行くことである。これは俊吉の仕事と連続したもので、娯楽とは言い難い。

このような信子夫婦が内面化する産業化適合理的な価値観は、人付き合い以外にも見られる。信子の夫は「夕刊に出てゐた食糧問題から、月々の経費をもう少し軽減出来ないものかと云ひ出」す。現時点で生活が困っているから月々の経費を軽減したいと考えたのではなく、新聞で報道されていた食糧問題を読み、今後のことを考えて経費軽減の必要を思い立つのである。現時点での生活感覚より、将来のことを優先して考える計画的で合理的な思考法と言える。「瑣末な家庭の経済の話」に時間を費やしている際、信子の夫は「これで子供でも出来て見ると——」と考へ考へ話す。子供ができた時のことも視野に入れて家庭の経済を考えているのであり、将来設計を立てた上で生活をしようとしており、計画的・合理的な生活と言える。

女中を置かない理由の一半にも、合理化の思考様式を窺うことができる。大正期は新中間層の家庭で女中払底が

問題となっていた時期であり、いつそのことを女中を廃止したらどうかという意見も見られるようになる。たとえば、三宅雄二郎「下女問題」(『婦人之友』一九一七・七)に、「僅かの収入の家でも下女を置くことになって居つて、元と贅沢心から出て居り、何とか改めねばならぬといふのである」とあることから窺えるように、贅沢心を戒め合理化を推し進めるといふ名目で女中廃止が奨励されていたことが分かる。

また、信子は「洗濯屋」を利用して居るが、洗濯の時間を節約するために洗濯屋を利用することは、当時の新中間層の合理的な生活の理想像を語る文脈で提唱されていた。安部磯雄「世界の改造と同時に家庭の改造を要す」(『婦人公論』一九一九年八月)では「洗濯も掃除も共に専門家にやらせるやうにしたら何うか」と述べて居るし、徳永寿美子「滅されてゐる中流階級の主婦」(『婦人公論』一九一九年一〇月)も「洗濯とか、裁縫とか、人手を借りられるものはなるべく人に頼むやうにして、その僅かな時間を自分の仕事の為めに使つて居ります」と言い、逸名子「家庭を如何にするか」(『婦人公論』一九一九年一月)でも「裁縫洗濯等の簡単に出来ないやうなものは専門家にさせるのです」とある。信子は自分の時間を確保するために洗濯屋を利用するという合理的な生活を送っているのだ。「竿に干した洗濯物」の見られる妹夫婦の家の近辺とは対照的である。信子はまだ洗濯屋の利用に不慣れだが、夫に「小説ばかり書いてみちや困る」と言われることで、洗濯屋をうまく利用できるやうになるだろう。

それに対して、山崎甲一も指摘しているやうに、俊吉は「ゆつくり歩い」たり、「ゆつくりと靴を運ん」だりしている。信子が電車の終点に「急ぐ」のとは対照的である¹²。俊吉は、合理性とは縁の遠いのだかさを与えられている。

信子と俊吉が結ばれなかった理由は、「より安全な生活が望めるという(堅実な)計算が働いた」¹³ことや夫のあか抜けた外見の外に、俊吉との価値観や心的傾向の違いにありそうだ。そして、結婚をめぐるこの選択が、信子の作家としての不成功に拍車をかけたことは言うまでもない。新中間層的な生活様式を価値的と思うことに繋がり、作家としての成功をより価値的でないと思ふことを帰結するだろうからである。今の生活である程度事足りると

考えてしまうということだ。

四、信子と照子の関係

「秋」では、二人の姉妹と俊吉との恋の三角関係が主題となっている¹⁴。信子と照子との間柄について詳細な分析を初めて行ったのは、山崎甲一である。山崎は「ラブレターの紛失事件から浮かび上がってくるのは、これに係わった当事者双方の「嫉妬の情」である」¹⁵としている。信子の結婚前から照子は信子に嫉妬しており、信子から俊吉を奪うために俊吉宛のラブレターを書き、信子の見やすい位置に置き、信子の姉としての配慮を要請したとするのだ。この説は高田知波が評価し、より子細な検討を加えている¹⁶。

女同士の関係にスポットライトを当てる試みは、「秋」の解釈を大きく前進させたと言えるが、しかし、信子と照子には学歴の違いがあり、価値観の共有が少ない。通常のホモソーシャルシャリティーにおける鞘当てでは価値観が共有されている二人が異性をめぐって争うが、この姉妹には価値観の一致が少ない。実際、信子と照子と俊吉の三人で展覧会や音楽会へ行く際、照子は信子と俊吉の会話の「話の圏外へ置きざりにされる」のである。

まずは、この姉妹の価値観の非共有について見てみよう。照子は「女学校」が最終学歴（あるいは中退）と考えられるが、女学校では良妻賢母の育成が教育上の目標であった。平塚らいてうは「現代の女学校教育に対する女学生としての不平」（『婦人公論』一九一六年七月）で、「今日の女学校教育は今日の若い娘たちの未知の世界に向って開いた澁刺とした心の要求を一つとして満たしてはくれません」とし、「彼らがどれほど退屈しているかも知らずに、良妻賢母主義という美名をかかげて一向平気で、姑や夫のご機嫌をとる奴隷道徳を説いたり、家計簿記のつけ方や、お台所のお仕事や、お産の準備や、その心得や、お乳の吞ませ方などを教へたりしてゐます」としている。女学校では、良妻賢母主義の教育が行われていたようだ。

他方、信子の最終学歴と考えられる日本女子大学校は、「当時は女性には女としての教育のみがクローズアップさ

れており、人といえば男性を意味していた」時代状況の中で「女は学なきをよしとす、という従来の考え方に対して高レベルの教育を求め」た。創立者の成瀬仁蔵は「高い教育を受けたことを何らかの形で社会に還元する将来への希望をもつ」ようにと述べている⁽¹⁷⁾。日本女子大学は、理念としては、女子に大学同様の高等普通教育を施し、社会で活躍できる女性を育成することが目標に掲げられていたのである。

両者の学歴の差は、二人の価値観の差異に影響を与えているだろう。俊吉と高度な文学談義をする姉の信子とは裏腹に、妹の「照子は子供らしく、飾窓の中のパラソルや絹のシヨオルを覗き歩いて」いる。久米依子は明治四〇年代から、「少女雑誌各誌は、さまざまに愛らしく美しい少女イメージを図版や記事中で示すようになった」とし、「少女読者たちは雑誌の誌面を通じて、どのようなまなざしが自分たちを「愛らしい」と捉え、尊重するのかを学ぶようになった」としている⁽¹⁸⁾。「飾窓の中のパラソルや絹のシヨオルを覗き歩」く照子は、おしゃれに気を使っているのであり、男性からのまなざしを意識して、自らの美的価値を高め、男性に選ばれる女性になることを目指しているだろう。姉や俊吉とともに出かけていた頃から、照子は俊吉からのまなざしを意識し、選ばれる存在となろうと、自らの愛らしさを演出していたと言える。姉に「閑却」された嫉妬が照子を、姉とは違う愛らしい少女として、俊吉の眼に映じるようさせていたと考えられる。

照子が姉に送るのは「桃色の書簡箋」である。沼田笠峰『現代少女とその教育』（同文館、一九一六年一月）には、「言語、服装、頭髪、学用品、その他教師の気のつかないやうな些細なことでも、女生徒の間にはそれからそれへと新しいものが伝はつて、流行の形を取つて栄えたり衰へたりする。級によつて羽織の紐に流行があつたり、レターペーパーの色に好みがあつたりするのは、実に可笑しいほど細かな所まで注意が払はれて居る。」とある。照子が桃色の書簡箋を用いるのは、自然に身に着いた志向ではあり得ない。ほぼ間違いなく、女学校で他の級友たちが書簡箋の色に拘るのを模倣した結果と言えるだろう。女学校で「愛らしい」書簡箋の色が流行るのは、男性から見られる存在として自らの美的価値を高めようとした結果である。照子は、男性に望まれる女性になる練習を日頃から

行っているものであり、そうした日常的な志向が姉への書簡箋の色にも表れていると考えられる。

信子への手紙に書かれる照子の行為にも、彼女が女学生という制度を内面化していることが窺える。照子は「毎朝鶏に餌をや」り、姉が大阪へ発つ際には「鶏を抱いて来て、大阪へいらつしやる御姉様へ御挨拶をなさい」と言う。毎朝鶏に餌をや、鶏を抱き、鶏を精神的にも教育しようとするその母性的な姿は、慈母の優しさに方向づけられているだろう。女学生の頃の照子は、良き家庭婦人の行いを疑似的に予習していると言える。女学校卒の照子と女子大学卒の信子との間には、価値観の相違がある。

姉と妹の間に横たわる価値観の懸隔は、二人の対立を裏付けることにもなりそうだ。しかし、山崎や高田のいうように果たして二人の関係は争闘のみによって捉え得るだろうか。無論、姉が妹の気持ちを推し量って恋人を譲り、妹がそれに感謝するという、先行研究によって十分に批判されてきた解釈の正当性を強調し、二人の姉妹愛の物語を抽出するつもりは毛頭ない。私がここで抽出したいのは、姉と妹それぞれが互いを模倣し合うという共依存関係である。

まず、照子は姉の「恋」を自分の欲望に転位することで、欲望の模倣が起こっているわけだが、彼女の模倣はそれだけにとどまらない。照子は姉の教養に追いつこうと努力しているようなのである。高田知波は、大阪で姉妹と俊吉の三人で会話をしていた際、「ミユウズたちは女だから、彼等を自由に虜にするものは、男だけだ」という俊吉の発言に対して、音楽や詩の男性神「アポロ」を引き合いに出して反論を展開するのが信子ではなく照子であることとに着目し、「じつは彼女は、自分が文学の分野でも信子と互角、あるいはそれ以上に議論できる女性であることを夫と姉の両方に向かって懸命にアピールしていた」¹⁹のだと解釈している。照子は、俊吉に愛されるべく、姉に追いつこうと文学に関する知識を身につける努力をしていたのである。女学生の頃姉と俊吉との仲の好い関係を見ていた照子にとって同性の信子は、未来の自分のあるべき姿として指標となっていたはずだ。無論そこには、姉の能力に圧倒されることで醸成されたライバル意識が背後にあるだろう。

一方で、姉の信子の方はどうか。注目されるのは、次の場面である。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時もの薄笑ひを浮べながら、彼女が妹の口真似をするのを、面白さうに聞いてゐた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話してゐるやうな心もちがした。

照子の口真似をするという行為は、照子を模倣したいという信子の潜在的な欲望を表徴する。夫に家事能力の低さを注意されていた信子の心理的不安定が、家事のできるはずの照子を見習うべき存在として希求し始めるのである。結婚前の信子にとって照子は妹でしかなく、親密な絆が結ばれていないが、結婚後、女性であるがために持つはずの共通経験により信子は潜在的に照子との同一化を求め、性同一性の確立を欲するのである。

信子が潜在的に照子との絆を求めていると言えるのは、結婚後、俊吉のことを想って夫に罪悪感を覚えた信子の「顔」が「以前より若々しく、化粧をしてゐるのが常」となったと書かれていることから裏付け得る。男性からのまなざしを意識して自身の美的価値を高めるといふ行為は、照子の模倣と言つてよく、結婚前の信子には外見に拘る様子は一切書かれていない。また、はじめて結婚後の妹夫婦の家を訪れる際、信子が「派手な裏のついた上衣」を着たのも、自身が女であることを意識した結果だ。

結婚前は自身の女性としての価値に無頓着に見えた信子が、男性から求められる女性への同一化を志向し始めたことを最も端的に表すのが、俊吉が自分を恋していたのではないかと思ひ込むことである。俊吉に愛されていたと想定することは、自身の女性としての価値を認識し始めたということであるうえ、妹の恋を自身の欲望に転位するということでもある。

結婚後、一人照子からの手紙を読むたびに信子は「必涙が滲んで来」る。その手紙には「もう今日かぎり御姉様と御一しよにゐる事が出来ないと思ふと」「止め度なく涙が溢れて来ます」と書かれている。信子の涙は照子の涙が転移したものと見える。結婚が決まって大阪へ旅立つ際には、「信子は何時もと変りなく、晴れ晴れした微笑を浮べながら、ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐた」。結婚生活が始まるまでは信子はまだ妹の感

傷に影響を受けてはいない。再会する際にも信子の「眼には何時かもう涙があつた」とあり、別れの際の妹と同じ状況になっている。感情面での照子への同一化も、照子に影響を受けるようになった信子を象徴していると言えるだろう。照子は姉への手紙の中で「御詫び」をするが、信子は妹に「悪るかつたら、私があやまるわ」と言う。かつては妹が謝り、再会時には姉が謝るのであり、妹からの手紙を繰り返し読んでいた信子が、妹の影響を受けたのだと考えることもできる。おまけに、信子は「云ひ続ける内に、彼女の声も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的にな」る。妹の手紙の中での感傷をなぞっているように見える。照子からの手紙を反復的に読む信子が照子からの影響を受けたことを象徴的に表しているように思われる。

妹は姉の教養に追いつこうとし、姉は妹のように自らの女性性を自覚するようになる。競争的関係を結ぶ二人の女が、関係を断ち難い肉親関係であり、さらに学歴の相違に伴う価値観の違いがあつたとき、女同士の関係は、お互いを見習う関係になるといふことをこのテキストは教えてくれる。(新しい女)と(良妻賢母主義教育)の混在という時代状況が、一組の姉妹に与える影響が対象化されている。そして言うまでもなく、信子が照子を倣ったことは、彼女が作家として成功しなかつたもう一つの理由でもある。

姉妹の絆は、二人の学歴が違うというこのために、破局を迎えねばならない。照子は信子と二人になった際に、「隣の奥さんの話、訪問記者の話、それから俊吉と見に行つた或外国の歌劇団の話」をする。高田知波が言うように、「自分と俊吉がいかに仲のいい夫婦であり、作家の妻として自分がいかに貢献しているかということ」を、照子は遠回しに姉にアピールしている」のであり、「この会話自体がすでに相当緊張を含んで」いる(20)。絆に見えていたものが、その実競争的な関係であることを味わつた信子が「妹とは永久に他人になつたやうな心もち」を抱くのは自然な流れだろう。学歴による隔壁は、妹に永久に姉をライバル視させるのであるし、姉にとっては妹に対する優位性を保証する。学歴と、それに基づく価値観の相違する姉妹の関係を、「秋」は鮮やかに描き出しているだろう。ただしそれは、信子にとって姉妹の絆に見えていたものが破綻したということに過ぎず、お互いを指標とし合う関

係性は今後も継続されるだろう。照子にとっては、俊吉の心を引き止めるために姉を見習い続けねばならないのだし、信子にとっては家庭生活に戻るためには妹を見習う外ないのである。信子の感じた「寂しさ」は表面的な調和が崩れ、妹との間に葛藤が存在することを認知したことにすぎず、姉妹の相互依存が解消されることはないはずだ。

五、語り手の欲望

以上、作品を丹念に読んできたが、最後にこの小説から読み取れる語り手の欲望を把握しておきたい。「秋」は、女子大学卒の女性を描く上で、ヒロインの信子を、同性間関係の希薄な人物として、また、彼女の夫とセットにして、合理的な価値観を持ち、人付き合いを疎遠にする人物として描いた。加えて、信子の唯一の同性間の親密な絆を妹に限定し、信子を良妻賢母という点で妹の照子に見習わせた。ここに、「女の知の系譜」と「新中間層」に対する語り手の対抗意識が窺える。

まず、女流作家などのインテリ女性の台頭に対する警戒である。差異化原理として働いたのは、男性を同性間関係の親密さによって特徴づけ、その希薄な女性との間に断層をつくることであった。女性のホモソーシャリティーの欠如を書くことは、信子に職業への道を閉ざすためである。実際、俊吉や信子の夫は、ホモソーシャリティーが職業と密接に結びついている。加えて、信子に照子を羅針盤とさせることで、信子に女性としての美的価値を高めさせながら、家事の大切さを自覚させることにより、男／女の疎隔を設けつつ、良妻賢母主義の中に封じ込めようとする戦略もある。

ただし、恋愛の相手を奪う試みをしたのが、姉ではなく妹であるという点には注目したい。年少者の年長者に対する反逆は、儒教的な家族主義への抵抗を表徴する。照子は今後も自らの教養を磨き続けるだろうし、それによって姉を脅かすことにもなる。ただし、それはあくまで職業とは結びつかないのであるし、夫に見合う妻となるように心がけているに過ぎない点で、男性作家を特権化する語り手にとっては安全な圏域に収まり続けることにはなるの

ではあるが。

次に、人間関係を重んじる俊吉の造形からは、「秋」の語りの深層に、新中間層と正系知識人とを差異化したいという欲望があったことを物語る。同じ時期、芥川は「寸刻も休まない売文生活」に「疲労と倦怠」を表明していた⁽²¹⁾。自身の創作活動を「売文」と呼び始めていたのである。締め切りに終わられる生活は、資本主義体制からめとられるという点で、帝大卒の正系知識人と高商卒の新中間層サラリーマンとの境界を揺るがす。正系知識人と新中間層サラリーマンとの区分けが困難な文壇の状況の到来は、ノスタルジアを招来するだろう。「秋」では、傍系エリートである高商卒のサラリーマンを合理性によって特徴づけ、帝大卒の正系知識人を人情によって色づけた。この差異化戦略は比較的たやすいことだったのかもしれない。今田高俊がいうように、サラリーマンを職業とする「新中間階級の特徴」は「なにごとにも計画的・合理的に判断し効率を重んじること」である⁽²²⁾。一方で、竹内洋がいうように、帝国大学は非大学型高等教育との差異化を図るべく、帝国大学の養成機関である高等学校を利用し、「高等学校の人格教育が人物のゆとり、自由、自重を養い」、「傍系」エリートとは違ふとされたのである⁽²³⁾。俊吉を「ゆつくり」歩く人物として規定したのも、資本主義制度における生存競争とは無縁の余裕を持つ人物として彼を造形したかったからに外ならない。

「秋」は、〈女の知の系譜〉と〈新中間層〉に対する差異化戦略を捉える上で有効なテキストである。

注

- (1) 竹内洋 『学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社、一九九九年四月)。
- (2) 高田知波 「妹と姉、それぞれの幻像——芥川龍之介『秋』を読む——」(『駒沢国文』二〇〇九年二月)。
- (3) 三好行雄 「ある終焉——「秋」の周辺——」(『芥川龍之介論』筑摩書房、一九七六年九月)。
- (4) 関口安義 「寂しい諦め——芥川龍之介「秋」の世界——」(『国文学論考』一九八四年三月)。

- (5) 蒲生芳郎「芥川龍之介『秋』私見——信子の造形をめぐって——」(『キリスト教文化研究所研究年報』一九九三年三月)。
- (6) 蒲生芳郎、前掲「芥川龍之介『秋』私見——信子の造形をめぐって——」。
- (7) 神田由美子「秋」(『作品論 芥川龍之介』双文社出版、一九九〇年十二月)。
- (8) 西山康一「芥川作品の語り出される〈場所〉——「秋」をめぐって——」(『芸文研究』一九九八年六月)。
- (9) 溝部優実子「秋」論 〈書く女〉としての信子」(『芥川龍之介研究年誌』二〇一〇年九月)。
- (10) 五島慶一は「女に小説は書けるか——芥川龍之介「秋」に於ける女性表象——」(『女性・ことば・表象——ジェンダー論の地平』大阪教育図書、二〇一七年九月)で、俊吉が「(『文芸サークル』の一員である)としている」。
- (11) 「十年前に卒業した東京高商出の傑出者総評」(『実業之日本』一九二〇年二月一日)。
- (12) 山崎甲一「秋」——彼等三人の内面の劇——」(『アプローチ 芥川龍之介』明治書院、一九九二年五月)。
- (13) 蒲生芳郎、前掲「芥川龍之介『秋』私見——信子の造形をめぐって——」。
- (14) 二人の姉妹と一人の男との恋の三角関係といえは久米正雄の「空華」(『婦人公論』一九一九年九月—一九二〇年十二月)もそうである。一九二〇年三月までに発表された「空華」のテキストと「秋」との間にはいくつかの類似が見られ、「秋」が「空華」を参考にして書かれたことが分かるのだが、これについては別稿にて論ずる。
- (15) 山崎甲一、前掲「秋」——彼等三人の内面の劇——」。
- (16) 高田知波、前掲「妹と姉、それぞれの幻像——芥川龍之介『秋』を読む——」。
- (17) 『日本女子大学学園辞典——創立100年の軌跡』(日本女子大学、二〇〇一年十二月)。
- (18) 久米依子「構成される少女」——少女雑誌の創刊と少女セクシュアリティの発見」(久米依子『少女小説』の生成 ジェンダー・ポリティクスの世紀』青弓社、二〇一三年六月)。
- (19) 高田知波、前掲「妹と姉、それぞれの幻像——芥川龍之介『秋』を読む——」。
- (20) 高田知波、前掲「妹と姉、それぞれの幻像——芥川龍之介『秋』を読む——」。

- (21) 「東洋の秋」『改造』一九二〇年四月。
- (22) 今田高俊『社会階層と政治』（東京大学出版会、一九八九年一月）。
- (23) 竹内洋、前掲『学歴貴族の栄光と挫折』。

第五章 中国を語ること

——「南京の基督」論——

一、中国の変容と金花の物語

本章は、近代中国を舞台とした芥川龍之介の「南京の基督」(『中央公論』一九二〇年七月)を、中国表象という観点で捉えなおしてみることを目的とする。

「南京の基督」に関する研究の最近の動向として、この小説を当時の中国の社会や歴史の中に開き、中国に対する日本やアメリカの帝国主義的な欲望を読み取ろうとする点が挙げられる。例えば、西山康一は、日本の旅行家や語り手の態度に「当時の日本の中国大陸進出をめぐる〈帝国主義〉的なイメージあるいはロジックが、政治性を隠蔽しながらも無自覚な差別コードとして影響を及ぼしている」⁽¹⁾としている。中村三春は、混血児に着目し、

「George Murry はその姓名からして、日本人女性と亜米利加人男性との間の子」と想定し、この小説には「日本と亜米利加という列強が集合して中国を植民地化(娼婦化)している図」があり、「そこには、日本と亜米利加との関係は対等ではなく、日本の追従性に対する自嘲も付加され」、「混血児だけでなく、混血児と金花との関係を見つめている旅行者その人も、同じくジェンダー＝コロニアルな視線を決して免れることはない」としている⁽²⁾。孔月は、日本人と亜米利加人との混血児や日本の旅行家に表象される「アメリカと日本の帝国主義的な欲望(政治的欲望)が、金花に表象される中国を植民地化(娼婦化)しようとする構図を、「病」(性病)を通して構図の逆転を試みた表象のテクスト」⁽³⁾としてこの作を読解している。これらの研究言説は、「若い日本の旅行家」が上海の競馬を見物して中国南部の風光を探りに来て娼婦を買う構図に、中国を半植民地化しようとする日本の欲望が読み取れる点に

着目することに、問題意識の淵源があるだろう。この小説を社会や歴史の文脈に位置付けて、作品を開くことで、従来の制度化されてきた「南京の基督」の研究史を一新しようとする試み自体は評価に値する。

しかし、「南京の基督」という小説が表象している中国は、日本などの帝国主義諸国によって半植民地化されつつある中国のみだろうか。本章では、小説の発表された当時中国が直面していた変化、別して人間の生き方や思想といった内面の変化をも織り込んでいることにこの作の中国表象の特質がある、と考える。「南京の基督」と同じく、近代中国を舞台にした小説「首が落ちた話」(『新潮』一九一八年一月)の主人公何小二が首を切られた際追憶する女性には、「纏足をした」女性である。「首が落ちた話」とは裏腹に、「南京の基督」の主人公宋金花は纏足をしているという情報が全く記述されていない。纏足をしていない女性だと推測している。この纏足の有無の変更は見逃せない。一九一二年の『読売新聞』では、「今の支那人の風俗中、最も奇異なるは、男子は弁髪をなし、女子は纏足をなせる者大部分を占むること是なり」(4)とされ、中国の女性の大半が纏足をしていることが紹介されていた。ところが、一九一七年の記事においては、「支那婦人は今まで御承知の通り家庭に許り閉ぢこめられ、滅多に外出などしなかつたものですが、革命があつてからの変わり方は非常に急激で、丁度堰かされてゐた河が一度に漲り流れるのと同じやうに、服装などのハイカラになつた事は驚くほど」であることを指摘したうえで、「纏足はもう新しい女は一切致して居りません」(5)と紹介されている。辛亥革命後の中国の進歩的な女性が纏足をしなくなったことを述べている。纏足をしていない女性として金花を登場させることにより、この小説は、当時の中国の女性の変化を的確に描き出している。本作は、中国が半植民化されつつあるという外側からの中国の変化を描き出すのみならず、当時の中国が直面していた内側からの変化をも見事に表しているのである。

この作が当時の中国の変化を取り込まなければならなかった必然性は、この作が掲載された雑誌『中央公論』の性質によるだろう。『中央公論』では、当時の中国の内側からの近代化を積極的に紹介していたのである。例えば、宇野哲人の「支那に於ける儒教の民主化」(一九一九年五月)、(吉野作造が書いたとされる)巻頭言として掲げられた「北

京学生団の行動を漫罵する勿れ」(一九一九年六月)、吉野作造の「北京大学に於ける新思潮の勃興」(一九一九年六月)、「支那学生運動の新傾向」(一九二〇年二月)、「日支学生提携運動」(一九二〇年六月)などによって、当時の中国の急激な変化を伝えていた。芥川は、生涯、雑誌や新聞といったメディアに小説を発表し続けたのであるが、そうした媒体に小説を発表する限り、その発表媒体による制度的な影響を小説が免れ得ないことを強く意識していた⁽⁶⁾。したがって、中国を舞台とした小説を書く際、掲載媒体である『中央公論』が中国の内側からの変容を雄弁に語るジャーナリズム媒体であったことから、当時中国の直面していた過渡性を取り込む必要性があったと考えられるのである。このことからまず、当時のジャーナリズム表象で語られていた中国の変容を正確に捉えておく必要がある。

当時の中国は、物質面での改革(一九世紀後半の洋務運動)に始まった中国近代化のプロセスが、体制面での改革(一八九八年の戊戌変法、一九一一年から一九一五年の辛亥革命)段階を超え、さらに文化面での改革レベルにまで進んできているという情勢にあった。中国では一九一二年、辛亥革命によって、清朝が倒れて中華民国が成立し、二千年以上続いた君主制が取り除かれ、共和国が建設された。それによって、これまで君主制の精神的な基盤となっていた儒教はいったいどうなるのかという問題に、早晩中国の思想界は直面しなければならなかった。

日本で論じられていた中国は、家族主義に基礎を置く儒教道德の国であり、その儒教道德では孝道が勧められ、とりわけ清朝末に儒教が熱烈に推奨された、というものであった。宇野哲人が、「経書の中にも孝経と云ふのがあり」、その孝経から分かることは、「支那人は又日本人とは違ひ国家主義忠君主義よりは寧ろ家族主義孝行主義の国民である」⁽⁷⁾、あるいは「支那国民が家族主義を執つてゐることは予の言を待たずして何人も熟知する処であらふ」⁽⁸⁾と述べるように、当時の日本では中国は伝統的に家族主義を基礎に置く儒教道德の国と見做されていた。桑原隲蔵は、「支那で孔子及び孔子教を尊崇することは、二千余年前の古代から実行されて居るが、支那人が特に尊孔主義を高唱するに至ったのは清朝の末年以来のこと」で、「教育の大方針は、尊孔」となり、「学部で規定した学堂管理通則には、各学堂に孔子を祀り」「式日毎に孔子の靈牌に、三跪九叩の礼を行うことを命じて居る」としている

(9)。清朝末の中国人の儒教に対する熱心な信仰ぶりが分かる。その儒教道徳では、孝道が推奨される。「子たるものが父母に孝順でなければならぬ」であり、「若し不幸にして父母が慈愛ならざる場合」でも「子としては絶対に服従すべき」で、「万一過つて父が犯罪行為をしても、子たる者は、之を隠すべきである」とされるのだ(10)。

しかし、辛亥革命後の中国は、儒教をどうするかという問題に取り組まなければならなかった。儒教は新時代に不適當であり排斥すべきとする意見や、共和・利他・博愛の新時代に合致するように従来の儒教観を変えようとする試みが見られたのだ。その中国の試行錯誤の様子が当時の日本のジャーナリズム言説で紹介されている。例えば、桑原隲蔵は、中華民国の成立によって儒教に対する考え方が変容したことを紹介している。「国体の改まった中華民国——民主共和主義——時代に、忠君尊王主義の孔子教がその儘に、教育の宗旨に利用できるであろうか。これは大なる疑問と申さねばならぬ」ということで、「中華民国の成立と共に、一部の支那人の孔子教に対する態度が幾分変化して来た」。「或る者は君主專制時代に創唱され、又發達して来た孔子教は、最早民国時代には適當せぬ。中華民国は別の新道徳を要求すると公言して居る」。「四川省の或る地方では、孔子廟を破壊」した者もいるという。一方で、一部の学者は、孔子教の存続を求め、「大正元年十月に尊孔主義を標榜する孔教会が組織」され、「主唱者は広東の陳煥章」で「公洋学の信者」である。「公洋学——殊に康有為などの主張する公洋学——では、孔子教を尊王忠君主義と認めず民主共和主義と解し」、孔子の理想は、「堯舜時代以前」の「大同の世」の時代で、その時代は、「君位も世襲でなく、聖徳ある者が君位に推され、一切の貨財は天下の共有で、従つて盜賊がなく、夜も戸を閉す必要がない、天下一心、万人共和の時代」である。この点で、「孔子教は尤も民国福利時代に必要欠くべからざる教義といわなければならぬ」と主張する(11)。宇野哲人も同様の紹介を行っており、公洋学が説く大同の世は、「己の親子のみを特別に親愛せずして万人を平等に博愛」し、「労働に従事すれども自己の利益を計らんが為にあらず」とするという(12)。公洋学一派は、伝統的な儒教観を変え、共和・利他・博愛の民国時代に合致するものとしたのだ。ちなみに、このような公洋学の考える民国の理想は、張耀會の主張する「支那今後の二大方針」のうちのひとつも

ベクトルを同じくしている。張耀會によれば、中国を「紛擾せしめたる原因は、個人主義及び地方觀念の偏激なる發達にあるに外ならず、これを根本的に矯正」して、「中国人は一体不可分にして、超個人的目的を有するものなり」と云う自覚を激發することが不可欠という(13)。

しかし、儒教を支持する孔教会の主張は北京大学教授陣によって批判された。吉野作造によると、「陳独秀君は北京大学に於ける新思潮の先驅として一爾年以來盛んに孔孟の教に忌憚なき酷評を加えて居った」(14)という。同様の内容は『東京朝日新聞』によっても紹介されている。「支那に於ける最近思想革命の第一声は、今春北京大学教授陳独秀、胡適、秦汾、陳大齊、錢玄同氏等に依りて挙げられ」、「彼等は支那思想界の權威たる儒教主義に反抗し、端なく旧思想との間に大衝突を惹起」したという(15)。

さらに、「儒教は女性の人權を無視」し、「経典」には「婦人とは人に伏するもの」と書いてあるのだが(16)、儒教道徳によつて抑圧されてきた女性が解放されるというのも、当時のジャーナリズム表象で語られていた中国の変容であった。例えば、「小石川区竹早町の第二高等女学校の卒業生たるべき四十三名の女学生の中に珍しくも一人の支那婦人が居り」、「或ひは渡米する事になるかも知れぬ」(17)ことが紹介されたり、「牛込河田町の女子医学専門学校を昨年卒業し、爾来一個年帝大及三井病院に於て研究を重ねていた支那留學生の蘇淑貞さん(二七)と錢旭琴さん(二五)との兩人は此程いよいよ学成つて、錢さんは上海の公立病院の産婦人科を、蘇さんは広東の産婦人科を担当することになつて帰国」(18)したことが書かれたりした。婦人参政権を求める運動も起き、「支那は目下洪牙利ブダペストに開会中の万国婦人参政権會議の會員たるを許可せられたり」(19)とする記事や、上海で「中華女子参政同盟会」(20)が組織されたことを紹介する記事などが見られる。

当時のジャーナリズム表象では、中国の内側からの変容が積極的に語られていた。「南京の基督」が掲載された『中央公論』は、ジャーナリズムの指導的役割を果たしていたことから、そのような中国の変容を取り入れる必要があったのだと考えられる。

「南京の基督」の主人公宋金花は、私娼であるが、彼女が春を鬻ぐ理由は「貧しい家計を助ける為」と語り手によつて叙述される。「この商売をしなければ、阿父様も私も餓ゑ死をしてしまひますから」、「私は阿父様を養ふ為に、賤しい商売を致して居ります」と金花自身が述べるように、彼女は自分が娼婦となつた目的を、父親扶養のためだと理解している。金花は客の払つて行く金が約束の額より多かつた際には、「たった一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしてゐた」と記されるように、父親に対する孝行を大切にする人物として造形されている。作品内では、金花が父親に尽くしていることが繰り返して強調されており、金花の孝道の一途さが描かれている。金花は内面思惟の中で「秦淮の孔子様の廟へ、写真機を向けてゐた人」を思い出している。外国人が中国観光の土産として孔子廟の写真を撮っていることが記述されていることから、この作品では、儒教を中国の伝統性の象徴として見做す論理が内包されていることが分かる。小説が内包する〈中国の伝統＝儒教〉という論理は、金花の人物造型にも少なからず影響を及ぼしている。キリスト教を信仰しながらも、金花は、伝統的な儒教道徳を内面化した存在であり、伝統的な家族制度の中に生きる人物として造形されているのだ²¹。

しかし、金花は儒教道徳から決別を果し、伝統的な孝道の世界から抜け出すこととなる。金花が梅毒に罹つて、朋輩の陳山茶から人に移せば梅毒は治るといふ治療法を教へてもらい、陳山茶が帰つた後、彼女は受難の基督の十字架の前で祈禱を捧げる。彼女は「たとひ餓ゑ死をしても、——さうすればこの病も、療るさうでございますが、——御客と一つ寝台に寝ないやうに、心がけねばなるまいと存じます。さもなければ私は、私どもの仕合せの為に、怨みもない他人を不仕合せに致す事になりますから。」と祈る。他人の仕合せを優先して、父親との生活を犠牲にするのである。高橋博史はこの箇所について、「このとき金花は、父のために生きること——へたつた一人の父親との関係のなかに自分の生の根柢を求めることよりも、大勢の他人との関係のなかに自らの生を見いだすことを——たとえそれが飢え死に至る生であつても、選んでいるのである」²²と述べている。金花は、父親への孝行を犠牲にして、他人の幸福を志向するのであり、利他・博愛の決意をするのである。

金花は他人の幸福を志向するのは裏腹に、金花の「朋輩の売笑婦」は「嘘もつ」き「我儘も張」とされている。実際、「陳山茶」は、自分の梅毒を治すためなら客を犠牲にしてもよいと考えており、利己的である。宇野哲人が「少しく支那人と交つた経験のある者は支那人は利己的だとか個人的だとか云ふ事は誰しも感ずるのである」(23)としたり、横山章が「彼等(中国人のこと——引用者注)には君臣の大義とか、国民の本分とか称する高尚にして温味ある点は殆ど発見する能はず、唯眼前自己の利益に向かつては何ものをも犠牲に供して憚らざる極端なる個人主義の崇拜者なり」(24)としたりしており、中国人を利己的と見做す考えが瀰漫していたことが分かる。「朋輩の売笑婦」の性格造形には伝統的な中国人観がコードとして働いていると言えるだろう。金花の博愛への決意は、伝統的な利己的な中国人像からの脱出と見ることもできる。祈祷をする前の金花は、朋輩の陳山茶に梅毒を治すためには人に移し返すとよいと勧められた際、「山茶の言葉には多少の好奇心を動かし」てしまうのであり、自分のために他人を不幸にしてもよいという柔弱な考えが見られ、利己性から逃れられていなかった。祈祷後の金花は、利己性から抜け出し、利他の決意をするのである。

そもそも金花の父親は、「もう腰も立たない」ほどの「老人」であったのであり、儒教道德の衰微が暗示されていた。また、金花が孝道を捨て博愛の決意をしたのち、父親についての情報が一切見られない語りの構造になっていることが、金花が父を捨てたことを何より雄弁に物語っているとと言えるだろう。金花がこの決意をする以前は、彼女が父親思いであることが再三述べられており、父親に関する情報が蔓延していたのとは裏腹に、この決意の後には父親に関する情報が皆無となるのである。あれほど父親思いであったにも拘らず、作品の「二」章において、梅毒の癒えたことに気付いた金花が、健康な身体をとり戻したことによって再び父親の扶養が行えることを喜ぶ内面が書かれないことは奇異である。金花の梅毒が治って再び売春を行えるようになった「三」章においても、売春により生計を立てることができたために再び父親を養えるようになった、と言った情報は全く捨象されている。祈祷後は父親に関する情報が不思議にも消えるのである。祈祷する際、キリストに「私はあなた御一人の外に、たよるも

ののない女でございます」と言うことで金花は父親を頼ることのできないものとして明確に言語化したのであり、父親との生活から抜け出すことになるのである。金花は儒教道徳を捨てたのであり、博愛の態度を選択するに至るのだ。

と同時に、祈祷後の金花は「山茶や迎春にいくら商売を勧められても、剛情に客をとらずにゐた」点で、女性であるにも拘らず自分の意志を貫き通しており、意志堅固の女性となつてゐる。「南京の基督」の典拠となつた谷崎潤一郎の「秦淮の夜」(『中外』一九一九年二月、『新小説』一九一九年三月)の売春婦たちは、御客に泊まってもらうべく媚を売るだけの存在であり、自分独自の生き方が見られず、人間としての主体性が描かれていない。「秦淮の夜」の売春婦たちとは裏腹に、金花は自分なりの生き方を「決心」した点で、近代的な主体性を内面化するに至つたと言える。西原大輔は、谷崎の支那趣味小説に関して、谷崎は「中国を変化のない社会と見なし、中国文化を静的なものと認識した」ため、谷崎の描く中国人女性は「風景の一部として一方的に観賞される存在であつて、生きた対話の相手ではない」とし、声を持たないものとして描かれたという²⁵。それとは対蹠的に、「南京の基督」の金花は、声を持つ、自立した人間として造形されている。若い日本の旅行家に翡翠の耳環をもらつた際、「金花は始めて客をとつた夜から、実際かう云ふ確信に自ら安んじてゐたのであつた」と語り手が述べるように、祈祷前の金花は、男に頼る女——自立してゐない女であつた。朋輩の陳山茶に梅毒を治すためには人に移し返すとよいと勧められた際に「山茶の言葉には多少の好奇心を動かした」てしまふのも、意志の弱いためであつた。そして、基督に祈祷する際、金花は「私は女でございます。いつ何時どんな誘惑に陥らないものでもございませぬ」と言い、女性の弱さを認識してゐたのだが、祈祷の後には、自立した強い女性へと成長するのである。付和雷同型の弱い女性から志操堅固型の強い女性への反転である。

このように、祈祷の前後では、①金花が家族主義的な儒教道徳から逃れ博愛の決意をする物語、②金花が利己主義から抜け出し利他的決意をする物語、③付和雷同の女性から自立した女性へと成長する物語という三つの物語が

並行しているのである。

このような物語を生成する背景として、当時日本で表象されていた中国の変容との歴史的共時性がある、というのが本章での考え方である。当時の日本では、儒教が徹底批判される状況が表象されていたから、①の物語が生まれる必然性がある。また、公洋学の民国観——共和・利他・博愛の時代——や張耀會の主張する中国の今後の方針——個人主義から超個人主義——から②の物語が生まれる。さらに、女性解放の気運の表象から③の物語が生まれてくる。このような、ジャーナリズム言説で表象されていた中国の変容をエネルギー源として、金花の変容の物語が生成されたのではないだろうか。「南京の基督」における中国表象の特質は歴史的言説を背景にすることにあったのだ。芥川が中国に渡るのは一九二一年三月のことであるが、中国を訪れたことのない芥川が近代中国を舞台とした小説を書くには、当時のジャーナリズム言説を参照しなければならなかったのではないか。

さて、金花の成長する物語を確認したわけであるが、それも小説の冒頭に描かれる寂しさを生み出すものでしかなかった。それでは金花に救いは訪れるのか。その点を次節で考察しつつ、金花の救いの物語を生み出す原動力をも探究したい。

二、母胎回帰の物語

「南京の基督」という小説は、湿った小説である。例えば、金花の華奢な足に襲ってくる寒さを「水のやうに」と比喩している。金花が見慣れない外国人の顔に見覚えがあると感じ、初めて会った時の記憶を思い出す際、「画舫に乗つてゐた人」や秦淮河のほとりにある「秦淮の孔子様の廟」や「利涉橋の側の飯館の前」にいた人を思い出し、秦准河の周辺で出会った人たちを思い浮かべている。金花の夢の中の部屋の外には「川があるのか、静な水の音や櫂の音が、絶えず此処まで聞えて」くるのであり、それは「彼女には、幼少の時から見慣れてゐる、秦淮らしい心もち」がするのである。夢の中にいる外国人は「真鍮の水煙管」を啜っている。夢がさめたあと、金花の

寝台は「小舸」にたとえられ、川に浮かぶ船に比喻されている。その中の金花は、「昨夜の汗にくつついたのか、べつたり油じみた髪が乱れて」おり、汗で湿っている。そもそも、この作品の舞台の「南京の奇望街」は、秦淮の近辺にあるのであり、水で囲まれた土地なのである。このように、「南京の基督」は、〈水〉が多く登場し、作品が湿っているのである。

芥川龍之介文学において、水はしばしば、原初性を表すものとして活用されてきた。例えば、「大川の水」(『心の花』一九一四年四月)では、大川端に近い町に生れた「自分」は、大川の「水を見る毎に、何となく、涙を落したいやうな、云い難い慰安と寂寥とを感じ」、「自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との国にはいるやうな心もち」がする。「読書三昧に耽」る「自分」は大川の水を見ると、「静寂な書齋の空気が休みなく与える刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく、動いてゐる自分の心をも、丁度、長旅に出た巡礼が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、なつかしさととがしてくる」気分になる。「大川の水」では、〈水〉は、近代と対比され原初を感じさせるものとして登場している。また、「松江印象記」(『松陽新報』一九一五年八月)は、「松江へ来て、先自分の心を惹いたものは、此市を縦横に貫いてゐる川の水と其川の上に架けられた多くの木造の橋とであつた」と言い、「この市の川の水は(中略)強い愛惜を自分の心に喚起してくれる」としている。この文章は「卑しむ可き新文明の実利主義」を批判し、前近代的・原初的な松江を推賞するのだが、前近代的・原初的なものとして松江の〈水〉が挙げられている。さらに、「尾生の信」(『中央文学』一九二〇年一月)は、女を待ち続けたがために洲の上へ上ってくる川の水によって溺れ死んだ尾生の魂が、幾千年かの流転ののち、「私」に宿ることになるという話である。この小説では尾生が女を待っているのは橋の下なのであるが、「私」の魂の原初としての「尾生」が〈水〉に囲まれた空間にいたというのは示唆的である。このように、芥川文学では、原初性の象徴として〈水〉が活用されるが多かつたのだ。

このことは芥川文学のみならず、他の作家の用いるコードでもあつた。例えば、永井荷風の「深川の歌」(『趣味』

一九〇九年二月）は、欧米帰りで「髻をはやし、洋服を着」「電気鉄道に乗」る——近代人としての「自分」が、江戸情緒漂う「水の深川」への回帰を願う。この小説では、〈水〉は失われた江戸情緒の象徴として活用されている。この時代の小説では、〈水〉に原初的なイメージが付与されるが多かった。

「南京の基督」は、〈水〉の蔓延により、金花の原初回帰を暗示させていたのだが、思えば金花は、始めから母なるものを希求しており、原初の世界を渴望していたのであった。「歿くなつた母親」と示されるように、金花は母親不在の存在であり、識閥下で母親を求めていることが推定される。また、金花は、「母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰」をずっと持ち続け、十字架のキリストを見るたびごとに希望の光を瞳によみがえらせているのだが、このとき金花は母親を思慕し求めているのではないだろうか。さらに、金花が日本人の旅行家に、キリスト教信仰と売春との矛盾を指摘された際に語った次の台詞も、金花の母親への希求を表している。

「天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。——それでなければ基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」

罪を罰する存在である警察署の役人と対比させることで、金花にとってのキリストは、罪を罰して裁く〈父〉の役割ではなく、罪を許して包み込んでくれる〈母〉の役割を持つていることが読み取れる²⁶。キリストを信仰するということが、彼女にとって母なるものに対する希求だったのである。

さて、金花の部屋に見慣れない外国人が入ってくる。金花はその見慣れない外国人の顔に見覚えがあると感じ、始めて会った時の記憶を思い出そうと努める。

が、それにも関わらず、前にも一度この顔を見た覚えのあると云ふ、さつきの感じだけはどうしても、打ち消す事が出来なかつた。金花は客の額に懸つた、黒い捲き毛を眺めながら、気軽さうに愛嬌を振り撒く内にも、この顔に始めて遇つた時の記憶を、一生懸命に喚び起さうとした。

「この間肥つた奥さんと一しよに、画舫に乗つてゐた人かしら。いやいや、あの人は髪の色が、もつとずつと

赤かった。では秦淮の孔子様の廟へ、写真機を向けてみた人かも知れない。しかしあの人はこの御客より、年をとつてみたやうな心もちがする。さうさう、何時か利涉橋の側の飯館の前に、人だかりがしてゐると思つたら、丁度この御客によく似た人が、太い籐の杖を振り上げて、人力車夫の背中を打つてみたつけ。事によると、――が、どうもあの人の眼は、もつと瞳が青かつたやうだ。……」

画舫は秦淮河に浮かぶ遊覧船であり、孔子様の廟は、秦淮河に隣接しているのであるし、利涉橋は秦淮河にかかる橋である。金花が外国人に初めて遇つた時の記憶を思い出している際、金花は秦淮河を思い出しているのであり、〈水〉を思い出しているのである。この外国人は原初のイメージを纏っているものであり、彼と出会うことは、彼女が原初へ回帰する契機なのだ。母なる世界への回帰が近づいている。

見慣れない外国人が金花の部屋に登場する少し前に、寒さが金花の「鼠繻子の靴を、その靴の中の華奢な足を、水のやうに襲つて来る」。見慣れない外国人が入ってきた瞬間、「卓の上のランプの火は、一しきりばつと燃え上つて、妙に赤々と煤けた光を狭い部屋の中に漲らせ」る。子宮内の羊水と、子宮の内側の皮膚の色を暗示しているのであり、金花の母胎回帰が暗示されている。そして、見慣れない外国人と一夜を過ごす際、金花は夢を見、天国の世界へ行く。その世界で金花が母体へと回帰する物語が伏在しているのだ。金花の母胎回帰の物語は、作品の中で直接示された明示的な物語ではなく、暗示によつて間接的に示された隠微な物語であつたために、先行研究では読み解かれることがなかつた。しかし、小説が細かい声でささやく暗示に耳をすませば、顕示的に現れてくる確かな手触りのある物語でもある。夢の中で金花のいる部屋は次のように描写されている。

彼女の椅子の後には、絳紗の帳を垂れた窓があつて、その又窓の外には川があるのか、静な水の音や櫂の音が、絶えず此処まで聞えて来た。

「絳紗」とは、赤い色のうすぎぬのことであり、子宮の内側の皮膚の色を暗示しており、部屋全体が子宮であることが暗に示されている。「水の音」は羊水を暗示している。そして、金花が後ろから誰か歩み寄るのに心づいて、後

ろを振り返った際、見慣れない一人の外国人が、「水煙管」を咥えながら腰をおろしていた。夢の場面の前まで外国人が咥えていたのは、「パイプ」だったのであるが、ここで突如「水煙管」に変わっており、「水煙管」という言葉が作品の分析において重要な意味を持つことが示唆されている。部屋の中に水が入って来たのであり、金花が子宮内で羊水に包まれたことが分かる。さらに、天国の夢が覚めたとき、金花の顔は帳を垂れた小舸のような寝台の中で「うす暗がりに浮んでゐる」と書かれている。子宮の中で羊水に浮んでいる胎児を思い起こさせる。ここでは帳を垂れた小舸のような寝台全体が子宮を暗示しており、その中に金花が羊水に浮かんではいるのだ。その金花の頬には、「昨夜の汗にくつついたのか、べつたり油じみた髪が乱れて」おり、水で湿っている。羊水に湿った胎児を彷彿させる。金花は、キリストと出会うことで、母胎回帰を果たしたと言えるだろう。

金花が母胎回帰する物語は、別の暗示によっても暗示されている。若い日本の旅行家が最初に金花を訪れた際、金花は「何時もの通り晴れ晴れと、糸切歯の見える笑を洩らす。糸切歯とは人間の犬歯のことだが、犬歯は全歯のなかで最も長く、歯冠の先が鋭くながつており、食肉獣ではよく発達して牙となるものである。「大導師信輔の半生」(『中央公論』一九二五年一月)の「六 友だち」の中でも、海女を海に飛びこませるべく銅貨を海の中に投げ込む友達の毒を表すために、「人並み以上に鋭い犬歯をも具へてゐた」としている。概して犬歯は鋭さの象徴と言えるだろう。金花の糸切り歯を強調することで、金花の意志の強さ——大人であることを表していたのだ。しかし、天国の夢がさめた直後の金花は、「心もち明いた唇の隙にも、糯米のやうに細い歯が、かすかに白々と覗いてゐた」のだ。金花の歯の細さを強調することで金花が子供になったことを表している。金花の歯に着目することで、金花が大人の世界から子供の世界へと回帰する物語が読め、母胎回帰の物語を補強している。

さて、「南京の基督」の末尾には次のような附記がある。

本篇を草するに当り、谷崎潤一郎氏作「秦淮の一夜」に負ふ所尠からず。附記して感謝の意を表す。

この附記によって、「南京の基督」が、谷崎潤一郎の「秦淮の夜」からの引用を織り込んであることが明示されている。

る。

リンダ・ハッチオンは、パロディに関して「他者との一体化という点では規範的だが、先行する他者から自身を区別しようというオイディプスの要求があるという点では競争的である」とし、パロディには「保守的の反復と革命的差異の間に引き裂かれたこの両面性」が見られることを指摘している⁽²⁷⁾。いったいに、作品が先行作品からの引用を明示する際には、先行する手法やテーマを露呈させつつその作品からの差異化を図ることで、先行作品を批判して、その小説の独自性を創り出すものである。したがって、「南京の基督」を分析する際にも、何が反復され、どこで差異を創り出したかを捉えることが、この小説の独自性を探り出す上で不可欠であった。

しかし、先行研究においては、「南京の基督」が「秦淮の夜」に依拠しているものは、小説の舞台設定にとどまっているというのが、一致した見解であった。そのため、この小説の「秦淮の夜」に対する批評性を考察することが怠られてきた。例えば、栗栖真人は、この小説が「秦淮の夜」から「娼婦の部屋や様子から服装、また翡翠の耳環や西瓜の種等の小道具」を「借り物」として用いていることを指摘している⁽²⁸⁾。また、西原大輔は、「谷崎作品から採られているのは、「南京奇望街」「秦淮の孔子様の廟」「姚家巷の警察署」「利涉橋の側の飯館」といった四つの地名のほか、「西瓜の種」「翡翠の耳環」「黒繻子の上衣」「うす暗いランプ」「陰鬱な」「テーブル」「椅子」「籐の寝台」「毛布」「壁紙」といった限られた用語にすぎない」⁽²⁹⁾としている。このように、「南京の基督」が「秦淮の夜」に求めたものが細部の道具に過ぎず、限定的な影響しか見られないことが指摘されてきた。その上、附記が、志賀直哉の「小僧の神様」⁽³⁰⁾やフロベールの「聖ジュリアン」⁽³¹⁾といった真の出典を隠蔽するための陽動作戦の役割を果たしており、谷崎作品との連関を無視すべきとする指摘すらあった。つまり、「南京の基督」は「秦淮の夜」との相互対話的側面から読み解かれることがなかったものであり、そのために、この小説が「秦淮の夜」へ強烈に主張している何物かを探ることが等閑視されてきたのであった。

しかし、私は、「南京の基督」は、「秦淮の夜」から舞台設定のみならず物語の型とテーマを借用するという非常

に明瞭な反復を行いながら、叙述の仕方に差異を創ることで、谷崎作品に対する強烈な反措定^{アンチテーゼ}たりえたと思うのだ。

「秦淮の夜」は、「私」が南京の秦淮付近で遊女探しをし、最初「滑らかに研かれた」「洗練された」「美女」に惚れるが、その美女とは高値でしか寝ることが出来ず、仕方なくあきらめ、別の別嬪を探しに歩き回り、最終的に奇望街で、「力を籠めてぎゅつと圧したらば、壊れてしまひさうな柔かな骨組」をし、眼鼻立ちが「赤子のやうに」「生々しい」「小さな愛らしい顔」をした「十六七になる」「娘」を見つけ、「激しい情緒」を感じるに至る物語である。つまり、洗練された大人っぽい女性との恋を諦め、子どものような女性に恋を感じる物語である。この物語は、〈大人／子ども〉の二項対立のうち、〈子ども〉を選ぶ物語となっている。「南京の基督」も、金花が、堅い決意を貫くことに決めるといふ近代的価値観を身に付けた後、その艱難から母胎回帰する物語であり、〈大人／子ども〉の二項対立のうち〈子ども〉を選ぶ物語となっている。「南京の基督」が「秦淮の夜」から引用したのは、作品の舞台の小細工のみならず、物語の型そのものであったと言えるだろう。

西原大輔によれば、谷崎潤一郎は中国を「古代がそのまま現代に残っている国」と見做し、「それゆえに醜悪な近代に侵食されることなく、エキゾチックな美が保存された」国として描き、中国を「夢と幻想の国として表象した」のであった³²。「秦淮の夜」も、中国に近代とは無縁の子どものような女性を求める物語である上、南京を夢と幻想の国として表象している。「南京の基督」が母胎回帰の物語とすると、この小説が中国に求めているテーマは、「秦淮の夜」のテーマを多かれ少なかれ引用していたと言えるだろう。

「南京の基督」の附記の意味については、「秦淮の夜」から、娼家の室内描写や中国の地名などの舞台設定などを引用したことを示すためにすぎないというのが、先行研究における一致した見解であった。しかし、今まで見てきたように、この附記により、「南京の基督」が「秦淮の夜」を、舞台設定に加えて物語の型およびテーマの面で反復した作品であることを示す装置であったのではないか。

では、「南京の基督」は「秦淮の夜」とどのような差異を創り出すことで、小説の独自性を確立したのか。この点

を次節で詳述したい。

三、語りの性質

谷崎潤一郎の「秦淮の夜」は、日本人が中国の街で娼婦探しをするという内容に一致するかのようになり、語りの構造にも、帝国主義的とも言える暴力性のある態度が表れている作品であった。第一に、中国を一般化し抽象化し断定的に理解しようとしている。第二に、いまここで把握したことを客観化を経ずして記述している点である。第三に、中国を語る際に、比喻として日本を用いることで、中国を日本の視座の中に取り込もうとする点である。第四に、語り手の「私」が情報量の多い人物として設定されることで、「私」が出会った土地や中国人を全体の中で位置づけて把握しようとし、その人や土地に寄り添って耳を傾けようとし、ない点である。

第一の点から考察してみたい。「秦淮の夜」では、中国を一般化し抽象化して断定しようとする傾向が見られる。例えば、「日本の町と違って、支那では北京でも南京でも夜になると非常に淋しい。」という文では、中国をすべて見物したわけでもないのに、例外を排除して一概にそれらの土地を一般化しようとしている。旅行者が短期間の滞在でその土地のすべてを分かった風に語る、あの知ったかぶりを思わせる。「彼等〔兵隊のこと―引用者注〕は徒らに其の兵営として市中の名刹伽藍を占領し、人心を不安ならしめて居るばかりである。」という文でも中国の兵隊を一般化して断定している。一般人に安心感を与える兵隊もいるかもしれないのに、兵隊全体が人心を不安にさせていると断定している。こうした一般化を経た断定によって、語られなかったものの声を排除してしまうのだ。

第二に、現在形によって、主観的に語る傾向も見られる。例えば、「案内者の云った通り家々は皆真黒に戸を鎖して居る。」という文では、語り手がその時点で把握した事柄として、周りの家がすべて戸を鎖していることを述べているのだが、あとから考えたら戸を鎖していない家もあったかもしれないのに、語り手のいまここで捉えた認識をそのまま表象することで、客観化を経ずに直接表現している。最初に出会った芸者の容貌に関しても、「如何にも

洗練された芸者育ちの可愛らしさを、遺憾なく發揮して居るのである。」とすることで、あとから再考すると、洗練されていないところもあったかもしれないのに、そうした他の可能性に対する吟味を経ずに、その時点で把握したことをストレートに表現している。一般に、過去形は「ある動作を確認し、動かしがたい状態としてとらえ」、話し手が「眼前の動作を」受け手に対して「客体化する」ものであるが、現在形は「話者がその場において」事態に「参加し、立ち会っている」「現場参加のしるしのことば」である³³。「秦淮の夜」は、現在形の多用により、語り手が現場参加的にとらえた事実を客体化せず主観的に物語っている態度が見てとれるのだ。これにより、事態を主観的に語る性質を帯びていると言えよう。

第三に、「秦淮の夜」には比喩として日本を用いて中国を語る傾向が見られる。「東京の銀座通りのやうな繁華な町でも」、「あまりに惨な住居である。東京だと水天宮の裏通といつたやうな感じもする。」「又廣い通りへ出た。廣いと云つても漸く日本橋の仲通りぐらゐな廣さである。」のように、中国の土地を語る際、日本の比喩を用いている。これによつて、あくまで日本人の視点でしか中国を把握していない態度を示しているのである。

第四に、「秦淮の夜」の一人称の語り手は、日本の旅行者として設定されており、中国国内を旅行してきた経験に加え、南京の土地を移動する経験による幅広い知識を持ちあわせている。例えば、「今度の支那旅行で私はいつも案内者の不親切と横着とに不快を感じたけれど、此の支那人の案内者だけは特別であつた」というように、中国で体験した経験の中で一人の案内者の位置づけを行うことが出来る。また、「この女の、肌ざはりの悪さうな、色つやのない指の先を眺めてみると、先の女の瑠璃のやうに研かれた綺麗な皮膚の匂ひが、ますます忘れがたないものにはれて来るばかりであつた」、あるいは、「あの女をルビーとすれば、この女は黒曜石に似た憂鬱があつた」というように、女性同士の比較を行うことが出来るほど、経験をもちあわせている。それにより、中国の土地や人々は全体の中で位置づけられたり、他と比較されたりするのだ。この語り手は、出会った土地や人々を、メタ視点から把握したり相互比較を行っているのであり、対象を虚心に捉えようとする誠実さが見られない。

このように、「秦淮の夜」の一人称の語り手は、第一に、中国の人や土地を一般化して断定することで語られないものの声、耳を傾けず、第二に、現在形の多用により主観によって表現する傾向が見られ、第三に中国の視点を把握しようとせず、日本の喩で中国を語るといふ日本の視座を持ち、第四に中国を移動する情報量の多さによって全体から部分を位置づけることで誠実に事象を把握しない、といった要素を持っているのである。それより、この語り手は、中国との真の交流ができていないのだ。

さて、リンダ・ハッチオンはパロディを「類似よりも差異を際立たせる批評的距離を置いた反復」³⁴と定義したが、「南京の基督」が「秦淮の夜」を換骨奪胎して成立するとき、際立たせた最大の差異は、語り手の語り口ではなかったか。この小説では、三人称の語り手により、ある性質を帯びることに成功しているのである。

まず第一に、この小説の語り手は、中国の人や土地を一般化して捉えることを一切していない。南京奇望街という土地の一般的性質に言及することもないし、そこに住む人々の一般的性質を記述することもしていない。

第二に、この小説は、地の文の大部分が過去形によって閉められている。西原大輔は次のように指摘している。

「南京の基督」の各文末に注目してみると、驚くべきことに、地の文がほとんど全て「た」形で終わっている。

「であった」「があった」「であった」「ていた」「なかった」「らしかった」「した」「になった」「てしまった」

と、その一本調子の文体は、驚くほど徹底している。例外は西洋人が部屋に入ってくる場面で、「その勢いが烈しかったからであろう」「客の年ごろは三十五、六でもあろうか」という二箇所、さらに宋金花の夢が醒める下り、「あの怪しい外国人の足音でも聞こえたためであろうか」「記憶を喚びましたためであろうか」の合計四箇所のみである。すなわち、「南京の基督」は、文体が単調になることを恐れず、徹底した「た形」の文を反復して、時間軸に沿った物語叙述に徹している。³⁵

地の文の文末のほとんどすべてを過去形で統一することにより、この小説は、事象を客観化し対象化しその他の可能性をも吟味してから冷静に叙述しようとする意志を明示することに成功したのだ。実際、この語り手は、作品の

大部分で、自分の捉えた世界をすぐさま提示してしまう落ち着きのなさは見られない。

第三に、この小説の語り手は、中国や中国人を語る際、日本との比喩を通して語ることを決してしない。南京奇望街という土地を日本にたとえて叙述することもまったくしないし、金花を日本人との比較によって語ることも一切していない。

第四に、この作の語り手は、金花の部屋から離れることは一切なく、それによって、持っている情報量が非常に少ない語り手となっている。例えば、「秦淮に多い私窩子の中には、金花程の容貌の持ち主なら、何人でもゐるのに違ひなかつた」「金花程気立ての優しい少女が、二人とこの土地にゐるかどうか、それは少なくとも疑問であつた」という叙述では、金花を南京奇望街の中で位置づけようとする際に推量表現を用いている。このことよって示されるのは、語り手がいかに南京奇望街に関する知識が希薄であるかということだろう。語り手は南京奇望街を出歩いたことがないのであり、そのため、推測によってこの土地を語るしかないのである。五島慶一は、この物語世界の中における「あらゆる言語行為——会話、祈祷、内的独白、等——は「支那語」を共通のコードとして行われているように書かれており、それ以外——例えば（中略）「不思議な外国人」の洩らした「滑な外国語」に至っては、言語としての意味付けを拒否されている」のに加え、「この小説の舞台は「南京の奇望街の或家の一間」、即ち金花の室に設定されている。と同時にそのみに限定されている」とし、それによって、語り手は「彼女に寄り添いその視点で語る」ことが可能になったとする³⁶。語り手の視野の狭さによって、中国の土地や人を全体の中で位置づけたり比較することが排除されており、それによってこの語り手は、中国の土地や人を虚心に捉える態度を示すことができていく。「金花程気立ての優しい少女が、二人とこの土地にゐるかどうか、それは少なくとも疑問であつた」という箇所も、金花を全体の中で位置づけようとする意志よりも、むしろ金花に対する語り手の愛情の表明に過ぎないのではないか。

このように、「南京の基督」は、構造やテーマを「秦淮の夜」から引用しながら、語り方において帝国主義的性質

を排除しようと努めることにより、谷崎の中国表象に対する反措定^{アンチデター}たりえたのであった。

そして、それと同時に、「南京の基督」と同様に近代中国を舞台にした「首が落ちた話」(『新潮』大七・一)における中国の語り方を一新することもできている。

「首が落ちた話」では、現在形と過去形が混交している。「思ふ」「である」「であらう」「ない」「する」「ある」「らしい」「来る」「ある」「しまふ」「思はれる」「たい」「暖い」のように、高い頻度で現在形が使われている。いま、この視点で語ることにより、他の視座を排除して主観的に描く語り手である。また、「日の光も秋は、遼東と日本と変りがない。」の文では、中国を一般化して物語る語り口と同時に、日本との比較で中国を語っており、日本的視座からの中国描写となっている。「テエブルの上へのせた鉢植ゑの紅梅が時々支那めいた匂を送つて来る」に見られるように、この語り手は、日本的視座を持つているのである。この語り手は、新聞記事を「日本の新聞口調に直す」ことができるのであり、何小二の心中思惟を推し量る中国語運用能力とともに、日本語運用能力も兼ね備えているのである。「南京の基督」の語り手が、中国語のみしか理解できなかったのとは裏腹に、日本的視点からも対象を把握しているのである。さらに、「首が落ちた話」の語り手は、主人公の何小二が日清戦争時に頸を切られる「遼東」での出来事を描写できる上、木村陸軍少佐と山川理学士とが談話する「北京にある日本公使館内の一室」での出来事をも描写できている。空間移動能力がある。「南京の基督」の語り手が金花の部屋での出来事しか描けないのとは裏腹に、広い視点から部分を位置づけることができるのだ。それに加えて、「首が落ちた話」の語り手は、「日清両国の間の和が講ぜられてから、一年ばかりたった、ある早春の午前である」に見られるように、時代状況を捉える力をも持っているのであり、ジャーナリズム的な知の視点から出来事を意味づける能力を持っているかのように見えるのだ。

「首が落ちた話」の語り手は、多かれ少なかれ暴力的要素を持っていたのであり、芥川龍之介は「南京の基督」を執筆するに際して、語り方における帝国主義的要素を弱めようと努めたのではないか。

「南京の基督」が発表された当時は、中国に関する言説が大量生産された時期であった。それとともに、そうした言説の恣意性に言及する主張もなされていた。例えば、徳富蘇峰は「支那の事を観察するに、唯だ日本人の立場よりし、己を以て他を料る者多」く、「直ちに自己流儀の標準にて、之を判断し去らんとす」³⁷ることを批判している。芥川龍之介自身も、「骨董羹」(『人間』一九二〇年四、五、六月)において、「Judith Gautierが詩中の支那は、支那にして又支那にあらず。葛飾北斎が水滸画伝の挿絵も、誰か又是を以て如実に支那を写したりと云はん」とし、中国表象の恣意性に気付いていた。「南京の基督」は、そうした恣意的な中国の語り方の排除に努め、中国を虚心に語る努力を示すことにより、中国との真の交流に成功したのだ。

四、外的焦点化のパスpekティブ

しかし、この小説は、若い日本の旅行家を登場させ、彼の心中思惟を取り込むことで、彼の視点によって金花の体験する物語を相対化し、金花の救済物語を否定する視点も持ちあわせているのである。この点がこの小説の語りの特質でもある。実際、この小説の語り手は、金花が体験する生を外部から眺める外的焦点化のパスpekティブも持ちあわせている。

例えば、金花のことを「朋輩の売笑婦と違って、嘘もつかなければ我儘も張らず」という語り手には、金花と朋輩の売笑婦とを比較する視座も持っているものであり、金花の外側の視点から金花を位置づけることも(一箇所だけであるが)している。

また、金花の見る夢の中での次の箇所からも、語り手が金花から距離を置いた視点を持っていることが読み取れる。

その内に金花は誰か一人、音もなく彼女の椅子の後へ、歩み寄つたのに心づいた。そこで箸を持った儘、そつと後を振り返つて見た。すると其処にはどう云ふ訳か、あると思つた窓がなくて、緞子の蒲団を敷いた紫檀

の椅子に、見慣れない一人の外国人が、真鍮の水煙管を啣へながら、悠々と腰を下してゐた。

金花はその男を一目見ると、それが今夜彼女の部屋へ、泊りに来た男だと云ふ事がわかつた。

金花にとつては、椅子に座っていた男を一目見ただけで、その男の正体が分かつたのにもかかわらず、その男を最初に描写する表現は、「見慣れない一人の外国人」となっている。その男のことを一目で認識できた金花の視点で叙述するなら、「一人の外国人」とだけ書けばよいはずである。それをわざわざ「見慣れない一人の外国人」としているのである。その男のことを「見慣れない」と認識するのは、語り手の視点であろう。金花にとつてはその男は愛着のある存在だとしても、語り手にとつては、距離を置きたい存在なのである。ここでは、金花の認識とずれた視点を持つ語り手が現れている。

それに加え、この語り手はこの外国人をキリストと見做すことを躊躇しているようである。外国人が十字架のキリスト像に生き写しであることに金花が感づき、愛情を抱きはじめる際、語り手は「この怪しい外国人の側へ、差しさうに歩み寄つた」と叙述する。金花が外国人を信用することに疑問を抱き、警告を加えようとしているかのようである。

さらに、語り手は、暗示によつて、金花の物語を否定している。この小説で重要な記号の一つ、「西瓜の種」を巧みに用いることで、金花の生に何の変化もないことを暗示しているのである。「西瓜の種」は、次の箇所から、金花の憂鬱な日常の象徴であることが分かる。

少女の眼はこの耶蘇を見る毎に、長い睫毛の後の寂しい色が、一瞬間何処かへ見えなくなつて、その代りに無邪気な希望の光が、生き生きとよみ返つてゐるらしかつた。が、すぐにまた視線が移ると、彼女は必吐息を洩らして、光沢のない黒繻子の上衣の肩を所在なさうに落しながら、もう一度盆の西瓜の種をぼつりぼつり噛み出すのであつた。

十字架のキリスト像を眺める際希望を感じていた金花が憂鬱な日常に回帰すると、「西瓜の種」を噛むことから、

「西瓜の種」には金花の憂鬱の日常という象徴性が付与されていることが分かる。さて、金花は小説の冒頭で「盆に入れた西瓜の種を退屈さうに噛み破つてゐた」とあるのだが、小説の終わりの部分でも、「西瓜の種を噛みながら」とあり、物語の始まりにおいても終りにおいても西瓜の種を常に噛んでおり、このことから憂鬱な日常の持続が、つまり金花が暗い日常性から抜け出せていないことが、暗示されているのである(38)。

だがしかし、それと同時に、金花の救済の物語を肯定し、金花の生に寄り添うことを示す暗示も確かにある。先に、「西瓜の種」の象徴性を考える際に引用した部分において、金花がキリスト像を眺めて希望を夢見た後、吐息を吐いて憂鬱な日常へと回帰すると、「光沢のない黒縹子の上衣の肩を所在なさそうに落しながら」とある。「黒縹子の上衣」は、金花の夢みる希望と対比させられていることから、金花の憂鬱な日常の象徴と言える。そして、金花が天国の夢を見て目が覚め、梅毒が治ったことに気づく際、「黒縹子の上衣をひっかけようとした。が、突然その手を止めると」とあり、「黒縹子の上衣」を着るのをやめるのである。「黒縹子の上衣」を着ていた金花が、それを着なくなるという変化によって、金花が憂鬱な日常から確かに抜け出したことを示す装置もあるのである。

このように、「南京の基督」は、金花の生を彼女に寄り添って忠実に語る内在的視点と同時に、金花の物語を相対化する超越的視点をも持っているものであり、この点が、この小説における語りの特徴なのであった。中国を語る際、中国に寄り添って虚心に語る内在的視点とともに、知識人の視点からそれを相対化する外在的視点を持つというのが、この小説における中国の語り方の特質なのである。

五、語りの欲望と戦略

以上、作品を丹念に読む試みをしてきたが、最後にこの小説の語りの欲望と戦略を明らかにしておこう。この小説では、第一に、中国の近代化を背景として取り込んでいた。これは次のように評価することもできる。近代化した日本が、中国にも近代化を要請するという欲望である。先進国が、発展途上国に発展を期待することはよくある

話だが、この小説でも、中国に近代化を期待することで、自分と同じ道程を歩むことを要請しているのである。

第二に、この小説では、「秦淮の夜」のパロディという側面で捉えることもできるものの、次のような物語が描かれてしまっていることは当然問題視される必要がある。母胎回帰の物語がそれであり、中国をユートピアとして捉えるオリエンタリズムの思考が背景に据えられていよう。発展した国が発展途上の国を捉える思考軸であるこの思考は、自身を文明・知識の国として見做すことから発生する。第一、第二の性質は、それぞれ矛盾するように見えながら、いずれも自国を文明・知識の国として捉える発想から起こっているはずである。語り手の知識人としての側面の現れである。

第三に、中国に寄り添う視点とともに、外的焦点化のパースペクティブも持っている。金花に寄り添う視点の獲得は、金花を劣位化したいという欲望を抑え込むために採用される戦略である。外的焦点化のパースペクティブは、金花と己とを差異化したいという欲望に基づくだろう。

この小説では、知識人としての側面を持つ語り手が、中国の娼婦・金花と出会う際に働く欲望と戦略が描かれているのである。

注

- (1) 西山康一「幻想」／「迷信」としての〈中国〉——芥川龍之介「南京の基督」における〈科学〉と〈帝国主義〉(『文学』二〇〇二年五・六月号)。
- (2) 中村三春「混血する表象——小説「南京の基督」と映画『南京の基督』」(『日本文学』二〇〇二年一月)。
- (3) 孔月『芥川龍之介中国題材作品と病』(学術出版会、二〇一二年九月)。
- (4) 『読売新聞』一九一二年五月二七日、朝刊。
- (5) 『読売新聞』一九一七年七月二二日、朝刊。

(6) 芥川龍之介はのちに、「文芸雑談」(『文藝春秋』一九二七年一月)において、次のように述べている。

「僕等の小説を載せるものは、月刊誌や新聞である。それは昔と変わったことは無い。然し、西洋に居る友達の寄越したノウトルダムの絵葉書を見てみると、斯う云ふことも考へずにはゐられぬ。斯ういふことは、どう云ふことかと云へば、由来、絵というものは建築に支配されないことは無い。あのミケル・アンジェリの大壁画を生んだのも、ロマネスクの建築のあつた為である。同時に又、ファン・アイクの小油絵を生んだのもゴシックの建築のあつた為である。すると、文芸上の作品も、その作品の掲げられる月刊雑誌や、新聞の支配を受けてゐるかも知れぬ。現に今日の短篇小説もその行と行の間に、月刊雑誌を感じさせるだらう。」

(7) 『東京朝日新聞』一九一二年五月七日、朝刊。

(8) 宇野哲人『支那文明記』大同館書店、一九一八年一月。

(9) 桑原隲蔵「支那国教としての孔子教(一)」(『東京朝日新聞』一九一七年二月二三日、朝刊)。

(10) 宇野哲人、前掲『支那文明記』。

(11) 桑原隲蔵「支那国教としての孔子教(二)」(『東京朝日新聞』一九一七年二月二三〜二五日、朝刊)。

(12) 宇野哲人「中華民国に於ける儒教の民主化」(『中央公論』一九一九年五月)。

(13) 『東京朝日新聞』一九一八年一月一〇日、朝刊。

(14) 吉野作造「北京大学に於ける新思潮の勃興」(『中央公論』一九一九年六月)。

(15) 『東京朝日新聞』一九一九年一〇月三十一日、朝刊。

(16) 宮崎市定編『中国のめざめ』(人物往来社、一九六七年八月)。

(17) 『読売新聞』一九一五年二月三日、朝刊。

(18) 『読売新聞』一九一六年七月三十一日、朝刊。

(19) 『東京朝日新聞』一九一三年六月一九日、朝刊。

- (20) 『東京朝日新聞』一九二〇年五月一〇日、朝刊。
- (21) 宮坂寛は「南京の基督」論——金花の〈仮構の生〉に潜むもの——(『文藝と思想』福岡女子大学文学部、一九七六年二月)において、金花の人間像に「東洋的エトス」が見られることを指摘している。
- (22) 高橋博史『芥川文学の達成と模倣——「芋粥」から「六の宮の姫君」まで』(至文堂、一九九七年五月)。
- (23) 『東京朝日新聞』一九二二年五月七日、朝刊。
- (24) 関和知編『西隣遊記』一九一八年八月。
- (25) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』(中央公論新社、二〇〇三年七月)。
- (26) 鷺只雄「「南京の基督」新攷——芥川龍之介と志賀直哉——」(『文学』一九八三年八月)の中に、金花の信仰に関して次のような指摘がある。
- 「行為あるいは悪を罪として糾弾し、厳しく裁き罰する存在、いわゆる〈父の宗教〉ではなくて、罪を許し、弱さを認め、愛をもって受け入れてくれる〈母の宗教〉のイメージがきわめて濃厚である」
- (27) リンダ・ハッチオン著、辻麻子訳『パロディの理論』(未来社、一九九三年三月)。
- (28) 栗栖真人「芥川龍之介「南京の基督」論」(『別府大学紀要』別府大学会、一九八四年一月)。
- (29) 西原大輔「芥川龍之介「南京の基督」とフロベール」(『広島大学日本語教育研究』二〇〇八年三月)。
- (30) 鷺只雄、前掲「「南京の基督」新攷——芥川龍之介と志賀直哉——」(『文学』一九八三年八月)。
- (31) 西原大輔、前掲「芥川龍之介「南京の基督」とフロベール」。
- (32) 西原大輔、前掲『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』。
- (33) 柳父章『翻訳学問批判——日本語の構造、翻訳の責任』(日本翻訳家養成センター、一九八三年一二月)。
- (34) リンダ・ハッチオン、前掲『パロディの理論』。
- (35) 西原大輔、前掲「芥川龍之介「南京の基督」とフロベール」。

(36) 五島慶一 「南京の基督」論——〈物語〉と語り手——」(『日本近代文学』二〇〇〇年五月)。

(37) 徳富猪一郎 『支那漫遊記』一九一八年六月。

(38) 高橋龍夫は『南京の基督』試論」(『稿本近代文学』一九八八年一〇月)において、「(若い日本の旅行家)にとって、一年の歳月は、金花の現状に何の向上も認められなかったはずである。金花は最後に〈西瓜の種をかじりながら〉返答するが、冒頭で〈西瓜の種を退屈さうに噛み破ってい〉ることと、基本的に何ら変わっていない」と述べている。

第六章 愛と権力

——「妙な話」論——

一、探偵小説への近接

芥川龍之介文学の成立を考える際に避けては通れない問題系の一つに、探偵小説の受容という論点がある。江戸川乱歩は、「探偵小説的作品の続出した大正期に最も多くのこの種作品を発表した作家は谷崎潤一郎について芥川龍之介と佐藤春夫であった」とし、「芥川のそういう作品として従来挙げられているもの」として「開化の殺人」〔中央公論〕一九一八年七月、「疑惑」〔中央公論〕一九一九年七月、「影」〔改造〕一九二〇年九月などを列挙したうえで、「藪の中」〔新潮〕一九二二年一月、「報恩記」〔中央公論〕一九二二年四月の二篇を「探偵小説として書かれたものではないが、探偵小説的観点からも充分読みごたえある作品である」と見做している⁽¹⁾。乱歩のこの評価は的確だろう。確かに芥川は「一人一語」〔文芸春秋〕一九二五年二月の中で、「僕は探偵小説では最も古いガボリオに最も親しみを持つてゐる」と記し、ガボリアの名探偵ルコックとともに、ドイルのシャーロック・ホームズやルブランのアルセーヌ・ルパン、ポーのデュパンといった、探偵小説の主人公たちを書き連ねている。乱歩の挙げた作品以外にも芥川は、「未定稿」〔新小説〕一九二〇年四月) という表題の、本格探偵小説を企図したと思われる未完の作品を発表している。「二つの手紙」〔黒潮〕一九一七年九月) にしても、「探偵小説の定型を押しさえながら、それをずらし、転倒させた探偵小説のパロディ」⁽²⁾と見做しうる。

芥川龍之介の探偵小説との距離について考察する上で俎上に載せたい作品に、「妙な話」〔現代〕一九二二年一月) という短編がある。井上諭一の指摘によればこの小説は、「ストーリーは単純そのものなのだが、奇妙な赤帽をめぐ

るエピソードが連ねられた後、最後の数行で物語の意味が激変してしまうことに注意」すべきで、「つまかさねられてきたエピソードが形づくりつつあった物語、つまり怪奇な暗号(?)の物語が、末尾に至って別の物語に強引にすりかえられていると言える」(3)。二重性を布置することで二様の物語をつくる構成に関して、渡部直己はエドガー・アラン・ポーの「お前が犯人だ」の影響圏の系譜に位置づけている。

『お前が犯人だ』の、いわば信用詐欺的な枢機を模倣・変奏したかたちで、一人称のもとに、傍観的な報告者が当事者たる身を隠しつつける作品の先陣をきって、『奇妙な小話』(一九年十二月)の佐藤が、若者を嗾け憎む相手を自死においやった「X」なる悪漢の正体に結末の「効果」を求めれば(「Xは、実は、私だったのだ!」)、これに挑むかのように、芥川が『妙な話』(二一年一月)を書き、次いで谷崎が、一高寮内に頻発する盗難事件の話を犯人となす文字どおり『私』(二一年三月)なる作品を発表して——かりに、これを純然たる推理小説の世界的系譜上に眺めるなら——A・クリステイ『アクロイド殺人事件』に五年ほど先んずることになる。(4)

「妙な話」を探偵小説の枠組みで捉え直す視座を提供するこの指摘はなかなかいい着眼だ。確かに妙な話という怪奇な物語が団円においてその内実を明らかにされるといふ謎解きの構図は、この小説が探偵小説へ接近していることを物語る(5)し、次の部分は、芥川がこの小説を探偵小説的手法を用いて書いたことを私たちに告げてくれる。

「この間千枝子から手紙が来たつ。君にもよろしくと云ふ事だった。」

村上はふと思ひ出したやうに、今は佐世保に住んでゐる妹の消息を話題にした。

「千枝子さんも健在だらうね。」

不倫の相手の話題が出れば通常動揺を覚えるはずだが、ここでは「私」のその動揺が確信的に捨象され、結末において千枝子との不倫という内実が明かされるといふ小説の構図になっている。謎解きの構図と情報量の少ない語り手。この二つは、この小説が探偵小説の手法を取り入れていることを明かしてくれる。

本章では論の手始めに、「妙な話」を探偵小説として位置づけなおすことを試みる。結論から先に述べれば、千枝

子の体験した奇妙な怪異譚を「私」に告げる村上は、妹の千枝子と「私」との不義の関係を看破したうえで、「私」に対して不倫の恋を穩便に詰問する推理ショーのようなものを展開しているのだと解釈したい。

村上の語りを詳細に分析すれば、その語りには聞き手を奇異に思わせる歪みがあり、真意を包み隠す韜晦があり、両義的に解釈できる二重性を帯びている。こうした奇妙なねじれを持つ村上の語りには、表面的な物語内容の背後に隠された別の物語を暗示する効果があるのであり、そうした隠された物語を「私」に心づかせることで、不倫の恋を行おうとした「私」をやんわりと詰っているように思われる。

例えば、「私」が千枝子の消息を尋ねた際、村上は「あゝ、この頃ははずつと達者のやうだ。あいつも東京にゐる時は、随分神経衰弱もひどかつたのだが、——あの時は君も知つてゐるね。」と答えている。『芥川龍之介資料集 図版1』（山梨県立文学館、一九九三年一月）所収の「妙な話」の「草稿1」では、「ああ、この頃ははずつと達者のやうだ。」の後に「あいつのヒステリーにも」と書かれていたのが取り消し線によって見せ消ちにされ「一昨年東京にゐた時は、」と書き直され、「随分神経衰弱もひどかつたもんだが」と続けられている。定稿では、村上は一貫して千枝子の病を「神経衰弱」と規定しているが、芥川は最初「ヒステリー」としていたのを、「神経衰弱」に変更したことが窺える。この変更の意義は重い。石原千秋は当時の雑書を分析し、「明治の中頃から大正期にかけて、神経衰弱は男の、ヒステリーは女の病であり続けた」とし、大正期では「神経衰弱が生存競争の「病」という社会進化的パラダイムによって語られるようになって一方、ヒステリーがセクシュアリティの病としての性格を強めている」と指摘する⁽⁶⁾。「神経衰弱」と「ヒステリー」とをジェンダーで区分けする同時代のフレームを考慮に入れれば、千枝子の病は「ヒステリー」と呼ぶのが相応しい。彼女の病を「神経衰弱」と名指す村上の語りは、聞き手に違和感を生じさせずにはおかない。語りにおけるこの種の歪みは、村上の物語る物語内容の表層の裏面に、別の物語を伏在させていることを暗示させていよう。信用、詐欺、的な村上の語りは、それ自身によって隠された真意を聞き手に心づかせるための装置となりうるはずだ。

村上の語りの歪みを帯びた性質は作品の他の箇所にも見出される。千枝子が一度目に赤帽に出会った際の、「あの怪しい赤帽が、絶えずこちらの身のまはりを監視してゐさうな心もちがする」という彼女の心情の叙述はその好例である。村上の語る千枝子の物語は、千枝子とその夫とが愛を確認し合うというプロットを基軸とするのだが、そうした夫婦愛の物語というコンテキストで解釈すれば、赤帽という存在は二人の愛を手助けする頼りがいのある存在であるはずだ。にもかかわらず、赤帽に「監視」されている気がするという千枝子の心情を述べる村上は、千枝子が罪悪を犯しつつあったことを知っていたに違いない。

千枝子が二度目に赤帽に遭遇した際、「兎も角、赤帽の見えないのが、千枝子には嬉しい気がしたのでらう」とするのと同様で、通常恐怖の対象であったはずの赤帽の見えないことを確認して感じるはずの感情は安堵の**はずだが**、恋人に会いに行くときの「嬉しい」という感情を表現することで、村上の語りは歪みを帯びる。聞き手の「私」は、村上が「私」と千枝子との不義の関係を知悉しているかのような感じを受けるだろう。

村上の語りには、真意を包み隠す韜晦も見られ、千枝子の神経衰弱の「主な原因は、今まで一週間に一度づつはきつと来てゐた夫の手紙が、ぱったり来なくなつたせいかも知れない」とする箇所に、その特性が見出せる。「だろ**う**」などよりもさらに断定度の低い推量表現をあえて用いることは、神経衰弱の原因が他にもあったことを間接的に告知する戦略的な表現となりうる。

「或日、——さうさう、あの日は紀元節だつけ、「千枝子が中央停車場へはひると、——いや、その前にまだかう云ふ事があつた」という二つの部分では、語りの秩序性を消し去り、現在進行中の語りのいまにおいて物語を編成する無秩序性を構築することで、語り損ねたものがあるかのようなニュアンスが漂う。この語り漏らしを印象付ける語りの特性は、村上が真意を隠蔽しているかのようなイメージを作る技法となるだろう。

最初赤帽に遭遇した翌日から風邪を引いたことに関して述べる次の引用にも、韜晦が見受けられる。

翌日から彼は三日ばかりは、ずつと高い熱が続いて、「あなた、堪忍して下さい。」だの、「何故帰っていらつし

やらないんです。」だの、何か夫と話してゐるらしい謔言ばかり云つてゐた。

謔言によつて不義の恋が暴かれそうになるなど、謔言によつて秘密が暴露しそうになったり、暴露することを怖れたりするのは、泉鏡花の「外科室」(『文芸倶楽部』一八九五年六月)、菊池幽芳の「女の生命」(『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』一九一八年六月二日)一九一九年二月二日)、有島武郎の「或る女」(『叢文閣』一九一九年三・六月)にも見出せる。秘密を暴く装置として謔言を捉えるまなざしが、当時の人の間で共有されていただろうと推察していい。「あなた、堪忍して下さい。」という千枝子の謔言は無論、彼女の秘められた罪悪を潜めたコードとして捉えられるはずで、この謔言を聞いた村上は彼女の何らかの罪を忖度しただろうことが想定される。にもかかわらず、自身の感じたであろうその疑念をあえて捨象する村上の語りには、千枝子らが夫婦愛を確認するという表面的な物語を示す後景に、千枝子の罪悪を知悉していることを暗示する効果があると言えよう。

両義的に解釈できる二重性を帯びているという村上の語りの特徴については、最初千枝子が赤帽に出会う直前、電車の中で「すぐ眼の前の硝子窓に、ぼんやり海の景色が映」ったという箇所から析出される。陳論霖はこの点に關して、「不倫に走る彼女を知る「私」及び読者の我々には、「海」が他にもない千枝子の夫がいる「地中海」であることが分かる」と指摘する。千枝子が海を見たことを地中海にいる夫への思いを募らせている象徴として解釈するのは、この小説のごく自然な読みではあるが、しかし、聞き手の「私」にはそうは捉えられなかったはずだ。なぜなら、「私」は「朝鮮」からの一時帰国中に村上の話を知っているのであり、千枝子のまなかに立ち現れた海の光景は、朝鮮へ渡る自身への思いであるとも解釈可能だからだ。千枝子の見た海は、夫への思いという表面的な記号性のうらに、日本と朝鮮を往復する「私」への思いという記号性をも付与されているはずだ。

歪み・韜晦・二重性といったねじれを持つ村上の語りの特徴からごく自然に結論できるのは、村上が表層的に語る物語内容の奥底に、別の物語内容を潜めているということであり、村上が「私」と千枝子との不倫を知ったうえで、この話を語り聞かせているということだろう。小説の冒頭部で、「私」と村上が「銀座通りを歩いてゐた」場面

から、「或珈琲店」へ入り「往來の見える卓に私と向ひ合つて腰を下す状態への移行を点出するのにも、芥川の絶妙な技巧を見取らねばならない。並んで歩く状態から、向かい合つて座つて話す状態への移行は、和やかな談笑の場面から刑事の尋問に似た場面への移行を象徴的に表現する。ここで、小説のエピローグに目を向けて置こう。

私はカツフェの外へ出ると、思はず長い息を吐いた。それは恰度三年前、千枝子が二度までも私と、中央停車場に落ち合ふべき密会の約を破つた上、永久に貞淑な妻でありたいと云ふ、簡単な手紙をよこした訳が、今夜始めてわかつたからであつた。………

赤帽という奇怪な存在によつて密会の約束を果たせなかつたという腑に落ちがたい怪異譚を聞いて、人は「今夜始めてわかつた」と果たして容易に納得できるものだろうか。不可思議な物語を生真面目に話す村上の精神の異常を疑う感情を持たなかつたのはなぜなのか。「私」は間違いなく、村上が自分たちの不義の恋に気付いて偽りの物語を話すことで自分を穏やかに詰問していたということに、心づいたはずだ。カツフェに入つて来た村上の友人の人数を「三四人」という不明瞭な数値でしか把握できないところにも、「私」の心の焦りが表れている。村上は、雨の日に剛情にも鎌倉へ行きたいという千枝子の不審な行為、「あなた、堪忍して下さい。」という千枝子の謔言、淫婦が断罪されるという内容を持つ泉鏡花の「紅雪録」(『新小説』一九〇四年三月)「続紅雪録」(『新小説』一九〇四年四月)を読むことなどから推理することで、千枝子の不倫を暴き出したのだと考えていい。つまり、村上はある種の探偵であり、千枝子の不倫に気付き、その推理の結果を(怪異譚という偽りの物語に変形しながら)「私」の前で披露することで、「私」を追い詰めているのだと言える。「妙な話」の探偵小説への近接はこのような観点から捉えられよう。

二、「貞淑な妻」になる物語

「妙な話」を読み解く際に考察の俎上に載せられるべきことの一つに、「何とか云ふ鏡花の小説」、つまり泉鏡花の「紅雪録」「続紅雪録」との比較検討がある。「紅雪録」「続紅雪録」の綾子は、夫にせがんで東京へ遊学して浮気

をする「淫婦」だが、最終的に、狂死したその夫の弟である赤帽に殺される。すでに西尾元伸は、「妙な話」の「千枝子が赤帽を怖れる理由の一つ」は「不義の妻が断罪されるという『紅雪録』内の事件が負っていた」とし、「密会の日に出会った赤帽から「鏡花の小説」を想起し、怖れを抱いた千枝子が、「永久に貞淑な妻でありたい」という手紙を書くのは当然のことであった」としている(8)。この指摘は的確であるが、千枝子が「永久に貞淑な妻でありたい」という手紙を「私」に送った理由を「鏡花の小説」を想起したことに求めるわけにはいかない。「紅雪録」「続紅雪録」の淫婦綾子とは裏腹に、「妙な話」の千枝子が自身の意志によつて貞淑な妻になることを決意しているのには、その時代のまなざしをなぞっているように思われる。

小谷野敦は「貞操」は、大正中期以後、読書大衆の関心事になったが、同時に「処女」も、ここで初めて彼らの意識に上せられた」とし、「処女」「貞操」といった言葉が文藝作品、あるいは読書大衆が読むような新聞雑誌の中に盛んに現れるようになるのは、大正期以降のことである」としている(9)。大正期のディスクールに貞操が頻出するのは、当時の貞操論争の影響と考えていいだろう。一九一一年に創刊された『青鞥』に集まった新しい女性たちによつて処女や貞操をめぐる論争が行なわれた。川村邦光はこの貞操論争に関し、「『処女性』なるものの価値を社会に告知した点で画期的だった」とし、次のようにいう。「この処女・貞操論争でまず問われたのは、その価値に関してであった。それに道徳的な価値というよりも、むしろ精神的な価値があると主張される。処女にしても、貞操にしても、社会によつて、あるいは父親や夫によつて強制されるべきものでも、良妻賢母主義的なものでも、男性のためのものでもない。女性が自分自身のために守るべき、内面的・精神的な至高の価値として確立すべきものである」(10)。一九一四年九月、生田花世が「食べることと貞操」と題した短文を『反響』に発表し、食べることのために貞操を犠牲にしたことを告白した。これに応じたのが安田皐月で、彼女は同年一二月に「生きる事と貞操と」(『青鞥』)を発表し、貞操は女の全般であるべきものだと言張する。安田皐月のこの文章がきっかけとなつて起こったのが貞操論争で、伊藤野枝や平塚らいてう、与謝野晶子らをも巻き込み、大杉栄などもこれに加わつ

て、貞操に関して様々に議論され、その価値が高められた。

「妙な話」の前年に書かれた菊池寛の「真珠夫人」(『大阪毎日新聞』一九二〇年六月九日～十二月二十八日)には、「処女」という語が三〇回、「貞操」は四回出てきており(11)、吉川豊子はこの小説が「貞操論争」の言説に通底することを指摘している(12)。

芥川龍之介文学と貞操論争との関わりについて論じる際に見逃せないのは「お富の貞操」(『改造』一九二二年五月、九月)である。安藤公美は「(貞操)論の時代ともいうべき一時期が、まさに「お富の貞操」の発表の時だったのである」(13)とし、足立直子は「大正期、貞操論争に端を発する純潔を保持するという専ら自己の身体面の価値の所有性を際立たせていくことになる、論理先行型の貞操観が定着していく中、それに対してより内的モチーフに基づく貞操たるものを模索したのがこの作品であったと考えられる」(14)としている。ただし、「お富の貞操」よりも前に発表された作品にも貞操論争の影はあると考えられるし、安藤論は「お富の貞操」が貞操の時代の影響を受けていると指摘するにとどまり、足立論は貞操論争の具体像を明らかにし得ていない。芥川文学における貞操論の影響は、まだまだ考察の余地が残されている。

川村邦光は、貞操論争に関して次のようにいう。

恋愛と結婚、また霊と肉との関わりで、貞操・処女が問題にされた。ここでは、「処女をいつ捨てる、あるいは失うか」ということば遣いで問題が提起された。男女双方とも、恋愛の高まりのなかで結婚するときが、そのときとされている。女性自身の能動的な主体性・自発性を前面に出した、性―愛一致、もしくは愛―性―結婚の一致が説かれ、「霊肉一致」(平塚らいてう「処女の真価」一九一五年)と表現され理想とされている。(15)

貞操論争における性―愛一致の理想の内実を、いくつかの言説を参考にする中で明らかにしていこう。この論争における性―愛一致の思想はすでに、安田皐月の「生きる事と貞操と」にその萌芽が見出される。「動かす事の出来ない自分の所有物、自分を考へる事を忘れて親の為兄弟の為に針の尖程の愛もない結婚をして一挙一動虚偽の着

物に自分自身を塗抹して生きて居る奥様も世には貞淑を以て目される。入籍と、一人の男を守りて居ると云ふ事と、生涯の生活の保証を夫に持たせて居ると云ふ事と、そんな外面条件を幾つ^ツばた^ツ処でそれが肉の切売だと云ふ事に対する何の反証にもならない」。処女を捨てるときは女性自身の恋愛が高まった時であるべきだとする理想の濫觴を見出していい。伊藤野枝は「貞操に就いての雑感」(『青鞜』一九一五年二月)の中で、「私が従来の貞操と云ふ言葉の内容に就いて考へ得たことは愛を中心にした男女の結合の間には貞操と云ふやうなものは不必要だと云ふこと丈けであつた」としている。「最も不都合な事は男子の貞操をとがめずに婦人のみをとがめる事である」として「習俗打破」をことあげするこの文章において野枝は、結婚に処女を要求する男性の抑圧性に反抗し、女性の位置を男性と同等にしようとしている。ここで注意したいのは、男女双方が互いに対して愛を持つたときには貞操は捨てられてよいとしていることである。生田花世も「再び童貞の価値について——安田皐月様へ——」(『反響』一九一五年二月)の中で、「婦人は自分の処女を純潔に保つてやがて時を経て自分を愛してくれる男に、そして自分も亦愛する男に、適当に自分を見出す時に、その時にです。それを手放すといふ事が、これが原則としての、一般としての童貞に対する婦人の正しいたしなみで有らねばならないのであります」という。男女双方が互いに愛を見出した時にこそ貞操は捨てられるべきだとしている。平塚らいてう「処女の価値」(『新公論』一九一五年三月)の「此処で残された問題は処女を捨てるに最も適当な時といふことである。(中略)各自の内的生活の経験から見るときは、それは恋愛の経験に於て、恋人に対する霊的憧憬(愛情)の中から官能的要求を發し、自己の人格内に両者の一致結合を真に感じた場合ではあるまいか。」、岩野泡鳴『男女と貞操問題』(新潮社、一九一五年一〇月)の「恋愛の一致する結婚状態にしか貞操は住まぬ。そして一夫一婦はその刹那に於いてだけの貞操形式である。」といった言説にも、男子と女子の位置を同等にし、両者の双方向的な愛が確認されたときにこそ貞操を問題にするパラダイムが見て取れる。処女の価値化や夫婦愛の重要性自体は明治期に胚胎している⁽¹⁶⁾が、貞操論争における一連の言説で強調されているように、そうした処女礼賛や夫婦愛賛美は女性を抑圧する規範として存在したのであり、また、現実においては果され

ないことも多い理想に過ぎなかった。菊池幽芳の「己が罪」(『大阪毎日新聞』一八九九年八月一七日～一〇月二一日、一九〇〇年一月一日～五月二〇日)でも確かに、処女・貞操に拘泥する女性が主人公となつてはいる。しかし、家庭小説の枠組みで語られることの多い「己が罪」における貞操は、あくまで女性を抑圧する制度として機能しているのであり、こうした大正期のディスクリールとの較差は大きい。

「妙な話」の物語は、大正期の恋愛のディスクリールをなぞっている。「千枝子さんは旦那様思ひだから、自然とそんな事がわかつたのでせう。」「一つには名誉の遠征中も、細君の事ばかり思つてゐるかと、嘲られさうな気がした」という二箇所から、千枝子・夫の双方が互いに思い合っていることが強調されていることが分かる。「更に妙だつた事は、千枝子がさう云ふ赤帽の問を、別に妙とも思はなかつた事だ」、「夫はどう云ふ訳か格別不思議とも思はずに」という二箇所からは、赤帽に出会つた際の二人の反応の同一性が示されている。千枝子が「今まで向ひ合つてゐた赤帽の顔が、不思議な程思ひ出せな」ければ、夫も「おれはどうしてもその赤帽の顔が、はつきり思ひ出せない」と言つており、夫婦の体験の親縁性は殊更に強調される。

この小説では、夫婦の双方向的な愛・両者の一致結合が強調されていることは見逃せず、千枝子が主体的に、「貞淑な妻」になることを決意する原因には夫婦愛を求めていい。性―愛一致の理想をモチーフとする「妙な話」には、大正期の言説が鮮やかに刻印されている。

三、天皇制国民国家体制

性―愛一致という理想、夫婦の双方向的な愛というロマンチックなプロットは、しかし、この小説において絶対視されたモチーフとは言い難い。この小説では、そうした理想的なモチーフを生み出す制度をもその説明原理として内包しているからである。

千枝子が鎌倉に行く日、つまりは「私」との不倫に赴く日は「紀元節」とされている(17)。紀元節は「天皇統治の

存在理由である古代の政治神話を宣伝し、外国に対して国威をはるために設定されたもの」(18)であり、紀元節には小学校では儀式が行われ、校長・教員・生徒は天皇・皇后の「御影」に対し「最敬礼」を行い、校長もしくは教員は教育勅語を「奉読」し、忠君愛国の志気を涵養するための演説をした(19)。学校では「饅頭を配るなど、小さい頃から宮中行事が民衆の日常生活の中に浸透していった」(20)という。「雲に聳ゆる高千穂の…」という歌も歌われたが、この歌は「武徳・仁徳・皇基・国体の四つをたたえる歌」であり、「近代日本の国家主義的な、また軍国主義的なイデオロギーが明らかにふくまれている」歌であった(21)。「二月一日の紀元節には紀元節祭という祭が宮中で行われ、神宮でも神社でも行われ」(22)た。政府は「祝祭日と国民教育を重ね、国家神道と民間の年中行事を重ねるという巧妙なやり方」(23)を採用していたのである。紀元節は天皇統治の宣伝を図る国家主義的・軍国主義的な行事として、宮中をはじめ、学校・神宮・神社などでさまざまな行事が行われていたのだ。

また、千枝子は赤帽に会ったのち、「中央停車場から濠端の電車の停留場まで、傘もささずに歩いた」というから、濠端を通って中央停車場に入ったことが分かる。神田由美子の調査によれば、中央停車場は「皇居と向き合う天皇の駅として、また欧化をめざす皇都東京のシンボルとして計画された」(24)駅だが、千枝子は宮中で紀元節祭が行なわれている皇居の近くを通って中央停車場へ入ったということになる。神田は「東京駅は二重の「組みかえられる」物語の中で貞女と姦婦の二面性を持つ千枝子のように、日本近代の正と負を担って発展してきた」とし、次のようにいう。「芥川は西欧化をめざす皇都のシンボルとして、また天皇制軍国主義のランドマークとして存在した中央停車場を舞台とする「妙な話」において、日本の近代化が中、上流階級に及ぼした心理的病の深刻さを、近代の停車場の記号的存在だった赤帽に追い詰められていく千枝子の狂気を通して描いている」。

近代日本においては、女性に良妻賢母を養成する女子教育が発達したが、「鏡花の小説」を読み、「鎌倉」に「或実業家の細君」になった「学校友たち」のいる千枝子は女学校において良妻賢母となるべく涵養されたはずだ。明治二〇年以降「家庭」は「俗悪から守られ無垢であるべきだ」という観念が現れたが、こうした日本近代に芽生え

た「家庭」は、「国家と個々の家族を直接的に結合する基盤となり、それによって明治国家の民衆管理は一層進捗した」⁽²⁵⁾。

千枝子の前に現れ、彼女の不倫を防ぐ役割を果たす「赤帽」は、天皇制国民国家制度の暗喩と言えよう。千枝子が貞淑な妻になることを決意するのは、この国民国家を担う家庭を無垢たるものとして守る貞女の道を歩むことの決心に他ならない。「妙な話」は、千枝子が天皇制国民国家に困り込まれていく物語として読める⁽²⁶⁾。

実際、千枝子が赤帽に脅かされるのは、一度目は皇居の近くへ行ったときであるし、二度目は夫の同僚がアメリカから帰ってくるのを迎えに行くときで、そこには多くの軍人がいた。夫が赤帽に会ったのも当然のことながら、同僚の海軍兵士とカッフェで飲んでいた時で、赤帽が現れるときには常に天皇制軍国主義的な要素があったのである。赤帽は天皇制国民国家制度の暗喩と捉えていい。

千枝子が作中の現在住んでいるのは「佐世保」であるが、『芥川龍之介資料集 凶版1』所収の「草稿1」では「××に住んでゐる」とされているし、「草稿2」では「鎌倉の大町」に住んでいることになっている。海軍鎮守府が置かれ、海軍基地、海軍工廠が設置された軍港都市の「佐世保」に現在千枝子が住んでいることにした改稿の意義は大きい。この小説はやはり、千枝子が天皇制軍国主義に困り込まれた物語として積極的に読むべきであろう。

陳諭霖は赤帽を、「不倫を誰かに止めてほしいと願う千枝子の潜在意識が作り出した幻想」と捉えているが、「紀元節」に皇居の近くに来たときに赤帽が現れたことを考えれば、赤帽は天皇制国民国家制度の暗喩と言えるのであって、それに二度脅かされる千枝子は国民国家を担う主婦として困り込まれていくのだと言えよう。

千枝子の夫婦愛と貞操とは、天皇制国民国家体制のなせるわざなのであって、村上はそうした権威的な位置から、天皇制に忠実でない「私」を追いつめているのだといえる。

D・A・ミラーは、探偵小説を「権力ゲームの物語」としたうえで、探偵の推理力は「法と秩序を護るため行使される支配的権力の代役を勤める」とし、「探偵小説はいつもこうして、探偵のすばらしい直観^{スーパードイジョン}と、それが体

現する警察の管^{スーパーバイジョン}理との地口をほのめかす」と指摘している(27)。「妙な話」において、千枝子の不倫を推理によって暴き、それを披露することによって「私」を追いつめる村上は、明らかに規律権力の代役をしているのであって、この点でも、「妙な話」は探偵小説の系譜に位置づけうる。

四、超感覚の権威性

「妙な話」は、村上の推理によって「私」と千枝子との不倫が暴かれる探偵小説のパロディとして位置づけられるのであるが、村上は通常の探偵のようには「私」に推理を展開せず、千枝子の夫婦愛を強調する怪異譚を物語ることで間接的に自身の推理＝詰問を「私」に伝える。その夫婦愛に彩られる形で千枝子が貞淑な妻になる決意をするという物語のプロットは、大正期の恋愛のディスクールの影響を受けていることが確認されるが、芥川はそうした夫婦愛と貞操とが生成される制度をも小説の中に取り込んでいる。

こうした「妙な話」における村上の物語は、果たしてこの小説において絶対的な位置を確保し得ているのであるうか。村上の物語に相対的な視座は確保されていないのだろうか。

千枝子や夫の遭遇した「赤帽」に関して気になるのは、彼らが赤帽の顔を記憶することができていないということである。「いや、見当らないと云ふよりも、今まで向ひ合つてゐた赤帽の顔が、不思議な程思ひ出せないのだから」、「では今笑つた赤帽の顔は、今度こそ見覚えが出来たかと云ふと、不変記憶がぼんやりしてゐる」、「おれはどうしてもその赤帽の顔が、はつきり思ひ出せないんだ」というように、千枝子と夫が赤帽を覚えることができないことを強調することにはそれなりの意味が込められているように思われる。

記憶がないということに目を向けたときにごく自然に連想されるのは、「妖婆」(『中央公論』一九一九年九月・一〇月)における次の記述である。「さう云ふ夢とも現ともつかない恍惚の境にはいつたものは、その間こそ人の知らない世界の消息にも通じるものの、醒めたが最後、その間の事はすっかり忘れてしまひます」。神下ろしの最中の記憶がな

いという内容は、福来友吉の『催眠心理学』（成美堂書店、一九〇六年三月）における次の記述に酷似する。

被験者は深き催眠にあり。余は指頭を以て机ら三個軽打しつゝ、「汝の醒覚したる時、斯の如く机を三つ軽打せば、必ず汝の父の事が汝の思想に現出すべし」と謂ふ意味の暗示を嚴重に与ふ。然る後催眠術を解く。被術者は平常の如く、傍なる人と笑談しつゝあり。余は機を見て、机に三個の軽打を与ふ。被験者は忽ち其の談話を中絶して何事かを思想しつゝある如し。余は何事をなせしやと被験者に問ふ。彼は父の事に就きて考へつゝありと答ふ。「何故に此の如き事を考つゝありや。」「何故か知らねども、父の事の考へが突然思想に現出したり。」

「汝は机の軽打を聞けりや。」「之を聞けり。」「机の軽打と父の事との間に何等かの関係なきか。」「関係なし。」此の如き事実は所謂催眠後の暗示奏効に就きて多く見る所の現象にて、催眠現象上決して事新しき事にあらず。此の場合に於て、実は被験者の心中に現出したる父の観念は、机の軽打の音感覚と聯合関係を造り居るものなり。父の観念は机の軽打音の暗示によりて解発されたるなり。然るに催眠中の経験に就きて記憶なき被験者は此の関係を認めずして、自発したるものとして父の観念を判断したり。

福来は、催眠術にかけられた被験者は催眠中の経験について記憶を持たないとしているが、「妙な話」や「妖婆」における記憶がないという内容は、催眠術の巧みな変奏であると考えていい。「妙な話」において、赤帽の顔を思い出せない千枝子は、赤帽に催眠術のようなものをかけられたと言い換えてもいい。

千枝子を脅かす赤帽には、催眠術師のイメージが投影されているといえるが、同時に、遠い地中海にいる夫の消息を認知できる赤帽の能力には千里眼のイメージをも付与されているだろう。「新聞によれば千里眼問題再燃の由本屋にたのみやりし福来博士の新著も待遠しく田舎の新聞が同問題の記事を少ししか出さぬが歯がゆく候」（浅野三千三宛、一九一三年八月一二日）という書簡の内容は、芥川の千里眼への興味を私たちに教えてくれる。「千里眼」という言葉は、「妖婆」や「上海遊記」（『大阪毎日新聞』一九二二年八月一七日〜九月二日、『東京日日新聞』八月二〇日〜九月四日）（十 戯台（下））にも出てきており、芥川は千里眼に対して興味を持っていたようである。

芥川が興味を寄せていた千里眼事件とは、「明治四十三年（一九一〇年）から四十四年にかけて、いわゆる透視・念写などの超常能力の有無をめぐる世論、アカデミズムを二分した事件」²⁸のことであるが、千里眼事件の立役者の一人、御船千鶴子が透視能力を獲得した経緯について、芥川が先の書簡で注文していたことが分かる福来友吉の『透視と念写』（東京宝文館、一九一三年八月）を参考にしておこう。千鶴子が透視能力を獲得したのは義兄清原猛雄に促されたことであつた。清原は一九〇三年より催眠術を行い始めたのだが、御船氏を訪問した際、下婢に催眠術を施した。その際、千鶴子は自ら進んで施術を乞うた。清原が凝視法によって施術したところ、彼女は容易に催眠術にかかり、種々の暗示にも成功した。清原は千鶴子を催眠状態に導き、千里眼の能力があることを暗示した。日露戦争で常陸丸が遭難した際、清原は千鶴子に催眠術を施して催眠状態に導き、同船に第六師団兵士が乗っているかどうかを尋ねた。千鶴子は同師団の兵士は一旦長崎を出発したものの、途中故障があつて長崎に引き返し、同船中には乗っていない旨を答えた。すると、その三日後、報道によつて彼女の答えが事実であることが確かめられた。

清原は一九〇八年七月、千鶴子に対し、深呼吸を行なつて無我の状態に至れば万物を透視できることを告げ、毎朝これを行なうことを命じた。彼女がこれを励行したところ十日ほど経つたある朝、千鶴子は何げなくふと庭前の梅の木を見て、その幹に小虫が数匹いることに気付き、家人に伝えた。家人が樹皮を剥ぎ去つて調べたところ果たして虫のあることが発見された。

同月宇土半島松合の海中で遊泳している際、千鶴子は金の指輪を水中に落としたり。人々が水底を搜索しても見つからなかつたが、千鶴子が催眠状態に入つて透視したところ、指輪のある場所を明視しえた。砂の内に隠れていた指輪を発見することができたのである。

遠い地中海にいる千枝子の夫の消息を知ることのできる「妙な話」の「赤帽」の能力には、千里眼のイメージが付与されていると言つていい。これまでの研究史においては、分身する「赤帽」は「ドツペルゲンガー」として捉

えられてきた(29)が、「赤帽」には催眠術と千里眼という二つの超感覚のイメージが投影されているのである。

天皇制国民国家の暗喩である赤帽に超感覚的なイメージが付与されるのはある意味当然のことである。明治政府は神社の人事権を国家が全部握ることにし、天皇は国家神道の中核として捉えられていたわけだし、靖国神社にしても、天皇の名のもとに忠魂として祭祀するのであり、天皇には近代的なイメージと同時に、科学とは対置される宗教的なイメージをも与えられていたからだ。赤帽に超感覚的なイメージを付与した「妙な話」の村上はやはり、赤帽を天皇の暗喩として千枝子を規制させる物語をつくり出したと言える。

しかし、皮肉なことに、こうした超感覚は当時のディスクリールにおいて、科学では扱えないものとされ、科学のもとから追放されていった。

感覚の超／常を決定する要因は、事実の如何というよりも、事実を認定するシステムそのものに内在する。千里眼事件が明らかにしたのは、その意味で心理学のポジショニングをめぐる問題だった。はたして心理学は、超感覚的知覚の有無を判断するに足る、客観的なシステムなのか。そもそも心理学における「客観」とは、何なのか。

当初、福来が注意深く避けていた超感覚的知覚の問題にあえて踏み込んだのは、彼が『催眠心理学』で宣言した「神怪不思議のものとして学者の研究範囲外に放擲されたりし催眠現象に合理的新説明を与え、以て斯術をして堅実なる科学的基礎の上に立たしめるためだったはずだ。

しかし、彼の実験の精度が物理学の側から問題にされたとき、福来は十分に応えることができなかった。それは、変態心理学という学問ジャンルへの不信任感を呼び起こした。ついには、実験心理学という同じ学問ジャンルからの批判によって、変態心理学もまた、福来ともどもアカデミズムから放逐されてしまった。このとき、実験心理学の権威を支えたのは、確立しつつあった、物理学をはじめとする科学の認知システムだった。

千里眼肯定派が立論の要としていた「魂」や「精神」といった概念は、かくして科学の前に敗れ去る(30)。

千里眼事件を受けて『透視と念写』を刊行した福来は、その二カ月後の一九一三年一〇月二七日東京帝国大学休職を余儀なくされたが、そうした福来の敗北と軌を一にする形で、催眠術・千里眼・テレパシーといった超感覚は科学の圏域から追放されていくことになる。

「赤帽」という天皇制国民国家制度の暗喩によって「私」と千枝子の不倫を食い止める物語を紡ぎ出した村上の語りは、作品外コンテクストから相対化しうる。

赤帽という超感覚的な存在それ自体が村上の言説の絶対性を揺るがせうるわけだが、それと同時に確認したいのは、「私」が「朝鮮」で働いていることが頻りに強調されていることである。「君が朝鮮へ立つ時にも」、「君が朝鮮へ行つたのと、確前後してみたと思ふが」、「では僕は失敬しよう。いづれ朝鮮へ帰る前には、もう一度君を訪ねるから」というように、作品では「私」が朝鮮で勤務していることを反復している。この時代、朝鮮で働くということの意味については趙景達の指摘が参考になる。「総督府の日本人官僚は、エリートとして朝鮮人に君臨した。中でも、高文試験合格の高級官僚はそうであった。しかしその多くは、高文試験で上位合格できずに、やむなく総督府に入庁したような者たちであった。中には、内務省などから一時的に人事異動でやってくる者もいた」³¹。明治末頃から定着し出した銀、ブ、ラ、の主要な担い手は、震災前までは「カフェ・プランタンに集ったような若きインテリたちであった」³²という吉見俊哉の指摘を踏まえれば、「旧友の村上と一しよに、銀座通りを歩」く「私」は確かにインテリとして形象化されていると言える。しかし、朝鮮で働くことを余儀なくされた「私」はそうしたエリートの中での脱落者としての役割を振り当てられているのだ。

インテリの中での落伍者としての「私」とは裏腹に、「中央停車場から皇族、貴族の別荘がある鎌倉を訪ね、旅行には必ず赤帽を使い、将校として欧州に出征した夫を持つ千枝子は」「富裕階級に属する」と言える³³。その夫は、「欧州戦役中、地中海方面へ派遣された」「乗組将校」であった。第一次世界大戦地中海へ派遣された第二特務艦隊は、連合国にとって最も重要な軍隊輸送船の直接護衛を引き受け、護衛回数は総計三四八回、護衛した船舶数は

七八八隻、兵員は七〇万人に達し、被雷した船舶から七〇七五人を救助するなどの戦功を挙げた。海軍の地中海派遣の最大の成果は、大戦終了後、日本が五大国の一員としてヨーロッパの問題にまで容喙することができるようになったことである。また、旧ドイツ領南洋諸島の赤道以北を入手したうえ、戦利品としてドイツ潜水艦七隻を入手し、日本海軍の潜水艦建造技術を飛躍的に進歩させる要因ともなった³⁴。千枝子の夫は戦後、まさに日本の外交的・軍事的に貢献したエリートとして見做すことができるのだ。学歴社会の失敗者と成功者との二分法は作品に刻印されている。不倫をやめ、貞女になることを決意する千枝子の心の奥底を探ってみれば、学歴社会の失敗者に対する貶価が潜まっていたのであり、千枝子の貞操はこの点でも相対化されよう。

学歴社会の中での成功者と落伍者を選別する千枝子の愛のエゴイズムとともに彼女の夫婦愛を相対化するのは、同一性の強調されていた千枝子とその夫との較差が描かれてしまっているということである。夫婦で佐世保へ赴く途次の中央停車場において、夫は赤帽の顔を一目見ると、それがかつてマルセイユで見かけた赤帽であることに心づいた。夫が赤帽を認識したことが描かれているのは裏腹に、千枝子はその赤帽に対して思った感情は捨象されている。テキストのこの空白は重要で、それまで夫婦の同一性が殊更に強調されていたこととの一貫性を保てていない。夫婦の同一性を揚言することによってその愛をことあげする村上の物語は、不覚にも瑕疵を作ってしまった。いる。

小説の終わり、新たにカツフェへ入ってきた村上の友人らによって締め出され「長い息を吐く」「私」の点描は、「私」の孤独を表象する。「私」は銀ブラするエリート社会から疎外されたともいえるわけで、こうした「私」の疎外感を物語の末尾に据え置くことで、「妙な話」という作品は村上の権威的な振る舞いに批評性を確保しよう。村上の探偵的な権威性も、千枝子の夫婦愛も、この作品においては絶対的な位置を占めえない。

男女の不義を犯す罪人を追いつめるという点で「妙な話」とアナロジーを持つ谷崎潤一郎の「途上」(『改造』一九二〇年一月)を、永井敦子は「本来存在しなかった犯罪が、(監視権力)への同調によって、事後的に生成する物語」

(35)として読んでいるが、探偵小説という形式を利用して監視する権力のあり方を問題にしていた谷崎と同様、芥川龍之介も、探偵小説という枠組みの導入により、監視権力のあり方を問題にしているとも言える。内田隆三は、谷崎潤一郎・佐藤春夫・芥川龍之介のミステリーに関して、「知覚やまなざしを行使する〔探偵の〕主体の同一性についてある種の疑惑」(二)〔内引用者〕が広がっていたとし、「反探偵小説」の兆しを読み取っている(36)が、「妙な話」も、探偵の監視のまなざしを相対化する要素を含んでいる点で「反探偵小説」の兆しを読み取っている。

この小説は、探偵小説という形式をズラしながらなぞることで、当時の貞操論の陰鬱なアイロニーを表現することに成功している。

五、エリートたちの欲望

最後に、この小説を知識人の欲望に着目して読んでみよう。この小説では、海軍エリートを義理の弟に持つ村上が、脱落した知識人の「私」の不倫を詰問している。海軍エリートを義理の弟に持つ村上は、海軍特有の天皇制の権威主義的視座から「私」を追い詰めていると言える。海軍エリート側の知識人の欲望の、権威主義性が描かれているのだ。

しかし、村上の欲望は相対化されている。知識人としての作者自身の欲望にも目を向けなければならないだろう。正系知識人の芥川にとって、軍隊エリートは差異化したい存在なのである。

この小説からは、登場人物と作者の二つの知識人の欲望を読み取らなければならない。

注

(1) 江戸川乱歩「解説」(『日本推理小説大系第1巻 明治大正集』東都書房、一九六〇年一二月)。

(2) 一柳廣孝「さまよえるドッペルゲンガー——二つの手紙」と探偵小説——(『無意識という物語』名古屋大学出版会、二〇〇

- 一四年五月)。初出は吉田司雄編『探偵小説と日本近代』(青弓社、二〇〇四年三月)。
- (3) 井上諭一「小説のこわし方についての試論——一九二〇年前後の芥川龍之介の方法——」(『弘学大語文』一九八八年三月)。
- (4) 渡部直己「妄想のメカニズム——芥川龍之介と競作者たち」(『日本小説技術史』新潮社、二〇一二年九月)。
- (5) 横井司は芥川文学に関して、「芸術至上主義的立場からは、探偵小説が陥る形式のパターン化に不満を覚えたのだろう。探偵小説と目される作品に名探偵が謎を解くものは皆無だが、探偵小説を意外性の文学ととれば、切支丹ものの『奉教人の死』(18発表)など、作品の多くがその範疇に含まれる」としている(「芥川龍之介」、権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』新潮社、二〇〇〇年二月)。
- (6) 石原千秋「百年前の男と女 雑書から覗く明治・大正⑩ 男は神経衰弱、女はヒステリー」(『本』二〇〇六年七月)。
- (7) 陳論霖「芥川龍之介の戦争作品における怪奇的要素の問題——「妙な話」、「奇怪な再会」を通して——」(『日本語日本文学』二〇一二年一月)。
- (8) 西尾元伸「芥川作品の中の〈鏡花〉——『奇怪な再会』を中心として——」(『阪大近代文学研究』二〇〇六年三月)。
- (9) 小谷野敦「貞操の近代文学史——近代恋愛へのマルジナリア——」(『比較文学研究』二〇〇三年九月)。
- (10) 川村邦光「“処女”の近代——封印された肉体」(井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『セクシュアリティの社会学』岩波書店、一九九六年二月)。
- (11) 小谷野敦、前掲「貞操の近代文学史——近代恋愛へのマルジナリア——」。
- (12) 吉川豊子『或る女』／『真珠夫人』／『海の極みまで』——吉屋信子 初期「三部作」の時代と「戦略」——(『昭和文学研究』一九九七年七月)。
- (13) 安藤公美「貞操・戦争・博覧会——「お富の貞操」(『芥川龍之介 絵画・開化・都市・映画』翰林書房、二〇〇六年三月)。初出は『解釈と鑑賞』一九九九年一月。
- (14) 足立直子『お富の貞操』論——芥川の貞操観とお富の〈確信〉(『芥川龍之介 異文化との遭遇』双文社出版、二〇一三年二

- 月)。初出は『日本文藝研究』二〇〇二年三月。
- (15) 川村邦光『セクシュアリティの近代』（講談社、一九九六年九月）。
- (16) 菅野聡美『消費される恋愛論 大正知識人と性』（青弓社、二〇〇一年八月）。
- (17) 神田由美子は「車中と停車場の光景 芥川文学における近代的空間」(『芥川龍之介研究年誌』二〇〇九年三月)において、「紀元節」という言葉に傍点を振っている。
- (18) 『大百科事典 3』(平凡社、一九八四年一月)。
- (19) 「小学校祝日大祭日儀式規定」(一九九一年六月一七日)。
- (20) 日本史研究会京都民科歴史部会編『天皇制を問う——歴史的検証と現代』(人文書院、一九九〇年九月)。
- (21) 松島栄一「近代日本の形成と紀元節制定の問題」(歴史教育者協議会編『紀元節』淡路書房新社、一九五八年一月)。
- (22) 日本史研究会京都民科歴史部会編、前掲『天皇制を問う——歴史的検証と現代』。
- (23) 日本史研究会京都民科歴史部会編、前掲『天皇制を問う——歴史的検証と現代』。
- (24) 神田由美子、前掲「車中と停車場の光景 芥川文学における近代的空間」。
- (25) 牟田和恵『戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性』(新曜社、一九九六年七月)。
- (26) この点で本章は、東京駅を「日本の近代化」の象徴として捉え、近代性の「欺瞞」の物語として「妙な話」を読む神田由美子前掲論とは、立場を異にしている。
- (27) D・A・ミラー『小説と警察』(村山敏勝訳、国文社、一九九六年二月)。
- (28) 一柳廣孝『催眠術の日本近代』(青弓社、一九九七年一月)。
- (29) 陳諭霖、前掲「芥川龍之介の戦争作品における怪奇的要素の問題——「妙な話」、「奇怪な再会」を通して——」、一柳廣孝「最後の夢小説——「夢」と「人を殺したかしら？」と——」(『無意識という物語』名古屋大学出版会、二〇一四年五月)。
- (30) 一柳廣孝「超感覚の行方——催眠術・千里眼・テレパシー——」(前掲『無意識という物語』)。

- (31) 趙景達『植民地朝鮮と日本』（岩波書店、二〇一三年十二月）。
- (32) 吉見俊哉「盛り場の一九二〇年代」(『都市のドラマトウルギー——東京・盛り場の社会史——』弘文堂、一九八七年七月)。
- (33) 神田由美子、前掲「車中と停車場の光景 芥川文学における近代的空間」。
- (34) 平間洋一「第二特務艦隊の地中海派遣」(『第一次世界大戦と日本海軍——外交と軍事との接続』慶應義塾大学出版会、一九九八年四月)。
- (35) 永井敦子「探偵小説の中の〈監視権力〉——谷崎潤一郎「途上」における探偵と被疑者——」(『日本近代文学』二〇〇四年一〇月)。
- (36) 内田隆三『探偵小説の社会学』(岩波書店、二〇〇一年一月)。

第七章 保吉物と軍隊

——「保吉の手帳から」「あばばば」「寒さ」——

一、芥川龍之介と軍人

文学が軍隊を批判する際、どのような表現形態を採用するのか。文学独自の軍隊批判の方法はないのだろうか。それを説明する上で、本章では芥川龍之介の保吉物を取り上げておこう。芥川は一九一六年一月に横須賀の海軍機関学校教授嘱託に奉職し、一九一九年三月まで英語を教えている。横須賀の海軍機関学校は、海軍の機関将校や士官となる者を養成する学校であった。その頃の体験を主たる材料として創作したのが保吉物である。別して、「保吉の手帳から」(『改造』一九二三年五月)、「あばばば」(『中央公論』一九二三年二月)、「寒さ」(『改造』一九二四年四月)には、海軍機関学校に勤めた経験が反映され、軍隊に対する対抗意識が析出できる。したがって、この三作——「保吉の手帳から」に關しては「わん」のみ——を扱い、保吉物の軍隊批判の表現形態を復元してみたい。

森本修は、「(保吉物)では、一般社会から隔離した特異な社会で権力者としての階層を形成する軍人(軍部)の否定が一貫した主題となっている」(1)としているが、軍人否定をどのような表現形態によって成就しえたかについては、いまだ明らかにはなっていないように思われる。

確かに、芥川自身軍人に対するよそよそしさを感じていたのは事実であるようだ。海軍機関学校で教鞭をとっていた時期の書簡に、「学校も格別面白くはありません時々まちがった事を教へて生徒につつまれます生徒は皆勇猛な奴ばかりであらゆる悪徳は堂々とやりさへすれば何時でも善になるかの如き信念を持つてゐます(事によるとこの信念は軍人の間に共通な信念かもしれませぬ)だから私のあげ足をとるのでも私を凹ますのでも堂々とやつつ

けられます」⁽²⁾とあるのを見ても分かる。軍人特有の勇猛な性格に辟易していた様子が窺える。「何しろ四月から先になると海軍拡張が始まりさうなので弱つてゐるのです」⁽³⁾とも言っており、海軍拡張の時代趨勢を肌で感じ取つてもいた。また、諏訪三郎「敗戦教官芥川龍之介」(『中央公論』一九五二年三月)によれば、芥川は授業で扱う教材に関しても、他の教官と乖離していたようである。「当時の機関学校の教材は、英文を印刷にしたものを用いており、その内容はことごとく勝利を謳歌する軍国主義的なものばかりで、英語を教えながら、生徒の士気を鼓舞激励するねらいであったが、芥川教官は新任忽々それを一掃して、教材に用いるものは、すべてが敗戦の物語であり、衰亡の歴史であった。それゆえ一部の生徒からは、反軍的であり娑婆くさいといわれて、早くも敗戦教官のニツクネームを烙印された」。そして、芥川は生徒に次のように話していたようだ。

「君達は、勝つことばかり教わつて、敗けることを少しも教わらない。ここに日本軍の在り方の大きな欠陥がある。むろん、敗けてはならない。しかし勝つためには、敗けることも考えるべきだ。さらにいうが、戦争というものは、勝った国も負けた国も、末路においては同じ結果である。多くの国民が悲惨な苦悩をなめさせられる」

「戦争というものは、勝った国も負けた国も、末路においては同じ結果である」という文言からは、戦争に対する否定を読み取っていいだろう。

しかし、戦争否定や軍人否定が小説のテーマとなるときには、どのような表現形態が採用されるのかについては未解明の部分が多い。その表現形態を把持することが、本章の目的である。

二、「保吉の手帳から」

「保吉の手帳から」の〈わん〉に関して、森本修は「芥川の権力に対する精一杯の抵抗」⁽⁴⁾を読み、石谷春樹は「人間の権力に迎合する態度に痛烈な皮肉を込めている」⁽⁵⁾とする。軍隊に対する抵抗が読み取られてきたわけで

あるが、軍隊批判をどのような表現によってなしているのかを捉えることが重要だろう。

この小品の保吉は教職という現状に不満を感じているようである。「保吉はパンの為に教師になった」という、教職に就きたいきさつを経済的理由に求める言表が、そのことを端的に表しているだろう。そして、学校で六時半から開かれる英語会までの時間をつぶすために彼が過ぐすレストランの光景は、保吉の心境を映し出している。レストランは「薄汚いレストラン」と書かれているのであるし、そのレストランの壁は「亀裂の入った白壁」である。周囲の光景は、保吉の不遇を表す鏡となっている。そこで出される焼パンは「脂臭い焼パン」で、焼パンの調理が洗練されていない。壁には「ホット（あたたかい）サンドウキツチもあります」と書かれており、ホットの意味も分からない人が多い田舎の様子をよく表している。都会であれば「ホット」という言葉に注釈は付かないとでも言いたげだ。自身の境遇を思っ保吉が思い起こすのは、土岐哀果の「遠く来てこの糞のよなビフテキをかじらねばならず妻よ妻よ恋し」という歌である。都会から遠く隔たったところで仕事をしなければならぬ不遇を読んだ歌として、保吉はこの歌を想起しているのだろう。横須賀という田舎で、やりたくもない教師という職業に就く現状へのフラストレーションは、十分に表されている（6）。

しかし、希望の職ではない教師としての生活を送らざるを得ないという位置は、権力を批判するために活用されることになる。保吉はこのレストランで、「十二三の乞食」が海軍の武官二人に悪戯される場面に際会することになるのである。海軍の武官は、乞食の少年に「わんと云へ」と言い、「わん」と言えばネーベル・オレンジをあげるつもりなのである。この悪戯をみて保吉は次のように思う。

悪戯？——或は悪戯ではなかつたかも知れない。なかつたとすれば実験である。人間は何処迄口腹の為に、自己の尊厳を犠牲にするか？——と云ふことに関する実験である。保吉自身の考へによると、これは何も今更のやうに実験などすべき問題ではない。エサウは焼肉のために長子権を抛ち、保吉はパンの為に教師になった。こう云ふ事実を見れば足りることである。

パンのために教師になったという保吉の現状は、焼き肉のために長子権をなげうったエサウとともに、口腹のために自己の尊厳を犠牲にする乞食の少年に同一化されている。就きたくない職業にいやいや就いているという保吉の現状は、乞食の少年に同一化するために利用されているのである。

保吉はもともと「乞食」というものに対してロマンチックな興味を感じていた。

保吉は時々乞食と云ふものにロマンティックな興味を感じてゐた。が、憐憫とか同情とかは一度も感じたことはなかつた。もし感じたと言ふものがあれば、莫迦か謙つきかだとも信じてゐた。しかし今その子供の乞食が頸を少し反らせた儘、目を輝かせてゐるのを見ると、ちよいといじらしい心もちがした。ただしこの「ちよいと」と云ふのは懸け値のないちよいとである。保吉はいじらしいと思うよりも、寧ろさう云ふ乞食の姿にレムブランド風の効果を愛してゐた。

乞食が配置されることにより、風景に「レムブランド風の効果」が与えられることを愛する保吉には、「美的陶冶を欠く一般人に対し」「自らを優越化する態度」⁽⁷⁾が見られる。こうした「美的優越は、容易に政治的権威とすり変わる」のであり、「文化エリートを優越化し、視の対象を支配する装置」となりうる。保吉は、文化エリートの位置において、乞食を鑑賞物として享受していたのである。

だが、この小品は保吉が乞食の少年をいじめていた海軍の主計官に報復をする場面で幕を閉じる。「主計官。わんと云ひませうか？ え、主計官。」と言う彼の声は、保吉の信ずるところによれば「天使よりも優しい位だった」という。わんと言うのは、乞食の少年に同一化するということである。文化エリートの位置から下降するのだ。そして、乞食の少年に同一化することで、軍隊の権力を糾弾することができている。乞食の少年への同一化は、軍隊の権力性とのへだたりをつくり、虐げられるものとして、権威への批判の資格を与えるからである。エリートの位置にいれば、このような批判はできないはずだ。保吉は、軍人から分断され、権力を持つ者に比肩し得ない者として造形されているのであり、それによって権力を攻撃し得ているのである。

軍隊の権威性を攻撃するために依拠する位置をつくる戦略は、他にも見られる。

二人（『海軍の武官―引用者注』は麦酒の代りをする度に、「こら」とか「おい」とか云ふ言葉を使った。女中はそれでも厭な顔をせず、両手にコップを持ちながら、まめに階段を上り下りした。その癖保吉のテェブルへは紅茶を一杯頼んでも容易に持つて来てはくれなかつた。これは此処に限つたことではない。この町のカフェやレストランは何処へ行つても同じことだつた。

海軍の武官は尊敬されており、自分の高い地位のうまみを享受して倨傲な言葉を用いる。海軍の武官の勢威とは裏腹に、文官で一般人から尊敬されることのない保吉は権威がない。これも、権力を持つ者からへだたりをつくる装置と言へる。

このように、この小品では、乞食の少年に同一化し、自身の権威のなさを描くという操作を経て、軍隊の権威性とへだたりを作り、軍隊の権威性を批判することを可能にする位置を確保しているのである。

三、「あばばば」

「あばばば」の店の女に關し、田沼伊都子は「母」というアイデンティティを確立したことにより、彼女の個としての私性が消滅し、没個性的人物になつてしまつた⁽⁸⁾としてゐる。しかし、女の母への成長は、そのように否定的に評価されるべきだろうか。というのも、女が母へと成長するありようを描くことは、間接的な権力批判となつてはいないかと思ふからである。以下、この小説ではどのように軍隊を批判しているのかを捉えたい。

「あばばば」の主人公・保吉は「海軍の学校」に勤務していると明記されている。その学校の近辺にある店がこの小説の舞台となつてゐる。その店の飾り窓には「軍艦三笠の模型」が飾られてゐる。「旭日旗を描いた三笠」という煙草も登場しており、海軍に關連する言葉が少なからず織り込まれてゐる。この小説を読むとき、これら海軍の表象に留意しないわけにはいかないだろう。

そして、「あばばば」には海軍に対する揶揄が隠微に、しかし確かに痕跡をとどめている。例えば、この店の描写に関する次の引用にそれが表れているだろう。

もう今では目をつぶつても、はつきりこの店を思ひ出すことが出来る。天井の梁からぶら下つたのは鎌倉のハムに違ひない。欄間の色硝子は漆喰ひ塗りの壁へ緑色の日の光を映してゐる。板張りの床に散らかつたのはコンデンスド・ミルクの広告であらう。正面の柱には時計の下に大きい日曆がかかつてゐる。その外飾り窓の中の軍艦三笠も、金線サイダアのポスターも、椅子も、電話も、自転車も、スコットランドのウイスキーも、アメリカの乾し葡萄も、マニラの葉巻も、エジプトの紙巻も、燻製の鯨も、牛肉の大和煮も、殆ど見覚えのないものはない。

鎌倉のハム、欄間の色硝子、コンデンスド・ミルク、日曆の紹介をした後に、「その外」という言葉を挟んで「軍艦三笠」について触れているのだ。保吉の中では「軍艦三笠」の模型は取るに足らないものとして軽視されている。ここに海軍に対する揶揄を読み取ることができるだろう。その上、「軍艦三笠」は「金線サイダアのポスター」や「椅子」などとともに列記されているのであり、食品や日用雑貨の類と等価値の些末な物として扱われているのである。また、保吉が「朝日を二つくれ給へ。」と言った際に店の女が間違えて出すのが「箱の裏側に旭日旗を描いた三笠」であるのも、海軍に対する軽視を読み取っている。「三笠」という名前の煙草は間違つて出されるものなのであり、保吉にとって不要なものなのだ。

店の主人が「無愛想を極めてゐる」人物として形象化されているのも着目すべきだろう。横須賀は「工員軍人相手の商店が並んで商店街が形成され」⁽⁹⁾ていた都市だ。軍人を主たる客層とした横須賀の商店の中で、この店の主人は常に無愛想なのであり、軍人に媚びない人物と言える。「保吉の手帳から」の「わん」のレストランの女中が、海軍の武官に「こら」とか「おい」とかいう言葉を使われながらも、「厭な顔をせずに」「まめに階段を上りおり」しているのとは対蹠的だ。この小説では、軍隊に対する揶揄が潜在しているのである。検閲の都合上、露骨な表現

を用いて海軍を指弾することは避けられているが、それを読み取ることができるよう、工夫が施されている。小説の言葉に耳をすませば、海軍に対する揶揄を抽出できるのだ。

さて、「あばばばば」は「海軍の学校へ赴任した当日だったかも知れない」日に、保吉が店へマッチを一つ買いに入るところから始まる。保吉がマッチをくれるよう店の主人に頼むと、主人は、マッチは切らしているからと、煙草に添える一番小型のマッチをくれようとする。保吉は「貰ふのは気の毒だ。ぢや朝日を一つくれ給へ。」と応じる。主人は小型のマッチをかたくなにサーブスしようとし、保吉は無料でもらうことを固辞し、譲り合わない。最終的には、店の小僧がマッチを見つけてきたため、保吉はマッチを買うことに成功する。

保吉は内心凱歌を挙げながら、大型のマッチを一箱買った。代は勿論一銭である。しかし彼はこの時ほど、マッチの美しさを感じたことはない。殊に三角の波の上に帆前船を浮べた商標は額縁へ入れても好い位である。

彼はズボンのポケットの底へちやんとそのマッチを落した後、得々とこの店を後ろにした。……

マッチを、もらうのではなく買うことができたというだけで、「内心凱歌を挙げ」「得々と」した気分になるといのは、いささかおおげさであるように感じられる。この心情は、彼がこの日「海軍の学校へ赴任した当日」だったことよって説明できるだろう。保吉はこの日社会人になったばかりなのである。物をただでもらうのではなく、代金を払って物を買うという等価交換を欲しているのである。つまり、貨幣経済システムの中に位置を占めたいのだろう。保吉には、大人になりたいというささやかな願望があるようだ。

一人前の大人として認められたいという保吉の願望は、他の箇所でも窺える。店の女と小僧に語る次の言葉である。

「虫の湧いたやつを飲ませると、子供などは腹を痛めるしね。(彼は或避暑地の貸し間にたつた一人暮らしてゐる)。いや、子供ばかりぢやない。家内も一度ひどい目に遇つたことがある(勿論妻などを持つたことはない)。

何しろ用心に越したことはないんだから。……」

妻子がいないのに妻子がいるかのように装うのは、妻子のある大人として認められたいという保吉の意識の表れである。彼は学校の英語教官という知的エリートであるにも拘らず、妻子を持った人として認められたいという極めて平凡な願望を持っているのだ。

実際、保吉の生活は、有閑階級的なものではなく、いかにも庶民的だ。彼は「或避暑地の貸し間にたつた一人暮らししてゐる」。「保吉は突然燻製の鮭を買ひ忘れたことを思ひ出した」とあることから、自炊していることも分かる。自分の家を持つこともせず、使用人を使うことすらせず、自炊で一人暮らしをしているのである。保吉は、貧しいプチブルである。

加えて、保吉は電話がなかなか通じない間、「まづポケットから *Spartaco* の「社会主義早わかり」を出し」て読む。彼は被支配者階級からの声に耳を傾けようとしている。あるいは、被支配者階級の立場に自己同一化している。彼の眼は庶民の側に寄っているのである。

エリートの願望や生活の水準を高く描くのではなく、平凡なものとして描いているのが、この小説の特徴である。保吉の平凡志向と軌を一にして、この小説では一人の女の平凡な生が描かれる。

「さつきね、あなた、ゼンマイ珈琲とかつてお客があつたんですがね、ゼンマイ珈琲つてあるんですか？」

「ゼンマイ珈琲？」

主人の声は細君にも客に対するやうな無愛想である。

「玄米珈琲の聞き違へだらう。」

「ゲンマイ珈琲？ ああ、玄米から搾へた珈琲。——何だか可笑しいと思つてゐた。ゼンマイつて八百屋にあるものでせう？」

保吉は二人の後ろ姿を眺めた。同時に又天使の来てゐるのを感じた。

玄米珈琲をゼンマイ珈琲と聞き違えたことを巡つての夫婦の会話に、保吉は「天使の来てゐるのを感じ」る。夫婦

の平凡な幸福に暖かいまなざしを送っている。家庭の幸福という平凡な幸福である。また、この小説のクライマックスは以下のようになっている。

「あばばばばば、ばあ！」

保吉は女を後ろにしながら、我知らずにやにや笑ひ出した。女はもう「あの女」ではない。度胸の好い母の一人である。一たび子の為となつたが最後、古来如何なる悪事をも犯した、恐ろしい「母」の一人である。この変化は勿論女の為にはあらゆる祝福を与へても好い。しかし娘じみた細君の代りに凶凶しい母を見出したのは、……保吉は歩みつづけたまま、茫然と家々の空を見上げた。空には南風の渡る中に円い春の月が一つ、白じろとかすかにかかつてゐる。……

ここでは、恥ずかしがり屋の娘から「母」になるという女の成長が描かれている。月並みなこの成長に、保吉は軽い失望を感じているが、この失望は彼に、大人になりたいという願望を促すことになるだろう。他人の大人への成長を見て保吉も、社会の中で当たり前の位置を与えられることが幸福なのだと思はざるを得ない。

さらに、この成長は強い強度をも持っている。彼女の成長は、「一たび子の為となつたが最後、古来如何なる悪事をも犯した、恐ろしい「母」の一人」になることであり、「凶凶しい母」になることなのだ。

「あばばばば」では、海軍という後景に女の平凡な成長が対置されている。その平凡さには強い強度が与えられている。その平凡な幸福への視線を可能にしているのが、保吉自身の平凡志向である。もし視点人物の保吉がエリート志向していたら、平凡な幸福を幸福として叙述することはできないだろう。エリート志向であれば、女と保吉との間に上下関係が生まれるため、平凡な幸福も憐れみとともに記述されてしまうからだ。保吉の志向を庶民の側に寄せるといふ操作を経て初めて、庶民的な幸福をそのまま語ることができるのである。もちろん、保吉の視線には観察者の優位性は認められる。しかし、エリートでありながら、彼の庶民性を描いていることは無視されるべきではないだろう。

加えて、無辜の庶民の平凡に対する視点の導入は、海軍への対抗戦略となつてゐるだろう。帝国の規模を拡張しようとする海軍の欲望に対して、平凡志向という庶民的願望で抗してゐるのだ。庶民的な平凡な生活は、視点人物の平凡志向によって権威化され、庶民の生活を脅かす海軍の欲望に抗することに益してゐる。

四、「寒さ」

芥川龍之介の「寒さ」に関しては比較的多くの言及がある。遠藤久美江は「保吉が踏み切り番の死という個人の悲劇の底に不特定多数の下層労働者の悲劇を洞察した」⁽¹⁰⁾。物語として読んでゐる。平岡敏夫は「血の中に宿つてゐる生命の熱」が酷薄に線路へ伝わって行くことへの痛切な哀惜⁽¹¹⁾を描いた作品とし、長沼光彦は「自分とは直接関係のない事件や他者など、心理的な距離のあるものへ目を向け熱を感じることに、そういう想像力が小説「寒さ」のテーマだろう」⁽¹²⁾と述べてゐる。田沼伊都子は「機械的に職務を遂行することが、人間にしかできない行為を引き起こすという逆説的な事象を通して、新たな人間らしさを発見」⁽¹³⁾する物語として読んでゐる。ただし、この作品に潜在してゐる軍隊批判を読むことも重要だろう。

この小説では、いくつかの箇所でも軍隊に対する嫌悪感が表れてゐる。「就中海軍の将校たちの大声に何か話してゐるのは肉体的に不快だった」という箇所をその例として挙げる事ができるだろう。ここでは、海軍の将校の場をわきまえない大声での会話に対する「不快」が記述されている。また、次の箇所も、隠微にはあるが、海軍に対する否定的な評価が表現されてゐると言える。

この物理の教官室は二階の隅に當つてゐる為、体操器械のあるグラウンドや、グラウンドの向うの並松や、その又向うの赤煉瓦の建物を一目に見渡すのも容易だった。海も——海は建物と建物との間に薄暗い波を煙らせてゐた。

「グラウンド」「並松」「赤煉瓦の建物」が正負いずれのイメージも付与されていないのとは裏腹に、「海」は「薄暗

い波を煙らせてみた」というように、負のイメージで描写されている。なぜ海だけ「薄暗い」イメージを与えられなければならないのだろうか。これは、この海が海軍の基地となっていることを顧慮する必要があるのではないか。「寒さ」の学校のある横須賀は軍港都市であり、海軍機関学校の外に、海軍砲術学校・海軍航海学校があり、鎮守府・横須賀海兵団・横須賀海軍港務部・横須賀海軍工廠・横須賀海軍病院などがあつた。「海」に「薄暗い」イメージを与えるという措辞によって、海軍の行いの暗鬱なありようを比喩的に表現しているのだ。さらに、次の引用からは、戦争の隠喩を読み取ることができるよう思われる。

今この男女を接触せしめると、恋愛の伝はるのも伝熱のやうに、より逆上した男からより逆上してゐない女へ、両者の恋愛の等しくなる迄、ずつと移動をつづける筈だらう。

「興奮」とすべきところを、「逆上」という、文脈に合わない言葉が用いられている。「逆上」とは「かつとなること」であり、戦争を暗示しているとも解釈できる。物理の教官室のストーブが「室内に漂う寒さと戦ひつづけてゐる」とされるのも同列だ。「戦」とは戦争の比喩でありうる。踏切り番の「死」や、その死体の「血」なども戦争を暗示するものとして解釈できるだろう。鉄道事故による死と、戦争による死は、いずれも近代の産物による暴力的な殺人行為である点において通底するものがあるはずだ。

このように、「寒さ」では、海軍に対する嫌悪感の吐露や、戦争を想起させる比喩が見られるのである。

この小説は、「物理の教官室」での、「理学士」の宮本・長谷川と「文学者」の堀川保吉の会話から始まる。「どうも素人の堀川君を相手ぢや、折角の発見の自慢も出来ない。」と宮本が言うように、「理学士」と「文学者」という、専門による区分けが判然となされている。両者は物の見方において差異があるものとして描かれている点において、その対比は重要な意義を持つ⁽¹⁴⁾。理学士の物の見方は、次の宮本の言表に端的に表れているだろう。

「それを伝熱作用の法則と云ふんだよ。扱女を物体とするね。好いかい？もし女を物体とすれば、男も勿論物体だらう。すると恋愛は熱に当る訳だね。今この男女を接触せしめると、恋愛の伝はるのも伝熱のやうに、

より逆上した男からより逆上してゐない女へ、両者の恋愛の等しくなる迄、ずっと移動をつづける筈だらう。
長谷川君の場合などは正にさうだね。……」

理学士の宮本は、男と女を物体、恋愛を熱と見做し、男の恋が女に伝わることを、物理の法則である「伝熱作用の法則」を当てはめて説明している。公式主義的で、事物に対して実感を以て接することをせず、〈個〉を見る視点に欠けていると言えるだろう。〈個〉の内面を捨象することで共通項を捉える、抽象的なもの見方である。また、宮本が人間をも物体と見做していることも確認できる。

それに対して、保吉は「作者と読者との間には伝熱作用も起らないやうだ。」と言うように、宮本の提示した公式に当てはまらない自身の境遇に言及している。以下で見ると、保吉は宮本とは見解が異なる人物として描かれている。例えば、物理の教官室のストーブに対する保吉の感想は以下のようなものだ。

ストーブの火は息をするやうに、とろとろと黄色に燃え上つたり、どす黒い灰燼に沈んだりした。それは室内に漂ふ寒さと戦ひつづけてゐる証拠だった。保吉はふと地球の外の宇宙的寒冷を想像しながら、赤あかと熱した石炭に何か同情に近いものを感じた。

教官室で燃えるストーブの火を見て、「室内に漂ふ寒さと戦ひつづけてゐる」と捉え、それに対して「同情」を感じている。理学士の宮本であれば「同情」ではなく、伝熱作用の法則の例として捉えるだろう。実際宮本は、ストーブの胴に触れた保吉の靴の革が焦げるさまを見て、「それも君、やつぱり伝熱作用だよ。」と言っている。保吉はそれぞれのものを〈個〉として見、その内面を想像しているのだ。ここでいう〈個〉として見るとは、それぞれのものを内面を持った具体的存在として見、事物間の共通項を捉えるよりも、それぞれの生を想像し、多対多ではなく一対一の関係を取り結ぶといった意味である。轢死に遭遇する日においても同然だ。「保吉はその遠い焚火に何か同情に似たものを感じた」とあるように、彼は人ではない焚火に対してさえも「同情」を感じている。

このように、公式主義的な理学士と、物事を〈個〉として見る文学者とは画然と区別されている。竹内洋は、「文

学部生にとって経済資本の期待収益が少なくなるぶん、文化教養への投資の思い入れが強くなる」(15)とし、文学部生は「矜持」を持ちやすいとしているが、文学部卒特有の作者の矜持が、理学士との差異化を凶らせていると言える。

保吉の物の捉え方についてより詳しく見てみよう。保吉は踏切り事故に逢着する。踏切り番の死骸を目撃した保吉は、次のような感情を抱いている。

踏切り番は——保吉は踏切り番の小屋の前に菰をかけた死骸を発見した。それは嫌悪を感じさせると同時に好奇心を感じさせるのも事実だった。

踏切り番の死骸に対して「好奇心」を感じているわけだが、踏切り番の轢かれた線路についた血を目撃して以降はこの「好奇心」の感情はなくなり、代わりに「同情」を覚えるようになる。

血の中に宿つてゐる生命の熱は宮本の教へた法則通り、一分一厘の狂ひもなしに刻薄に線路へ伝はつてゐる。

その又生命は誰のでも好い、職に殉じた踏切り番でも重罪犯人でも同じやうにやはり刻薄に伝はつてゐる。——

そういう考えの意味のないことは彼にも勿論わかつていた。孝子でも水には溺れなければならぬ、節婦でも火には焼かれる筈である。——彼はかう心の中に何度も彼自身を説得しようとした。しかし目のあたりに見た事実は容易にその論理を許さぬほど、重苦しい感銘を残してゐた。

職に殉じた踏切り番でも重罪犯人でも、血の中に宿る生命の熱が酷薄に線路に伝わるありようは同じだという論理や、孝子でも節婦でも死ぬはずだという論理は、保吉を説得するに十分ではないようである。誰でも同じだから仕方がないという考えを受け入れられない保吉は、踏切り番を〈個〉としても見ているのだと言える。みんな同じという論理を受け入れられず、それぞれの生の〈個〉性を見るのである。つまり、法則把持的な抽象的思考は保吉を説得するに十分でなく、踏切り番の死を具体性のあるものとして見なければ気が済まないのである。「論理」よりも「感銘」が選ばれているのだ。そして、〈個〉として見る視線により〈同情〉が可能となる。

保吉はその遠い焚火に何か同情に似たものを感じた。が、踏切りの見えることはやはり不安には違ひなかつた。彼はそちらに背中を向けると、もう一度人ごみの中へ帰り出した。しかしまだ十歩と歩かないうちに、ふと赤革の手袋を一つ落してゐることを発見した。手袋は巻煙草に火をつける時、右の手ばかり脱いだのを持って歩いてゐたのだつた。彼は後ろをふり返つた。すると手袋はプラットフォオムの先に、手のひらを上へ転がつてゐた。それは丁度無言のまま、彼を呼びとめてゐるやうだつた。

保吉は霜曇りの空の下に、たつた一つ取り残された赤革の手袋の心を感じた。同時に薄ら寒い世界の中にも、いつか温い日の光のほそぼそとさして来ることを感じた。

焚火に「同情」を覚えることについては先にも触れたが、落とした「赤革の手袋」は血の色である点で、踏切り番の血を暗示しているだろう。その赤革の手袋は「無言のまま、彼を呼びとめてゐるやう」なのである。踏切り番の気持ちを想像せずにはおけない保吉の心内が象徴的に描かれている。そして、「霜曇りの空の下に、たつた一つ取り残された赤革の手袋の心を感じた」のである。踏切り番に対して同情する保吉の心情を象徴的に表している。保吉は踏切り番を〈個〉として捉えているのである。

踏切り番の死を「同情」を以て見る保吉とは裏腹に、例えば「肉屋の小僧」の顔は「妙に生き生きと赫いて」おり、轢死事故に対する「好奇心」を隠さない。また、「プラットフォオムの人人は彼の気もちとは没交渉にいづれも、幸福らしい顔をしてゐた」のであるし、「就中海軍の将校たち」は「大声に何か話してゐる」のである。彼らは、自分とは関係のない人を〈その他〉として扱っている。同情し、〈個〉としてもものをみる保吉と、好奇心を感じ、自分とは関係のない人を〈その他〉としてみる人たちとの対比は鮮やかだ。

同情し、具体的な〈個〉としてみる保吉の思考様式は、戦争に対する対抗戦略となつてゐるだろう。戦争は人を物としてみて同情を回避することで生じるものであるし、自分とは関係のない人を〈その他〉としてみる（みんな同じだと捉える）ことで生じるものであるからだ。また、「好奇心」は科学を發展させる原動力となるものであり、その

科学により戦争が起こるのだと言える。それに対して、「文学者」の保吉は「同情」をしており、戦争を難ずるために「好奇心」に對置して「同情」が招来されているのだ。戦争に異議を唱えるために文学者ができることは「同情」というわけだ。

また、保吉には、田沼伊都子が言うように「擬人化」⁽¹⁶⁾志向がある。保吉が駅へと向かう途次の次の引用にそれが端的に表れている。

人つ子一人ぬない麦畑はかすかな物音に充ち満ちてゐた。それは誰か麦の間を歩いてゐる音としか思はれなかつた、しかし事實は打ち返された土の下にある霜柱のおのずから崩れる音らしかつた。

霜柱の崩れる音を、人の歩いている音として捉えており、霜柱を擬人化している。保吉は、物をも人と同じようにまなざすのである。鉄道工夫の当たる焚火にしても同然だ。「黄いろい炎をあげた焚火は光も煙も放たなかつた。それだけに如何にも寒さうだつた。」というように、焚火を人のように捉えて「寒さう」と感じるのである。焚火を擬人化し、内面あるものとして捉えている。すべてを物体として捉える宮本とは対照的である。保吉の擬人化志向は、理学士の公式主義的な思考様式と対照をなしており、戦争に対する批判的機能を持つことになるだろう。

このように「寒さ」は、軍隊に反発するために次のような戦略を採用している。まず、海軍に対する嫌悪感を表現し、戦争を想起させる比喩を用いて、海軍や戦争に対する敵対を主題の一つとして示している。また、理学士と文学者の物の見方を対比する構図を作り、公式主義的な理学士と、物事を「個」として見る文学者との相違を描いている。自分の国を内として、その外側にあるものを外として一般化する。そして、その外には確かに人が住んでいるのだろうか、そういう具体性において外を捉えることをしない。自国の外は外側一般という思考こそが戦争を招くのだろうか、抽象化志向の理学士と対照して具体化志向の文学者を對置することは、戦争に対する批判的装置を備えていると言える。そして、自分とは関係のない人を「その他」として扱う人や踏切り番の死を好奇心によって興味を持つ人から保吉を区分けし、彼に、同情というファクターを与え、具体的に事物と向き合う人物

として設定している。戦争を批判するために「同情」が招来されているのである。この小説では、文学者の造形自体が軍隊を批判する機能を持つのである。

五、表現形態としての軍人否定

芥川の保吉物は、軍人否定の小説群として捉えられながら、作品に即してその軍人否定の内実が分析されることが少なかった。本章では、「保吉の手帳から」「あばばばば」「寒さ」の三作を扱い、軍人否定の内実を明らかにするとともに、軍人否定の際に採用される表現形態を捉えることに努めた。

「保吉の手帳から」の〈わん〉では、就きたくない仕事に従事せざるを得ないという現状が、「乞食」の少年に同一化し、軍隊とのへだたりをつくるために活用されている。この同一化の過程を経て、この小品では軍隊を批判することが可能となっている。就きたくない仕事に就かざるを得ないというエリートの悲劇を、下層の者に同一化し、軍人を批判するために利用しているのである。

「あばばばば」には、エリートを平凡な人間として叙述するという特徴があった。この叙述の仕方は、平凡な女の平凡な幸福を描くことを可能にしている。それにより、帝国の規模を拡張しようとする海軍の欲望に抗している。

「寒さ」では、文学者の造形に、軍隊批判が見られる。公式主義的な理学士とは裏腹に、同情し、ものや人を〈個〉として見る文学者が対置される。作者自身の文学者としての矜持が、作品における文学者の造形に影響を与えていると言えるだろう。このような文学者の形象が、軍隊を批判する機能を持つことは先に指摘した通りである。

保吉物は、ミリタリズム批判というテーマから解読されるべきである。

注

(1) 森本修「芥川「保吉物」について」『立命館文學』一九五五年一月。

- (2) 一九一七年二月八日、夏目鏡子宛芥川書簡。
- (3) 一九一八年一〇月二一日、小島政二郎宛芥川書簡。
- (4) 森本修、前掲「芥川「保吉物」について」。
- (5) 石谷春樹「芥川文学における〈保吉物〉の意味」(『三重法経』一九九八年三月)。
- (6) 田沼伊都子「芥川龍之介「保吉の手帳から」論——変化する俗世間との関わり方——」(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』二〇一三年三月)でこれらの箇所を「現在の境遇が思わしくない」ことを表現しているとす。
- (7) 安西信一「ピクチャレスクの「移植」——英国式庭園と現代へ——」(『芸術学の一〇〇年』勁草書房、二〇〇〇年六月)。
- (8) 田沼伊都子「芥川龍之介「あばばば」論——社会的役割の変化による個の喪失——」(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』二〇一五年三月)。
- (9) 横須賀市史編纂委員会『横須賀市史』(横須賀市役所、一九五七年三月)。
- (10) 遠藤久美江「芥川龍之介「寒さ」の位置」(『藤女子大学国文学雑誌』一九七五年四月)。
- (11) 平岡敏夫「芥川龍之介と国木田独歩」(『芥川龍之介』大修館書店、一九八二年一月)。
- (12) 長沼光彦「芥川龍之介「寒さ」の空間」(『京都ノートルダム女子大学研究紀要』二〇〇八年三月)。
- (13) 田沼伊都子「芥川龍之介「寒さ」論——機械的行為に表れる人間らしさ——」(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』二〇一七年三月)。
- (14) 長沼光彦も前掲「芥川龍之介「寒さ」の空間」において、「世の中を物体として扱おうとする「理学士」と、その意味づけを受け入れない「文学者」とが対比されている」としている。
- (15) 竹内洋『教養主義の没落』(中央公論新社、二〇〇三年七月、九七頁)。
- (16) 田沼伊都子、前掲「芥川龍之介「寒さ」論——機械的行為に表れる人間らしさ——」。

第八章 北京の駐在員の物語

——「馬の脚」における日本人社会システム——

一、移民の系譜

芥川龍之介の「馬の脚」(『新潮』一九二五年一・二月)は、北京に派遣された日本人会社員を主人公とする。精彩を放つ芥川文学においては比較的注目されることの少ない作品であったが、近年はいくつかの作品論が発表されている。幻想的で怪奇な作品である故、素材に関する考察が目立つ一方で、作品自体が持つ「大人に読ませるお伽噺」という自己規定の内実としての風刺の対象を捉える論考が提出されている。「家族主義への反発」⁽¹⁾を見る単援朝、「運命に対するアイロニー」や「恋愛に対するアイロニー」を読む藪下明博⁽²⁾、「ジャーナリズムという権威への批判」⁽³⁾などを読む國末泰平、「告白という行為を自己対象化した作品」⁽⁴⁾とする秦剛などの論考が挙げられるが、藪下が「アイロニーの数々は実に多種多様」とするように、風刺の対象の非統一性ゆえに、様々にアイロニーの内実が考察されてきたと言える。最近では、本作が中国を舞台にしていることに着目し、当時の日本の帝国主義政策への作者の批判を読む読解も見られる⁽⁵⁾。

しかし、「馬の脚」の特徴的な点は、北京に移住した日本人の話であるということである。この主人公は移民(国連の定義では「出生あるいは市民権のある国の外に十二カ月以上いる人」と言っても差支えないだろう。芥川文学では移民をどのように描いているのか。芥川文学が移民を描いていると言え、意外に思われるかもしれない。しかし、中国から日本に移住して来た女性の話である「奇怪な再会」(『大阪毎日新聞』夕刊、一九二一年一月五日〜二月二日)、日本

から上海に移住した夫妻を描く「母」(『中央公論』一九二二年九月)、日本からチベットに移住した男の話である「第四の夫から」(『サンデー毎日』一九二四年四月一日)など、芥川文学に移民の物語は多いのである。芥川が中国を視察旅行した時の紀行『支那遊記』(改造社、一九二五年一〇月)にも中国に移住した日本人が点綴している。芥川文学研究が見落してきた移民の系譜を復元することは、現代的問題をも孕む点において興味深く思われる。海外に駐在する日本人がどのようなシステムに基づいて生活し、どのような眼で外国人をまなざしているのか。この新たな問題提起を掘り下げる意義は大きい。芥川文学における童話は「象徴的な表象」⁽⁶⁾となっているが、「大人に読ませるお伽噺」が提示する「象徴」を改めて解明してみよう。本章では、移民という観点を導入しなければ見えてこないこの作の深層に迫る。主人公が「三菱」に勤める典型的な新中間層であることに着目したうえで、北京在住の日本人社会に働くシステムと、そのシステムが孕む外国人へのまなざしについて相貌を開示し、「馬の脚」の読みに新たな展開を試みたい。

二、日本人社会システム

秦剛は「馬の脚」の忍野半三郎の形象に関して、「芥川の府立三中時代親友で、妻塚本文の叔父である山本喜誉司が、東大農科卒業後三菱合資会社に入社し、「馬の脚」が書かれた当時北京に勤務していた。忍野半三郎が北京の三菱会社員である設定は山本喜誉司を意識したとも考えられる。」⁽⁷⁾と述べている。山本喜誉司は、一八九二年東京・牛込生まれ。本所小学校を経て府立三中に入学。府立三中で芥川と出会い、一高を出るまで兄弟も及ばぬような親交を結んだ。一九一七年、二五歳で東京帝大農学部園芸科を卒業し、まもなく媒酌結婚で五十江夫人を迎えた。五十江夫人は東京女学校卒で、芥川や山本と縁戚関係にあった。山本は東大農学部卒業とともに三菱合資会社査業部に入社。盛岡の小岩井農場、朝鮮全羅南道木浦の綿作試験場を経て一九一九年中国に派遣され、以後七年間北京

に駐在。中国各地の三菱直営農場で綿花栽培とその普及に従事した。「この頃北支は争乱の渦中にあり、匪賊馬賊の出没するなかでの農場経営は困難をきわめた」という。一九二一年には芥川が大阪毎日新聞社の特派員として中国に派遣され、北京の山本を訪問して、家族とともに記念写真を撮っている⁽⁸⁾。北京の三菱に勤めている点、妻を媒酌結婚で娶っている点が、「馬の脚」の半三郎に類似している。芥川は、一九二一年に山本と再会した際、北京での生活について詳しく聞いたと考えられ、この経験が「馬の脚」の素材として活用されていると考えられる。

では、「馬の脚」では中国で居住する日本人の社会をどのように描いているだろうか。主人公の半三郎とその妻常子の営む生活に目を向けると、日本国内における婦人雑誌などのメディア言説で提唱されていた、大正期の新中間層にとつての理想的家庭像との少くない符合が指摘できることは、注目に値する。この符合によつて、日本社会は均一性を保持しているように思われる。大正期に社会階層の一つとして本格的に現れたこの階層の登場の重要な意味は、「新しい家族形態の出現」であるとともに、「家庭（ホーム）」の「実態化」であった。メディアで推奨された理想的な家庭像は、「一つの社会階層としての位置を獲得した新中間層が模索していた、新しい家族形態にふさわしい生活文化や家庭文化、すなわち文化生活への欲求」と重なることで、実態化したのだ⁽⁹⁾。新中間層が欲望する階級帰属意識は、異国の地においてとりわけ先鋭化しているようである。「三菱」の社員という新中間層の典型とも言える半三郎夫妻は、文化生活への欲求を持つ。この階級帰属欲求によつて下位の階層との差異を仮構することで、また、雑誌言説を模倣することで、新中間層は均一性を得るのである。なお、内地の雑誌言説が外地や外国でも読まれていたことは、例えば『婦人之友』一九二二年一二月の読者投稿欄に「台湾」在住の一愛読者「交際費に消える殖民地生活」や「支那」在住の啓子「物価の安い支那の生活」があることから窺える。

「馬の脚」の常子の特徴づける微笑は寝台車の「南京虫」に刺されることで一時的に奪われている。その南京虫防虫のために社宅の居間には「除虫菊」が置かれている。夫の半三郎の失踪後に常子が一人で追憶することの一つ

にも「南京虫」が挙げられていて、常子の南京虫に対する警戒の強さは頭わだ。読者層を新中間層の上位の主婦に想定した雑誌『婦人之友』一九一四年九月号に掲載された由家永喜「上流の家庭にも南京虫が居る」には、「南京虫と云へば、下級の細民に特有な寄生虫の様に思はれて」いて「何処の家庭でも此虫の発生を他に知らせるのを恥辱の様^{ホル}に考へ」ていると述べられており、南京虫が発生しないことが中間層の階級^{ステイタス}を象徴するものとなっていることが分かる。新中間層を読者層として想定したこの頃の婦人雑誌(『主婦の友』『婦人之友』など)は、衛生に関する記事を毎号のように誌面に登場させている。衛生は階級意識と結びつく象徴性を帯びるようになっていく。衛生という新中間層のハビトゥスが、常子の南京虫への忌避を生じさせていると言える。

さらに、半三郎の家庭生活は「只常子と一しよに飯を食つたり、蓄音機をかけたたり、活動写真を見に行つたり」というものだ。小山静子によれば、一九〇八年創刊の『婦人之友』では「飽きることなく、繰り返し」「家族の団欒」が主張されたという¹⁰。妻と一緒に食事をする半三郎の生活は、新中間層の家庭のイメージをなぞったものである。一家団欒の家庭像は、理想的な家庭像の提示であるとともに、「家族の尊重」という「中流階級的美徳」と呼ばれた「価値」に合致しており¹¹、一家団欒の余裕のない層との差異を仮構する手助けをする、文化的階層化への欲望を満たす価値観であった。

「蓄音機をかけたたり、活動写真を見に行つたり」という趣味的な生活に関しても同然だ。三宅雄二郎は「文化生活」(『婦人之友』一九二二年一月)において、「文化生活」を営むべき「紳士淑女の資格」として「一通り芸術を解する位の用意を肝要とする」と述べている。弘田龍太郎は「家庭と音楽趣味」(『婦人之友』一九二二年七月)で、家庭における趣味は「芸術的なものが一番」でとりわけ「音楽をおすゝめしたい」と言い、田辺尚雄「家庭生活の改善に蓄音機を利用せよ」(『婦人公論』一九二〇年七月)では「家庭生活の改善の目的の為に」「進歩したる文明の利器たる蓄音機」を勧めている。経済的余裕のある人には高価な蓄音機で音楽を聴くことが提唱されているのだ。映画につい

でも、日本で流行し始めた大正初期においてこそ低級な娯楽と見做されていたが、石川義一が「蓄音器と社会教化」
〔音楽と蓄音器〕一九二二年二月）で、「公衆が同一時間に一般的に味はるゝ芸術は活動写真と蓄音器とである」と述
べるように、徐々に芸術としての位置を占めるようになっていくのである。蓄音器と映画を味わう趣味的な生活が、
生活様式の優劣を軸にした新中間層の階級的欲望を満たす効果を持っていたことを推測できる。

アメリカ人からダブルベッドを買った帰途を回想して半三郎は、「並み木の槐は花盛りだった。運河の水明りも美
しかった。しかし——今はそんなことに恋々としてゐる場合ではない。」と書いている。アメリカ人からダブルベッ
ドを購入した時の半三郎の誇らしさは、彼がアメリカ的な家具を手に入れることで階級的満足感を感じていること
を雄弁に物語る。

半三郎は冥界の事務所の役人に馬の脚をつけられて復活したのち、馬の脚の露頭を防ごうと努めるが、馬の脚を
隠すべく彼の取る行為も同じように評価できる。無論半三郎のこれらの行為は直接的には馬の脚を隠す目的を持つ
が、この作品が「小説ではな」く「大人に読ませるお伽噺」であると宣言していることを踏まえれば、字面通りの
解釈は避けねばならない。半三郎が馬の脚を隠す目的で導入している様々な行為には多分に寓意性があるはずだ。
馬の脚を隠すべく、「和服を廃した」り、「長靴」や「靴下」を履いたり、「文化生活の必要を楯に、たった一つの日
本間をもとうとう西洋間にし」たりするなど、半三郎は当時メディアで提唱されていた西洋的な服装や住宅様式を
採用している。高級文化としての西洋式の服装や住宅様式は、新中間層の文化威信を保証し、彼らにとって中流性
の表示化の意味合いがあっただろう。

平時の忍野夫妻の生活様式は中間層としてのステイタスシンボルとして機能するし、馬の脚の露呈を防ぐために
半三郎の行う行為は、西洋を模した生活によって己の劣等感（馬の脚によって寓意される）を解消し、文化的階層化に
よって中間層としての階級帰属を維持しようとする生活を風刺している。

ところで、半三郎は「平々凡々」たる人物とされる。日本綿花副社長の山田穆は「社員採用は平凡主義 長男と「左」とは歓迎しない」(『サンデー毎日』一九二四年三月一六日)で、「今やあらゆる商業は皆組織的になつてきてゐるから奇抜な人より寧ろコツ／＼と粒々辛苦して努力する風の人が最も大切なのである」と述べている。半三郎の平凡な造形は、当時の平凡主義型サラリーマンの典型でもある。

大正期の生活の改良論の特色は「その対象が都市中間層に向けられていること」¹²であるが、忍野夫婦の家庭生活は新中間層を対象に提案された家庭の理想像の忠実な再現であるし、馬の脚の露頭を防ぐ半三郎の行為は、そうした理想像を無理に取り入れることで階級帰属を維持しようとする行いを表徴する。

内地の生活改良論をなぞり、典型的なステイタスシンボルの装飾によって生成される新中間層の階級意識は、異国の地・中国で生活する日本人社会において均一性を保証する役割を果たしているようである。馬の脚になった半三郎が、「万一この脚の見つかった日には会社も必ず半三郎を誅首してしまふのに違ひない」と不安に思うことは、会社の極めて強固な均一性を示している。冥界で彼が、「我は是日本三菱公司の忍野半三郎」と、三菱という所属会社を添えて自己紹介をしていることから、彼の三菱への帰属意識の高さが窺える。この帰属意識は、彼が三菱という身分文化への同一化を志向していることを物語るだろう。また、「彼は」「あらゆる北京中の会社員と変りのない生活を営んでゐる」という言表は、北京中の会社員が同じ生活を送っていることを前提としている。しかし、無論それは幻想に過ぎない。北京中の会社員が同じ生活を送るなどということはあり得ない。彼らには当然、家庭生活の円満さや趣味嗜好、選択する家具類などにおいて微妙な違いがあるはずだ。北京中の会社員が同じ生活を送っているという言辭は、異国の地・中国において、われわれ日本人という共同性を創り上げようとする、現地の日本人の意識を記述していると言えるだろう。内部の多様性を隠蔽することで構制される共属感情である。そして、この「想像の共同体」を創り上げる紐帯の役割を果たしているのが、新中間層としての階級意識なのである。竹内洋は、「身分集団」Ⅱ「教育の種類による生活様式のちがいにともづき肯定的(否定的)特権づけがなされる集団」は、

「礼儀作法、会話の流儀、価値観、嗜好などが共通する文化集団」であり、「仲間うちでは共属感情や一体感を保ちながら、文化を共有しない者を排除する集団」であるとし、「職員層Ⅱサラリーマンはそうした身分集団だった」としている⁽¹³⁾。身分集団としての新中間層という共属感情は、外国における日本人の想像の共同体を下支えする。現地の日本人に「われわれ」意識があったことは、夫の異変を見た常子の「この夏は内地へ帰りませうよ」という発言にも明らかだが、この想像の共同体はその土地の人とは違う「われわれ」意識を形成する役割を果たさだろう。こうした想像の共同体を仮構することを促す、現地の日本人の共属意識を支える規範を、「日本社会システム」と呼んでおこう。この日本社会システムが、北京における下層労働者や娼婦など他の日本人を隠蔽する志向性を持つことは言うまでもない。「馬の脚」では、下層の日本人は一人として登場していない。

現地の日本人がわれわれ日本人という共同性を創り上げているというのは、芥川の実体験が反映されているだろう。芥川は中国旅行中、小穴隆一宛に「日本画でも近頃上海の日本人倶楽部に展覧会を催した支那人あり」（小穴隆一宛芥川書簡、一九二二年五月二〇日）と書き送っているが、上海の日本人倶楽部の存在を知ったことは「馬の脚」成立にも影響を与えているだろう。日本画の展覧会を主催する日本人倶楽部は、われわれ日本人という共同性を創り上げる機能を持つはずだからである。

「馬の脚」には日本人経営の新聞「順天時報」が頻繁に登場する。半三郎の復活や失踪について取材し、紙面に大きく取り上げて詳細に報道し、社説まで出している。新聞は「読者に国民としての感情の共有・一体感」⁽¹⁴⁾を齎すと同時に、読者の「感性の均質化」⁽¹⁵⁾を促す。新聞を読んだ読者は、新聞を読むことで同じ情報を共有しているという共属感情を持つことになる。そして、同じ国民としての自覚を強められ、感性的なレベルでの反応も画一化し、統合の強度が高められる。「馬の脚」における日本人社会は、現地の日本人誰もが読む「順天時報」を読み、その情報を共有することで均一性を形成しているだろう。特に、日本国内とは違い、海外における日本人経営の新聞の種類は限定されるため、新聞を通じて得られる情報が同じものになり、一体感が形成されやすい。確かに、「半三

郎の復活の評判になったのは勿論である」、「半三郎の失踪も彼の復活と同じやうに評判になったのは勿論である」という箇所から、半三郎の復活や失踪が、「評判」になるほど、日本社会の中で広く知られていることが分かる。「順天時報」によって日本社会が情報を共有し、その情報に関して話し合っていることを物語る。「マネエヂヤア、同僚、山井博士、牟田口氏等の人びとは未だに忍野半三郎の馬の脚になったことを信じてゐない」という一節からも、彼の上司や同僚らが「順天時報」の記事を通して、半三郎が馬の脚になったという「強迫観念」を抱いていることを知り、かつ、それがあくまで「発狂」の結果による「奇怪なる強迫観念」に過ぎないということを学んでいることになる。感性の均質化が起こっているのだ。また、「馬の脚」では、会社の上司や同僚、常子、山井博士など、「順天時報」に取材される人が多く登場する。同じ新聞に取材され紙面に載ることを通じて、彼らは同じ日本人としての意識を強めることになるはずだ。日本社会システムは、階級意識によって共属意識を支えると同時に、メディアを通じても均一性を形成する。

海外の日本社会に齎す新聞の機能については、芥川自身の実体験が参照されているだろう。芥川は、大阪毎日新聞の特派員として上海に上陸した後、一九二一年四月一日に乾性肋膜炎の診断を受け、里見病院に入院している。その頃の様子は書簡で次のように書かれている。

その外知らざる人もいろいろの見舞に来てくれ、病室などは花だらけになり候 且又上海の新聞などは事件少き故小生の病気の事を毎日のやうに掲載致し候為井川君の兄さんには「まるで天皇陛下の御病気のやうですな」とひやかされ候（芥川道章宛芥川書簡、一九二一年四月二四日）

日本人読者対象の上海の新聞が日本で有名な作家である芥川の病気のことを毎日のやうに報じ、それを読んで、多くの上海在住の日本人が芥川の元を訪ねたというのである。在留日本人は、日本人読者対象の新聞を読んで、一体感を保っていたのである。なお、上海の日本語新聞には芥川の子息が連日のやうに載ったやうで、「別封は上海の新

聞切抜です僕の事が三日続きで出るなどは恐縮の外ありません」（芥川道章宛芥川書簡、一九二一年五月六日）の文字も見える。異国における日本語新聞の機能を、芥川は肌で感じ取っていたようである。

衛生意識も共属意識を支える役割をする。成田龍一は「近代都市空間の特徴である均一的・均質的空間の形成の契機として衛生は存在していた」⁽¹⁶⁾としている。衛生意識は常子に限らず彼の上司も持っていたことは、半三郎と話す「マネエヂヤア」が「長靴の外にも発散する」「俺の脚の臭ひ」に「絶えず鼻を鳴らせて」いることから窺える。不潔なものを排除しようとする常子や上司の衛生意識は、排除という形式を通じて均一性を保証する日本人社会システムの機能を表す。

この衛生意識も芥川の中国視察旅行での体験が元となっていると思われる。芥川は、中国に到着後、書簡で度々中国の不潔さについて語っている。「亭外は尿臭甚し」（岡栄一郎宛芥川書簡、一九二一年四月二三日）、「乞食と小便臭いのとに少からず驚嘆しました」（薄田泣菫宛芥川書簡、一九二一年四月二四日）、「床は糞だらけ、恐る可く臭い」（小穴隆一宛芥川書簡、一九二一年五月一〇日）、「此処の名物は新思想とチブスだ」（滝井孝作宛芥川書簡、一九二一年五月三一日）、「南京虫に食はるのなどは当り前になつてしまひました」（芥川道章宛芥川書簡、一九二二年六月一四日）というように、中国の不潔を語る言及は執拗を極めている。「上海游记」〔大阪毎日新聞〕一九二二年八月一七日〜九月一二日、『東京日日新聞』八月二〇日〜九月一四日）でも、「苟も支那たる以上、籐椅子と雖も油断は出来ない。何時か私は村田君と、この籐椅子に坐つてゐたら、兼ね兼ね恐れてゐた南京虫に、手頸を二三箇所やられた事がある。」とある。海外においてこそ衛生意識が作動することを、芥川は自身の実体験から学んだのである。

「順天時報」の社説が本国の「政府」に対し、発狂禁止令制定を要求するのも同然である。中国の法律に合わせ現地の習慣に同化して生活するのではなく、本国の法体制の下で生活しようとする意識が窺える。日本人移民が本国の雑誌言説で流行していた生活様式を採用しているのも含め、彼らは同じ日本人としての意識を強めているの

である。

「馬の脚」は、海外の日本人社会システムを見事に捉えている。「馬の脚」における日本人社会システムは、メディア言説をなぞった階級意識・新聞の情報共有・衛生によって、北京における日本人社会の均一性・一体感を下支えているのである。

三、ナシヨナリズム

芥川龍之介が中国で見たことは多岐にわたるが、その中でも、日本人女性の活躍と、西洋人と日本人との関係は特筆されてよい。日本人女性の活躍については「上海遊記」の次の一節に表れている。

上海の日本婦人倶楽部に、招待を受けた事がある。場所は確か仏蘭西租界の、松本夫人の邸宅だった。白い布をかけた円卓子。その上のシネラリアの鉢、紅茶と菓子とサンドウィッチと。——卓子を囲んだ奥さん達は、私が予想していたよりも、皆温良貞淑さうだった。私はさう云ふ奥さん達と、小説や戯曲の話をした。すると或奥さんが、かう私に話しかけた。

「今月中央公論に御出しになつた『鴉』と云う小説は、大へん面白うございました。」

「いえ、あれは悪作です。」

私は謙遜な返事をしながら、「鴉」の作者宇野浩二に、この問答を聞かせてやりたいと思つた。

上海の日本婦人倶楽部の女性たちが小説や戯曲に関して談笑する。ここには、女性の趣味の向上がはっきりと描かれているだろう（無論、芥川は女性の地位向上を皮肉なまなざしで眺めてはいるが）。その上着目したいのは、「仏蘭西租界」において円卓子上に「シネラリアの鉢、紅茶と菓子とサンドウィッチと」の並んでいることである。ここには、女性の地位向上と西洋化との連関が示されているだろう。

日本人女性の活躍に加え、西洋人と日本人との関係に関する知見を得たことも着目したい。

南陽丸の船長竹内氏の話に、漢口のバンドを歩いてゐたら、篠懸の並木の下のベンチに、英吉利だか亜米利加だかの船乗が、日本の女と坐つてゐた。その女は一と目見ても、職業がすぐにわかるものだった。竹内氏はそれを見た時に、不快な気もちがしたさうである。私はその話を聞いた後、北四川路を歩いてみると、向うへ来かかった自動車の中に、三人か四人の日本の芸者が、一人の西洋人を擁しながら、頬にはしやいでゐるのを見た。が、別段竹内氏のように、不快な気もちにはならなかった。が、不快な気もちになるのも、まんざら理解に苦しむ訣ぢやない。いや、寧ろさう云ふ心理に、興味を持たずにはゐられないのである。この場合は不快な気持だけだが、もしこれを大にすれば、愛国的義憤に違いないぢやないか？（「上海游記」）

異国の地において別してナシヨナリズムが作動することを目撃したのであるが、このナシヨナリズムは「馬の脚」を読む上で重要である。

さて、前節で見た中間層としての階級意識に基づいた等質性は、日本人社会システムがナシヨナリズムの性質を持つことを物語る。このナシヨナリズムを支える仕組みについてより詳しく見てみよう。

まず考えなければならぬのは、夫の半三郎が妻の常子の視線を強く意識していることの意味である。妻が夫の視線を意識するのではなく、夫が妻の視線を意識するという構図には深い意味が込められているだろう。実際、半三郎が文化生活を無理に取り入れるのも「常子の疑惑を避ける」ためであり、彼の日記には「俺の大敵は常子である」と書かれており、家庭内における妻の視線の強さを寓意している。小山静子によれば、大正期の生活改善・文化生活の言説の教育史的意味は、第一に、既婚女性が社会教育の対象として見做されるようになったことであり、第二に、学校の良妻賢母教育のあり方が見直され、家事・育児を行うに足る科学的合理的な思考や知識を身につけることが求められるようになったことである。これにより、女性が家庭内で果たすべき役割への期待が高まり、主

婦の管轄の下に家庭が存在するということが明白になった。それは、たとえ夫の経済力に支えられたものではあれ、女性の家庭における地位の向上、家庭内での男女の同等化を齎すものであった(17)。

大正期、女性は母たるべく科学の知識を身に付けることが要請され、家庭における衛生の管理者・監督者としての役割を振り当てられた。この衛生意識を強く持つのが常子である。「猿股やズボン下や靴下」に「いつも馬の毛がくつついてゐる」がために、自身洗濯屋を利用する半三郎の行為が寓意しているのは、自身の不潔な要素を妻に見られたくない夫の意識であろう。

一家団欒を説く言説は、女性が隷属的位置に置かれるべきではないというデモクラシーの思想を背景とする(18)。半三郎は「常子と一しよに飯を食つたり」するが、妻と一緒に食卓を囲むことは、それ自体女性の地位向上を意味するだろう。またこの時期は、児童教育の担い手である母になるべき女性に、趣味の涵養の必要が説かれていた(19)が、その背景には育児を担当する存在として女性を評価し、女性の知力を活用可能なものとして見做す思想がある。妻と共に蓄音機を聴き、活動写真に行くことは、妻の趣味性の向上を手助けしているはずである。

夫が遁走し一人で追憶に沈む常子が「考えつゞけ」るのは「ダブル・ベッドのこと」や「南京虫のこと」なのであり、女性こそが中間層にとつてのステイタスシンボルに拘泥しているという事態が起こっていることを物語る。

常子が、制御できなくなった馬の脚を細引に縛り始めた夫を見て「発狂と言ふ恐怖」を感じる背景には、大正期に『婦人公論』でも度々紹介された優生思想の受容があるだろう。「発狂」を「恐怖」と感じるまなざしは、歴史的産物であり、実際晩年の芥川自身が生母フクの精神病の遺伝に怯えていたことは広く知られている。そして、この優生思想によって、女性が男性を見る視線が鋭くなった。優生思想の普及に努めた永井潜は「生理学的立場から観て」(『婦人公論』一九一八年四月)で、優生学を理解すれば「婦人を、単に選ぶ者ではなくして、又自ら選ぶ者でなければならぬといふ事を、能く了解する」として、男性のみならず女性も優生学の知識に基づいて異性を選

別する必要を説く。新婦人協会による花柳病男子結婚制限法の制定運動も含め、優生思想の普及により女性の地位が向上していたのである。夫が「発狂」したと思いこんだ常子が「鎖に繋がれた囚人のやう」に感じるのにも、優生思想が表れている。永井潜「良い子供を産むために(三)——人種改善学(優生学)の話——」(『婦人公論』一九一六年四月)が「悪い恐ろしい系図」に「重罪犯人」の多いことを紹介しているように、優生思想では悪い遺伝と犯罪が連鎖して捉えられるからである。優生学では、精神病・結核・ハンセン病・花柳病患者などが子孫を残すことに反対する。夫の「発狂」の可能性を考えて「恐怖」を覚え、「内地へ帰りませう」と中国を離れることすら夫に請う常子の感情的で取り乱した様子を考えれば、彼女が優生学に沿った見地から半三郎の発狂を忌むべきものと見做していることを推定させる。

「馬の脚」に見られる女性の地位向上は、男女平等の思想を反映しており、別言すれば男性／女性の差異の無化である(無論、完全なる無化ではないが)。半三郎が気にするものとして、「同僚の疑惑」と並列して「常子の疑惑」を挙げていることも、男女の差異を無化していると言えるだろう。加えて、彼の上司も妻の常子もいずれも清潔を重視していることについては一節で述べたとおりである。常子は半三郎を「発狂」したと見做したが、「マネエヂヤア、同僚、山井博士、「順天時報」の主筆等」も彼は「発狂」したのだと見做している。さらに、日本人経営の「順天時報」の記者に「女記者」(日本人と考えられる)がいることが点描されるのも、女性の社会進出を暗示しており、男女の差異を消滅させる装置として働いている。日本人の単一性を保証するとともに、ジェンダー的にも中性化しているのが日本人社会システムなのである。移民先では日本人の人口の少なさゆえに、性差関係なく総動員して均一性を支える必要があるのである。実際、「この夏は内地へ帰りませうよ。」という常子の言葉からは、彼女がナシヨナリズムの番人としての役割を振り当てられていることを物語る。と同時に、「文明国としての自覚」を促す「男女平等観」(20)を内在させることは、西洋と互角に立ちうる地位を保証し、この点においても日本人社会システムはナシ

ヨナリズムの性質を持つ。なお、西洋が男女平等的な思想を有していることは「亜米利加人のオオクシヨン」で買った「ダブル・ベッド」に象徴的に表れている。

次に「順天時報」について見てみよう。「順天時報」は社説で「二千年来の家族主義」を維持する必要を説く⁽²¹⁾。中間層のステイタスシンボルは、西洋の文明を基準として日本をそれに同一化しようとするものであるが、それだけでは日本の文化的同一性を意識しにくい。確かに西洋的なライフスタイルは、異国の地中国において「われわれ」の威容を定位しはする。しかし、そうしたライフスタイルはアイデンティティ付与的ではないうえ、西洋のヘゲモニーを手助けすることにもなる。異国の地で日本人社会が威容を真に確立するには、伝統性とのつらなりが必要だろう。固有性を確保し得てこそ、日本人社会は他の列強と互角に立ちうるのである。「順天時報」は、伝統性を軸に、日本人の共同性を保証し、西洋との種差を強調することで、自らのナショナリズムを強めるのだ。ただし、日本の固有性が示されているのはいかにも、「家族主義」以外にはない。ここに芥川の日本人社会システムに対する皮肉を讀むこともできよう。

「馬の脚」における日本人社会システムは、モダニズムの衣裳を纏ったナショナリズムとなっている。このナショナリズムは、欧米列強が進出する中国において、列強と互角に立つことを保証しつつ、日本の大国としての地位を確保したいという欲望を孕んでいるだろう。加えて、ナショナリズムという形態をとることで日本人社会システムは一体感を維持する役目を担い、異国の地において日本人社会を統合する機能を持つ。

四、われわれの内なる野蠻／かれら

「馬の脚」が日本の中国に対する帝国主義的野心を告発した作品であることについては、孔月の詳細な検討がある⁽²²⁾。孔は、三菱、本願寺派の布教師、同仁病院、「順天時報」が日本帝国主義と共犯関係にあったことに着目し、

「馬の脚」は「日本帝国主義を嘲笑と皮肉を込めて諷刺」しているという。

ただし、「馬の脚」においては、中国は日本人社会の外部のものとしてあるのではない。例えば半三郎夫妻に使われる「支那人のボオイ」は、日本人の生活を手助けしているのだし、人力車の車夫も、西洋から輸入した人力車を用い、日本人を客として生活している点で、日本人社会の生活の内部に入り込んでいる。馬車の馭者も「支那馬車」ではあるが、馬車という西洋的な道具を利用している。冥界の「支那人」の役人たちも、死者を間違えたり無理に馬の脚を付けたりしており、中華民国の腐敗を象徴的に描き出しているとは言えるが、「第一革命以来一度もないことだ」という言葉に見られるように、彼らは列強に追いつこうとはしている。また彼らは、「電報」という近代的な器具も使っている。半三郎が「十二銭の賃金をどうしても二十銭よこせと言ふ」人力車の車夫を蹴飛ばすのも同然だ。礼儀の欠けた中国人を、現地の文化や社会環境の反映として等閑視するのではなく、礼儀という文明的基準に中国人を従わせようとしているのである。「本願寺派の布教師」が中国で布教を行うのも、中国を日本に従順なものとさせようとする心理の表れである。

日本と中国との差異はあくまで相対的なものだ。例えば、中国の「車夫」が「十二銭の賃金をどうしても二十銭よこせと言ふ」い貨幣経済システムの約束事を十分には習得していないのに対し、半三郎はダブル・ベッドを、貨幣経済システムの約束事の体得を要請する「オオクシヨン」で買っている。いずれも貨幣経済システムの中で商品やサービスの売買を行っているが、その体得度において差があるのである。「われわれ」日本人社会に馴致される発展途上のものとして描かれている点で、中国人は「われわれの内なる野蛮」とでも呼びうる。

興味深いことに本作では、中国のモンゴルに対する侵略も風刺されている。語り手は、半三郎に付けられた馬の脚が「蒙古産の庫倫馬」であるが故に、「彼の馬の脚の蒙古の空気を感ずるが早い、忽ち躍ったり跳ねたり出したのは寧ろ当然」だと推測する。その馬は、「張家口、錦州を通つて」、最終的には冥界の中華民国の「支那人」の

役人のもとに運ばれている。

モンゴルという地名は、「雑信一束」(『支那游記』)にも出て来る。「乞食童子一人、我等の跡を追ひつつ、蒼茫たる山巒を指して、「蒙古! 蒙古!」と申し候。然れどもその偽なるは地図を按ずるまでも無之候。」という箇所である。芥川が来たのは内モンゴルに極めて近い位置であるため、「乞食童子」にモンゴルと言われ、違うと思ったというのは、芥川が内モンゴルの位置をかなり正確に把握していたということを意味する。

現在のモンゴル民族は、ロシアのブリヤート共和国、独立国のモンゴル国、中華人民共和国内の内モンゴル自治区の三地域にわたって居住する。内モンゴルは現在中国がモンゴル民族に強要した植民地で、漢民族への同化が強いられている。モンゴルはモンゴル帝国崩壊以後、清朝の支配下にある時も民族の独自性を保持してきた。一九一一年、辛亥革命のさなか、中国からの解放と独立を求めて、ハルハ・モンゴル部の貴族王侯らと、チンギス・ハーンの直系子孫らが主導して、モンゴル高原の諸部が清朝に独立を宣言した。それに対して山西省の軍人閻錫山は、中華民国への忠誠を強要するために、晋軍を率いて内モンゴルのフフホトなどを制圧した。中華民国はモンゴル人に対して圧政をしいた。そして、一九一三年の露中宣言と一九一四―一九一五年のキャフタ三国協定によって、このモンゴル国政府は力づくで独立を取り消され、中華民国内の一自治領に格下げされてしまう。一九一九年には中華民国の軍事力によって自治すらも返上させられる。一九二二年にはモンゴル人民党がソ連赤軍の援助を請いつつ、中国軍・ロシア白軍をウランバートルから追放した。一九二四年には国名がモンゴル人民共和国になる。一方で内モンゴルの独立は不可能となった²³。

このようなモンゴル独立の趨勢は、当時日本でも盛んに報道された。例えば、「庫倫活仏の独立」(『東京朝日新聞』一九一一年二月六日)では、モンゴルが独立を宣言したこと、モンゴル人が清の官吏に「虐待」され、「清人を怨むこと著るし」いことが書かれている。黒澤主一郎「蒙古問題」(『戦友』一九一三年二月)でも、清朝が中国を統一した

際、「蒙古を討平して其領域内に収め」たこと、清朝が転覆した際「外蒙古の独立を宣言し」たこと、「内蒙古も亦之に応じて叛旗を翻がへすに至れ」ることが紹介されている。「馬の脚」では冥界の中国人の役人に送られたのは「蒙古産の庫倫馬」であるが、この「庫倫」という地名は、モンゴル独立運動の極めて重要な地名であった。前掲「庫倫活仏の独立」の見出しから分かるように、また、黒澤主一郎、前掲「蒙古問題」に「外蒙古の庫倫に活仏なるものあり、喇嘛の最高僧にして蒙古民族の信仰最も厚し」とあるように、この活仏が外モンゴルの独立を宣言したのである。

さらに、半三郎に取り付けられた馬の脚は、異臭を放ち、モンゴルの空気を感じて踊ったり跳ねたりする野、蛮なものとして描かれている。須田千里は「馬の脚」の典拠として「土人甲」を指摘するが、「土人甲」では、冥界でつけられるのは「胡人の脚」、つまり「北方、または西方の異民族」の脚で「毛深く、嫌な臭い」がし、「人種・身分に関わる差別」があるという²⁴。「土人甲」の異民族差別のモチーフは「馬の脚」で十分借用されているだろう。「馬の脚」でも、野、蛮なモンゴルを掌握する中国人という、支配／被支配の構図が見られるのだ。

「馬の脚」は当時の言説と共時性を持つ。「馬の脚」ではまず、役人が「人違ひ」で半三郎を死なせ、「これは君の責任だ。好いかね。君の責任だ。」と若い役人に責任を押し付ける年かさの役人を描くことで、中華民国の官僚制度の腐敗が描かれている。そして、冥界の中国人の役人に送られた「蒙古産の庫倫馬」は、半三郎の脚として取り付けられて復活し、モンゴルの空気を感じて踊ったり跳ねたりする。中国人は「野蛮」なモンゴルの馬を掌握して意のままに取り引きし、その脚を日本人に押し付けているのであるし、モンゴルからの風で踊ったり跳ねたりする馬の脚はモンゴルの独立運動を表徴するだろう。社会主義に関わることなので、検閲の都合上か、モンゴルは馬というメタファーによってしか表されていないが、このように「馬の脚」では、中華民国のモンゴルに対する圧政への寓意もあるのだ²⁵。

「馬の脚」が表象する異国は、中国とモンゴルにとどまらない。中国に進出する欧米列強、別してアメリカも描かれている。半三郎がダブルベッドを買ったのは「或亜米利加人のオオクシヨン」においてであるし、彼が冥界の役人によって間違えられたのはアメリカ人の「美華禁酒会長ヘンリー・バレット」である。ヘンリー・バレットは禁酒会長だが、アメリカで禁酒法が施行されたのは一九二〇年である。中国で禁酒を広めているヘンリー・バレットの造形は、外国にも自国の思想を広めようとするアメリカの傲慢さの象徴である。こうしたアメリカ的生活を、半三郎は採用しているのであるし、「順天時報」はアメリカを初めとする欧米列強から自国を差異化しようとしているのである。

中国に進出するアメリカ人を書くのは、何も「馬の脚」が最初というわけではない。『支那游記』に収録されることになる中国紀行の中で、すでに現れている。「江南游記」(『大阪毎日新聞』朝刊、一九二二年一月一日～二月二三日)には、「私」がロマンティシズムに浸っている中、「禿頭の亜米利加人」が「傍若無人にも立小便」をするというシーンがある。このアメリカ人に「私」は「攘夷的精神」を感じている。「長江游記」(『女性』一九二四年九月)には、「東洋に対する西洋の侮蔑に踵の高い靴をはかせた如き」「亜米利加人」の「細君」が出てくる。芥川は、中国でアメリカ人が横暴を働いているという感想を持ったのだろう。

以上の考察から、「馬の脚」に登場する四つの表象についてまとめておくことができるだろう。第一に、日本人経営の三菱・同仁病院・「順天時報」の従業員などから成る日本人社会である。これを「われわれ」と名づけておけば、第二に、中国に租界を形成し生活する欧米の列強、とりわけアメリカ人で、「われわれ」が同一化する対象であると同時に、差異化を図ることで競い合う対象である点で、「ライバル」と名づけていい。第三に、中国人は「われわれの内なる野蠻」として表象されている。「身近な劣位」と言ってもいい。最後にモンゴル人であるが、臭いが強烈で蚤のわく存在として、理性の制御に従わない存在として描かれている点で、「われわれ」の外部に位置し独自の秩序

を持った非共約性として描かれており、「かれら」と呼ぶのが相応しい。欧米列強／日本人社会／中国人／モンゴル人はそれぞれ、ライバル／われわれ／われわれの内なる野蛮／かれらと名づけうる。日本人社会システムは、四種の序列を形成する志向を持つ。

半三郎が再び戻ってきた時の彼に対する常子の「名状の出来ぬ嫌悪」は、「われわれ」の外部にある「かれら」の認識によるものだと考えていい。再び戻ってきた夫は、「ぼろぼろの上衣」を着、「髪の毛の長い頭を垂れてゐる」。その姿に常子は「殆ど恐怖に近いものを感じ」る。「毛色に見える栗毛の馬の脚」を見るに至って、彼女は「名状の出来ぬ嫌悪」を感じる。彼の日記によれば半三郎の馬の脚は「蚤の巣窟」となり、「臭ひ」が「長靴の外にも発散する」ほどだった。「われわれの内なる野蛮」を越えた非文明性と不衛生、動物性を目撃して嫌悪を感じる常子は、「インベリアル・アイズ帝国のまなざし」(26)によってアフリカやアメリカの原住民を目撃するヨーロッパ人の眼に通底する。常子は「われわれ」の外部のものとして夫を見てしまったのだが、その夫は「悲しさうに彼女の顔を眺め」、「くるりと背を向け」再び遁走する。夫は常子のまなざしを明確に認識したのであり、「われわれ」という共同性によって排除されたのである。「かれら」は「われわれ」とは非共約のものとして、啓蒙の対象にもならず、同化不可能なものとして排除されるだけなのだ。つまり、「マネエヂヤア、同僚、山井博士、牟多口氏等」が半三郎を「発狂」者と見做したことが、その否定としての文明の「われわれ」の位置を明確にする役割を持つのと。パラレルに、「かれら」も「われわれ」の陰画として機能し、それを反転させた陽画としての「われわれ」の文明性を規定する存在なのである。いわば、「かれら」はわれわれに己の文明性を確認させてくれ、一体感を与えてくれるのである。一方で中国は、日本人に近代化を期待され、近代化を促すという口実を与えて日本の帝国主義正当化の役割を持つと同時に、(野蛮)に恥じないよう日本の先進性を高い位置で維持し続ける緊張感を日本に与える機能を持つはずだ。会社における正社員と派遣社員との関係のように。

五、新たな共同体へ

新中間層が理想的な家庭像に倣い、新聞記事を読むことで情報を共有し、衛生意識に基づいて不潔なものを排除することで、均質性・共属意識を維持する志向性を持つ日本人社会システムは、男女の差異をも無化して同質性をさらに保証し、日本の伝統性とのつらなりを意識する点でナショナリズムの性質をも有する。また、ライバル／われわれ／われわれの内なる野蛮／かれらを系統的に序列化する心象地理を形成し、相対的差異に基づく差別と、絶対的差異に基づく差別という、差別の二種類の形態を示している。帝国は二種類の差別を必要とするということか。

「馬の脚」が提起する問題が現代性を持つのは、例えば、戦後の日本が「一億総中流」という幻想を「戦後の国民統合表象」⁽²⁷⁾とした原型を提示していることに気づく時だろう。現代でも中流幻想は排除・多様性の抑圧という弊害を持つ。ただし現代では、中流幻想によって、「外国人」と「日本人」との隔離を消失させる非敵対的な「新たな共同性」⁽²⁸⁾、中流という幻想によって緩やかにつながる共同性の成立を期待することもできるかもしれない。

注

- (1) 単援朝「馬の脚」から「河童」へ——中期以後の芥川文学の一面——」（『稿本近代文学』一九九一年十一月）。
- (2) 藪下明博「馬の脚」或は、幻想とアイロニーの共存」（『芥川龍之介』一九九二年四月）。
- (3) 國末泰平「馬の脚」冥界からの生還」（『芥川龍之介の文学』和泉書院、一九九七年六月）。
- (4) 秦剛「告白」を対象化した〈お伽噺〉——芥川龍之介の小説「馬の脚」を中心に——」（『国語と国文学』一九九九年二月）。
- (5) 邱雅芬「中国旅行後の芥川龍之介文学——「馬の脚」の世界——」（『Comparatio』二〇〇四年六月）、孔月「馬の脚」における帝国日本の表象——その寓意・諷刺をめぐって」（『芥川龍之介中国題材作品と病』学術出版会、二〇一二年九月）。

- (6) 武藤清吾『芥川龍之介の童話 神秘と自己像幻視の物語』(翰林書房、二〇一四年二月)。
- (7) 秦剛、前掲「告白」を対象化した〈お伽斬〉——芥川龍之介の小説「馬の脚」を中心に——。
- (8) 山本喜誉司評伝編集委員会『山本喜誉司評伝』(サンパウロ人文科学研究所、一九八一年三月)。
- (9) 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』(勁草書房、一九九九年一〇月)。
- (10) 小山静子、前掲『家庭の生成と女性の国民化』。
- (11) 村上泰亮『新中間大衆の時代——戦後日本の解剖学』(中央公論社、一九八四年一月)。
- (12) 中畠邦「大正期の生活論」(和歌森太郎先生還暦記念論文編集委員会『明治国家の展開と民衆生活』弘文堂、一九七五年六月)。
- (13) 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社、一九九九年四月)。
- (14) 鈴木健二『デジタルは「国民」国家を溶かす——新メディアの越境・集中・対抗』(日本評論社、二〇〇七年八月)。
- (15) 奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキヤンダル』(平凡社、二〇〇〇年七月)。
- (16) 成田龍一『近代都市空間の文化経験』(岩波書店、二〇〇三年四月)。
- (17) 小山静子、前掲『家庭の生成と女性の国民化』。
- (18) 家族団欒の必要を説く森本静子「日米家庭生活の比較研究(其一)」(『婦人公論』一九二〇年三月)は、「我国にて多く見る主人ばかりが恰ら暴君の様に振舞つて、妻は人権も何も認められ」ないのは「家庭として何の価もない」として、「主人は主人として、妻は妻として」「夫れ相応に楽しみを得る事」ができることを理想としている。
- (19) 中根環堂「西洋の母と其趣味 愛と家庭の後編」(『婦人公論』一九一六年七月)など。
- (20) 中村隆文「男女交際」という言説」(稲垣恭子・竹内洋編『不良・ヒーロー・左傾——教育と逸脱の社会学——』人文書院、二〇〇二年四月)。
- (21) 宮崎由子「芥川龍之介「馬の脚」——理性への反抗——」(『芥川龍之介研究』二〇一二年九月)も、「家族主義」は「当

時には日本を支える思想として、道徳家達によって推進されていた」ことに注意を払っている。

(22) 孔月、前掲「馬の脚」における帝国日本の表象——その寓意・諷刺をめぐって」。

(23) 楊海英『植民地としてのモンゴル 中国の官制ナショナリズムと革命思想』（勉誠出版、二〇一三年六月）参照。

(24) 須田千里「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』——その典拠と主題をめぐって——」（『光華日本文学』一九九六年八月）。

(25) 「馬の脚」における「蒙古」という言辞に着目し、「満蒙独立運動」と結びつけてこの作品を理解することは、既に孔月が前掲「馬の脚」における帝国日本の表象——その寓意・諷刺をめぐって」で行っている。しかし、半三郎が日本の帝国主義に加担した、「満蒙独立運動」に参加する日本人馬賊の戯画であるという指摘は、「野蛮」な表象として描かれている馬の脚を帝国主義の象徴として捉える矛盾など、無理が多い。

(26) Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge, 1992

(27) 竹内洋『大衆モダニズムの夢の跡 彷徨する「教養」と大学』（新曜社、二〇〇一年五月）。

(28) 酒井直樹「レイシズム・スタディーズへの視座」（鶴飼哲、酒井直樹、テッサ・モーリス＝スズキ、李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』以文社、二〇一二年一〇月）。

第九章 旅

——「湖南の扇」論——

一、旅行と観光

ダニエル・J・ブーアステイン⁽¹⁾はかつて、一九世紀の半ば過ぎ頃から欧米人による外国旅行の性格が変わり始めたことを指摘し、「旅行者の没落、観光客の台頭」と巧みに要約した。危険にさらされながらも驚きと喜びを発見し、己の成長を促した「旅行」が消失したのと引き換えに、便利さと快適さを保証されながら、メディアに出てくるイメージに似ているかを旅の行程で確認する「観光」が台頭したというのである。そこで経験されるのは、己が所属している国民国家との理解しやすい安っぽい差異、いかにもその国を表現しているかのような「疑似イベント」に過ぎない⁽²⁾。

芥川龍之介の「湖南の扇」(『中央公論』一九二六年一月)には、「観光客」として降り立ったはずの中国のまち長沙で、「旅行者」としての経験を余儀なくされた脅かしの経験が刻み込まれているかに見える。

塚谷周次が湖南の地の「ラジカルな革命的雰囲気の原因を検証しようとするリアリズム精神を所持」した小説と指摘し⁽³⁾、青柳達雄が「土匪黄六一は実は革命者」で、玉蘭は「革命者黄六一の遺志を継いで生きる覚悟」を表明したと指摘して⁽⁴⁾以来、「湖南の扇」は、黄六一・譚永年・玉蘭・含芳といった中国人登場人物に焦点を当てることで、「激動と混乱の中国を見た」⁽⁵⁾芥川の眼の鋭さを反映した作品として読まれてきた。とりわけ近年は、中国側の資料が引用されることで、中国人の登場人物たちを立体的に浮き上がらせる試みが顕著で⁽⁶⁾、研究が充実してきている。

ただ、長沙の地に降り立った旅人「僕」の分析も待ち望まれるだろう。「含芳の隠された心情の表出媒体」として語り手「僕」を捉える江藤茂博⁽⁷⁾や、「僕」を「支那趣味」のロマンティズムの知識人像」としてその内実を明らかにする孔月⁽⁸⁾らの論究もあるが、旅する「僕」の心理に焦点を絞り、小説の構造を十分に捉えているとは言い難い現状はある。

本章では、長沙を旅する「僕」の脅かされる心理に分析のメスを入れながら、これまでの論究では見落とされてきたこの小説の謎を解明しつつ、「湖南の扇」という小説の中国表象の特殊性を把握したい。

二、メタファーとしての自然

長沙に到着した「僕」は、長沙の風景に失望し、出迎えに来てくれるはずのBさんが見当たらないことも手伝って、「苛立たしき」を感じるのだが、その際、「葉柳の下に一人の支那美人を発見」し、この女性に「惹かれ」る。この「支那美人」とは後に妓館で再会することになる含芳であるが、長沙に対する幻滅を揚言していた「僕」が一転して、この「支那美人」に愛着を覚えるのはなぜなのか。

長沙に接近する際の「僕」は、「甲板の欄干へ凭りかかっていたまま」「湖南の府城を眺め」るのであり、市街全体を高みから見下ろす鳥瞰の態度で長沙に入り込んでいる。「狭苦しい埠頭のあたりは新しい西洋家屋や葉柳など見えるだけに殆ど飯田河岸と変らなかつた」と失望する「僕」は、自国の文化から見て珍しい、いかにもその土地らしいものを見ようとしており、予め所持していたイメージの中にある、日本との安易な差異を旅の行程で見出そうと努める「観光客」として降り立っているに過ぎない。

しかし、そのような「僕」の高みの位置はすぐさま揺さぶりを受けることになる。「蝗に近い」「薄汚い支那人」を目にし、群れる「蝗」のように「無数の支那人に埋まつてしまった」栈橋が目に入り、「苦力を擲」る「老紳士」を目撃することで、「僕」は、不潔に怯え、攻撃を受ける恐怖を識閥下で感じるようになるだろう。加えて、出迎え

に来てくれるはずのBさんが見つからず、周りに「支那人ばかり」しかいないことにより、覚束なさを感じるようになるだろう。「僕」は、日本人不在による不安や「支那人」の暴力性などに脅かされる存在へと下降するのだ。長沙に到着した「僕」の感じる「苛立たしさ」は、脅かしを受けて苛立たしさを感じる直後であることに留意すべきだ。

一人の「支那美人」を発見したのは、「僕」が脅かしを受けて苛立たしさを感じた直後であることに留意すべきだ。葉柳の下にいた含芳に慕情を抱くのは、彼女が「如何にも子供らしい女」であったからだと言えるだろう。のち妓館で彼女と再会した時にも、含芳は「病的な弱々しさ」を持つとされ、「日かげの土に育った、小さい球根」に喩えられるうえ、「子供のやうにいやいや」をするのだが、含芳の繊弱な印象や子供のよ様な所作こそが、「僕」の含芳に惹かれた要因だと考えられる。このような女性は「僕」に脅かしを与えないのだ。「僕」は、脅かされる不安を感じていたために、脅かしを与えない女性に心理的に接近するのであり、それによって心の抛り所を築き、不安を解消したかったのだ。

脅かしを受ける危機意識から逃れるように脅かしを与えないものへ傾斜するという如上の心理構造は、なおも「湖南の扇」の中で繰り返される。長沙に着いた当日、「僕」は「新しい赤煉瓦の西洋家屋」の見える風景に幻滅を覚えている。中国で浅薄な西洋化を見ることを不愉快に思うのは、『支那遊記』（改造社、一九二五年一月）の主要なモチーフの一つでもあり、「西洋」への拒否と東洋への傾斜、これは『支那遊記』の世界を底流するものの一つと言える⁽⁹⁾という指摘や、「芥川の空想と現実の狭間を広げ、不快な印象を与えたのは当時中国に進出し、繁殖していた西洋的な異文化のようである」⁽¹⁰⁾という指摘がある。しかし、「翌々十八日」には、西洋に対する不協和音の感覚は一転して好感へと変質する。モオタア・ボオトに乗って湘江を走る際、「僕」は、次のような感想を抱いているのだ。

僕等に乗せたモオタア・ボオトは在留日本人の「中の島」と呼ぶ三角洲を左にしながら、二時前後の湘江を走って行った。からりと晴れ上った五月の天気は兩岸の風景を鮮かにしてゐた。僕等の右に連つた長沙も白壁や

瓦屋根の光つてゐるだけにきのふほど憂鬱には見えなかつた。まして柑類の木の茂つた、石垣の長い三角洲はとどころに小ぢんまりした西洋家屋を覗かせたり、その又西洋家屋の間に綱に吊つた洗濯ものを閃かせたり、如何にも活き活きと横たはつてゐた。

「十六日」に感じていた長沙の風景に対する幻滅が解消しているばかりでなく、「西洋家屋」の見える風景に「活き活き」としたものを感じ、感興をそそられていることが分かる。長沙の風景に対する評価のこの鮮やかな移行は一体なぜ起こつたのか。

長沙に着いた日、「僕」は譚永年から、Bさんが「マラリア熱に罹つた」ことを聞く。「此処（『長沙』の名物は新思想とチブスだ）（一九二一年五月三一日付、滝井孝作宛書簡。「」内引用者、以下同）、「長沙は」チブスやマラリアの流行する町」（『雑信一束』、『支那游記』）といつた芥川自身の記述から、Bさんがマラリア熱に罹つたという設定は、芥川自身の実感を反映したものである。感染症の流行は、「僕」を脅かしたはずである。

別して着目したのは、「僕」の遭遇した排日的趨勢についてである。十八日、譚に湘南工業学校へ参観することを勧められた際、「僕」は気乗りがしないのだが、その理由は「きのふの朝、或女学校を参観に出かけ、存外烈しい排日的空気に不快を感じてゐた為」だという。長沙が排日的空気の強い場所であつたことは、『支那游記』中の「雑信一束」の「七 学校」における次のような記述からも明らかである。

長沙の天心第一女子師範学校並に附属高等小学校を参観。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰ふ。女学生は皆排日の為鉛筆や何かを使はないから、机の上に筆硯を具え、幾何や代数をやつてゐる始末だ。

次手に寄宿舎も一見したいと思ひ、通訳の少年に掛け合つて貰ふと、教師愈仏頂面をして曰、「それはお断り申します。先達もここの寄宿舎へは兵卒が五六人闖入し、強姦事件を惹き起した後ですから！」

当時の中国では排日の気運が高まつていたのであるが、『支那游記』ではこうした傾向を丹念にすくいとつており排日的遠景が点綴している。「上海游記」（『大阪毎日新聞』一九二一年八月一七日〜九月二一日、『東京日日新聞』八月二〇日〜

九月一四日)には「雅叙園の局票」に「毋忘国恥と、排日の気焰を挙げてゐた」ことを描いている。「江南游記」(『大阪毎日新聞』朝刊、一九二二年一月一日〜二月一三日)にも、西湖のほとりで「排日の歌か何かうたつてゐる」「支那の中学生」、天平山にある「排日の落書き」、揚州の水路の橋に書かれた「排日の宣言」を抜き取り描いている。『支那游記』に中国の排日的遠景が点綴しており、そうした芥川の実体験が「湖南の扇」に影響を与えていることについては、夙に指摘されている(11)。「湖南の扇」の「僕」は十七日に或女学校を参観し、排日的空気に気圧されていたのだが、それは中国という他者との出会いを意味し、外国における異邦人としての自己の認識であったはずだ。案内してくれるはずのBさんがいないという日本人の不在も手伝って、「僕」の危機感、脅かしを受ける恐怖、いわばアイデンティティの危機は胸底で募っていたはずである。

十八日には一転して西洋家屋に愛着を示すのは、外国で締め出されるよそ者という点で同類の存在に安堵を感じたかったからではないだろうか。実際、西洋家屋は、「傍若無人」(『江南游記』)に建っているのではなく「小ぢんまりした」ものと記述されており、西洋人が異国の地で心細く暮らしていることが暗示されているのだ。

脅かしから逃れようとする「僕」の心理的傾向はさらに拍車を掛けていく。「僕」は自然の事物にのみ興味を示すようになるのだが、そのことは次の引用により明瞭である。

「この三角州は橘洲と言つてね。……」

「ああ、鳶が鳴いてゐる。」

「鳶が? ……うん、鳶も沢山ある。そら、いつか張継堯と譚延闓との戦争があつた時だね、あの時にや張の部下の死骸がいくつもこの川へ流れて来たもんだ。すると又鳶が一人の死骸へ二羽も三羽も下りて来てね……」

譚が政治に関心を抱いているのと対照されることで、「僕」の鳶への関心——自然への関心——が強調されていることが分かるだろう。自然の事物へと傾斜する「僕」の傾向は十八日には非常に強くなっているのだ。譚が日本領事

館や日清汽船会社の建物を指し示している際には、「譚の言葉は僕の耳に唯一つづりの騒音だった」とし、「指先に当る湘江の水勢を楽しみ、「兩岸の風景へ目をやるのは勿論僕にも不快ではなかった」としている。譚が政治や経済に関心を抱いているのは裏腹に、「僕」は触覚によって湘江の水を堪能し、視覚によって兩岸の風景を享受しているのであり、総身で長沙の自然を満喫しようとしているのだ。見事に粧った「支那美人」を乗せた一艘のモオタア・ボオトとすれ違った際にも、「これ等の支那美人よりも寧ろそのボオトの大迂りに浪を越えるのを見守」っており、人物よりもボオトが浪と調和している風景にこそ興味を寄せている。そのボオトに乗る「支那美人」をオペラ・グラスで眺めた際にも、「彼女の顔は」「格別美しいとは思はれなかった」が、「彼女の前髪や薄い黄色の夏衣裳の川風に波を打つてゐるのは遠目にも綺麗に違ひなかつた」としており、人物の顔そのものよりも、人物が自然の中に配合されている様子にこそ美を見出しているのである。長沙第一瞥の印象では、長沙の風景に対して落胆していたのが、一転してその風景を美観と見做すようになってきているのだ。

「侏儒の言葉（遺稿）」（『文芸春秋』一九二七年一〇月、一二月）中の「自然」の節には「我々の自然を愛する所以は、——少くともその所以の一つは自然は我々人間のやうに妬んだり欺いたりしないからである」とある。クリストフアー・マニスも次のように述べている。

タスカローラ・ネイティヴ・アメリカンの一人がかつて次のように言ったことがある。彼の部族の世界における経験と違って、西洋人にとっては「自然の無数の声は聞こえない」のだと。この違いは、アニミズム文化に関する人類学的研究によって実証されているものであり、私たちの社会と非人間的な世界との関係の、ある一面をくつきりと浮き彫りにしている。この側面は最近になってやっと、環境に関する討論において、明確なテーマとなり始めたばかりのものである。実際、話す主体としての地位が、嫉妬心から人間のみの特権として守られているという意味において、私たちの文化においては（また一般に文字社会において）、自然は沈黙しているのである。

(中略)

対照的に、アニミズム的な文化にとつて、すなわち、自然界を生きているものとして見る人々にとつては、人間だけでなく、動物や植物、あるいは石や川のような「自ら動かない」存在すら、言葉を話し、時に知性的でもある主体として、つまり良かれ悪しかれ、人とコミュニケーションし、相互作用できる主体としてみなされている。人の言語以外にも、鳥の、風の、ミミズの、狼の、滝の言語がある。(12)

文字社会においては一般に自然は沈黙しているということである。また、アラン・コルバンは「風景というのは距離を前提」にするとし「環境の中で展開することにより直接的な作用を受けないと感じるようになってはじめて、個人は観者的な立場をとり、風景が出現した」と述べている⁽¹³⁾。風景は沈黙しているということだ。前日に或女学校で排日的空気を肌で感じたことで、「僕」は、脅かしを与えることのない沈黙する自然・風景へと心理的に接近するのである。

「湖南の扇」の表現空間では自然は脅かしを与えないもの、(声)を発しないものとして「僕」の心に落ち着きを齎す役割を付与されているのだが、同時に、脅かしを与えないものは、自然に配合されて描写され、自然に比喻されることで、自然とアナロジーを持たされている。初見の含芳は、「枝のつまつた葉柳の下」にいたのであるし、身にまとうのも「水色」の夏衣裳⁽¹⁴⁾で、「蒼い湘江の水」との調和性を演出された装いなのである⁽¹⁴⁾。妓館で再会した際にも、含芳は「日かげの土に育つた、小さい球根」に隠喩化されている。脅かしを与えないものとして認知される含芳は、自然の中に佇み、自然と調和し、自然の事物を用いてメタファー化されるのだ。含芳の「友だち」の玉蘭に関する同様に、最初に見かけたとき前髪や衣装が川風に波打つことで彼女の美が見出されていたことは既述の通りだが、妓館で再会したときにも、玉蘭は「栗鼠」に隠喩化されている。脅かしを与えることのないものは、自然の事物との喩によって描写されるのだ。これに比して、譚は「ひよつとこ」にしか比喻されず、林大嬌も「テニスか水泳の選手らしい体格」としか譬えられていないうえ、彼らが自然との配合によって描写されることは一切

ない。

三、周縁からの脅かし

「僕」が長沙で受ける脅かしの中で最大のものは、案内役の譚永年という謎を秘めた人物である。「ひよつとこに近い」という比喻によって、譚は愛想の好いペルソナの背後に隠された顔を持っていることが暗示されていると言える。

湘南工業学校へ案内する「譚の提案は、単なる嫌がらせを越えて、自国の自負を内在させた所以であり、強固な自国意識と対抗意識に支えられていたものとして捉えられてくる」⁽¹⁵⁾という指摘は的確だ。譚が「僕」に解説する「日清汽船会社」にしても、「日本の経済侵入を象徴する建物」⁽¹⁶⁾である。「日本領事館」や「日清汽船会社」といった、帝国としての日本の政治的・経済的進出を象徴する建物を「僕」に提示することは、帝国主義の罪悪の象徴を「僕」に示すことに外ならない。譚は、排外的感情から「僕」に悪意を抱いていると言っている。

譚の排外的感情を「僕」は敏感に感じ取ったようで、例えば「譚の言葉は僕の耳に唯一つづりの騒音」と見做されるのであるし、彼の話は「退屈」に感じられるのである。加えて、「彼等の話してゐる言葉は一言も僕にはわからなかつた」という言語の不自由とともに、妓館において「時々彼等の目をやる」ことで、見られる立場に置かれる苛立たしさを感じる。長沙を見るはずだった「僕」は見られる位置に置かれるのだ。

こうした脅かしの感覚から、「僕」は脅かしを与えない含芳に「興味を感じ」、「大いに可愛」と思うのだと言っている。含芳は「仏蘭西人」のような発音で話すのだが、西洋人と自分をよそ者という点で重ね合わせていた「僕」にとって、含芳は同類の存在でもあるのだ。実際、彼女は「北京生まれ」の流民であり、地縁の論理から疎外されるよそ者なのであって、外国からやってきた「僕」に通底する系譜にあり、孤独な「僕」を安堵させてくれる存在であるとも言えるだろう。

しかし、脅かしを与えないものを措定し、それに寄りかかることは、どんな場合でも幻想に過ぎないだろう。妓館へ行ったことに関して、語り手である「僕」は、「同じ日の晩、或妓館の梯子段を譚と一しよに上つて行つた」と記述している。晩の何時頃なのか、妓館は湘江東岸にあるのか西岸にあるのか、中の島にあるのか、一切知ることができない。妓館での出来事を物語る際には時刻や場所が捨象されているのである。例えば、長沙に着いた当日のことは、「大正十年五月十六日の午後四時頃」「長沙の棧橋」に着いたとし、「嶽麓」へ向かう場面に関しては「翌々十八日の午後」「二時前後」に「中の島」を左にしながらかつて「湘江」を渡つたとし、長沙を発つ日に関しても、「五月十九日の午後五時頃」「沅江丸の甲板の欄干によりかかつてゐた」とされておき、いずれも日時・場所について、明確に特定できるよう記述されている。「紀行体」によつて「湖南の扇」を書くことは、塚谷周次が言うように、「芥川がむしろ意識的に計算した」⁽¹⁷⁾ことであろう。にもかかわらず、妓館の場面のみは、時刻も分らないし、妓館の場所も明示されていない。この空白は、妓館での出来事が、紀行文作家としての「僕」の座標軸では囲い込むことのできない、脅かしそのものであることを暗示しているだろう。

夙に溝部優実子が指摘しているように、玉蘭と含芳は土匪に関係している⁽¹⁸⁾。土匪になる要因としてフィル・ビリングズリーは、次のように言う。

ある種の自然地理的、政治地理的な環境のもとでは、抗しがたい勢いで賊活動の隆盛をみることもある。周期的に自然災害に見舞われて絶えず貧窮を強いられる地方、あるいは、伝統的な経済秩序がなんらかの理由で機能しなくなった地域、そうしたところで農業が成り立たなくなり暮らしの万策が尽き果てると、そこは騒然たる不法の地となる。また、政治の中心から遠く離れた僻地や、国境・省境・県境に近くて官憲の力が弱かったり分断されている地方、こういうところでも、生存の必要に駆られた住民が実力行使に訴える空気が強かった。そして、一年の四季の移りゆきのなかでも、食糧が乏しくなり、補いをつける農作業もなくなれば、やはり不法行為が表面化する。賊が生まれる要因にはさまざまなものがあるけれども、その公分母は、厳しい現実

が他の生存方法を不可能にしているという一事に尽きる。

言いかえれば、貧困こそが、不断に匪賊が生長する根元でくすぶりつづけているのであり、飢えこそが、不法行為への強力な拍車になっているのである。四川でとらえられたある賊徒は、軍の取り調べにたいして、「なぜ匪賊になったか知りたければおれの胃袋を開いて見てくれ」と答えた。興味をもった担当官が、処刑後に遺体を開いてみると、胃袋には野草以外にも入っていたいなかった。賊徒はしばしばこうも供述している。「ひとが梁山に登って賊の仲間になるのは、目の死に追い立てられるからだ」。(19)

「病的な弱々しさ」を持ち、「日かげの土に育った、小さい球根」を思わせる含芳は、確かに貧困者として形象化されているだろう。鳥籠の中の「栗鼠」を想起させる玉蘭も、栗鼠のように小胆で臆病なイメージで捉えられているのであり、貧窮する日陰者のイメージがある。含芳と玉蘭は、いずれも社会の中で周縁に配された人達なのだ。

それに対して、孔月が指摘するように、譚は「エリート層の青年」で「合理性と科学性を追究する西欧医学を身に付けた」「経歴」を持つ(20)。妓館の芸者の林大嬌は、「細い金縁の眼鏡」をかけているが、「今の支那では、女が眼鏡をかける事は、新流行の一つかも知れませんか」という「上海遊記」の記述を想起させれば、林大嬌が流行の先端を歩く者として設定されていることが分かる。西洋から輸入された「テニス」や「水泳」という運動の選手を想起させる体格も、林の摩登ニズムの性格を裏付ける。「ダイヤモンド」をいくつも輝かせて豊かさを誇示していることも併せて考えれば、林が譚の庇護と援助を受けて富者への参入を図っているだろうことが分かる。確かに、林は「躍るやうに譚の側へ歩み寄」るのであるし、譚も「得意さうに是了是了などと答へ」るので。林は譚への阿諛追従によって、豊かさと現代性を手に入れた人物なのだ。譚と林／含芳と玉蘭、彼此の対立は明らかだろう。譚と林が含芳や玉蘭に「敵意」を持つ理由の一つには、社会的な階層差による賤視がある。

譚や林は経済的主体としても文化的主体としても「僕」に対峙しうる存在であり、含芳と玉蘭は貧困者であるために「僕」に脅かしを与えない存在であるはずなのだが、「僕」が栗鼠を「気味の悪い見もの」だと感じたように、

やはり彼女たちも「僕」を脅かす存在であるようだ。夙に姚紅が「含芳と玉蘭を革命に関わる近代中国女性と見なすことは不自然ではない」⁽²¹⁾と指摘するように、彼女たちは女性革命家と見做しうるのであり、脅かしを与えないものではなく、実は政治的主体として「僕」を脅かす存在であったのだ。

もちろん、負けぬ気の強い玉蘭とは裏腹に、含芳は繊弱であえかな人物として造形されている。斬罪の話が出れば「耳輪を震はせながら、テエブルのかげになつた膝の上に手巾を結んだり解いたり」したり、玉蘭がビスケットを食べるときに「手の震へ」たりするのは、自分も斬罪に処せられるのではないかという内面の恐怖の表出であり、含芳の小心の表れである。しかし、譚永年らのいじめに屈することなく強い意志で自己主張する玉蘭は、含芳の成長形であり、含芳の将来の姿を暗示させるものである。栗鼠が「二匹」いたことは玉蘭と含芳の類縁性を裏付け⁽²²⁾、二人は対立としてではなく、ポジとネガの関係で捉えられるべきだろう。含芳にも将来大胆奔放に革命運動に身を捧げる日が来ることを、テキストは暗に示している。

「僕」が含芳に愛着を示すのは、彼女が子供のようで、貧しい人だと思つたからで、こうした抑圧的政治性を経て初めて、含芳を可愛がることができるのである。しかし、物語の展開はこのような自他の差異を無効にするものである。含芳とアナロジーを持たされた玉蘭が黄の血を染み込ませたビスケットを嚙む挙措は「負けぬ気の強い」「湖南の民の面目を示す」ものであるが、思えば「僕」も、「誰にでも急つかれると、一層何かとこだはり易い親譲りの片意地」を持ち合わせていた。「僕」と玉蘭のあわいに横たわる性格上の類縁性は、両者の差異を抹消し、自他混沌の状況を齎す。人血ビスケットを食べると無病息災になるという迷信を国辱と見做す譚に対して、「僕」が日本でも脳味噌の黒焼きがあつたことを言うのは、差異を無化する物語の団円の伏線になっていられると思われ、人血ビスケットの臭いを嗅ごうとするもすぐに興味索然とする「僕」の心理は、その反転としての結末への前奏としての意義を持つと思われるのだが、自他混沌の認識は「僕」を確かに脅かしたはずだ。

思えば、「僕」が脅かしを与えないものとして安らぎを感じ、含芳や玉蘭を比喻するのに用いていた自然も、最初

から脅かしの無気味な予兆を持っていた。長沙に到着した沅江丸から棧橋へ飛び降りる「薄汚い支那人」を「蝗」に比喩していたのがそれで、「蝗」は確かに脅かしを与えるものとして形象化されていたのである。指先で水勢を楽しんでいた湘江の水にしても、玉蘭の乗っていたモオタア・ボオトの残した浪によって、「僕の手をカフスまでずぶ濡れ」にする。関東大震災を受けて書かれた「大震に際せる感想」(『改造』一九二三年一〇月)の中で芥川は「自然の我我人間に冷淡なることを知らざるべからず」とし、「自然は人間に冷淡なり」と繰り返すのだが、自然を脅かしとして感じる芥川自身の感覚がこの小説に投影されていると見ることもできる。

長沙を旅立つエピローグで、「僕」は長沙を「無気味」に感じるのだが、この気味の悪さはもちろん、「暮色の影響」によるはずはなく、自他混沌の認知に起因するものだろう。

エピローグで旅行の滞在費を計算する「僕」に関して、片岡鉄兵は「作家としての芥川氏」(『文芸春秋』一九二七年九月)の中で「作者には、人生に対する何の興味も、熱情も、ロマンチズムも失はれて居る」としているが、私は、即物的で無関心な者の位置に己を据え置く意図であるように思われる。旅する「僕」の湖南におけるアイデンティティは、現地のコンテクストとは異なる価値を有することを確認する振る舞いによってしか構築できないからだ。滞在費を「日本の金に換算すると、丁度十二円五十銭だった」とするのも、日本の価値基準の中に湖南での出来事を囲い込むことによって、かろうじて自己同一性を保とうと努める所作であるように思われる。差異を仮設することで、「僕」は自己同一性を保とうと努めるのだ。

四、『支那遊記』の表現技法と「湖南の扇」

ところで、『支那遊記』で、芥川が中国の地に降り立って初めて見た中国人として紹介されるのは、次の二人である。

この図図しい婆さんと、昼間乗った馬車の馭者と、——これは何も上海の第一瞥に限った事ぢやない。残念な

がら同時に又、確に支那の第一瞥であつた。

中国で最初に出会う二人の他者は、東亜洋行というホテルへ向かうのに利用した馬車の馭者と、薔薇の花を売り歩く老婆である。馭者は、約束の金額では不足だとしてそれより高い金額の支払いを執拗にせがむ。花売りの老婆は、カッフェの戸口で薔薇を売ろうとしている時、酔っ払いのイギリスの水兵が乱暴に開けた戸によって、籠を落とし、薔薇を拾おうとするも、拾っている間に薔薇は水兵たちの靴に踏みじられる。それを見て気の毒に思ったジョオンズが籠の中に銀貨を抛り込んでやるが、「私」とジョオンズがカッフェを出ると、二人の前へ寄ってきてさらに金をくれるよう「乞食のやうに」手を出す。この二人の人物が、芥川の出会う初めての中国人として、彼の心に刻まれるのである。ここで着目したいのは外でもない。これらの人物は、単なる凡人ではなく、社会階層的に下位に属する、^{マージナル}周縁的な階層・境遇の人達であるということだ。

この異質な人物二人を、中国の第一印象として『支那遊記』の冒頭に配したのには、それなりの意味があるように思われる。というのは、中国を題材にした小説の中に、こうした異質な他者性を配するのは、谷崎潤一郎テクストの重要な特質であり、『支那遊記』では合計七回谷崎潤一郎について言及されているからである。

谷崎は、芥川に先立って、一九一八年十月から十二月にかけて、私費で、朝鮮、満州をへて中国大陸（北京、漢口、九江、廬山、南京、蘇州、上海、杭州）を旅行したのだが、この旅行をもとにした中国ものでは、周縁に属する人達が物語を彩る重要な役割を与えられている。芥川が『支那遊記』でたびたび言及する「天鷲絨の夢」『大阪朝日新聞』夕刊、一九一九年一月二七日〜二月二〇日）は、その好例である。「天鷲絨の夢」は、「世にも不思議な歓楽に耽つて居た」温秀卿らの生活を、その物語の中に出てくる「数人の奴隷の言葉を借りて」その陳述をありのままに順々に記載するという体裁をとる。その奴隷たちは、「大概幼い時に拐かされて人買いの手へ売り渡され、それから更に奴隷として温秀卿と其の寵妾との「歓楽の道具」となるべく其の家へ売り込まれた」人達だ。芥川が「南京の基督」『中央公論』一九二〇年七月）の執筆に際して舞台設定を依拠した「秦淮の夜」『中外』一九一九年二月、『新小説』同三月）で

も、「私」が最も愛着を感じるのは、素人の娼婦である。「私」の案内者は次のようにいう。「この女は、この頃世間が騒がしいのでお客が無くて困つて居ると云ふのです。最初は十弗だと云つて居ましたが、六弗に負けると云ひ出しました。談判をすれば大丈夫三弗までには負けるでせう」。「力を籠めてぎゆつと圧したらば、壊れてしまひさうな柔かな骨組」の「小さな愛らしい顔」をしたこの「花月楼」^{ホウイェーロー}に、「私」は「挟んだ顔をいつまでも放したくないやうな、激しい情緒」を感じる。

異質で非常なものを記述の対象としながら、そうした適度な刺戟を懐にして富とし、詩情として欲深く消費する。谷崎の中国もの特質の一つはこの点にある。

谷崎の名を頻りに登場させる『支那遊記』の冒頭で、周縁的人物二人を中国の第一印象として配する構造は、谷崎テクストを多分に意識したものと云える。『支那遊記』で試みられているのは、谷崎テクストが物語を彩る富として回収した周縁的人物を、経済的主体として脅かしを与えるものとして描き直すことであつたのではないか。馬車の馭者と花売りの老婆という、定常系から外れた二つの過剰な他者性を、経済的主体として自己主張する人物として定位し直しているのである。川本三郎は、「芥川龍之介の『支那遊記』は、よく読むと、佐藤春夫や谷崎潤一郎ら、ロマンチックに「支那趣味」をうたいあげる耽美派作家に対する、理智派作家のアンチテーゼになつてい」て、「支那趣味」派のロマンチズムの裏に潜むアナクロニズムに対する批判にみちている」と指摘している⁽²³⁾が、中国の中の周縁表象という問題系にレンズの焦点を合わせれば、芥川が試みた反指定の内実がより明確になるだろう。谷崎と芥川、両者の表現空間の差異を具体的に特定しなければならぬ。

『支那遊記』で試みられた描き直しのもう一つは、自然描写の問題系である。「江南遊記」には徳富蘇峰が中国の自然を賞讃したことに關して、次の二つの記述がある。

○何時か蘇峰先生の「支那漫遊記」を読んでゐたら、氏は杭州の領事にでもなつて、悠悠と余生を送る事が出来れば、大幸だとか何とか云ふ事だつた。しかし私は領事どころか、浙江の督軍に任命されても、こんな泥池を

見てゐるよりは、日本の東京に住んでゐたい。

○断橋、孤山、雷峰塔、——それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである。

『支那漫遊記』（民友社、一九一八年六月）は各地の山水明媚に筆を向けるが、芥川は『支那遊記』で、そうした自然を評価するという論理を見事に反転して見せる。蘇峰が愛でた西湖の風景を「泥池」と誹り、自然よりも人間に興味を持つと揚言することで、蘇峰の中国表象に対する対抗の意味合いを持たせているのだ。（芥川の読みでは）蘇峰は中国の自然をエキゾチックに評価したのだが、芥川には中国の激動する社会情勢を無視する蘇峰の中国の評価方法を崩す必要があつたのだらう。

自然を脅かしを与えないものとして定位してマージナルなものを自然に重ね合わせることで見出された安らぎを、それらの脅かしを見出すことで最終的には崩していくという「湖南の扇」のプロットは、芥川が『支那遊記』執筆のときに考えていた自然を愛でることに対する懐疑がもとになっていると言えるだらう。自然を愛でることは、芥川にとっては、脅かしに目をつぶることとして批判されねばならないことだったのである。

このように考えれば、「湖南の扇」のモチーフの一つが自ずと分かるだらう。自然を愛でることで中国の風景を富として囲い込み、周縁的人物を適度な刺戟として詩情を起こさせる源として利用するという先行テクストの表現構造と差異化を図ること。中国を描写する新しい表現方法を模索した『支那遊記』の論理（24）を、小説の世界に持ち込んだ野心的な試みの痕跡が、この小説には確かに認められる。

五、エリートと保守性

ところで、譚が「一高から東大の医科へはひった留学生」の「同期」なのであるから、「僕」も「一高」から「東大」を経たエリートだと推測できる。エリートの「僕」は、含芳や玉蘭が女性革命家だと直感して脅かしの感情を

受けている。自他混沌の認知に由来したものが、そのみによつては「僕」の脅かしは説明できそうもない。

革命思想は何故にエリートを脅かすのだろうか。それは、現体制がエリートたる「僕」を肯定し、評価するシステムだからである。エリートは現時点での社会システムによって選抜されることでエリートたることができているのである。したがって、その現体制を揺るがす思想は受け入れることはできないだろう。玉蘭や含芳の革命家たることを感じて脅かしを受けなければならぬ「僕」の形象からは、この時代のエリートの保守性を垣間見ることができるようだ。

この保守性は、エリートという身分集団の軽さ、深みのなさを表していよう。脅かしを受けたとき、自然や周縁的なものに頼ることで、脅かしから逃れようとする意識は、「僕」が真の出会いを拒否しているということを示している。「湖南の扇」では、真の出会い——中国の排日の趨勢や革命運動といった他者との出会いを受け入れないエリートとの排除性が描かれている。

注

- (1) ダニエル・J・ブーアステイン『幻影の時代 マスコミが製造する事実』（星野郁美・後藤和彦訳、東京創元新社、一九六四年一〇月）。
- (2) 日本についても同様。藤森清「明治三十五年・ツォリズムの想像力」（小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー 明治三十年代の文化研究』小沢書店、一九九七年五月）を参照されたい。
- (3) 塚谷周次「『湖南の扇』論考——芥川竜之介晩年の位相——」（『日本文学』一九七二年一月）。
- (4) 青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（承前）」（『関東学園大学紀要 経済学部編』一九八九年十二月）。
- (5) 関口安義『特派員芥川龍之介——中国でなにを視たのか——』（毎日新聞社、一九九七年二月）。
- (6) 単援朝「芥川龍之介「湖南の扇」の虚と実——魯迅「薬」をも視野に入れて」（『日本研究』二〇〇二年二月）、姚紅「湖南の

- 扇」論——情熱的な中国女性」(『文学研究論集』筑波大学比較・理論文学会、二〇〇九年二月)など。
- (7) 江藤茂博「芥川龍之介『湖南の扇』論——「僕」という仕掛け」(『十文字国文』二〇〇〇年三月)。
- (8) 孔月「『僕』の〈支那趣味〉装置——「湖南の扇」論」(『芥川龍之介中国題材作品と病』学術出版会、二〇一二年九月)。
- (9) 單援朝「芥川龍之介『支那遊記』の世界——夢想と現実との間——」(『国語と国文学』一九九一年九月)。
- (10) 張蕾『芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡——』(『国書刊行会』二〇〇七年四月)。
- (11) 塚谷周次、前掲「『湖南の扇』論考——芥川竜之介晩年の位相——」、神田由美子「芥川龍之介『湖南の扇』」(『解釈と鑑賞』一九九七年一二月)など。
- (12) クリストファー・マニス「自然と沈黙——思想史のなかのエコクリティシズム」、城戸光世訳(『緑の文学批評——エコクリティシズム』松柏社、一九九八年一〇月)。
- (13) アラン・ユルバン『風景と人間』(小倉孝誠訳、藤原書店、二〇〇二年六月)
- (14) 「湖南の扇」では、主要人物の衣装の色がすべて異なっており、象徴性が付与されているように思われる。含芳は「水色」の夏衣、玉蘭は「薄い黄色」の夏衣、譚永年は「鼠色」の大掛兒、林大嬌は「白い夏衣」を着ている。玉蘭の「黄色の夏衣」は「黄六一」との親和性を意味すると思われる。「上海遊記」の「十三 鄭孝胥」は、清貧に処していると伝えられる鄭孝胥の家が意外にも立派で、ちまたの噂が嘘であったことを暴く話だが、その鄭の家は「鼠色」だし、鄭が着ているのは「薄鼠の大掛兒」であることから、譚永年の「鼠色の大掛兒」は富裕さの象徴であると思われる。林大嬌の「白い夏衣」は彼女の個性のなさを象徴するか。
- (15) 溝部優実子『『湖南の扇』——含芳の「扇」を糸口として』(『日本女子大学紀要 文学部』一九九九年三月)。
- (16) 倉持丘「『湖南の扇』と芥川龍之介の植民地主義批判」(『解釈』二〇〇二年二月)。
- (17) 塚谷周次、前掲「『湖南の扇』論考——芥川竜之介晩年の位相——」。
- (18) 溝部優実子、前掲『『湖南の扇』——含芳の「扇」を糸口として』。

- (19) フィル・ピリングズリー『匪賊 近代中国の辺境と中央』（山田潤訳、筑摩書房、一九九四年一〇月）。
- (20) 孔月、前掲「僕」の〈支那趣味〉装置——「湖南の扇」論」。
- (21) 姚紅、前掲「湖南の扇」論——情熱的な中国女性」。
- (22) 溝部優実子、前掲『湖南の扇』——含芳の「扇」を糸口として」に、「二匹の栗鼠は、玉蘭の、さらには含芳のメアファーとして機能しているといえるだろう」とある。
- (23) 川本三郎『大正幻影』（新潮社、一九九〇年一〇月）。
- (24) 秦剛は「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象——〈支那趣味〉言説を批判する『支那遊記』——」（『国語と国文学』二〇〇六年一一月）で、『支那遊記』における芥川の〈支那趣味〉批判」を読み取っているが、本章は〈支那趣味〉批判の具体相として周縁的人物及び自然の表象に着目したものである。

終章

最後に、第一章から第九章までの内容を振り返り、序章で掲げた問題意識と照らし合わせつつ、本稿の最終的な結論を導き出したい。

第一章で扱った「片恋」では、ハイカラ文化との差異化を余儀なくされる知識人の姿が描かれている。お徳という芸者は、横浜に住み、外来の娯楽である映画を享受し、西洋人俳優に恋している。そのお徳の物語を語る「友だち」は「大学を出た」知識人であり、農民的文化のエートスと西洋文化へのコミットメントを併せ持ち、外来語を用いると同時に、伝統的な用語をも使用している。彼が自らの農民的エートスを強調するのは、ハイカラ文化との差異化を図るためである。彼がハイカラ文化を享受するお徳を冷笑するのは、自らの威信を再定位化するためである。ここに、ハイカラ文化によって不安を与えられ脅かされる知識人の像を見ている。

大正期は、映画をはじめとした、西洋由来のマス・カルチャーが下層階級の人たちにも浸透した時代である。それによって、それまで西洋文化の特権的に受容していた知識人が脅かされるといふ事態が到来した。友だちはそうした知識人の典型である。「片恋」では、マス・カルチャーに脅かされ、マス・カルチャーと差異化したい知識人の欲望が描かれているのである。

第二章で扱った「首が落ちた話」では、清の騎兵何小二の人生を様々な人物が物語っていた。語り手の語りは、〈立場をもたない語り〉であり、日本・中国のいずれかを上位に位置づけることをしない。木村陸軍少佐の語りは〈中国賤視の語り〉であり、日本を上位化する語りである。「神州日報」の語りは、〈中国の国家主義的語り〉であり、中国の英雄を創出しようとする語りである。山川理学士の語りは〈人間不信の語り〉であり、人間の発言を信用しない。

木村陸軍少佐と山川理学士とはいずれも知識人であり、何小二は階級の低い兵卒であることも注目される。陸軍

少佐は、清に対して日本、下級兵士に対して少佐、という二つの優越をもとに、何小二の人生を貶価する。木村の語りを相対化するのが、山川理学士の語りであり、彼の語りは人間の發言を信用しない。データに重きを置く理学士という知識人が、軍人を相対化するために活用されているのだ。そこには、軍人と己とを差異化したいという理学士の欲望も窺えよう。

第三章で扱った「葱」では、逸脱した知識人・田中君と、カフェーの女給・お君さんが登場する。二人の物語を紡ぐ「作者」は、知識人相手の小説を書く正統的審級の小説家である。田中君は、詩・音楽・美術・演劇に通じた「芸術家」であるが、性が放縦でもある点で、逸脱した知識人であると言える。一方で、「おれ」は高級芸術を手放し、通俗小説に走らなければならぬ。知識人と、一般的な労働者やサラリーマンとの境界とを揺るがせる事態が起こりつつあると言える。だからこそ、知識人の輪郭をはっきりさせたいという欲望が、田中君への不快感につながるのである。この田中君を「おれ」は規範のもとに困い込む。他方、お君さんは「おれ」に同一視される。これは、需要過剰の文学市場が形成されたことで揺らいだ文学者意識が、通俗小説を享受する読者層への共感を余儀なくされたこと、民衆を文化的主体と見做す言説が増えてきたことが遠因にある。また、お君さんは主婦予備軍として造形されているが、カフェーの女給を良妻賢母主義に封じ込めようとする「作者」自身の欲望を表すと考えられる。と同時に、彼女は自立した女性となる物語をも与えられている。これは、「作者」にとって女性が了解不可能なものとして映じていたからだろう。

モダニズム型知識人に脅かされた正統的知識人が、モダニズム型知識人を困い込む物語が析出できると同時に、民衆や女性との出会いによって、彼らを欲望のもとに困い込んだり、表象不可能なものとして表現したりする物語をも見出せる。「葱」では、モダニズム型知識人・民衆・女性と出会った知識人の欲望や戦略が描かれている。

第四章で扱った「秋」では、〈女の知の系譜〉と〈新中間層〉に対する語り手の対抗意識が描かれていた。この小説の語り手は、旧制高等学校を経た東京帝大卒の正系知識人を特権化し、〈女の知の系譜〉と〈新中間層〉を貶価し

ている。インテリ女性に対する警戒から、男性を同性間関係の親密さによって特徴づけ、その希薄な女性との間に断層をつくった。男女の差異化を図るのは、女性知識人の職業への道を閉ざすためである。また、新中間層と正系知識人との差異化も図られている。新中間層を合理性によって特徴づけ、正系知識人を人情によって色づけているのである。これら二つの差異化戦略により、〈女の知の系譜〉と〈新中間層〉を貶値し、正系知識人を特権化しているのが、「秋」という小説の構造である。

女流作家が台頭し、女子大学が創設されたこの時期は、インテリ女性が澎湃と出現した時期と言える。また、サラリーマン層の厚みが都市部を中心に増したことで、知識人が増大した時期でもある。このため、正系知識人は、傍系知識人との差異化を図る欲望に迫られたのだ。そのことを鮮やかに示すのが「秋」である。

第五章で扱った「南京の基督」では、第一に、中国の近代化を描いていた。中国の近代化を描くことは、中国を古い国として記述するオリエンタリズムの思考からは免れているが、日本と同じように中国に近代化を期待する点で、知識人の側に立つ語り手の欲望を表しているとも言える。第二に、この作には母胎回帰の物語が見られる。中国にエキゾチックな美を期待するオリエンタリズムの思考も併せ持っているものであり、中国に対する知識人の二重の欲望が窺えるだろう。第三に、語り方に知識の排除と知識の肯定の両方が見られる。谷崎潤一郎の「秦淮の夜」との比較検討から、「南京の基督」の語りは、中国の人や土地を一般化して捉えることをせず、中国や中国人を語る際、日本との比喻を通して語ることをしないうえ、持っている情報量が非常に少ないということが分かった。一般化したり、日本の比喻を用いたり、情報量が多いという語りは、知識の暴力性を示すものである。「秦淮の夜」が持つ知識の暴力性の排除に努めたのが「南京の基督」であった。同時に、この小説の語りには外的焦点化のパスペクティブも持ち合わせている。語り手がヒロインの宋金花とは異なる認識を示しており、知識人の視点から金花に寄り添う視点を相対化している。知識の肯定と否定との矛盾したスタンスを持つ語り手からは、中国の娼婦を語る知識人の、娼婦と己とを差異化したいという欲望と、その欲望を抑え込みたいという戦略が読み取れるだろう。

大正期は、中国に関する言説が量産された時代である。「南京の基督」もそうした言説のうちの一つである。「南京の基督」からは、中国を語る知識人の欲望と戦略が読み取れるのである。

第六章で扱った「妙な話」は、「私」の旧友・村上が、「私」と村上の妹・千枝子との不倫を、隠微に詰問した推理ショーである。村上が擁護する千枝子の夫が第一次世界大戦後、日本の外交的・軍事的に貢献したエリートであったのとは裏腹に、「私」は朝鮮で働くことを余儀なくされた、エリートの中の脱落者である。村上は特権的な立場から「私」の不倫を詰ることになるが、その特権性は、超感覚のイメージが付与されることで、作品外コンテクストから相対化しうる。エリートの中のエリートと、エリートの中の落伍者とが区分けされているわけだが、作品の構造は前者を相対化するものである。この作では、エリートの中の落伍者に対して温かいまなざしが、エリートの中のエリートに批判的な視座が注がれている。そして、エリートの中のエリートの権威主義的欲望が描かれている。

エリートの中のエリートと言っても、東京帝大を経た正系の学歴エリートではなく、千枝子の夫は海軍の武官である。それに対し、「私」は軍人ではないと考えるのが普通の読みである。芥川が、この作でエリートの中のエリートを相対化しえたのは、彼が軍人だからであるだろう。芥川にとって軍隊エリートは相対化しうるものだったのだ。正系学歴エリートとしての作者の欲望に着目することで、「妙な話」の相貌はより鮮明になるのだ。この作には、軍人に対する貶価が見られるのである。

第七章では保吉物を取り上げた。「保吉の手帳から」の〈わん〉では、就きたくない教職に就いているという現状が、乞食に同一化するのに用いられ、権力とのへだたりをつくっている。「あばばばば」でも、権力とのへだたりをつくる装置が見られる。エリートを平凡な人間として叙述することで、平凡な女の平凡な幸福を描くことを可能にし、海軍の欲望に抗しているのだ。高等教育は、貧しい階層（プチブル）の子弟を基盤としていた。そのため知識人は、下層の人たちに同一化しやすいのである。これら二作は、知識人としての欲望を抑え込む戦略が描かれている。

と言えるだろう。

「寒さ」では、文学者の造形に、軍隊批判が見られる。理学士と文学者を対比し、前者を公式主義的な人物、後者を、同情し、事物を（個）として見る人物として描いている。この作には文学部卒特有の矜持が見られる。文学部は、経済的な期待収益が少なくなる分、文化資本への思い入れが強くなる。そのため、文学的なものの見方に矜持を抱きやすい。人に対して同情し、具体性を持って事物を見るといいう、文学的なものの見方を誇りと思いやすいのである。

第八章で扱った「馬の脚」では、北京在住の知識人が、知識人としてのステイタスシンボルに執着する様子が描かれている。衛生意識を身に着け、蓄音機をかけ活動写真を見に行くことで芸術を解し、洋服を着て日本間を西洋間に変えるという生活様式は、中間層にとつての理想的なものとして語られたものであった。ジャーナリズムで語られた中間層の理想的な生活様式を取り入れる半三郎夫妻の生活は、異国で共同性を創り上げるのに役立っている。その共同性が差別を招来するありようを描いているのがこの作であり、それを描くことで、知識人という身分集団の共属意識を風刺しているのである。

知識人を風刺しえたのは、「馬の脚」の主人公が商科大学卒だからだろう。帝大卒の芥川にとつて、商科大学卒という学校歴の人物は相対化できたのである。正系知識人にとつて傍系の学歴エリートによつて担われた中間層は、批判の対象になり得たのである。

第九章で扱った「湖南の扇」では、知識人の保守性が描かれている。中国の不衛生や中国人の攻撃性、中国の排日的趨勢や革命運動に脅かされる「僕」は、異国の他者性に脅かされているのだと言える。「僕」が脅かしを受けるのは、知識人が保守的だからである。知識人という身分集団は、現体制の中で特権を享受している。だから、現体制と異なる文化や、現体制に抗う運動には共感を示すことが難しくなる。

大正期は、中国や朝鮮の日本に対する対抗意識が伝わってきた時期である。また、マルクス思想の流入した時期

でもある。異国の排日運動や革命思想の伝播は、保守性を持つ知識人を脅かしたはずだ。そうした知識人の保守性がこの作にはしたためられているのである。

芥川龍之介文学は、知識人が他の身分集団、あるいは他の知識人集団と出会うときに働く欲望や戦略が描かれているのだ。この欲望や戦略を明らかにすることで作品の読みを新しくし得たと思う。

初出一覧

- 第一章 芸者の恋と欲望する語り——「片恋」論——（芸者の恋と欲望する語り——芥川龍之介「片恋」論——）
『文学・語学』第二二二号、二〇一八年五月
- 第二章 「首が落ちた話」論——日清戦争と語りの戦略——（芥川龍之介「首が落ちた話」論——日清戦争と語りの戦略——）
『文学・語学』第二二二号、二〇一八年五月
- 第三章 「葱」論——軽薄な知の系譜と知識人——（芥川龍之介「葱」論——軽薄な知の系譜と知識人——）
明治大学大学院『文学研究論集』第四三号、二〇一五年九月
『芥川龍之介研究』第一二号、二〇一八年七月
- 第四章 正系知識人を特権化する差異化戦略——「秋」における〈インテリ女性〉と〈新中間層〉——
書き下ろし
- 第五章 「南京の基督」論——中国を語ること——（芥川龍之介「南京の基督」論——中国を語ること——）
明治大学大学院『文学研究論集』第四〇号、二〇一四年二月
- 第六章 愛と権力——「妙な話」論——（愛と権力——芥川龍之介「妙な話」論——）
明治大学大学院『文学研究論集』第四四号、二〇一六年二月
- 第七章 保吉物と軍隊——「保吉の手帳から」「あばばば」「寒さ」——（芥川龍之介の保吉物と軍隊）
明治大学大学院『文学研究論集』第五〇号、二〇一九年二月予定
- 第八章 北京の駐在員の物語——「馬の脚」における日本人社会システム——
書き下ろし
- 第九章 旅——「湖南の扇」論——（旅——芥川龍之介「湖南の扇」論——）
『芥川龍之介研究』第一〇号、二〇一六年三月

主要参考文献

一、単行本

- 青木保他 編『知識人』（岩波書店、一九九九年九月）
- 朝尾直弘 他 編『岩波講座 日本通史 第16巻 近代Ⅰ』（岩波書店、一九九四年一月）
- 東敏雄編『大正から昭和初年の農民像』（御茶の水書房、一九八九年九月）
- 足立直子『芥川龍之介 異文化との遭遇』（双文社出版、二〇一三年二月）
- アラン・コルバン『風景と人間』（小倉孝誠訳、藤原書店、二〇〇二年六月）
- 安斎育郎、李修京編『クラルテ運動と「種時く人」——反戦文学運動「クラルテ」の日本と朝鮮での展開』（御茶の水書房、二〇〇〇年四月）
- 安藤公美『芥川龍之介 絵画・開化・都市・映画』（翰林書房、二〇〇六年三月）
- 一柳廣孝『催眠術の日本近代』（青弓社、一九九七年一月）
- 一柳廣孝『無意識という物語』（名古屋大学出版会、二〇一四年五月）
- 稲垣恭子『女学校と女学生』（中央公論新社、二〇〇七年二月）
- 稲垣恭子・竹内洋編『不良・ヒーロー・左傾——教育と逸脱の社会学』（人文書院、二〇〇二年四月）
- 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『セクシュアリティの社会学』（岩波書店、一九九六年二月）
- 今田高俊『社会階層と政治』（東京大学出版会、一九八九年一月）
- 上田博、池田功、前芝憲一編『小説の中の先生』（おうふう、二〇〇八年九月）
- 鶴飼哲、酒井直樹、テッサ・モリス・スズキ、李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』（以文社、二〇一二年一〇月）
- 内田隆三『探偵小説の社会学』（岩波書店、二〇〇一年一月）
- エドワード・W・サイド著、板垣雄三・杉田英明監修・今沢紀子訳『オリエンタリズム』（平凡社、一九九三年六月）

- 海老井英次、宮坂寛編『作品論 芥川龍之介』（双文社出版、一九九〇年一二月）
- 奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキャンダル』（平凡社、二〇〇〇年七月）
- 金田晋編『芸術学の一〇〇年』（勁草書房、二〇〇〇年六月）
- 川村邦光『セクシュアリティの近代』（講談社、一九九六年九月）
- 川本三郎『大正幻影』（新潮社、一九九〇年一〇月）
- 菅野聡美『消費される恋愛論 大正知識人と性』（青弓社、二〇〇一年八月）
- 久米依子『少女小説』の生成 ジェンダー・ポリティクスの世紀』（青弓社、二〇一三年六月）
- 孔月『芥川龍之介中国題材作品と病』（学術出版会、二〇一二年九月）
- 小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギ― 明治三十年代の文化研究』（小沢書店、一九九七年五月）
- 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』（勁草書房、一九九九年一〇月）
- 権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』（新潮社、二〇〇〇年二月）
- 篠崎美生子『弱い「内面」の陥穽——芥川龍之介から見た日本近代文学——』（翰林書房、二〇一七年五月）
- 進藤純孝『芥川龍之介』（河出書房新社、一九六四年一月）
- 鈴木健二『デジタルは「国民」国家を溶かす——新メディアの越境・集中・対抗』（日本評論社、二〇〇七年八月）
- 関口安義編『アプローチ 芥川龍之介』（明治書院、一九九二年五月）
- 関口安義『特派員芥川龍之介——中国でなにを視たのか——』（毎日新聞社、一九九七年二月）
- 高橋博史『芥川文学の達成と模倣——「芋粥」から「六の宮の姫君」まで』（至文堂、一九九七年五月）
- 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、一九九九年四月）
- 竹内洋『競争の社会学 学歴と昇進』（世界思想社、一九八一年九月）
- 竹内洋『教養主義の没落』（中央公論新社、二〇〇三年七月）

- 竹内洋『大衆モダニズムの夢の跡 彷徨する「教養」と大学』（新曜社、二〇〇一年五月）
- 竹内洋『立志・苦学・出世 受験生の社会史』（講談社、二〇一五年九月）
- 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』（日本放送出版協会、一九九七年十一月）
- ダニエル・J・ブーアスティン『幻影の時代 マスコミが製造する事実』（星野郁美・後藤和彦訳、東京創元新社、一九六四年一月）
- 趙景達『植民地朝鮮と日本』（岩波書店、二〇一三年二月）
- D・A・ミラー『小説と警察』（村山敏勝訳、国文社、一九九六年二月）
- 成田龍一『近代都市空間の文化経験』（岩波書店、二〇〇三年四月）
- 成沢光『現代日本の社会秩序——歴史的起源を求めて』（岩波書店、一九九七年十一月）
- 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』（中央公論新社、二〇〇三年七月）
- 日本史研究会京都民科歴史部会編『天皇制を問う——歴史的検証と現代』（人文書院、一九九〇年九月）
- 檜山幸夫編『近代日本の形成と日清戦争——戦争の社会史——』（雄山閣出版、二〇〇一年四月）
- 平岡敏夫『芥川龍之介』（大修館書店、一九八二年十一月）
- 平間洋一『第一次世界大戦と日本海軍——外交と軍事との接続』（慶應義塾大学出版会、一九九八年四月）
- フィル・ビリングズリー『匪賊 近代中国の辺境と中央』（山田潤訳、筑摩書房、一九九四年一〇月）
- 三好行雄『芥川龍之介論』（筑摩書房、一九七六年九月）
- 牟田和恵『戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性』（新曜社、一九九六年七月）
- 武藤清吾『芥川龍之介の童話 神秘と自己像幻視の物語』（翰林書房、二〇一四年二月）
- 村上泰亮『新中間大衆の時代——戦後日本の解剖学』（中央公論社、一九八四年一月）
- 村上好俊編『女性・ことば・表象——ジェンダー論の地平』（大阪教育図書、二〇一七年九月）

- 柳父章『翻訳学問批判——日本語の構造、翻訳の責任』（日本翻訳家養成センター、一九八三年十二月）
- 山本喜誉司評伝編集委員会『山本喜誉司評伝』（サンパウロ人文科学研究所、一九八一年三月）
- 山本芳明『カネと文学 日本近代文学の経済史』（新潮社、二〇一三年三月）
- 楊海英『植民地としてのモンゴル 中国の官制ナショナリズムと革命思想』（勉誠出版、二〇一三年六月）
- 横須賀市史編纂委員会『横須賀市史』（横須賀市役所、一九五七年三月）
- 吉田裕『日本の軍隊』（岩波書店、二〇〇二年十二月）
- 吉見俊哉『都市のドラマトウルギー——東京・盛り場の社会史——』（弘文堂、一九八七年七月）
- リンダ・ハッチオン著、辻麻子訳『パロディの理論』（未来社、一九九三年三月）
- 歴史教育者協議会編『紀元節』（淡路書房新社、一九五八年一月）
- 渡部直己『日本小説技術史』（新潮社、二〇一二年九月）
- Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturalization*, Routledge, 1992

二、雑誌（特集）・紀要所収論文

- 青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説（承前）」（『関東学園大学紀要 経済学部編』一九八九年十二月）
- 石谷春樹「芥川文学における〈保古物〉の意味」（『三重法経』一九九八年三月）
- 石原千秋「百年前の男と女 雑書から覗く明治・大正⑩ 男は神経衰弱、女はヒステリー」（『本』二〇〇六年七月）
- 井上諭一「小説のこわし方についての試論——一九二〇年前後の芥川龍之介の方法——」（『弘学大語文』一九八八年三月）
- 江藤茂博「芥川龍之介「片恋」論——重層する語りのなかで浮かび上がるフィルムの質感」（『十文字国文』二〇一二年三月）
- 江藤茂博「芥川龍之介「湖南の扇」論——「僕」という仕掛け」（『十文字国文』二〇〇〇年三月）
- 遠藤久美江「芥川龍之介「寒さ」の位置」（『藤女子大学国文学雑誌』一九七五年四月）

- 大西永昭「戦略としての〈売文〉小説——芥川龍之介「葱」試論——」(『日本近代文学』二〇〇九年五月)
- 蒲生芳郎「芥川龍之介『秋』私見——信子の造形をめぐって——」(『キリスト教文化研究所研究年報』一九九三年三月)
- 神田由美子「芥川龍之介と永井荷風」(『東洋学園大学紀要』一九九三年七月)
- 神田由美子「車中と停車場の光景 芥川文学における近代的空間」(『芥川龍之介研究年誌』二〇〇九年三月)
- 神田由美子「〈路上〉の男女 「葱」の方法」(『芥川龍之介研究年誌』二〇一〇年九月)
- 邱雅芬「中国旅行後の芥川龍之介文学——「馬の脚」の世界——」(『Comparatio』二〇〇四年六月)
- 國末泰平「馬の脚」 冥界からの生還」(『芥川龍之介の文学』和泉書院、一九九七年六月)
- 熊谷信子「芥川龍之介の描いた日清・日露戦争——「首が落ちた話」——」(『遊卵船』二〇〇四年六月)
- 倉持丘「湖南の扇」と芥川龍之介の植民地主義批判」(『解釈』二〇〇二年二月)
- 栗栖真人「芥川龍之介「南京の基督」論」(『別府大学紀要』別府大学会、一九八四年一月)
- 桑原丈和「リアリズムへの悪意——現実と小説の(無)関係——」(『近畿大学日本語・日本文学』二〇〇二年三月)
- 五島慶一「左様なら。お君さん。——芥川龍之介「葱」と通俗小説——」(『日本近代文学』二〇〇三年一〇月)
- 五島慶一「南京の基督」論——〈物語〉と語り手——」(『日本近代文学』二〇〇〇年五月)
- 小谷野敦「貞操の近代文学史——近代恋愛へのマルジナリア——」(『比較文学研究』二〇〇三年九月)
- 坂上博一「すみだ川」の意味」(『日本文学』一九七一年一二月)
- 鷺只雄「南京の基督」新攷——芥川龍之介と志賀直哉——」(『文学』一九八三年八月)
- 佐谷眞木人『日清戦争——「国民」の誕生』(講談社、二〇〇九年三月)
- 秦剛「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象——〈支那趣味〉言説を批判する『支那遊記』——」(『国語と国文学』二〇〇六年一月)
- 秦剛「〈告白〉を対象化した〈お伽噺〉——芥川龍之介の小説「馬の脚」を中心に——」(『国語と国文学』一九九九年二月)
- 水洞幸夫「首が落ちた話」・「西郷隆盛」の位置——解釈する人々——」(『学葉』一九九〇年)

- 須田千里「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』——その典拠と主題をめぐって——」(『光華日本文学』一九九六年八月)
- 関口安義「『首が落ちた話』論——人生のしたたかな眼」(『芥川龍之介研究年誌』二〇〇七年三月)
- 関口安義「寂しい諦め——芥川龍之介「秋」の世界——」(『国文学論考』一九八四年三月)
- 高田知波「妹と姉、それぞれの幻像——芥川龍之介『秋』を読む——」(『駒沢国文』二〇〇九年二月)
- 高橋龍夫「『南京の基督』試論」(『稿本近代文学』一九八八年一〇月)
- 田沼伊都子「芥川龍之介「あばばば」論——社会的役割の変化による個の喪失——」(『白百合女子大学言語・文学研究センター』言語・文学研究論集』二〇一五年三月)
- 田沼伊都子「芥川龍之介「寒さ」論——機械的行為に表れる人間らしさ——」(『白百合女子大学言語・文学研究センター』言語・文学研究論集』二〇一七年三月)
- 田沼伊都子「芥川龍之介「保吉の手帳から」論——変化する俗世間との関わり方——」(『白百合女子大学言語・文学研究センター』言語・文学研究論集』二〇一三年三月)
- 田沼伊都子「芥川龍之介「湖南の扇」の虚と実——魯迅「薬」をも視野に入れて」(『日本研究』二〇〇二年二月)
- 単援朝「芥川龍之介『支那遊記』の世界——夢想と現実との間——」(『国語と国文学』一九九一年九月)
- 単援朝「『馬の脚』から『河童』へ——中期以後の芥川文学の一面——」(『稿本近代文学』一九九一年一月)
- 張蕾「芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡——」(『国書刊行会』二〇〇七年四月)
- 陳諭霖「芥川龍之介の戦争作品における怪奇的要素の問題——「妙な話」、「奇怪な再会」を通して——」(『日本語日本文学』二〇一二年一月)
- 塚谷周次「『湖南の扇』論考——芥川龍之介晩年の位相——」(『日本文学』一九七二年一月)
- 永井敦子「探偵小説の中の〈監視権力〉——谷崎潤一郎「途上」における探偵と被疑者——」(『日本近代文学』二〇〇四年一〇月)
- 中寫邦「大正期の生活論」(和歌森太郎先生還暦記念論文集編集委員会『明治国家の展開と民衆生活』弘文堂、一九七五年六月)

- 長沼光彦「芥川龍之介「寒さ」の空間」(『京都ノートルダム女子大学研究紀要』二〇〇八年三月)
- 中村三春「混血する表象——小説「南京の基督」と映画『南京の基督』」(『日本文学』二〇〇二年一月)
- 西尾元伸「芥川作品の中の〈鏡花〉——『奇怪な再会』を中心として——」(『阪大近代文学研究』二〇〇六年三月)
- 西原大輔「芥川龍之介「南京の基督」とフロベール」(『広島大学日本語教育研究』二〇〇八年三月)
- 西原千博『「葱」試解——作品を飛び出す作中人物——』(『稿本近代文学』一九九六年一月)
- 西山康一「芥川作品の語り出される〈場所〉——「秋」をめぐる——」(『芸文研究』一九九八年六月)
- 西山康一「幻想」／「迷信」としての〈中国〉——芥川龍之介「南京の基督」における〈科学〉と〈帝国主義〉」(『文学』二〇〇二年五・六月号)
- 馮海鷹「芥川龍之介『片恋』を読む」(『芥川龍之介研究』二〇一〇年四月)
- 水本浩典、細淵清貴「日清戦争従軍兵士が記録した異文化体験——日記の類似表現に着目して——」(『人間文化』二〇〇八年九月)
- 溝部優実子「「秋」論〈書く女〉としての信子」(『芥川龍之介研究年誌』二〇一〇年九月)
- 溝部優実子『「湖南の扇」——含芳の「扇」を糸口として』(『日本女子大学 紀要 文学部』一九九九年三月)
- 宮坂覚「「南京の基督」論——金花の〈仮構の生〉に潜むもの——」(『文藝と思想』福岡女子大学文学部、一九七六年二月)
- 宮崎由子「芥川龍之介「馬の脚」——理性への反抗——」(『芥川龍之介研究』二〇一二年九月)
- 森本修「芥川「保吉物」について」(『立命館文学』一九五五年一月)
- 藪下明博「馬の脚」或は、幻想とアイロニーの共存」(『芥川龍之介』一九九二年四月)
- 山崎甲一「お徳の「片恋」、龍之介の贖罪——嘘による外は語られぬ自画像」(『芸術至上主義文芸』二〇一六年一月)
- 姚紅「「湖南の扇」論——情熱的な中国女性」(『文学研究論集』筑波大学比較・理論文学会、二〇〇九年二月)
- 吉川豊子『『或る女』／『真珠夫人』／『海の極みまで』——吉屋信子 初期「三部作」の時代と「戦略」——』(『昭和文学研究』一九九七年七月)

吉田俊彦『首が落ちた話』（芥川龍之介）小考——認識面における漱石の影響——」（『岡大國文論稿』一九八九年三月）
林 珮君「芥川龍之介「首が落ちた話」論」（『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』二〇〇八年三月）
鷺崎秀一「芥川龍之介「片恋」論——チャップリン流行下における〈西洋の曾我の家〉表象から——」（『日本語と日本文学』二〇〇四年二月）
渡辺正彦「芥川龍之介「首が落ちた話」材源考——ドストエフスキー『白痴』との関連——」（『近代文学論』一九八六年三月）